



「泰澄大師と日本文化」

Foundation of Kyoto culture
Principle & Origin of Japanese culture

日本文化構造学 研究会主宰

日本学・京都教授研究会「知恵の会」

中村 正司



我々日本人は、神に**自然**なる「和」と「清」を、仏に「無」と「悲」を知り、儒に「徳」と「伐」を得た。
そのことを、神々への信仰や、聖徳太子、ブツダ、孔子たち 先人から学ばなくてはならない。



A horizontal banner image showing a misty, teal-toned landscape of rolling mountains. The text "山岳信仰 と 泰澄大師" is centered over the image.

山岳信仰 と 泰澄大師

「日本文化の原理」の構築、その検証と活用と関連し、平安京誕生への歴史を神仏信仰面からたどりたい。この中には、現代京都を理解するための重要な神名・神社が登場する。また、紹介する京都周辺の山岳寺院は、奈良時代創建で、その高い歴史価値は、今、忘却の危機にある。さらに、近年の豪雨で被災され、微力支援しながら、広報・啓蒙に取り組んでいる。

平安京前夜までの歴史、信仰は、そのあと、平安時代から現代にまでつながる、重要な文化の基礎的構造です。

したがって、日本や京都の全容を理解するために、認識すべき歴史なのです。

例えば、愛宕山の寺院は、「大和葛城・鴨氏の役小角」と、「越前秦氏の泰澄」について、その起源に関わる、奈良時代の伝承を持っています。

そして、その鴨氏、秦氏たち氏族の歴史を理解するには、縄文から弥生の時代背景や神話の神々、また古墳時代にかけ渡来した人々たちの、列島での遷移把握が必要です。

幸い、近年発展した考古学上の発見や分析、神社の文献公開、諸先生方の著書を総合することで、それらは徐々に解き明かされ鮮明となってきました。時代に沿って、縄文から弥生、飛鳥、奈良時代から、平安京誕生までの信仰を、特に京都に関係した事柄で、以下に概説します。

古来、山代の地も、狩猟に恵みをもたらす山河に暮らした。次に、銅鐸・鉄器などの文化をもたらした人々は、出雲など日本海側から渡来し、今の丹後・亀岡などに拠点、そして大和に至り、三輪山山麓を本拠としました。

彼らは、水・鉄をもたらす山を崇めた。その足跡は、山代・淡海・大和周辺の「磐座」や、「銅鐸」などの弥生遺跡から明らかとなってきました。

その中の一集団が、奈良盆地 南西に暮らした葛城鴨氏です。今日の奈良「高鴨神社」として痕跡する一帯に暮らし、やがて新しい勢力の流入を受け北上し、山代に至ります。そのあと奈良時代、同じく葛城から山代へ北上したのが、山岳修験の「役小角」です。

古来からの信仰を重要とした天智天皇は、大津京守護のために、奈良の大神神社から、今日の日吉大社へ出雲の神である「大己貴神」を勧請した。天武天皇は、出雲の一族である鴨氏奉祭の上鴨神社社殿を整えたと伝えられ、また桓武天皇も平安京の護りとしたのは、賀茂社の地であります。

古墳時代、多くの渡来人の1つ、秦氏は主に北九州から河内、山代に至るが、日本海側、越前から淡海(滋賀)を経て山代に南下した秦氏の一人が「泰澄」です。秦氏の拠点拡大や、その二つの渡来ルートの合流は、松尾大社の祭神「大山咋神」と「市杵島姫命」に伺えます。「大山咋神」は、日吉大社の奥宮磐座に残る古代の神山信仰で、山城の松尾大社からさらに保津川を昇り、亀岡に伝わります。「市杵島姫命」は、元来、北九州の宗像大社の祭神です。また、越前から南下した「泰澄」の「白山信仰」は、日吉大社など滋賀に多く伝わり、山城に至ります。

以上、出雲からは亀岡(当時、桑田)、大和～山代、一方では、越前からの淡海～山代 そのような人々の流れで山代の信仰が形成され、のちに山背、都として山城、京都となっていきます。

出雲から伝来した「磐座」信仰、「大国主」信仰は、亀岡の出雲大神宮や愛宕神社、そして山代の山頂に至り、今日の愛宕山社寺に伝わります。滋賀の日吉大社も、古代より、「磐座」信仰である「大山咋神」を祀り、またのちに「大国主」と同体と考えられている「大物主」の別名「大己貴神」が加わりました。最澄は、奈良の三輪山より「大物主」の分霊を日枝山(比叡山)に勧請して、大比叡としました。

一方、仏教公伝後、飛鳥や平城では、釈迦如来、薬師如来、盧舎那仏を本尊とした寺院が主流となります。しかし、今の京都では、その600年前後より、聖徳太子縁の「頂法寺」、「八坂寺」、「乙訓寺」、のちに役小角や泰澄とも関係する「神童寺」で、早くから観音菩薩が祀られました。その「神童寺」のあと、同じく周辺の山々では、600年代後半から700年代にかけ、南山城の「観音寺」「海住山寺」「三室戸寺」など、観音菩薩が盛んに祀られる様になりました。700年代初頭、行基は、元明、聖武天皇勅願などを受け、「福德寺」、「葛井寺(現 法輪寺)」、「西方寺(現 西芳寺 苔寺)」、「宝積寺」を山岳山麓に創建しました。その頃、隆豊禅師も、西山山岳に法相宗寺院として「金蔵寺」に観音菩薩を祀りました。のちに、桓武天皇は平安京遷都に当たり王城鎮護のため経典を埋め西岩倉山と号します。同じく、東方山岳では、700年後半に、天智天皇勅願、御手彫り観音菩薩の記録がある山科音羽川上流の「牛尾山法蔵寺」、泰澄開山の岩間山「正法寺」が創建されました。坂上田村麻呂は、「牛尾山法蔵寺」草創となる庵にいた円珍上人と出逢い、東山に音羽山清水寺が創建される。そのため「牛尾山法蔵寺」は、清水寺奥院としての歴史を持ちます。最澄の草庵である比叡山「一乗止観院」(延暦寺)でも、創建当初の東塔「山王院」に観音菩薩が祀られ、愛宕山と併せて平安京を四方で囲んでいます。

その愛宕山では、平安京遷都直前の781年、「慶俊」と「和気清麻呂」が、五寺を創建した。明治の廃仏棄釈で、その内の「白雲寺」は、修験道、地蔵信仰を基礎としつつ、イザナミから生まれた火の神カグツチの火伏信仰を加え、現在の「愛宕神社」(奥社祭神 大国主命)となります。

当初創建の五寺の内、寺としては「鎌倉山月輪寺」、「高雄山寺(現在の神護寺)」だけが、存続します。

「月輪寺」は、「聖観音」「千手観音」「十一面観音」三体の観音菩薩を祀り、明治まで観音菩薩を本尊とします。今は、阿弥陀菩薩を本尊とする天台宗寺院です。神山山岳修業を起源に、平安時代の「密教」、「浄土信仰」、「白雲寺」から分霊された「將軍地蔵」(イザナミの本地仏)など、信仰習合の有り様を残す山岳寺院です。平安時代以降、「空海」「空也」、また「法然」「親鸞」、摂関 九条家の祖「九条兼実」たちの、信仰、修業、交流の場所となっていきました。

「月輪寺」は、その歴史大河を生き残り、現在に至ります。

この様に、出雲から伝来した「磐座」、「大国主」信仰、そして仏教の「観音信仰」が、平安京に至る歴史において、信仰・宗教的な基礎を成しております。またそれらの信仰は、元来「自然信仰」から発祥した「循環 和合 現利思想」と「創造」といった 我が国の「思想文化の特性」がもたらした と考えます。そして、その「特性」は、そのあとの歴史、平安京、京都での、密教、浄土、禅、法華などの信仰や、建築、文学、絵画、諸道などの文化創出に、重層し影響をあたえ続けていきます。



はじめに 一般的理解

泰澄

国史大辞典 生没年不詳 加賀白山の開創者と伝える僧。白鳳十一年(六八二、同二十二年とするものもあり、私年号白鳳の相当年次には異説あり)六月十一日越前国麻生津(福井市)に生まれた。**三神安角**(やすずみ)の次男にして母は伊野氏である。幼時より三宝を崇敬し、十四歳の時越知山(おちさん、福井県丹生郡)に登り、**十一面観音**を念じ修行を積む。大宝二年(七〇二)**文武天皇**の勅により鎮護国家の法師となる。**臥(ふせ)行者・浄定行者**の二人が、徳を慕って弟子となる。養老元年(七一七)三十六歳で加賀の白山に登り、妙理大菩薩を感見する。同六年四十一歳のとき、**元正天皇**の病を祈り、加持力によって神融禪師の号を賜わる。神龜二年(七二五)**行基**白山に登って泰澄と相会す。天平九年(七三七)大流行の疱瘡を終息させた効により、大和尚位を授けられ、以後泰澄和尚と称す。天平宝字二年(七五八)越知山に帰り、大谷の仙窟内に籠る。神護景雲元年(七六七)**称徳天皇**の木塔百万基造立の誓願に応じて、一万基を勧進献上し、同年三月十八日、八十六歳にて入寂す。越の大徳と称せらる。〔参考文献〕『本朝神仙伝』、『元亨釈書』一五、卅元師蛮『本朝高僧伝』四六(『大日本仏教全書』)など(月光 善弘)

日本大百科全書 生没年不詳 奈良時代初期の、加賀(石川県)白山(はくさん)の開創者として知られる山伏(修験(しゅげん)者)。白山修験道では尊称して泰澄大師(だいし)ともいう。682年(天武天皇11)に越前(えちぜん)(福井県)麻生津に生まれたといわれ、初め越知山(おちさん)(福井市)で修行し、719年(養老3)に白山に登り白山修験道を開いた。その従者に臥(ふし)行者と浄定(じょうじょう)行者があつて、彼らに奇跡を行ったことは有名である。開山後も諸国で修行した話はかなり信憑(しんぴょう)性があり、京都では**稻荷(いなり)山**で修行し、**愛宕(あたご)山**を開き、大和(やまと)(奈良県)**吉野山**でも奇跡を現し、九州の**阿蘇(あそ)山**にも登った。そして400年後にも泰澄は白山に生きているという信仰があつた。

泰澄寺 [現]福井市三十八社町 日本歴史地名体系

北陸街道の西側にある。白鳳山と号し、真言宗智山派。本尊大日如来。泰澄の生誕地に建立したと伝えるが、創立時期はつまびらかでない。「帰雁記」は「浅水の辺に卅八社村といふ処有り。泰澄大師は此処の産也。親御は三神の安角といふ渡守りと云り。或時女房白き玉懐へ入ると夢を見てより大師を孕り」と記している。

泰澄は奈良時代初期の僧で、加賀・越前・美濃国境にある白山(二七〇二・二メートル)に初登頂したと伝え、白山信仰と結びついてこの三国には泰澄の開創と伝える社寺がきわめて多い。「元亨釈書」や正中二年(一三二五)書写の「泰澄和尚伝記」によると、泰澄は白鳳二年の生れで、父は三神安角、母は伊野氏。一一歳の時、北陸道遊行中の**道昭**に会って神童といわれ、一四歳で十一面観音の霊夢を見、その冬から越知(おち)山に登って修行。その験力が知られるようになり、大宝二年(七〇二)鎮護国家の法師に任ぜられた。霊龜二年(七一六)白山神の霊夢を感得し、その導きにより翌養老元年(七一七)白山登拝に成功、同三年に至る一千日の練行を積み、下山した。以後白山は行者たちの修行の場となった。元正天皇から神融禪師の号を許され、天平九年(七三七)には大流行した疱瘡を十一面法によって終息せしめ、大和尚位を授与され、以後泰澄和尚と号する。神護景雲元年(七六七)八六歳で越知山において死去したという。「越前国名蹟考」は「素良按るに、堂の後北の方へ一丁許に池二つあり。東にあるを御膳水とす。水清し。西は産湯水なり。清からず。少し南方へ上りて座禅石あり。盤陀石と云。石表を立。其外石禿祠(ほこら)石灯笼等あり」と記している。正面に大師堂、左に本堂があり、大師堂の南西に奥院白山権現社、北東に坐禅石、北方に産湯池・雷之池(御膳水か)がある。雷之池とは泰澄の坐禅修行中に落雷があつて、それを封じた池と伝える。〈近江・若狭・越前寺院神社大事典〉

白山信仰 国史大辞典 加賀・越前・美濃・飛騨四カ国にまたがって聳える白山を対象とする山岳信仰。白山とは**御前峰**(ごぜんがみね)・**大汝峰**(おおなんじがみね)・**別山**(べっさん)の総合名称で、ここを**水源**とする加賀の手取(てどり)川、越前の九頭竜(くずりゅう)川、美濃の長良川の三大河の流域に生まれた信仰は仏教や道教の影響下に山岳信仰として展開、おそくとも平安時代初期までにそれぞれの大河流域の信仰の拠点として加賀馬場(ばんば)・越前馬場・美濃馬場を形成した(『白山之記』)。この三馬場はいずれも白山本道(はくさんほんどう、禅定道ともいう)と称した登拝路の起点である。加賀馬場の中心は『延喜式』にいう**白山比咩神社**すなわち白山本宮であるが、平安時代中期以後は別当寺の白山寺に実権が移っていった。同様に越前馬場(白山中宮)は別当寺平泉(へいせん)寺、美濃馬場(白山中宮または白山本地中宮)は長滝(ちょうりゅう)寺が実権を握った。また、養老二年(七一八)泰澄(たいちょう)がはじめて登拝し、御前峰の神は伊邪那美神で白山妙理大菩薩と号し本地が十一面観音、大汝峰は大己貴神で本地は阿弥陀如来、別山は小白山別山大行事で聖観音を本地とする白山三所権現であることを明らかにしたとの伝承をまとめた『**泰澄和尚伝記**』が天徳二年(九五八)ごろ成立してから、この本地垂迹説による伝承が白山信仰の核心に据えられる。以後、三馬場はすべて泰澄が創めたとする開基縁起に一元化され、白山三所権現を基本とする体系になった。なお加賀馬場のみに泰澄開山を養老元年とする社伝のほか、泰澄と関わりのない崇神天皇七年説(社伝)、応神朝説(『旧社家建部家記』)、欽明朝説(『三宮古記』)、天智天皇六年(六六七)説(尾山神社本『類聚国史』一三七)の四種の創立伝承がある。平安時代末期には白山寺・平泉寺・長滝寺は前後して**天台延暦寺末**となり、泰澄の権威による白山嶺頂の管理権獲得に代表される三馬場間の激しい正別当争奪が江戸時代末期まで繰り返された。古代から修験の霊場として三馬場とも修行者の往来は盛んであつたが、いずれも独自の白山修験の教団組織は発達せず、中世・近世における御師の活動も美濃馬場以外は著しくない。近世以後、東日本の被差別部落に白山信仰にかかわる白山神社を氏神としているものがかかなりあるが、その理由は未詳である。明治の神仏分離で三峰の仏像はすべて下され、**白山寺**は白山比咩神社(石川県石川郡鶴来町)、**平泉寺**は白山神社(福井県勝山市)、**長滝寺**は白山長滝神社(岐阜県郡上郡白鳥町)になった。(学術調査団・一九八八年)

白山山頂遺跡 [現]白峰村白峰など 日本歴史地名大系

石川・岐阜県境にまたがる白山は、御前峰(二七〇二・二メートル)、大汝峰(二六八四メートル)、剣ヶ峰(二六七七メートル)の三主峰からなり、各種信仰遺物が採集されているのは、**白山奥宮**や**大汝神社**が鎮座する御前峰・大汝峰を中心とする地域。昭和六一年(一九八六)に室堂周辺を含む山頂部一帯で測量調査および遺物採集を実施。その遺物は、**銅製品**(仏頭・懸仏・鈴・飾金具・銅銭など)・**鉄製品**(鉄剣・刀子・独鈷・鰐口・火打鎌・釘・鋌など)・**石製品**(石仏・光背・狛犬・礫経石など)・**土器類**(須恵器・土師器・土師質土器・陶磁器など)・**ガラス製品**(玉類)など多岐にわたり、総数は約二千三〇〇点に及ぶ。主峰の南に連なる別(べつ)山(二三九九・四メートル)山頂でも鉄製遺物が採集されており、北陸有数の山岳信仰遺跡として重要。なお「白山之記」には御前峰などの仏神の配置が記されるが、明治初年の神仏分離の際に白山から引下ろされた下山仏などは、白峰村の林西寺や尾口村の尾添白山社に残る。「白山山頂学術調査報告」国学院大学考古学資料館白山山頂学術調査団・一九八八年)



日本文化と山岳信仰

日本文化と山岳信仰とは、不可分である。考古学や文献学だけでは捉えきれないその山への信仰は、民族学の努力によって捕捉されてきた。

里から望見される山岳は、死霊・祖霊・諸精霊・神々の住む他界、天界や地界への道で、それ自体が神や宇宙と云うように、俗なる里と対峙する聖地であると信じられた。

では、なぜそのように思われたのであろうか？

山は生活にとって欠かせない場所である。しかし、その頂きは遠くより望められるが至りがたく、山奥は深く、暗闇は立ち入りがたい。つまり、日常性と非日常性を併せもつ場所が山である。「この世」に対する、山の「あの世」としての**他界感**が、そのような信仰を育んだ。

山の頂は、雲や霧・雨など見えなくなるもの、見えないものが漂う天空と接近している。それが、タマ・ヒ(霊)の坐ます場所として信仰された。

そして山には、**祖霊・氏神**としての「山の神」、**自然神**としての「山の神」がある。

この二面性は、我が国の「自然と人」との原初的な習合として、見逃してはならない。

古事記のなかで、自然神としての「山の神」は、大山津見神や大山咋神などとして登場する。大山津見神の娘が、木花之佐久夜毘売(コノハナサクヤ姫)であり、天孫の邇邇藝命(ニニギノミコト)が娶ったこの神の女である。擬人化された表現は、「自然と人」に対する、同質で習合的な意識を表現している。**祖霊・氏神としての「山の神」の信仰**、つまり先祖崇拝は、**仏教のいわゆる「先祖供養」に繋がってゆく**。ここでいう「山岳信仰」に日本文化の古層としての固有信仰があることを認識せず、「仏教」の受容や、「供養」が、我が国で世界的に特筆して定着した理由は説明できない。つまり、「氏神」無しには、「氏寺」はないわけである。

柳田國男先生は、著書『先祖の話』の中で、わが国では人の「霊」が木に依り、巖を「座」(依座、よしまし)とするのは祭の時のみで、物にもそれぞれの「**タマ**」はあると見ていたが、それが人間の方から移っていった(転生した)、とする。「先祖の霊」に関連し、「**みたま**の清まり」、すなわち「現世」の「汚濁」(けがれ)から遠ざかるにつれて「神」と呼ばれてよい地位に登り、ある時期が過ぎてしまうといつとなく大きな「霊体」の中に「融合」していうように感じられる、とする。『日本書紀』に、その「**霊**」の語が多出するが、柳田先生は、その「皇祖之霊」、平安時代の「御霊」「怨霊」などが、本来の「みたま」に対する認識を変化させた指摘する。

山岳に宗教的意味を与えて崇拝し、また山岳を対象として種々の儀礼を行うことを**山岳信仰**という。古来山岳は狩猟民には獲物を与えてくれる動物の主である**山の神**の住む**霊地**として、農耕民には水田稲作や生活に必要な水を与えてくれる**水分神**(みくまりのかみ)の居所として崇められてきた。また鉱物資源を与えてくれる聖地ともされてきた。さらに古代の山陵がヤマと呼ばれたことからわかるように山岳は死霊の居処として崇められもした。必ずしも古代まではさかのぼり得ないかもしれないが、柳田民俗学などでは、この死霊の居処としての**山中他界観**を特に強調し、葬式をヤマイキ、棺をヤマオケと呼ぶこと、山中に埋め墓、里近くに詣り墓を作る**両墓制**などにその証左があるとしている。そして山中の死霊は、子孫の供養を受けることによって浄化して祖霊になるか、供養がなされなかつたり怨念を持って死んだりして幽霊や怨霊になるかする。またこうして**山中で浄化した祖霊**は山の神となって**山**にいるが、春先には山をおりて田の神となって**稲作**を守り、秋の収穫後は山に帰って山の神となる。これが**氏神**の祖型で、農村の神社で山中に山宮、里に里宮を設けたり、春秋の二回祭を行なったりするのは、この信仰にもとづく説明されたのである。やがてこうした**山岳の山の神の信仰**が、さらに展開して、山岳そのものを神と崇める**神体山**の信仰を生み出していった。大和の三輪山、諏訪神社の上社、金鑽(かなさな)神社の御室ヶ岳、宇佐八幡宮の御許山、御上(みかみ)神社の三上山などはこの例である。これらの神社では背後の山が、祭礼の時以外は禁足地とされており、その神域あるいは山麓から祭祀遺跡が発見されている。なお上記の山の神の展開としての氏神やこの神体山の思想は、**神道**の中心的部分となっていくのである。

柳田先生は、『先祖の話』の中で、まず「先祖」とは、本家やそこからの分家を経て、その家を立てた人から後を、その家々に伴って祭られている人々とする。

正月と盆の祭は、本来「**先祖祭**」であり、先祖の霊たちが融け込んだ「御先祖さま」「**みたま**様」として祭られる。「先祖の霊」は、正月の「年の神」と呼ばれ、さらに4月の祭では、稲作と関係し「御田の神」「農神」「作の神」と呼ばれたと想像されている。

「家々の先祖たちが氏神となった。親類を結合である一門、巻が氏神を祭し、さらにそれらが地域で合同すると村の氏神となる」、「先祖のみたまは、忌と穢れを遮断して。清く祭らねばならない」とする。また、その時々々の訪問・招待とは別に、「魂」が、子孫を媒介に「この世」に復帰するという信仰を指摘する。すなわち「**顕幽**(この世とあの世)二つの世界が、日本で、**互いに近く親しかった**」とする。日本文化を考えるに、この「他界感」が重要である。縄文時代に、早くに死んだ子供を住居の側に埋葬したことを、同様に「魂の復帰」への期待と解釈する説がある。この「魂」は、中国の魂魄の「魂」ではなく、あくまでも「**タマ**」である。もちろん中国では「タマ」とは読まない。「タマ」に「魂」が、同様に「ヒ」に「日」や「霊」があてられたが、我が国の音としての言葉である。それが合わさった「タマシヒ」も同様である。

奈良時代になると、こうしたわが国古来の山岳信仰に外来の**道教**、**仏教**とくに**密教**の影響が見られるようになっていった。このうち道教の影響は吉野山の仙柘媛の話のように山岳を仙人の住処としたり、仙薬を求めて入山修行したりするなどの伝承のうちに見ることができ。また仏教とくに雑密の影響を受けた在俗の優婆塞・優婆夷などが山岳修行を行うようになっていきもした。彼らの多くは山中で『法華経』を持し、陀羅尼をとらえて修行することによって**超自然力**を獲得し、その力を用いて呪術宗教的な活動を行なったのである。吉野の比蘇寺・竜門寺、滋賀の崇福寺、大和の長谷山寺などは当時これらの修行者が拠点とした山岳寺院である。なおのちに修験道の開祖に仮託された**役小角**(えんのおづの)にしてもこうした山岳修行者の一人だった。

平安時代になると最澄が比叡山、空海が高野山を開くなど**山岳仏教**が隆盛し、比叡山の回峰行を始めた相応、大峯山で修行し醍醐の三宝院を開いた聖宝など密教の験者たちがその験力を得るために山岳修行を行なった。また安倍晴明などの**陰陽師**で山岳修行をしたものも少なくなかった。こうした験力をおさめた**密教**の験者たちが**修験道**を作りあげていくのである。中世期にはこうして成立した修験道が全盛期をむかえ、**熊野**を本拠として三井寺の後ろだてのもとにまとまった本山派、吉野を拠点とした大和の諸大寺の修験から成る当山派などの中央の修験をはじめ、羽黒山・彦山・**白山**・立山など地方の諸山の修験が活発な活動をするようになっていった。そのためか白山山麓の永平寺を修行道場とした曹洞宗、身延山の七面山を道場とした日蓮宗、一遍が熊野で啓示を得て開教した時宗など**鎌倉新仏教**にしても山岳信仰や修験道と密接な関係を持っているのである。

近世期には山岳を拠点として諸国を遊行した修験者や聖たちは村や町に定着して、氏神や小祠小堂の祭や芸能にたずさわったり、加持祈祷などの活動に従事したりした。その影響は強く、現在でも奥三河の花祭などのように、山村には彼らが残した祭や芸能が伝えられている。また近世中期以降になると在俗の庶民たちが講をつくって羽黒・富士・白山・立山・木曾御岳・大峯・石鎚・彦山などの山岳にのぼるようになっていった。明治政府により修験道が廃止されると、羽黒神社・富士浅間神社・白山神社・英彦山神社など山岳にある社寺とくに神社がこうした山岳登拝の信者を受けとめるようになっていった。さらに富士信仰を母体とする桑教・丸山教・実行教、木曾御岳信仰にもとづく御岳教など山岳信仰を標榜する教団が形成されもした。第二次世界大戦後は旧本山派系の天台宗寺門派・修験宗・修験道、当山派系の真言宗醍醐派をはじめ数多くの修験教団が独立し、また石鎚本教・大和宗・真如苑・解脱会・神道天行居など山岳信仰と関係した新宗教も数多く出現した。

仏教公伝は、「日本書紀」の仏像記載 欽明天皇13年(552年) 欽明天皇(継体天皇嫡子)への、百濟聖明王の釈迦像金剛像伝来に対し、現主説の「上宮聖徳法王帝説」「元興寺縁起」戊午年538年、また「三国史記」聖明王即位や武寧王陵の墓誌石没年523年から推測し548年とする上田正昭 説もある。 同氏は、大和への公伝以前に北九州、福岡の靈仙寺や大分の満月寺の開基伝承、南丹市垣内古墳や、奈良広陵町新山古墳の仏獣鏡など、古代からの文化と同様に、中国から朝鮮半島を経由して、日本海側から自然な伝播があったとする。

また、道教についても、古墳出土の神獣鏡を前置きに、「日本書紀」推古天皇10年(602年)百濟僧觀勒(かんろく)による道教「遁甲方術書」の伝来や、天武天皇14年(685年)「招魂」に法師が煎薬(仙薬)を献じた。など朝鮮半島、大陸より伝来があった。 天武天皇の和風諡「天淳中原瀛真人天皇」(あまのぬなはらのまひと)瀛は、道教三神山「瀛州山」真人は道教奥義を極めた神仙に由来。その称号天皇は道教の「天皇大帝」などに由来する。(津田左右吉指摘) 701年、大宝令以降の大学寮整備、その内の典薬寮には、道教影響の呪禁師、呪禁生が配置された。

700年初期「記紀」の天照大神、天石屋戸の詩章には、道教の最高神 天帝の娘 織女(織姫)「織女神」や、のちに中国で道教と結ぶ古来の女仙「西王母」が重層している。 天平4年(732年)には、役小角の弟子、韓国連広足が道教系の呪禁を積み典薬頭になる。

日本国号は、大宝令が初見「明神御宇日本天皇(あきつみかみとあめのしたしらすやまとのすめらみこと)」。『日本書紀』大化元年(645年)高句麗や百濟の使者に示した詔に「明神御宇日本天皇」

聖徳太子の時代 歴史背景 敏達天皇3年(574年) - 推古天皇30年(622年) 仏教公伝、飛鳥時代 538年(552年)。百濟聖明王が欽明天皇に釈迦仏の金銅像や経論などを贈る。 587年 丁未の乱(ていびのらん) 仏教の礼拝を巡って『崇仏派』蘇我稲目、大臣・蘇我馬子と、物部守屋を攻め滅ぼす。この戦いで、厩戸皇子は神仏の四天王に祈願、勝利し、推古天皇元年(593年)、『四天王寺』を建立開始したとされる。

蘇我馬子も『飛鳥寺(法興寺)』を建立、推古天皇・聖徳太子の政治体制の下で仏教信仰を強く奨励。 厩戸皇子(聖徳太子)は『法華経・維摩経・勝鬘経』の三つの経典の解説書『三経義疏』を著す。 『十七条憲法(604年)』第二条も『篤く三宝を敬へ 三宝とは仏・法・僧なり』 仏教が国教となる。

行基の時代 歴史背景 天智天皇7年(668年) - 天平21年(749年) 600年代末、天武天皇や持統天皇も仏教を手厚く保護。 道昭 遣唐使として入唐、玄奘三蔵に師事、日本法相教学の初伝(南寺伝)

680年、天武天皇の勅命を受けて、往生院(現 泉南市)を建立。晩年は全国遊行し土木事業。 義淵 法相宗 天武天皇、道昭と 680年、薬師寺開基(興福寺と共に法相宗大本山 南都七大寺) 天武期を境に、仏呪、道呪に系統した役小角が、葛城、吉野金峯山から山代 山岳修業の拠点発祥。

700年代、文武、聖武期に義淵と弟子の行基や良弁、また泰澄らにより、信仰拠点が山代周辺に。 平城京(710年)、奈良時代には、仏教によって災厄(飢餓・疫病)や戦乱を防ぎ国が安定するという『鎮護国家』の思想に基づき、聖武天皇は741年『国分寺・国分尼寺建立の詔』

743年5月『墾田永年私財法』 同年10月東大寺『大仏造願の詔』 優婆塞 行基集団 が貢献。 749年 聖武天皇に菩薩戒を授けた行基は没す。 751年、良弁が東大寺初代別当に 延鎮(法相宗)による「山科、法厳寺」と、慶俊(法相、華嚴、真言宗)による「愛宕、五寺」開山で、

山代から山背にかけた山岳での信仰拠点が整う。 その最後、最澄の山岳修業「一乗止観院」から、山城の地に、平安仏教が展開する。

「神仏習合」発祥 752年、聖武天皇・光明皇后(藤原光明子)が東大寺の大仏(盧舎那仏)開眼供養。 南都六宗は 国家を安定させるために信仰する『鎮護仏教』としての性格が強い。同時に「東大寺」には、宇佐から八幡神を勧請。 720年隼人の乱以来、八幡神と仏は、宇佐での放生以来、相互関係にある。 神に祈願し勝利した相手、敗者の霊を鎮魂成仏。 神宮寺の弥勒寺建立。神には仏の守護を求めた。

「東大寺」の鎮守社として「手向山八幡宮」が残る。777年八幡神は神で初めて出家、八幡大菩薩へ。 「神信仰と密教」 自然観・宇宙観での共通性

密教: 宇宙の構成要素を「地・水・火・風・空」とし、全てを照らす光(太陽)、「大日如来」を宇宙の真理(根本)とする。 神道: 恵みと災いの源である森羅万象、特に水をもたらず(自然)神山信仰が起源。 地域・氏族守護神(氏神)へ、そこに光(太陽)を頂点とした「天照大御神」が伝来し加わる。

「現世利益」 「観音信仰」による 宗派和合 他の仏教と密教との違いは、「現世利益」即身成仏を目的とすることである。一方、神道(神道とは、記紀以降の国家的神概念ですが)も本来は自然を畏敬し恩恵を願うもの。「現世利益」で共通する。 また自然への信仰、仏性概念は、天台でも 安然・良源「草木国土悉皆成仏」に至る。

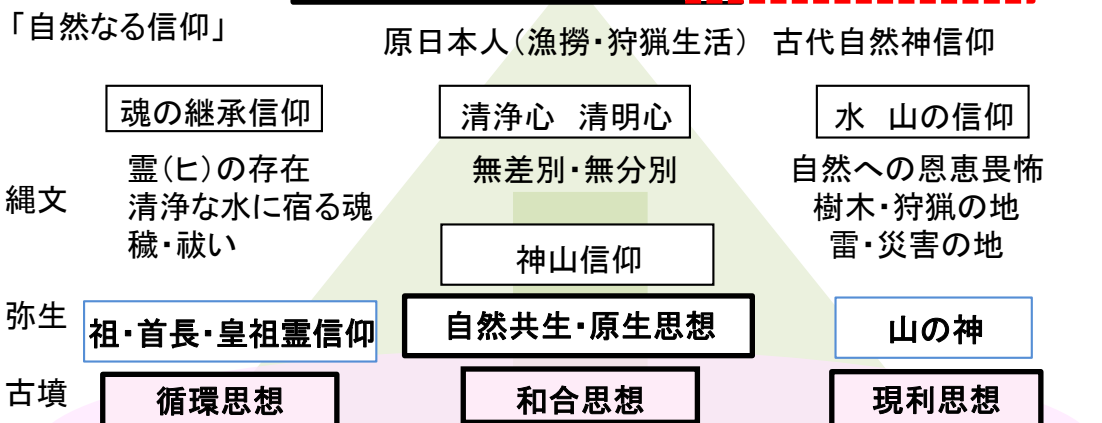
では、密教経典は『大日経』『金剛頂経』なのに、日本では「法華経」から誕生した「観音経」 観音菩薩をご本尊とする真言寺院がなぜ多いのか? 平安時代以前から、京都周辺 法相宗寺院でも同様。 神山信仰の水・山と関係する山岳修験道の真言密教 「神仏習合」の地では、その傾向が顕著である。 すなわち、そこでは「現世利益」祈願という共通で、宗派を超えて「観音信仰」が発祥したと考察する。

	インド	中国 日本
初期大乘経典	中期大乘経典	後期大乘経典
1世紀以降	3世紀 中観派 龍樹『中論』 空の思想体系化	5世紀 唯識派 弥勒が発祥 無着・世親
般若経		638年、玄奘三蔵がインドで唯識を学ぶ帰朝『成唯識論』訳出編集。弟子、慈恩大師基(窺基)が法相宗開宗。日本へは662年 道昭が伝播、奈良時代にさかんに学ばれ 南都六宗のひとつに。興福寺・法隆寺・薬師寺、清水寺へ
大般若経		9世紀初頭、最澄、空海 真言宗が密教専修、天台宗は天台・密教・戒律・禅の四宗相承。山岳信仰とも結び 修験道など「神仏習合」の主体へ
般若心経		
維摩経		
法華経	6世紀 密教 中期密教 7世紀 善無畏・金剛智 インドでは仏教衰退 ヒンズー主流に	
無量寿経	浄土信仰	中国、2世紀後半浄土教経典伝播、5世紀初め慧遠が念仏結社、初期浄土教主流に。世親(天親)の『浄土論』(『往生論』)を注釈した曇鸞の影響を受けた道綽(562年-645年)が、『仏説観無量寿経』を解釈『安樂集』撰述。弟子である善導(613年-681年)が、『観無量寿経疏』撰述、「称名念仏」を勧める。「称名念仏」を中心に浄土思想が確立。しかし中国では主流とはならなかった。
阿弥陀経	インドにおいて、浄土教の成立時期は、大乘仏教が興起した時代である。紀元100年頃に『無量寿経』と『阿弥陀経』が編纂され、広く展開。浄土往生の思想を強調した論書として、龍樹『十住毘婆沙論』『易行品』天親(4-5世紀)『無量寿経優婆提舍願生偈』(『浄土論』・『往生論』)。	その後、慧日(680年-748年)が善導の浄土教を基盤に、「浄土」と「禅」を並行して修法することを主張。後、中国の「禅」の大勢となる「念仏禅」の源流。
観無量寿経	しかし、インドでは宗派としての浄土教が成立されたわけではない。やがて、古来のバラモン教が、民間信仰と習合し、ヒンズー教が大勢となる。	

禅宗 5世紀後半~6世紀前半 インドの達磨、中国の慧可が開宗 7世紀 慧能の『説法書六祖大師法宝壇経』見性成仏の教え 9世紀 臨濟義玄 臨濟宗 洞山良价 曹洞宗 12世紀末~13世紀初頭 荣西、道元により、南宋より日本伝来

中国で、儒教と道教の思想や方法論と融合、中国感性に適合した仏教として宋以降は中国仏教の代名詞に、臨濟宗、念仏禅が主流。 中国では、元のち、14世紀 明期には衰退する。 中国共産党 無神論に

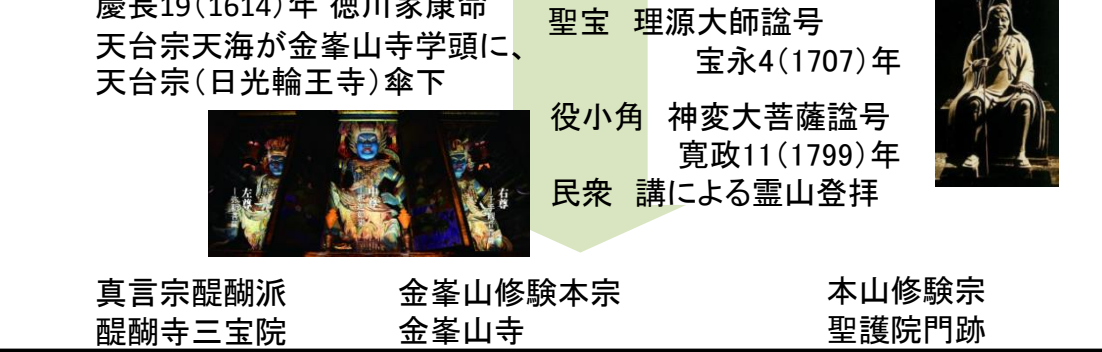
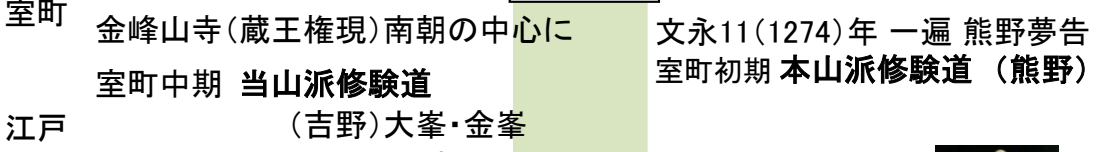
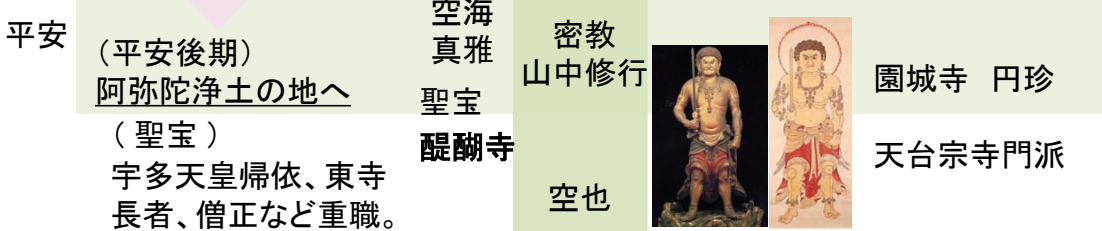
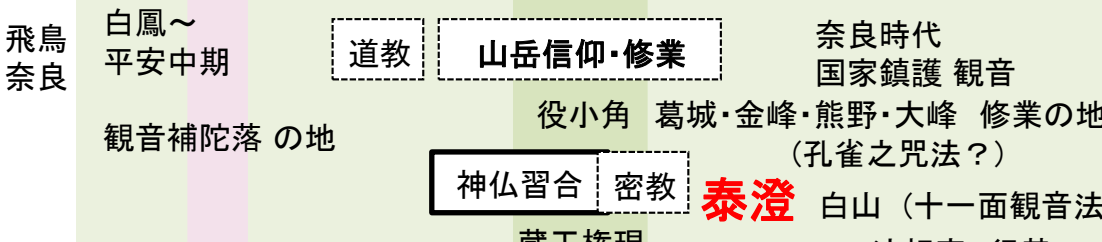
自然の法則・力 自然神(山・海・水)



熊野信仰の構造

熊野など山岳「生命循環の場所」魂の誕生と死、産霊の地

熊野など山岳「生命を支える場所」漁撈・狩猟、御食の地



山への「旅」 原点回帰 と 反体制 非日常 死・再生 への 旅路

古代、「山」は神が降臨する場所、禁足地であった。雨をもたらす雲を生み、雨は川となり水をもたらす。また「山」は風を、雲は雷を生む。人智を超えた力が信仰を産霊び、結ばれる。大和の三輪山、日吉の八王子山、紀州の熊野、京都では松尾の大杉谷、賀茂の神山など、縄文から弥生時代の「**神山信仰**」が、神々の誕生起源である。その禁足地である「山」に分け入らせたのは神仙思想をもつ道教、その影響が伺える「**役小角**」は、神山信仰と山岳修験の狭間で、神と仏、道教と密教を繋ぐ存在である。修験道では、天台本山派の高祖、真言当山派の元祖**聖宝**への秘法伝授者として、金峯山修験本宗では修験道始祖と金峯山開創者として、修験道諸派から尊厳される。

「役小角」原初伝来を、「日本書紀」に続く六国史第二、菅野真道らの延暦16年(797年)「**続日本紀**」、そして薬師寺僧、景戒著の弘仁13年(822年)頃の「**日本霊異記**」、それら平安初期文献から以下要約する。「役の優婆塞」(役小角)は**加茂役公**、(舒明天皇の時代に)**大和葛城**に出自し、神仙憧憬を持つ。呪法を用いて前鬼・後鬼を駆使し、金峯と葛木峯を通行。弟子の韓国連広足から妖惑の罪で、もしくは葛木の**一言主大神**から天皇への謀反讒言を受け、**文武天皇**3(699)年、伊豆に遠流される。「日本霊異記」後日譚、釈免のあと新羅に至り一言主大神を呪縛し未だ解脱せずと記す。

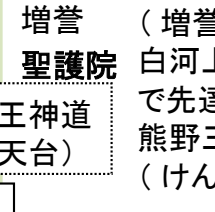
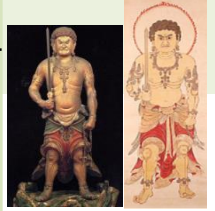
賀茂の地や一言主大神は、古事記の神武東征以前の「**出雲から大和**」にかけた**地祇国津神**の系統である。大宝元(701)年施行された大宝律令、その令の註釈書である令集解の**国記**(868年頃成立)では、天神天津神の伊勢と山城鴨に対し、大神と**葛木鴨**を地祇国津神と認識されたが、山城鴨と葛木鴨は「高鴨神社」と「御歳神社」「鴨都波神社」から「下鴨神社」など全国鴨社は、天照大御神、神武天皇以前の歴史で結ばれており、「葛城一言主神社」も同地域である。葛木南方、五条から吉野は東阿田など、稲作に適さず縄文文化が永らく続く古代風土地であった。

以上の記述や歴史背景から、大倭朝廷から見た「役小角」は**古代性を持つ反体制の象徴**とされたと考える。18才の文武天皇(実体は生母、のちの元明天皇)の701年「大宝律令」、710年「平城京遷都」と、壬申の混乱期を経て、皇祖神話・国家体制整備を時代背景に、約100年後の平安初期に彼の伝承が記された。当時、都市中では寺院建立が規制されていたが、南山城・愛宕・西山・山科など周辺山岳寺院では、すでに役小角は多く伝承されていた。

大宝令に定められた「**僧尼令**」は「僧尼の破戒行為的な犯罪に対する処罰、国家が任命した僧綱による寺院及び僧尼への自治的な統制、**私度や民衆教化の禁止**及び**山林修行**や乞食行為に対する制限」をした。また、一言主大神は、712年『古事記』、雄略天皇460年に葛城山鹿狩りにおいて天皇が敬服。720年『日本書紀』では共に狩りをする対等的立場に。797年『続日本紀』には、天皇と狩りの獲物を争い土佐国に流された。と変化された神である。その神を翻弄する役小角は、「まつろわぬ」集団内部の紛争、神祇祭祀に対する異教讒言の表現かもしれない。

「山中修行」は、**古代性を持つ反体制的性格**を底流し、都市的政治仏教から遠離れた山岳で拡大していった。「役小角」と同時代、秦氏系統である「**秦澄**」は、越前白山から山城に至っている。そのあと法相宗からは「**行基**」。自然界と仏教・修行との関係は、奈良時代、宇宙的真理の華嚴宗「毘盧遮那仏」をめぐり接近。平安京天台は叡山、宇宙(法界)の真理(法)「大日如来」が最高仏の真言密教は高野山を拠点に、天台から「空也」も愛宕で山中修行した。

平安京周辺山岳で、都創始前は法相僧侶の「**観音菩薩**」、都創始後は天台・真言で「**薬師如来**」が主に祀られた。一方、600年代後半、役小角開山伝承の「**金峯山寺**」「**大峯山寺**」は「**蔵王権現**」を本尊とした。釈迦如来(過去世)、千手観音(現在世)、弥勒菩薩(未来世)を本地とする権化である。密教彫像などの影響を受けて、仏とも神ともつかない**日本独自の尊像**が祀られた。修験道伝承では、蔵王権現は役行者が金峯山での修行の際に感得したとされる。また**聖護院**など密教系修験道では、密教「**三輪身**」で大日如来の自性輪身に対して、教令輪身である「**不動明王**」を本堂や護摩堂本尊とした。現世利益祈禱の修法「**護摩**」は、バラモン教で供養祭式「ホーマ」の音訳である。





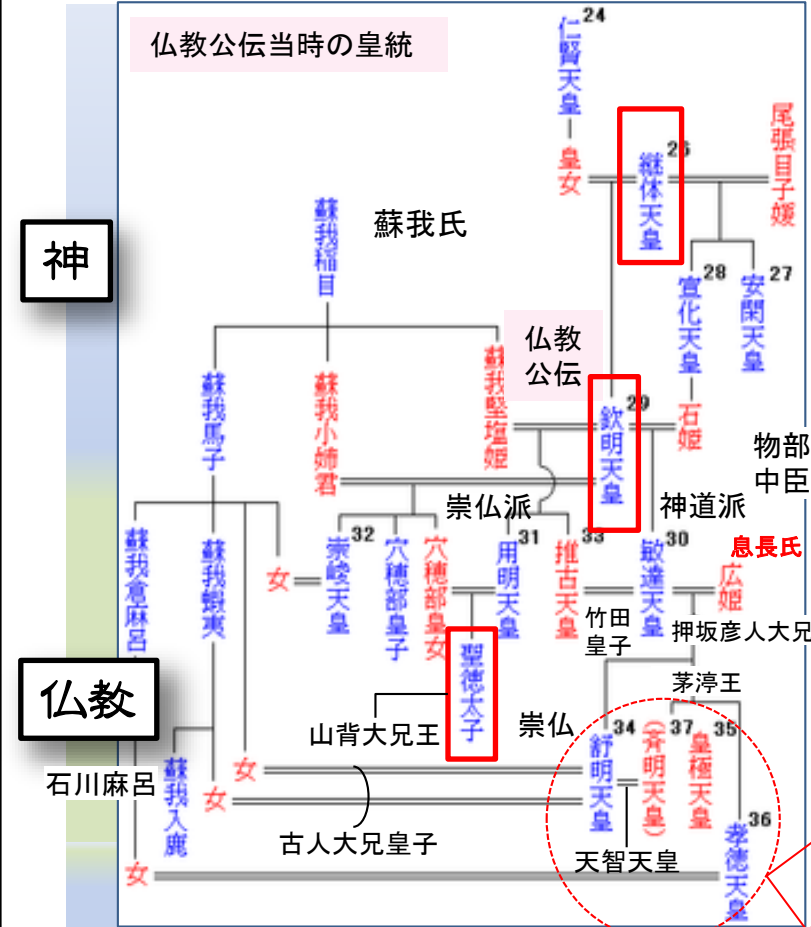
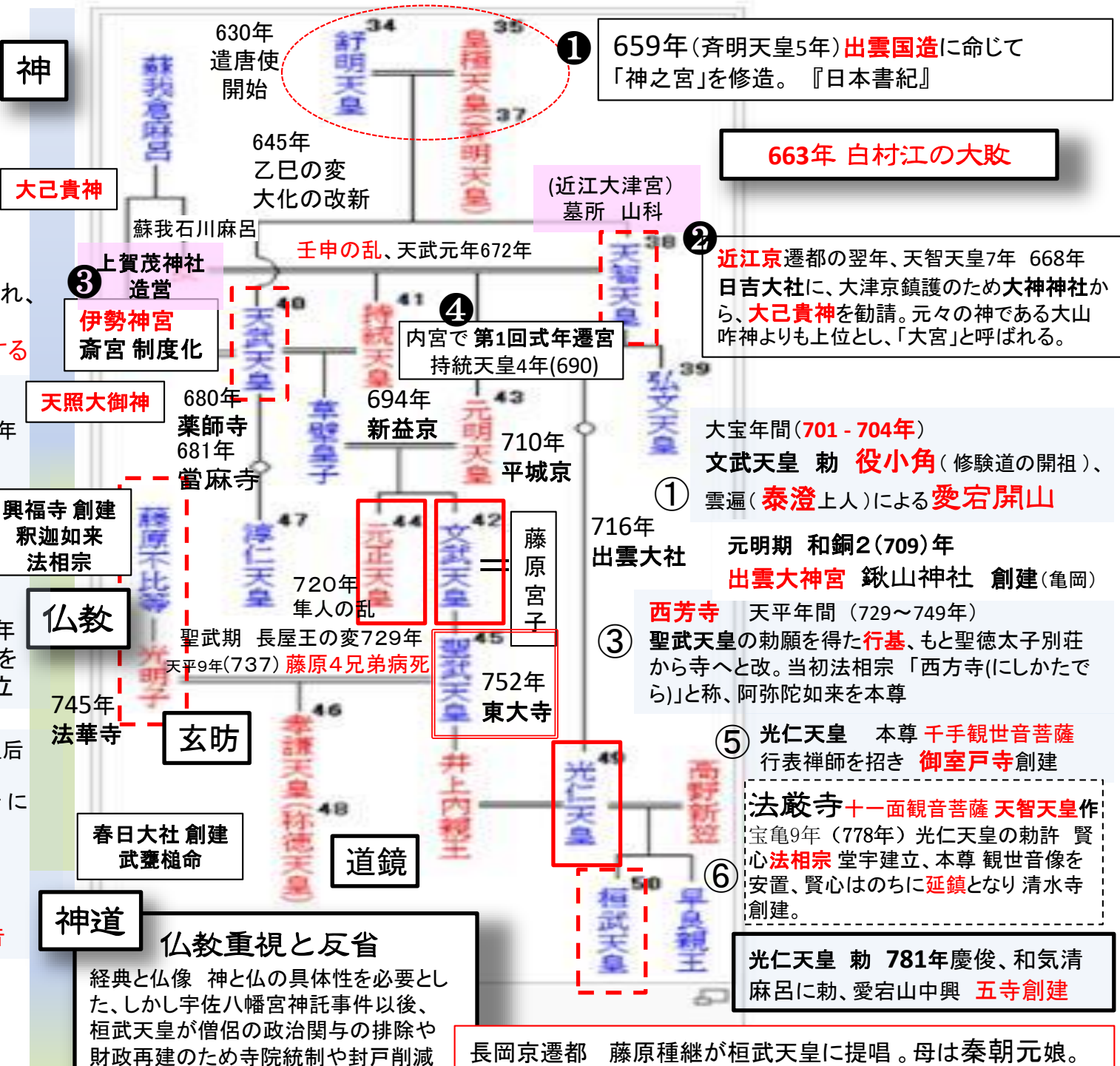
仏教は、我が国になにをもたらしめたか？ どのような役割を期待されたのか？ 治世者や民衆が、神、祓えの儀式で満たぬ、疫病・死の救済を見える憧憬「仏像」に求める過程。古来、神とされたモノは、山、海、水たち自然。そして精霊、開拓者の祖霊、首長霊たちである。神の中に異なる側面があり、和魂(にぎみたま)、幸魂(さきみたま)と奇魂(くしたま、くしみたま)、荒魂(あらみたま)。例えば、淡海 日吉大社では、東本宮に、大山咋神の和魂と、鴨玉依姫神の和魂が、そして八王子山の磐座には、各々の荒魂が祀られている。日本書紀によれば、神託を得た**神功皇后**は、熊襲、隼人など大和朝廷に反抗する部族と、その背後の三韓を征討に向かった。このとき、**住吉大神の荒魂**は突風となり船団を後押し、三韓の軍を苦しめた。高句麗「高太王の碑」から390年頃の史実との説。日吉大社対岸の三上山 山麓の御上神社祭神 天之御影命は息長氏の祖神 本拠の地。日本書紀原文 既而、神有誨曰「和魂服王身而守壽命、荒魂爲先鋒而導師船。」和魂、此云珥岐瀾多摩。荒魂、此云阿邏瀾多摩。即得神教而拜禮之、因以依網吾彦男垂見、爲祭神主。于時也、適當皇后之開胎、皇后則取石插腰而祈之曰「事竟還日、産於茲土。」其石今在于伊都縣道邊。既而則擣荒魂、爲軍先鋒、請和魂、爲王船鎮。

宇佐八幡宮祭神は、**八幡大神**であり、応神天皇のご神霊とされる。527年、磐井の乱 562年、任那日本府滅亡。社伝では、欽明天皇32年(571年)ご示顯とされる。欽明天皇(生509~在位539~571没)仏教渡来・崇廢抗争、内憂外患の時代。その子息、敏達天皇(538~585)には、淡海の**息長真手王**の広姫が迎えられた。八幡神の神霊 応神天皇の母も息長氏、**息長帯比売命**である。宇佐の地は大和や出雲との要地である。神代に比売大神(海神、宗像三神)が降臨と『日本書紀』に記され、八幡神が現われる以前の古い神、地主神として祀られ、崇敬された。そして713年、大隅国設置に際して隼人反乱。その和銅年間(708-715)宇佐八幡宮の社殿が創建される。

以上、**神**が、その役割を**武神**に比重していく過程である。その荒神、荒魂や、神力により滅んだ**魂を弔う主体が求められた**。そして、その役割は**仏**に託された。

飛鳥での諸氏氏寺を経て、法隆寺創建。薬師寺、當麻寺 そして平城の諸寺創建 国分寺・国分尼寺、法華寺のあとの東大寺に至る 約150年。徐々に盆地を北上「治世者の仏」から「**民衆の仏**」、「鎮魂・放生の仏」から「**現世救済の仏**」に浸透 惠我藻伏崗陵(えがのもふしのおかのみささぎ)として、第15代応神天皇の陵に治定されている地は、倭と、外交の湊 河内難波とを二つで結ぶ。一方は大和川で、**法隆寺**の斑鳩と、一方は石川・飛鳥川と竹内街道で**當麻寺**と結ぶ 合流地点である。

仏は、神仏習合の発祥となる宇佐の地から、瀬戸内を経て、応神神霊の眠る地で別れ、「鎮魂の役割」と、「現世利益と極楽浄土の役割」を、期待されることになる。**和合思想が鎮魂者を求め、習合した仏に、循環思想と現利思想を反映、文化を創造する**



神

仏教

神

大己貴神

上賀茂神社造営

伊勢神宮齋宮制度化

天照大御神

興福寺創建 釈迦如来法相宗

仏教

玄昉

春日大社創建 武甕槌命

神道

仏教重視と反省
 經典と仏像 神と仏の具体性を必要とした、しかし宇佐八幡宮神託事件以後、桓武天皇が僧侶の政治関与の排除や財政再建のため寺院統制や封戸削減

659年(齊明天皇5年)出雲国造に命じて「神之宮」を修造。『日本書紀』

663年 白村江の大敗

近江京遷都の翌年、天智天皇7年 668年 日吉大社に、大津京鎮護のため大神神社から、**大己貴神**を勧請。元々の神である大山咋神よりも上位とし、「大宮」と呼ばれる。

大宝年間(701-704年) 文武天皇 勅 **役小角**(修験道の開祖)、雲遍(泰澄上人)による**愛宕開山**

元明期 和銅2(709年) 出雲大神宮 鍬山神社 創建(亀岡)

天平年間(729~749年) 聖武天皇の勅願を得た**行基**、もと聖徳太子別荘から寺へと改。当初法相宗「西方寺(にししかたでら)」と称、阿弥陀如来を本尊

光仁天皇 本尊 千手観世音菩薩 行表禅師を招き **御室戸寺** 創建

法厳寺 十一面観音菩薩 天智天皇作 宝龜9年(778年)光仁天皇の勅許 賢心**法相宗** 堂宇建立、本尊 観世音像を安置、賢心はのちに**延鎮**となり 清水寺 創建。

光仁天皇 勅 781年慶俊、和氣清麻呂に勅、愛宕山中興 **五寺** 創建

長岡京遷都 藤原種継が桓武天皇に提唱。母は秦朝元娘。

天武天皇と法相宗の**道昭**、**義淵**により、680年 **法相宗 薬師寺**開基。天武期を境に、仏呪、道呪に系統した**役小角**が、葛城、吉野金峯山から山代 山岳修業の拠点発祥。700年代、文武、聖武期に義淵と弟子の**行基**や**良弁**、また道昭に師事した**泰澄**らにより、信仰拠点が山代周辺に拡大する。

平城京(710年)奈良時代、717年(養老元年)入唐した義淵の弟子**玄昉**も、ともに濮陽の智周に師事して法相を修め、帰国後これを広めた。玄昉は興福寺に入り当宗を興隆、法相宗興福寺の基をきずく。**聖武天皇**は、仏教による災厄(飢餓・疫病)戦乱鎮静の『鎮護国家』の思想に基づき、741年『国分寺・国分尼寺建立の詔』。また、唐の**華嚴宗**第3祖法蔵に学んだ**審祥**は736年に帰朝、金鐘寺(後の東大寺)良弁の招きを受け『華嚴経』・『梵網経』を講義、その思想により東大寺盧舎那仏像が構想された。743年5月『墾田永年私財法』同年10月東大寺『大仏造蹟の詔』優婆塞行基集団が貢献。749年、聖武天皇に菩薩戒を授けた行基は没す。751年、良弁が東大寺初代別当に。同時代、**延鎮**(法相宗)による「山科、法蔵寺」と、**慶俊**(法相、華嚴、真言宗)による「愛宕、五寺」開山で、山代から山背にかけての山岳での信仰拠点が整う。南都六宗は、三論・成実・俱舎・法相・華嚴・律の6宗。宗教的としてよりも教学思想的に、朝廷や文化に影響した。そのうち現存するのは、興福寺と薬師寺を二大本山とする法相宗、東大寺の華嚴宗、東大寺で授戒の制を確立した鑑真が開創した唐招提寺の律宗の三宗。南都六宗は国家を安定させるために信仰する『鎮護仏教』としての性格が強い。

「**神仏習合**」発祥 南都の教学仏教と平行して、宇佐八幡宮での**法蓮**、のちに**雑密**と呼ばれる断片的密教僧や私度僧の活動がある。「神仏習合」は発祥過程から三種に分類される。

「護法善神」奉斎神が仏を招来(福井 剣神社 宇佐八幡宮)

「神身離脱」奉斎神が託宣を告げて仏を招来(若狭彦神社 越前氣比神社 山城賀茂社の岡本堂)

「神奈備・磐座・神籬信仰習合」古来信仰に仏を招来(木津川 神雄寺 岸和田 神於寺)である。

「**神宮寺**」が、神祇に仕える目的から神社に付属し建立された。霊亀年間(715~717)の越前国氣比神宮寺や、養老年間(717~724)の若狭国若狭彦神宮寺の建立はその先駆をなす。720年隼人の乱後、宇佐での放生以来、八幡神と仏は、相互関係にある。神に祈願し勝利した相手、敗者の霊を鎮魂させる仏である。741年までに宇佐八幡宮神宮寺として弥勒寺が建立された。“【神仏習合】【神宮寺】”, 国史大辞典

逆に、仏の守護を神に求める役割が「護法善神」である。「東大寺」創建の前、749年、大仏の鑄造が完成し、宇佐から**八幡神**を勧請し「東大寺」の鎮守社として「手向山八幡宮」が創建された。その南都教学と神仏習合発祥の時代、752年、聖武天皇・光明皇后が東大寺大仏(盧舎那仏)開眼供養。天平宝字2年(758年)竣工した。

777年、八幡神は神で初めて出家、八幡大菩薩となる。

766年までに伊勢神宮にも神宮寺が、奈良時代末までに大神神社に大御輪寺が創建される。(大御輪寺の観音菩薩は、明治、廃仏棄釈の折、聖林寺に遷され国宝となる)

特に「**神身離脱**」習合の背景には、神主や祝部(はふりべ)、豪族たちの**富の蓄積**がある。神祇祭祀を基礎とする当時の租税制度は 皇祖神の霊力が宿るとした幣帛(へいはく)、律令で定められた幣帛班給を受けるための租税としての初穂徴収である。しかし一方、律令などの近代化、開墾と条里や灌漑の整備で生産量が増加、富が村に残るようになった。村長や富農へ、さらに地方豪族や郡司に富が蓄積し、財力で田夫を雇うようになり、**所有の概念**が生まれた。幣帛への価値観が崩壊し、受領する村が減少、また初穂奉納や班給を私物化する豪族も出現、税制が揺らぎ始めた。朝廷は、幣帛を受領するように太政官符(行政命令)を出し、ある時期まで一定の効果が得られた。豪族や富農は、皇祖神への裏切りと所有の**罪悪感**にとらわれ、**密教僧による「神宮寺」を勧進**。それと相乗して初穂(税収)低迷、幣帛受領の減少もさらに拡大した。

やがて朝廷も、僧統(僧都などの官僚機構)の承認を出して神宮寺の僧を合法化した。古来の神祇祭祀と律令による近代化との矛盾を、仏教による国家統一に方針変換したわけである。その結果、豪族の悩みも解消し国家も『墾田永年私財法』などで私的所有を承認したので、仏教ばかりか皇祖神への信仰も厚くなり、仏教と神道の合祀が促進された。神信仰が無くならなかった理由は、村人や田夫たちは**自然に左右される農耕**の実務者として古来の神祭りや宴を必要としたからである。そして難解な南都教学とはちがう**密教**は、古来の神祇祭祀となじむ呪術的であり、世俗の富を現世利益として肯定する思想として、この神仏習合の主体となった。しかし、密教はまだ国家として認知できる大乘仏教、体系を備えてはいなく、空海を待つことになる。

司馬遼太郎によると、**空海**は大安寺の勤操(ごんぞう)の私的給仕人としての自由な立場を得て、その南都教学を消化した。**法華経**に混在する「人間としての釈迦仏」と「永遠の空なる法身仏」、この存在的矛盾に盧舎那仏(るしゃなぶつ)という思想的法身を創造した思想が、東大寺に伝わった**華嚴経**である。空海は、その中に 宇宙原理の手掛かりを求める、そして、大和高市郡の久米寺で「大日経」毘盧遮那仏(びるしゃなぶつ)、特に日本密教では「**大日如来**」と呼ぶ思想的存在と出逢う。延暦23年(804年)遣唐し、密教第七祖 長安 青龍寺の**惠果**から、灌頂名 遍照金剛(へんじょうこんごう)と、伝法印信 阿闍梨付嘱物など授けられた。大同元年(806年)10月「虚しく往きて実ちて帰る」大同4年(809年)嵯峨天皇が即位。空海は、和泉国槇尾山寺から、7月の太政官符を待って入京、**和気氏**私寺であった愛宕山麓「**高雄山寺**(後の神護寺)」に入った。

「高雄山寺」所在の**愛宕山**は、愛宕神社略記などによれば、文武天皇期の大宝年間(701~704年)に、役小角と泰澄が開山し神廟を建立したとする。元来は山岳修験の山であり、明治の神仏分離のあと分離成立となる愛宕神社には、その時の伝承から日本一の天狗として「太郎坊」が伝わる。泰澄は、秦氏の系統で、越前国、豪族三神安角(みかみのやすずみ)の次男が通説。越智山にのぼり、十一面観音を念じて修行を積んだ。のちに開山する白山信仰の創始者である。

天応元(781)年、光仁天皇(桓武天皇の父)の勅により、**慶俊**僧都と**和気清麻呂**が、国家安泰を祈願し、慶俊僧都と愛宕山全域を中興、愛宕一帯を聖地化した。

興福寺の伝えによると弘法大師は法相学を 義淵僧正一道慈一**慶俊**・勤操一空海(弘法大師)という系統で学ばれた。とする。

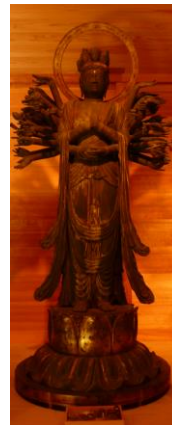
唐の五台山に倣って、5箇所(の峰)に寺を創建。朝日峰の白雲寺、大鷲峰(おおわしみね)の**月輪寺**、高雄山の**高雄山寺**、龍上山(たつかみやま)の日輪寺、賀魔蔵山の伝法寺である。「**月輪寺**」は、**千手観音菩薩**を本尊とし、神護寺とともに現存、光仁天皇の勅願所となっている。清麻呂は、同じ頃、河内にも「神願寺」を創建した。

天長元年(824)清麻呂の子、真綱、仲世の要請により「神願寺」と「高雄山寺」を合併し、寺名を「**神護国祚真言寺**((じんごくそしんごんじ 略して神護寺)」と改め、空海に付嘱し定額寺(官が保護を与える一定数の私寺のこと)に列せられた。それ以後、真言宗として今日に伝わる。

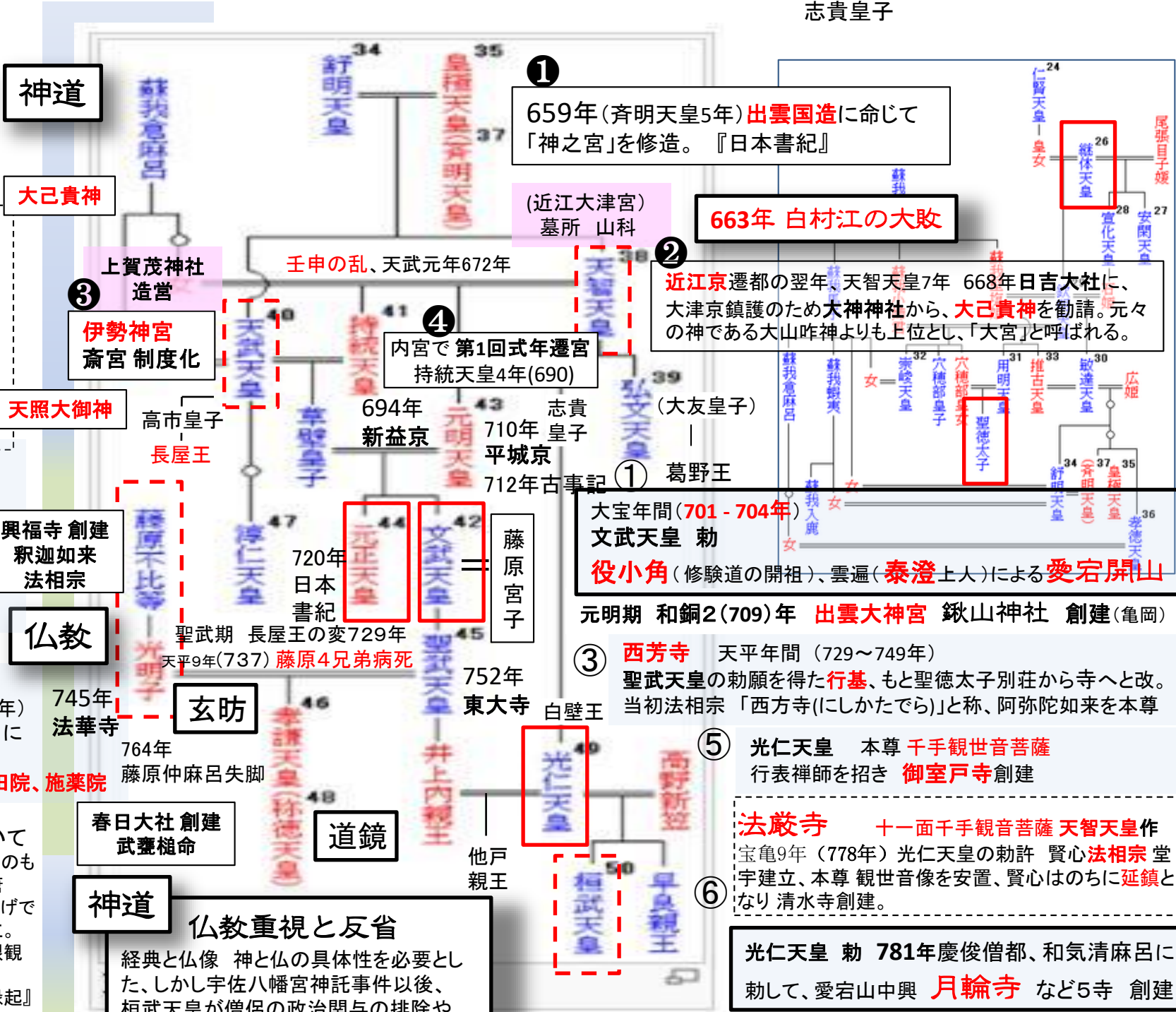
その**慶俊**は、730年頃に生まれ、延暦年間(782~806)まで生きた。百濟王族の子孫である渡来人系氏族葛井(藤井)連(ふじいのむらじ)の出身。奈良時代の720年に白猪氏から**葛井氏**に改姓。8世紀中頃に創建されたと推定される**藤井寺**を氏寺としている。出家後大安寺に属し、入唐僧の道慈を師として三輪、法相、華嚴などを学ぶ。天平勝宝5(753)年には法華寺(光明皇后の宮を寺院とした宮寺を起源とする)の大鎮。同8年、聖武天皇の死に際して律師に。昇進の背景には学問的教養のほか、光明皇后、藤原仲麻呂との強い連携が想定される。孝謙天皇と道鏡の関係進展で、藤原仲麻呂政権の崩壊とともに失脚するも、道鏡の没落後、律師に復帰していた。



聖林寺 観音菩薩 (元 大御輪寺 像)



継体天皇が山背の筒城・弟国を一時の宮とし、天智天皇と天武天皇系統間の皇位継承を経て、その5世代のちとなる桓武天皇に至る。その約130年の間に、山背は、山代 平安京へと、その輪郭を現す。新都創成の前章として、西山山岳 金蔵寺、山科山岳 正法寺 法蔵寺、愛宕山岳には、月輪寺など五寺 が歴史に出現する。



金蔵寺 (こんぞうじ) 創建 法相宗 現 天台宗
 養老二年(718)、元正天皇の勅によって隆豊禪師が開創し、**聖武天皇**は勅額を賜り經典を書写して埋めたといわれ、桓武天皇は長岡京遷都の際、京護持のため全山復興。また平安京遷都では、王城鎮護のため經典を埋め西岩倉山と号するに至ったと伝えられる。
 千手観音を刻んだことが「金蔵寺略縁起」に見えている。平安時代以後、当寺は西山の名刹として栄えたが、応仁の乱へと続く戦乱によって当寺の建物はすべて焼失、正確な歴史を伝える古文書、記録も失われた。
 現在の建物は、元禄四年(1691)、將軍綱吉の母、桂昌院によって再建

金蔵寺 (こんぞうじ) 本尊 **千手観音** 718年
 元正天皇の勅により、行善(隆豊禪師)開創
 ふもとの「勝持寺」は、679年 役小角が開山

岩間山 正法寺 本尊 **千手観音** 722年
 泰澄が、元正天皇大厄の病を法力で治し褒美として建立

岩間山 正法寺 西国三十三所
 泰澄大師が元正天皇の三十三歳の病を法力により治した褒美として建立したことに始まる、元正天皇の勅願寺院。
 泰澄は、養老元年(717)白山を開山。
 養老六年(722)、元正天皇の病氣平癒祈願を成満した泰澄は、靈地を求め岩間山を訪れた折、桂の大樹より千手陀羅尼を感得し、その桂の木で等身の**千手観音像**を刻み、元正天皇の御念持仏をその胎内に納め祀り本尊とした。
 後白河・後宇多・正親町(おおぎまち)天皇など、**歴代天皇の尊崇厚く熊野、吉野に並ぶ、日本三大霊場の一として隆盛** (平安~安土桃山)

④ 聖武天皇・光明子 741年(天平13年) 国分寺・国分尼寺に法華経設置 **観音信仰** 悲田院、施薬院

②金蔵寺 行善について 薩摩国生、元興寺の道昭のもとで仏法を納め、高麗、唐夢枕の聖観世音のお告げで小塩山山腹に一字を建立。靈樹から十一面千手千眼観音像を彫り出し本尊に。『金蔵寺略縁起』

神道

大己貴神

上賀茂神社 造営

③ **伊勢神宮** 齋宮 制度化

天照大御神

興福寺 創建 釈迦如来 法相宗

仏教

玄昉

春日大社 創建 武甕槌命

神道

仏教重視と反省
 經典と仏像 神と仏の具体性を必要とした、しかし宇佐八幡宮神託事件以後、桓武天皇が僧侶の政治関与の排除や財政再建のため寺院統制や封戸削減

① 659年(齊明天皇5年) **出雲国造**に命じて「神之宮」を修造。『日本書紀』

(近江大津宮) 墓所 山科

② 663年 **白村江の大敗**
 近江京遷都の翌年、天智天皇7年 668年日吉大社に、大津京鎮護のため**大神神社**から、**大己貴神**を勧請。元々の神である大山咋神よりも上位とし、「大宮」と呼ばれる。

④ 内宮で **第1回式年遷宮** 持統天皇4年(690)

694年 **新益京** 710年 志貴皇子 **平城京** 712年古事記 ① 葛野王

大宝年間(701-704年) **文武天皇** 勅 **役小角**(修験道の開祖)、雲遍(泰澄上人)による **愛宕開山**

元明期 和銅2(709)年 **出雲大神宮** 鞆山神社 創建(亀岡)

③ **西芳寺** 天平年間(729~749年) 聖武天皇の勅願を得た**行基**、もと聖徳太子別荘から寺へと改。当初法相宗「西方寺(にしかたでら)」と称、阿弥陀如来を本尊

⑤ **光仁天皇** 本尊 **千手観世音菩薩** 行表禪師を招き **御室戸寺** 創建

法蔵寺 十一面千手観音菩薩 **天智天皇**作 宝亀9年(778年)光仁天皇の勅許 賢心**法相宗** 堂宇建立、本尊 観世音像を安置、賢心はのちに**延鎮**となり清水寺創建。

⑥ **光仁天皇** 勅 781年慶俊僧都、和氣清麻呂に勅して、愛宕山中興 **月輪寺** など5寺 創建

行基と慶俊を繋ぐ、藤井寺と大安寺の 観音信仰

行基
 泰澄より「神仏習合」思想を学ぶ。八幡信仰を創設 東大寺及び大仏建立に宇佐八幡宮より守護神勧請(手向山八幡宮) 和銅6年(713年)文武天皇の母 元明天皇の勅願により、五穀豊穡、産業の興隆を祈願する **葛井寺(かどのいでら)** 建立 **現 法輪寺**(本尊 虚空蔵菩薩) 創建当時は観音菩薩と考えます。 725年 聖武天皇の勅願で **葛井寺(河内 藤井寺)** 創建 本尊 十一面千手千眼観世音菩薩 (国宝)

慶俊と、藤井寺 大安寺の関係
河内 藤井寺は百濟王族の子孫である渡来人系氏族葛井(藤井)連(ふじいのむらじ)の氏寺として、8世紀中頃に創建された。なお、平安時代初期に寺を再興したと伝えられる阿保親王の母も藤井氏である。 奈良時代720年に渡来人白猪氏から葛井氏に改姓し、一族から**大安寺僧慶俊**が出ている。

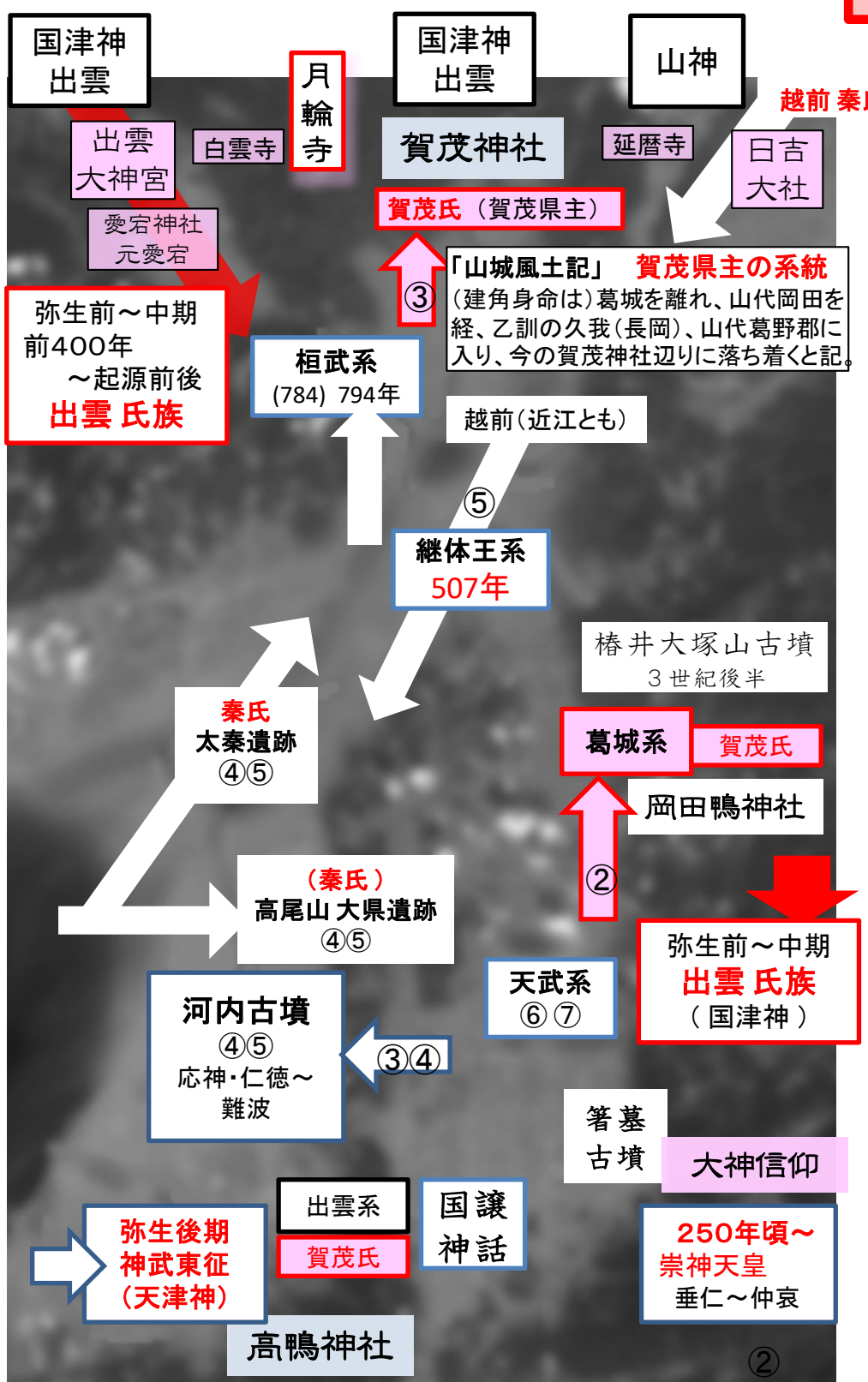
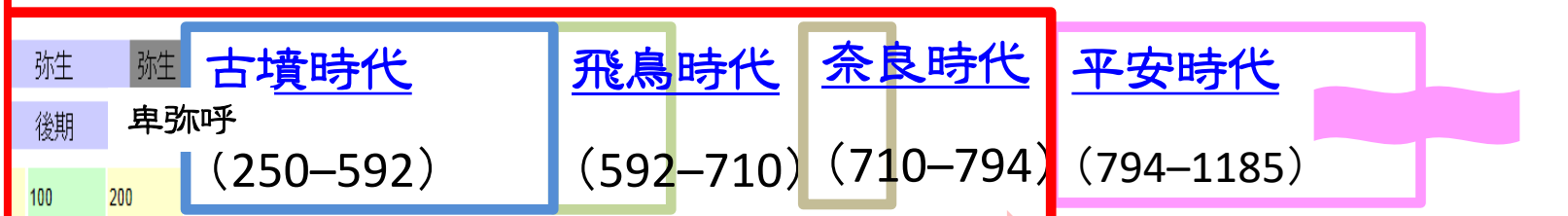
長岡京遷都 藤原種継が桓武天皇に提唱。母は秦朝元の娘。

大安寺の経歴
 起源 飛鳥時代 592~710年 百濟大寺(初の官営寺)高市・大官大寺 639年 起源は聖徳太子が今の奈良県大和郡山形市に建てた熊凝精舎(くまごりしょうじや) 奈良移築後、**大安寺**…本尊 十一面観音立像 釈迦如来像(金堂)

古代豪族と 秦澄

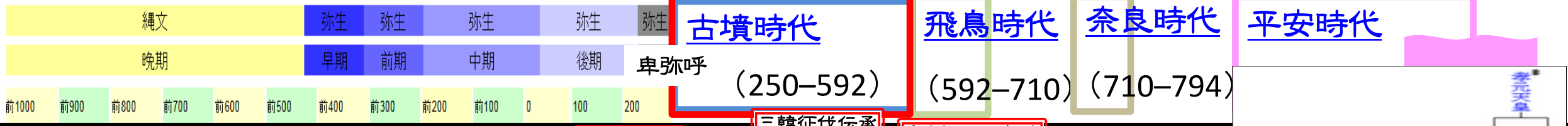
賀茂氏と秦氏
 その祖先、変遷経路、信仰、今に伝わる神社、寺との関係とは？
 ① 平安京に至る歴史地図
 神社名は、信仰した人々の拠点を著わし、建物としての創建(時期)ではない

主たる参考書籍 **考証・追論**
 「日本の古代文化」 林屋辰三郎氏
 「丹波王国」 関係書籍 伴とし子氏
 「出雲と大和」 村井康彦氏
 「葬られた王朝」 梅原猛氏



縄文 弥生文化と **磐座** 自然崇拜
 神話と氏族 **山代** 氏族の祖
 考古学と **渡来** 氏族の移動
 出雲と **山代**と大和 気候・地理環境
 大和の神々と **山代**の神々の関係
 古墳時代 王朝移動 **山代**への渡来人
 仏教公伝 大和教学と **山代** 観音信仰
 山岳信仰、修験道 大和から **山代**へ
 神仏習合の発祥
 外交・内紛と八幡神 発祥
 平安京前夜
 国家神道・仏教 **山背**神仏





古墳時代 (250-592) 約350年

外来文化の独自化 顕著なる遺構 変遷の理由

日本史全体では、古墳時代は約350年間。中国では、唐・宋・明・清と約1300年間、朝鮮半島でも同様に、比較すると、我が先祖の古墳文化時代は短期である。

しかし、その形状多様性、また世界最大の墓域面積「大仙陵」(5世紀前半)など、大規模を特徴とする。また、末期では他国に無い「巨石型 横穴式石室」採用に至る。

渡来の文化・風習を取入れつつ、独自の発展を遂げた我が国の文化的表現が、堂々と1600年、今も存在する。

応神天皇後、王朝が、西・河内(かわち)地域に変遷した要因と考察

前期 3世紀の後半、西日本各地に特殊な壺形土器、器台形土器を伴った墳丘墓(首長墓)。その後、円墳、出雲文化圏特有の**四隅突出型墳**から変化した**大型方墳** 最古は島根県安来市の**大成古墳**、前期で珍しい素環頭大刀が出土。**前方後円墳** 九州北部の石塚山古墳 3世紀中~4C初宮崎 西都原古墳群 3世紀中~7C 13号墳 80m前方後円墳 国産**三角縁神獸鏡** 奈良盆地に大王陵の大型前方後円墳が集中。埋葬施設は**竪穴式石室**で、副葬品は呪術的な**鏡・玉・剣・石製品、鉄製農耕具**。円筒埴輪が盛行。**土師器**が畿内で作られ、各地普及すると、その後、**器財埴輪・家形埴輪**が現れた。

主な王墓 箸墓古墳 (邪馬台国の女王卑弥呼墓と推定、最初の王墓。280メートル前方後円墳、造営は3世紀後半説) 大和古墳群の西殿塚古墳(219メートル) 天理市、柳本古墳群の行燈山古墳(伝崇神陵)、柳本古墳群の渋谷向山古墳(伝景行陵、310メートル) 王に準じる規模内容、桜井茶臼山古墳、メスリ山古墳

渡来人 4後半~6世紀 渡来多し

4後半~5世紀 ヤマト王権は属国の百済と連携、朝鮮半島南部の領土と支配権維持に再三出兵、大陸で活動、高句麗「広開土王碑」にも記録。

後半、大陸や百済などより渡来、政権要職、文化寄与

弓月君(秦氏) 養蚕、機織、土木

阿知使王(東漢氏 やまとのあやうじ) 文筆

西文氏(かわちのふみうじ) 儒教と漢字を伝えた

応神16年 先祖 **王仁**(わに)400年頃渡来 古市居住。『論語』と『千字文』を伝えた 『日本書紀』

鞍部村主司馬達等(止)(大唐漢人、継体朝・敏達朝)、鞍部多須奈(用明朝)、鞍作止利仏師(推古朝)

中期 5世紀の初頭、王墓クラスの大型前方後円墳が奈良盆地から河内平野に移り、巨大化した人物埴輪が現れた。

5世紀半ば 畿内の大型古墳の竪穴式石室が狭長なものから幅広に長持ち型石棺を納める。各地に巨大古墳が出現、副葬品に、馬具・甲冑・刀などの軍事的なものが多くなる。

5世紀後半 北部九州と畿内の古墳に横穴式石室採用が増えた。北部九州の大型古墳には、石人・石馬が建てられる。この頃大阪南部で、**須恵器**の生産が始まり、曲刃鎌やU字形鋤先・鍬先が出現。

5世紀の終わり 畿内の一部に先進的な群集墳が現れ、大型古墳に家型石棺。南東九州地方や北部九州に地下式横穴墓が造られ、装飾古墳が出現。

畿内の盟主墓 羽曳野市 **誉田御廟山古墳**(伝応神天皇陵、416メートル) 堺市 **大仙古墳**(伝仁徳天皇陵、486メートル) 上石津ミサンザイ古墳(伝履中天皇陵、365メートル) 一部の地域首長古墳が **巨大化**

岡山市 造山古墳 総社市 作山古墳 群馬県太田市 太田天神山古墳

後期 6世紀の前半 西日本の古墳に横穴式石室が盛ん

6世紀の前半 西日本の古墳に横穴式石室が盛ん。関東地方にも横穴石室を持つ古墳が現れ、北部九州では石人・石馬が急速に衰退。古墳時代後期の大王陵 今城塚古墳(大阪府高槻市、真の継体陵、) 河内大塚山古墳(大阪市松原市) 前方後円墳 最終段階大王陵 見瀬丸山古墳(欽明陵推定、橿原市) **敏達陵古墳(大王陵最後の前方後円墳)**

6世紀後半になり九州北部で装飾古墳が盛行。埴輪が畿内で衰退、関東で盛行。西日本で群集墳が盛ん。

終末期 全国的に6世紀の末までに前方後円墳が造られなくなり、畿内でも方墳や円墳がしばらくの間築造されていた時期を古墳時代の終末期と呼んでいる。

- 千葉県 大堤権現塚古墳(大堤古墳群、終末期最大の前方後円墳)
 - 浅間山古墳(龍角寺古墳群、最後の前方後円墳)
 - 龍角寺岩屋古墳(龍角寺古墳群、終末期最大の方墳)
 - 駄ノ塚古墳(板附古墳群、方墳)
- 大阪府南河内郡太子町磯長谷古墳群 春日向山古墳(現用明天皇陵、方墳)
 - 山田高塚古墳(現推古天皇陵、方墳)

石舞台古墳(奈良県高市郡明日香村島庄、蘇我馬子墓推定、方墳、横穴式石室)

山室姫塚古墳(千葉県山武市松尾町山室、大塚古墳群、円墳)

牧野古墳(奈良県北葛城郡広陵町、押坂彦人大兄皇子の墓である可能性が高い、円墳) ムネサカ1号墳(奈良県桜井市、中臣氏一族、円墳) 峯塚古墳(奈良県天理市、物部氏一族、円墳) 700年頃**高松塚古墳** **キトラ古墳**



古墳時代 (250-592)

箸墓古墳 250年頃

三韓征伐 伝承 390年頃 369-404

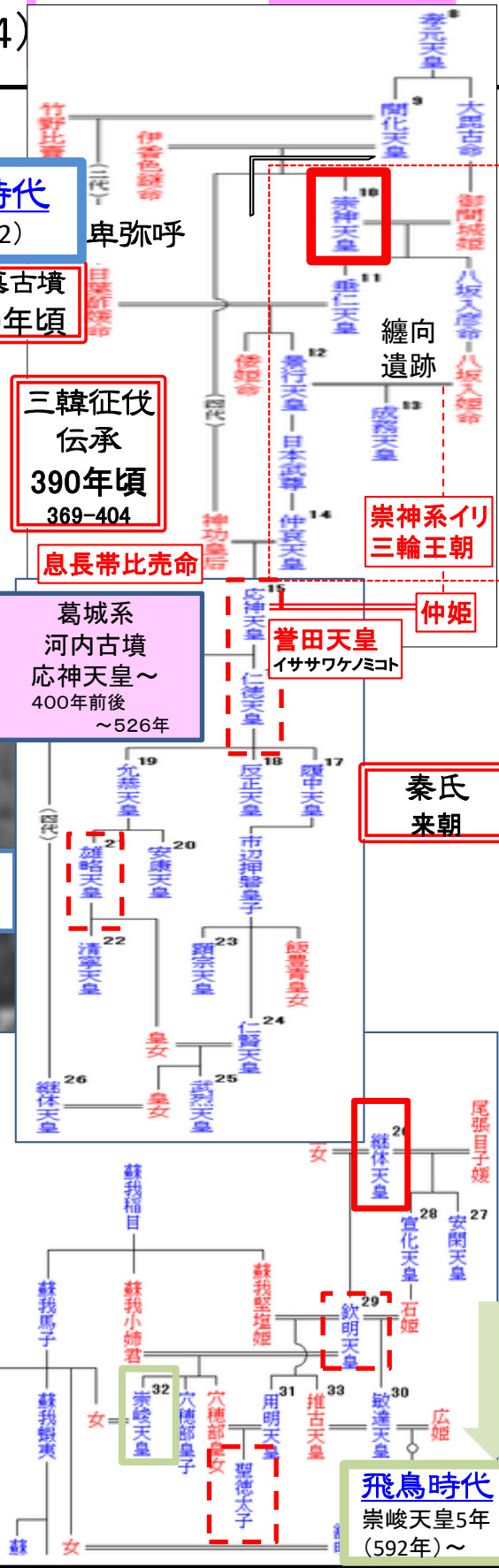
継体王系 507年

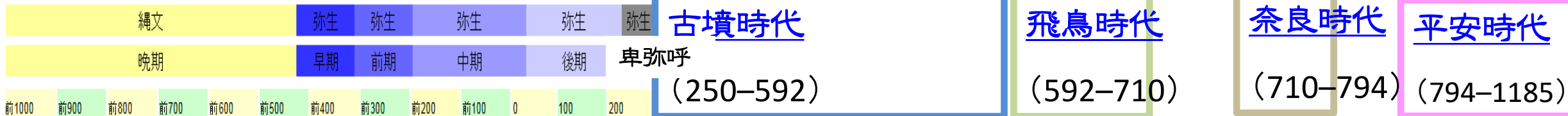
秦氏 太秦遺跡 ④⑤

河内古墳 ④⑤ 応神・仁徳~難波 葛城系古墳

箸墓古墳 250年頃

飛鳥時代 崇峻天皇5年(592年)~





神話と史実



- 1 石山貝塚 粟津湖底遺跡 勝籠尾崎湖底遺跡
- 2 長明寺 湖底遺跡 丸木舟
- 3 下之郷遺跡 環濠集落
- 4 下長遺跡 銅鏡・銅鐸破片 湖岸(新庄) / 大岩山・石山
- 5 鴨稻荷山古墳 大和と関係する有力豪族 主説 三尾族長の墓 雄略天皇(在位456~479) 秦酒公(はたのさかのきみ) 各地の秦部・秦人を統率
- 6 667年 大津京 大友氏 集落
- 672年 壬申の乱 長等山園城寺 (三井寺) 壬申の乱に敗れた大友皇子の皇子の大友与多王は父の霊を弔うために「田園城邑(じょうゆう)」を寄進して寺を創建、天武天皇から「園城」という勅額を賜わる

日枝神社 (小海神社) 大山咋神
 日吉十禪師との社名 瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)を権現とみた称。国常立尊(くにのとこたちのみこと)から数え第10の神にあたり、地蔵菩薩(ぼさつ)の垂迹(すいじゃく)

水尾神社 名神大社 従来は猿田彦「高島郡誌」
 磐撞別命(イワツクワケ) 垂仁天皇第十皇子(三尾氏祖)
 比咩神 振姫命 継体天皇 御母君

白鬚神社 国史見在社
 「淡海国最古」の伝承
 主祭神 猿田彦大神

日吉大社
 古来より、大山咋神を祀り天智天皇が大己貴神(大国主神に同じ)を併せ祀る。5摂社の内、
 樹下宮: 鴨玉依姫命 明治までは、十禪師(瓊瓊杵尊)を祀る
 白山宮: 菊理姫命 秦澄「白山信仰」

松尾大社
 大山咋神 市杵島姫命 スサノオの剣から生まれた宗像三女神の次女。

【亀岡地域】
 松尾神社 大山咋命 市杵嶋姫命
 桑田神社 市杵嶋姫命 大山咋命

御神島 常神岬

日吉神社

劔神社 素盞鳴尊 越前町織田

福井の古社 杉杜白鬚神社 (すぎのもりしらひげ)
 主祭神 猿田彦大神
 桓武天皇の御代、延暦年中に、越前国司、坂上菟田麿が再建。(田村麻呂の父)

矢合神社

山津照神社 国常立尊 息長氏神

日枝神社

志呂志神社 事代主神 瓊瓊杵尊 鴨祖神玉依姫命

「犬上」の地名 縄文、アイヌ語との関係

白鬚神社

日吉神社 大山咋神 長命寺護法権現社 武内宿彌
 大嶋神社 大国主神 奥津嶋神社 奥津嶋比売命

百濟寺 白村江の大敗後、百濟からの渡来人が建立。三重石塔

三上山

御上神社 天之御影命 鍛冶の祖神、天之彦根神の子、息長氏の祖説もある。

大岩山銅鐸 勝部神社

武部大社 名神大社、一宮 日本武尊 大己貴命

淡海国は、日本海と大和、山代の歴史

「磐座」から 大山咋神 猿田彦大神 と 瓊瓊杵尊 降臨 倭建命の失神 と 伊吹山

古代、湖東に多く暮らし、対岸との関係で、水と山の信仰を深めた。息長氏は、古事記で息長帯比売(神功皇后)たちが皇統と関係し、野洲から米原 山津照神社(古墳)に。河内 楯原神社にまで伝承を残す。

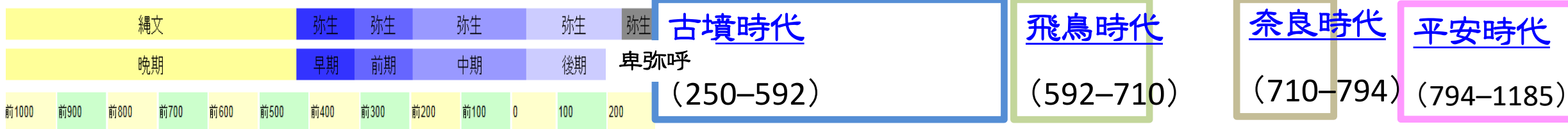
鳥越峯 白鬚神社 と 長命山 三上山 と 牛尾山 三上山の西方 大岩山銅鐸 物部の勝部神社

渡来人を受け入れ、湖西の往来が盛んとなる。大山咋神は、湖西から湖東へと淡海で多い。南下した秦氏は山代松尾で同族と合流し、大山咋神と市杵島姫命(出雲)とが出逢う。

継体天皇は、垂仁天皇の皇子 磐撞別命の末裔 三尾氏の本拠 高島から、越前三国で育ち、大伴氏が迎え、樟葉に至る。

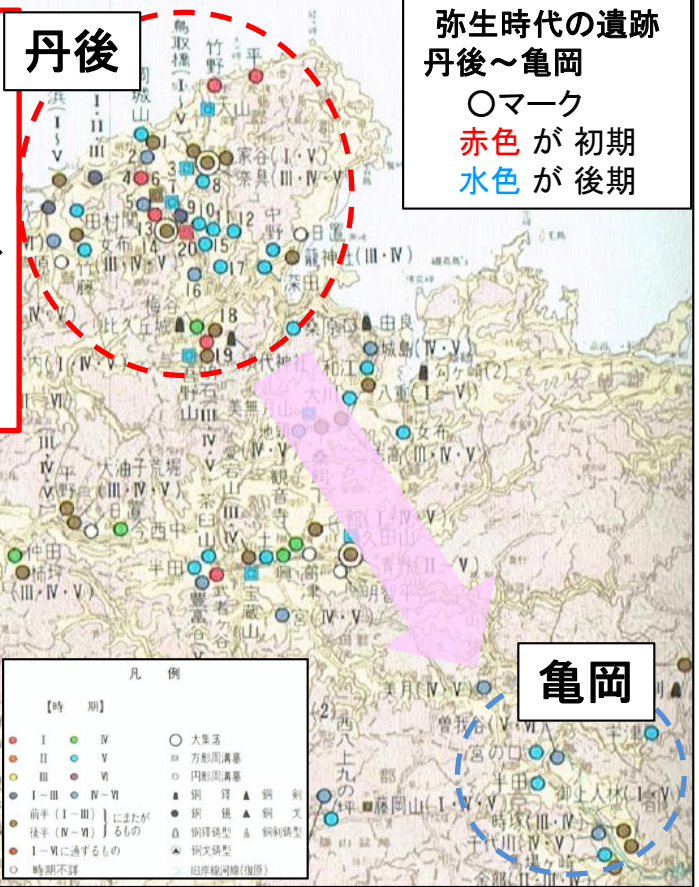
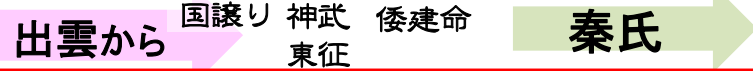
湖西、大友氏の地へ、天智天皇を迎え、その皇子は大友を名のる。仏として穴太崇福寺が、長門城からの本州国防、最後の砦 守護神山として「音羽山」が、志賀宮(大津京)を守る。中臣鎌足の妻が残した山階寺は、のちに大和で興福寺に。都は、藤原京に遷るが、山ノ神遺跡は瓦葺宮殿をもたらす。

白山 秦澄は、日吉を経て、愛宕山から岩間山に至る。



神話と史実

昔、桑田と名付けられた「亀岡」は、弥生から古墳時代にかけて人々の移住が盛んとなる。その信仰の歴史はこの地の山麓神社たちに残る。淡海、山代と同じように、出雲、丹後からの「神奈備 磐座」と神々への信仰は、現在「出雲大神宮」で継承される。当時、山代は河川氾濫も多く、丘陵平野であるこの場所が、稲作の適地とされた。その後、大和に至り三輪山山麓で、同様な生活を始める。この地域は、その後、**秦氏**の進出を迎える。淡海、現在の滋賀、日吉大社で古来誕生した、山の神「大山咋命」。松尾大社や、この地の神社に同じ様に祀られるその祭神が、滋賀・京都から亀岡にも変遷した 秦氏の歴史を確信させる。「市杵嶋姫命」は、秦氏本流が九州、瀬戸内から渡来した証である。秦氏と姻戚関係となる 吉岐氏、その祖 忍見命(押見宿禰)は、日本書紀で(487年)「月読尊」を吉岐から京都に分霊、月読神社を創建。現 松尾大社の境外摂社である。その昔、「賀茂建角身命」に嫁ぎ、「玉依比古命」(賀茂県主)、「玉依比売命」の二子を生む 丹波国神野の国神「伊可古夜比売命 いかこやひめのみこと」は、下賀茂神社に祀られている。ここ亀岡でも 市内西方、神尾山(神野山)山麓の宮川神社に静かに祀られ、この地と山代、賀茂氏との関わりを伝えている。



幡日佐神社 (はたひさじんじゃ) 式内社
品陀別命 (ほんだわけのみこと) 応神天皇に同じ 創建以来の祭神
氷室命 (ひむろのみこと) 近隣 氷室神社の祭神 江戸時代に合祀

天照皇大神社 創祀 大同三年(808年) 天照大神
境内神社 祇園社・八幡社・蛭子社・日吉社・春日社・稻荷大明神

松尾神社 創祀 和銅年間(八世紀初頭) 式内社
大山咋命 市杵嶋姫命

神奈備 磐座

白雲寺 現愛宕神社



出雲大神宮 神体山 御蔭山
式内社(名神大社)、丹波国一宮
創建年代 社伝、元明天皇期 和銅2年(709年)社殿創建
大神朝臣狛麻呂 現社殿 1305年足利尊氏
大国主命 縁結び・金運一福の神
三穗津姫命 五穀豊穡の神
高産霊尊の子で、大国主の国譲りの際に大国主の后となったと伝えられている。保津川名 由来伝承
天夷鳥命 (あめのひなどりのみこと) 出雲国造りの神 上の社
素戔鳴尊 (スサノノミコト) 厄難消滅の神
櫛稲田姫尊 (クシイナダヒメノミコト) 家内安全の神
笑殿社
事代主命 (コトシロヌシノミコト) 商売繁昌の神
少那毘古名命 (スナヒコナノミコト) 医薬・健康の神
稻荷社
宇迦之御魂神 (ウカノミタマノカミ) 五穀豊穡・商売繁昌の神
春日社
建御靈之男神 (タケミカツチノオノカミ) 武勇の神
(磐座) 天兒屋根命 (アメノコヤネノミコト) 受験・勉学の神
辨財天社
市杵嶋姫命 (イチキシマヒメノミコト) 財運・女性・芸能の神
黒太夫社
猿田毘古神 (サルタヒコノカミ) 導きの神
大山祇神 (オオヤマツミノカミ) 山の神
崇神天皇社
崇神天皇 (スジンテンノウ) 第10代天皇
御蔭山 (御神体山)
国常立尊 (クニトコタチノミコト) 国土安泰の神

小川月神社 月読神社

大井神社 式内社
和銅3年(710年)
御井神(木俣神)
月読神 市杵嶋姫命

愛宕神社 式内社
火産霊神 伊邪那美神 大国主神

桑田神社 式内社論社
市杵嶋姫命 (いちきしまひめのみこと)
配祀神 大山咋命 大山祇命

秦氏

鍛山神社 式内社 (伝) 和銅2年(709年)
大己貴命 譽田別尊

愛宕神社 (京都市)
本殿 伊弉冉尊 (いざなみのみこと)
稚産霊神 (わかむすびのかみ)
埴山姫神 (はにやまひめのみこと)
天熊人命 (あめのくまひとのみこと)
豊受姫命 (とようけひめのみこと)
若宮 雷神 (いかづちのかみ)
迦遇槌命 (かぐつちのみこと)
破无神 (はむしのかみ)
奥宮 **大黒主命(大国主命)**

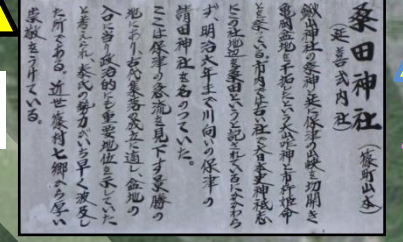
国津神出雲系 創造母神
「穀物神」
「創造神」天平瓮・祭器・道具・食器の源
「五穀神」
「穀物神」
「雷」建御雷神
「火の神」伊邪那美神の息子
「蛇神」?
国津神出雲系 創造・農業・愛縁神

京都

松尾大社 式内社(名神大社)
大山咋神 市杵嶋姫命
市杵嶋姫命 スサノオの剣から生まれた
宗像三女神の次女。

月読神社 式内社(名神大社)
和銅3年(710年)
主祭神 月読尊、相殿 高皇産霊尊

日吉大社
古来より、大山咋神を祀り
天智天皇が大己貴神を併せ祀る。
5 摂社の内、
樹下宮：鴨玉依姫命
明治までは、十禅師 (瓊瓊杵尊)を祀る
白山宮：菊理姫命 秦澄「白山信仰」



延暦寺

本尊は、薬師如来だが、一乗止観院 延暦寺発祥の東塔山王院に、観音菩薩が祀られた。

木造 千手観音立像 (旧所在山王院) 平安時代初期 イヌガヤ 一本造 51.2cm 重要文化財



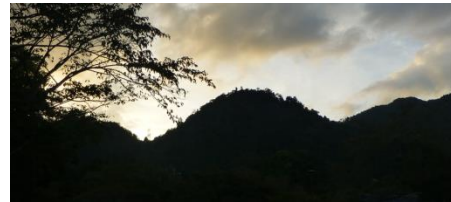
日吉大社

初見『古事記』

「大山咋神、亦の名を山末之大主神。

此の神は近淡海国の

日枝の山に坐し、亦葛野の松尾に坐して、鳴鏑を用つ神ぞ」牛尾山(八王子山)山頂に磐座 鳴鏑(なりかぶら 矢の先)



起源 社伝崇神天皇7年 推定210年頃 天智天皇7年 668年 近江京遷都の翌年

日吉大社に、大津京鎮護のため大神神社から、大己貴神を勧請。元々の神である大山咋神よりも上位とし、「大宮」と呼ばれる。

延暦7年 788年

最澄は三輪山より大物主神の分霊を日枝山に勧請して大比叡とし

従来の祭神大山咋神を小比叡とした。現在の根本中堂の位置に薬師堂・文殊堂・経蔵と、寺院を建立し、一乗止観院とした。

比叡山の地主神である日吉大社を、天台宗・延暦寺守護神として崇敬。中国の天台宗の本山である天台山国清寺で祀る山王元弼真君にならない山王権現と呼ばれる。

桓武天皇是最澄に帰依し、また、天皇やその側近である和氣氏の援助を受けて、比叡山寺は京都の鬼門(北東)を護る 国家鎮護の道場として次第に栄える。年号をとった「延暦寺」という寺号が許されるのは、最澄の没後、弘仁14年(824年)のこととなる。

延暦寺では、山王権現に対する信仰と天台宗の教えを結びつけて山王神道を説いた。

中世に比叡山の僧兵が強訴のために担ぎ出したみこしは日吉大社のものである。

天台宗が全国に広がる過程で、日吉社も全国に勧請・創建された。

本宮

西本宮:大己貴神(おほなむち) (大国主神に同じ)

東本宮:大山咋神

5 摂社

宇佐宮:田心姫神

牛尾宮:大山咋神 荒魂

白山宮:菊理姫命

樹下宮:鴨玉依姫命

三宮宮:鴨玉依姫命 荒魂



神奈備 磐座



白山比咩神社 (しらやまひめじんじや)

養老2年(718年)、越前の修験僧・泰澄大師

白山主峰・御前峰に奥宮を創建 現 石川県白山市三宮町 式内社、加賀国一宮。旧社格は国幣中社

現在は神社本庁の別表神社。

全国に2,000社以上ある白山神社の総本社

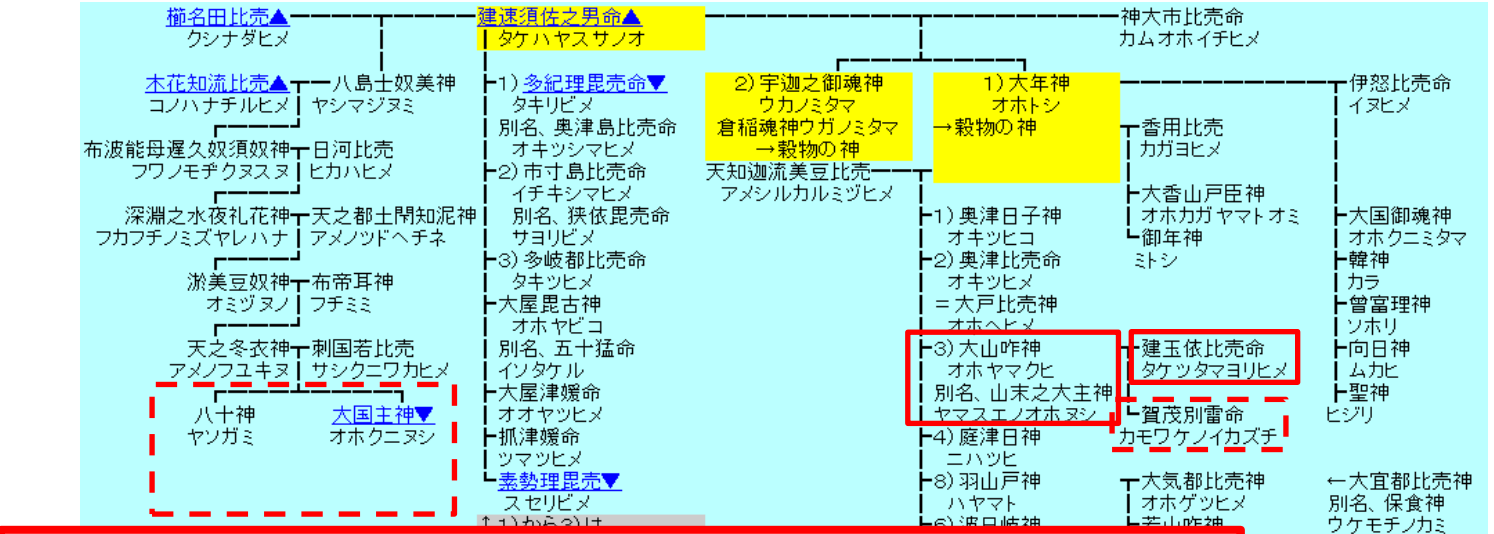
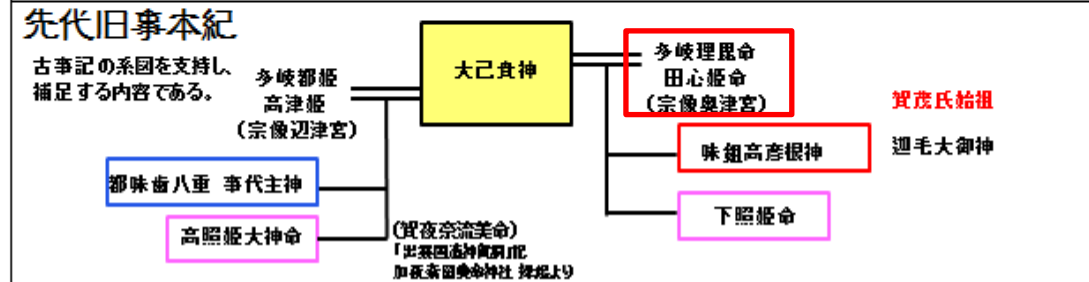
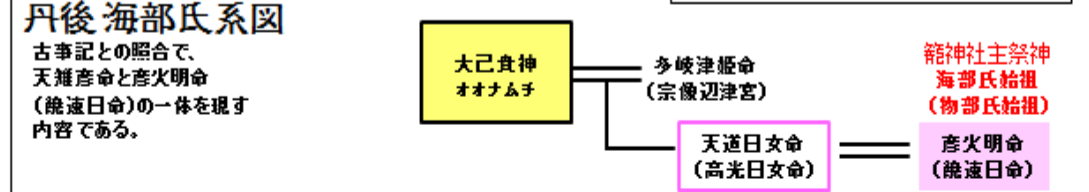
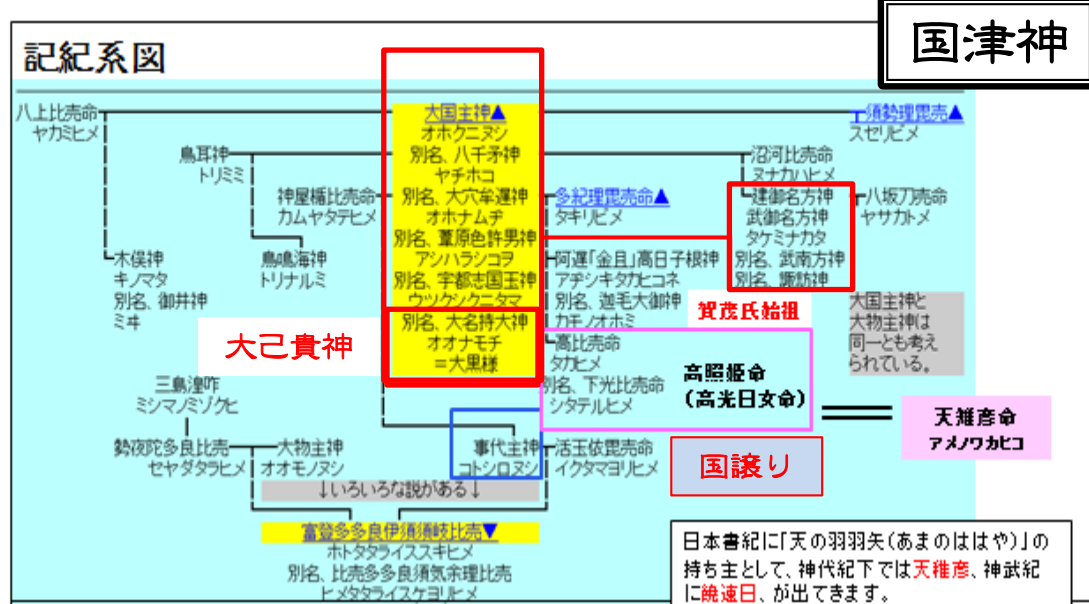
白山(標高2,702m)の山麓に鎮座、白山を神体山として祀る

主祭神 白山比咩大神・菊理媛神(くくりひめのかみ)と同一神

神名から、世をくくる、整える神

伊邪那岐尊 伊弉冉尊

Table with columns: 社格, 社名, 祭神, 旧称, 本地, 所在地. Lists various branches of the shrine and their associated deities and locations.



日吉大社の信仰起源、根本は山背の山々と同じく「神奈備 磐座」である。つまり山陰から丹後～亀岡～大和、もうひとつは、越(北陸)からここ淡海(近江)経由で山背に至る、人々の自然な流れの証である。琵琶湖を挟み、日吉大社の神山、八王子山と相対する三上山。その麓の野洲市小篠原(桜生)の「大岩山」から、「銅鐸」が通算38個、発見、山陰に渡来した弥生時代の「出雲北陸文化」だ。400年代、山背への秦氏渡来と秦酒公による氏族統率。500年代前半、湖西側、鴨稻荷山古墳は、山陰 小浜にも見られる「周濠前方後円墳」。日吉大社には、越前秦氏 泰澄の白山信仰が伝わり、同じ秦氏の松尾大社大山咋神へと繋がる。人々の移動と信仰の堆積、波及の痕跡が継承される大社です。日吉大社面談・磐座参拝を手がかりに考古、信仰から考察



出雲との関係 丹後 籠神社 藤祭別名「葵祭」…鴨社共通 「御蔭祭」(神霊の活性)…上鴨神社「御阿礼神事」 「賀茂別雷神」と、祭神「彦火明命」が異名同神という 籠神社伝承神事で 銅鐸(鐸鈴)を鳴らす…下賀茂神社 (同社によると、この伝承は鎌倉時代まで遡り、現在も大切に保存され、行われている)



「上賀茂神社 由緒」より … 古代の神山信仰に、鴨氏の信仰、祭神が習合

神代の昔、本社^の北北西にある、秀峰神山(こうやま) 御降臨になり、天武天皇の御代(678)、現在の社殿の基が造営されました。本殿御鎮座以後も広く庶民の信仰を集め、皇室の御崇敬は歴代にわたり、行幸啓は枚挙にいとまなく、国家の重大時には必ず奉幣、御祈願がありました。嵯峨天皇は御杖代(みつえしろ)として皇女有智子(うちこ)内親王を斎王(さいおう)と定め、その制度は以来三十五代、約四百年続きました。

「下鴨神社 由緒」より … 鴨氏の信仰、祭神の本拠 出雲との関係 葵祭と丹後 籠神社 藤祭 「葵祭」

【賀茂建角身命・八咫烏伝承】『古事記』

是(ここ)に亦、高木大神の命以ちて覚(さと)し白(まを)しけらく、「天つ神の御子を此れより奥つ方に莫(な)入り幸(い)でまさしめそ。荒ぶる神甚多(いとさは)なり。今、天(あま)より八咫烏(やたからず)を遣(つか)はさむ。故、其の八咫烏引道(みちひ)きてむ。其の立たむ後(あと)より幸行(い)でますべし。」とまをしたまひき。

『日本書紀』 既(すで)にして皇師(みいくさ)、中州(うちつくに)に趣かむとす。而るを山の中嶮絶(さが)しくして、復行(またい)くべき路無し。乃ち棲遑(しじま)ひて其の跋(ふ)み涉(ゆ)かむ所を知らず。時に夢みらく、天照大神(あまてらすおほみかみ)、天皇に訓(をし)へまつりて日(のたま)はく、「あれ今頭 八咫烏(やたからず)を遣す。以て郷導者(くにのみちびき)としたまへ」とのたまふ。果して頭八咫烏有りて、空より翔(と)び降(くだ)る。天皇の日(は)く、「此の烏の来ること、自づからに祥(よ)き夢に叶(こ)へり。大きなかな、赫(さかり)なるかな。我が皇祖天照大神、以て基業(あまつひつぎ)を助け成(な)さむと欲(ほ)せるか」とのたまふ。

伴信友 『瀬見小河』一之巻 高木大神と申は、高御産巢日神の又の御名なり、八咫烏すなはち建角身命なり、(略)、書紀に天照大神、古事記に高木神(高御産日神の又の御名)とあるは、互に一方を語り伝へたるものにして、まことは天照大神、高御産巢日神の御慮もて、神産巢日神の孫(みひこ)の建角身命を、豫て天降し置て、(高御産巢日神と神産巢日神とは、相偶(あひたぐひ)ませるがごとく、いとも奇(くす)しき御間(みなか)に坐ますにおもひ合せ奉るべし、かくて此二神の、建角身命の御祖に系りて、きこえ給へる氏々あり、因に下に拳ぐるをみて、それをもおもひ合せ奉るべし)供奉(つかへまつて)せ給へる由を、天皇の御夢に告覚(つけさと)し給へりしなり。

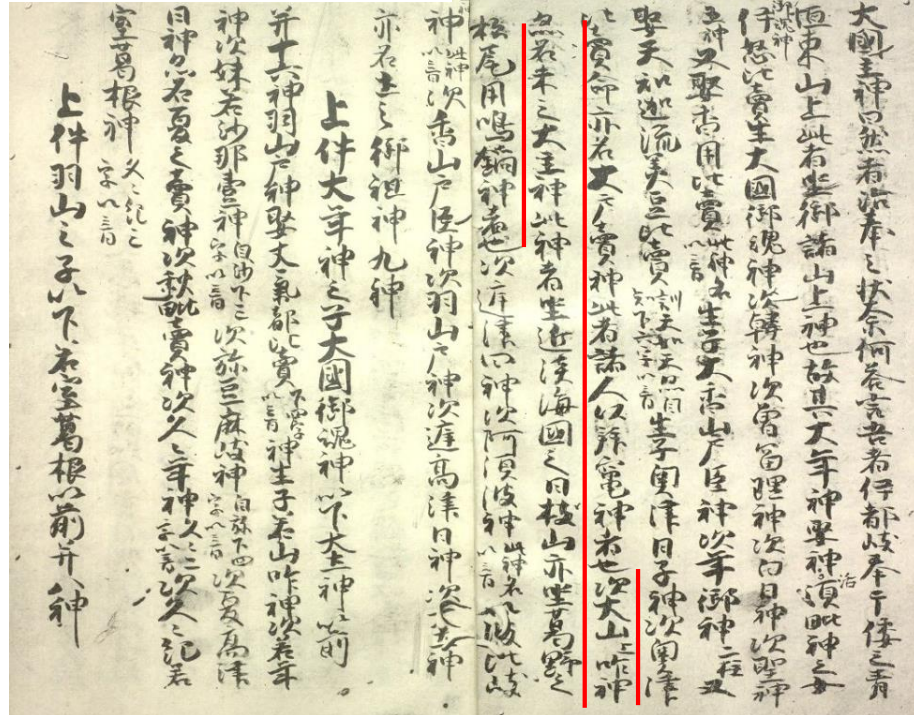
『尋常小学読本』巻五(二年生用)日本ノーバンハジメノ天皇ヲ神武天皇ト申シ上ゲマス。コノ天皇ガワルモノドモヲ御セイバツツナツタ時、オトホリスヂノミチガケハシクテ、オコマリノコトガゴザイマシタ。ソノ時ヤタガラストイフ鳥ガ出テ来テ、オサキニ立ツテ、ヨイミチノ方ヘ御アンナイ申シ上ゲマシタ。又アル時ドコカラトモナク一羽ノ金色ノビガトシテ来テ、オ弓ノサキニトマリマシタ。ソノ光ガキラキラシテ、ワルモノドモハ目ヲアケテイルコトガデキマセン。ソノ光ニオソレテ、皆ニゲテ行キマシタ。天皇ハ國ノ中ノワルドモヲノコラズオタヒラゲニナツテ、天皇ノオクライニオツキニナリマシタ。ソノ日ハ二月十一日ニアタリマスカラ、コノ日ヲキゲンセツト申シテ、毎年オイハヒヲイタスノデゴザイマス。

【玉依媛命・丹塗の矢伝承】 『続日本紀』 風土記 逸文

山城國 賀茂社山城の國の風土記に曰はく、可茂の社。可茂と稱ふは、日向の曾の峯に天降りましし神、賀茂建角身命(かもたけつののみみこと)、神倭石余比古(かむやまといはれひこ)の御前に立ちまして、山代河の随(まにま)に下りまして、葛野河と賀茂河との合ふ所に至りまし、賀茂川を見迎(みはる)かして、言(の)りたまひしく、「狭小くあれども、石川の清川なり」とのりたまひき。仍りて、名づけて石川の瀬見の小川と曰ふ。彼の川より上りまして、久我の國の北の山基(やまもと)に定(しづ)まりましき。爾(そ)の時より、名づけて賀茂と曰ふ。

賀茂建角身命、丹波の國の神野の神伊可古夜日女(いここよひめ)にみ娶(あ)ひて生みませるみ子、名を玉依日子(たまよひこ)と曰ひ、次を玉依日賣(たまよひめ)と曰ふ。玉依日賣、石川の瀬見の小川に川遊びせし時、丹塗矢、川上より流れ下りき。乃(すなは)ち取りて、床の邊に挿し置き、遂に孕みて男子を生みき。人と成る時に至りて、外祖父(おほぢ)、建角身命、八尋屋を造り、八戸(やと)の扉を堅(た)て、八腹の酒を醸(か)みて、神集へ集へて、七日七夜樂遊したまひて、然して子と語りて言(の)りたまひしく、「汝の父と思はむ人に此の酒を飲ましめよ」とのりたまへば、やがて酒杯(さかずき)を拳(こぶし)上げて、天(さき)に向きて祭らむと為(おも)ひ、屋の蓋を分け穿(うが)ちて天に升(のぼ)りき。乃ち、外祖父のみ名に因りて、可茂別雷神(かもわけいかつちのみこと)と號(なづ)く。

古事記 原文 国宝「真福寺本」



謂はゆる丹塗矢は、乙訓の郡の社に坐せる 火雷神(ほのいかつちのかみ)なり。可茂建角身命、丹波の伊可古夜日賣、玉依日賣、三柱の神は、蓼倉の里の三井の社に坐す。 … 乙訓神社(現 向日神社)

伴信友 『瀬見小河』二之巻

丹塗神矢の事 丹塗矢云々、逐感孕生男子とある 丹塗矢は、大仙咋神の玉依日賣に婚(アヒ)給はむ料(タメ)に、神霊を憑給へる物實なり、其は 古事記に 大山上咋神、亦名 山末之大主神、此神者 坐近淡海之日枝山、亦坐葛野之松尾 用鳴鐸神者也、(用字は桁字としてよむべからず、其説は下に云ふべし)と見えて、此鳴鐸神者とは、かの云々の時の鳴鐸の神矢なり、其を大仙咋神の霊形として松尾に祀れる由を、因にここに挙げたるなり、(但し 玉依日賣に婚給へる事を語はで、ただ鳴鐸神者也とあるは、うちつけなるこちす、もしくは阿禮か遺れて誦み脱せる事のありしにてやあらむ、)

『続日本紀』(しょくにほんぎ) 平安時代初期に編纂された勅撰史書。『日本書紀』に続く六国史の第二にあたる。菅野真道らが延暦16年(797年)に完成。文武天皇元年(697年)から桓武天皇の延暦10年(791年)まで95年間の歴史を扱い、全40巻から成る。奈良時代の基本史料である。編年体、漢文表記 前半ははじめ、文武天皇元年(697年)から天平宝字元年(757年)、孝謙天皇の治世までを扱う30巻の曹案として作られた。光仁天皇が、修正を石川名足、淡海三船、当麻永嗣に命じたが、彼らは天平宝字元年紀を紛失した上、未遂に終わった。桓武天皇の命により編纂を菅野真道、秋篠安人、中科巨都雄が引継ぎ、全20巻とした。

伴信友(ばん のぶとも、1773年3月17日(安永2年2月25日) - 1846年12月2日(弘化3年10月14日)) 江戸時代の国学者である。幼名は惟徳。通称は州五郎。号は事負。博覧強記で、古典の考証に優れていた。平田篤胤、橘守部、小山田与清とともに、「天保の国学の四大人」と呼ばれる。瀬見小河 1821(文政4) 全4巻全集 第2冊 賀茂神社についての考証。

▲神奈備 磐座 ▲役小角(修験道七高山) ▲秦登 ▲神社・寺
(平安京当初までの一部)

平安京遷都以前の創建を調査(伝承含む)
その内、主たる社寺のみ掲載。寺院は、赤カッコで表記

平安京 創始 以前
人々は居住拡大・移住しながら、磐座・山岳信仰、自然を神として信仰を深めた。出雲～丹後～亀岡～大和、越(北陸)～淡国(近江)、瀬戸内～河内、各時代に生活、祭礼、埋葬など文化の足跡を残しながら、山代に至る。600年頃には 仏教、観音信仰も加わり、神が宿る形容として神殿創設に影響。そのあと、天智・天武から文武天皇期には日本国、日本人としての自覚、国防整備がなされた。「山代」は、神々の憑代とした山を祀り、出雲の神、観音信仰で精神形成されていった。

桓武天皇 平安京鎮護のため、四方の大將軍神社造営に加えて、怨霊対策のため魔界封じを徹底。都の**東西南北の磐座**の下に『一切経(いっさいきょう)』経文を埋め込んだ。(ピンクの網掛け箇所)

賀茂川沿いに幸神社(さいのかみのやしろ)、鬼門の上賀茂神社と下鴨神社を大改修。延暦寺へ続く。裏鬼門にあたる南西は、城南宮・・・その先の石清水八幡宮。北の守りに、貴船神社と鞍馬寺造営。都の入り口・羅城門両脇に東寺と西寺。今熊野に宝剣を埋め(剣神社)、愛宕山寺院の大改修。

都の鬼門の方角に、死に追いやった早良親王や井上内親王と、藤原氏の政権争いで奈良時代に不遇な日々を送った吉備真備や藤原広嗣を祀る・上御霊神社と下御霊神社。

出雲大神宮 (現 亀岡市)
創建年代 社伝、元明天皇期 **和銅2年(709年)** 社殿創建 **大神朝臣狛麻呂** 現社殿 **1305年足利尊氏**
主祭神 **大国主命**(おおくにぬしのみこと) 別名を三穂津彦大神・御蔭大神とする。
三穂津姫命(みほつひめのみこと) 高産霊尊の子で、大国主の国譲りの際に大国主の後となったと伝えている。保津川名 由来伝承

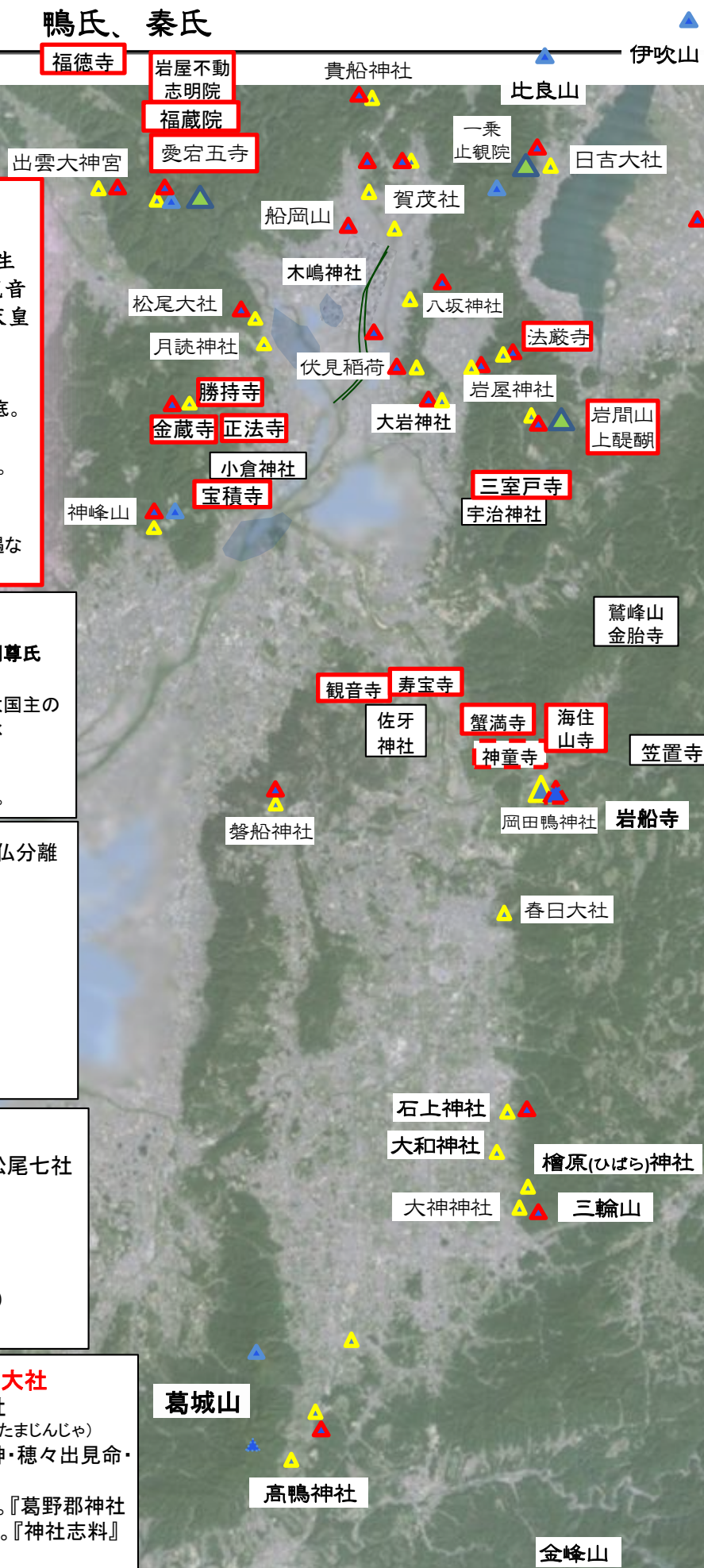
配祀神 天津彦根命 天夷鳥命
摂社 **崇神天皇など**
* 祭神 天津彦根命・天夷鳥命・三穂津姫命の3柱の説、元々は三穂津姫尊1柱のみの説もある。

参考 **愛宕神社** 白雲寺 天狗信仰 修験道「地藏菩薩」伊弉冉尊 から 明治期に神仏分離
本殿 **伊弉冉尊**(いざなみのみこと) **国津神出雲系 創造母神**
稚産霊神(わくむすびのかみ) 「穀物神」
埴山姫神(はにやまひめのみこと) 「創造神」天平瓮・祭器・道具・食器の源
天熊人命(あめのくまひとのみこと) 「五穀神」
豊受姫命(とようけひめのみこと) 「穀物神」
若宮 雷神(いかづちのかみ) 「雷」建御雷神
迦遇槌命(かぐつちのみこと) 「火の神」 **伊邪那美神の息子**
破无神(はむしのかみ) 「蛇神」?
奥宮 **大黒主命(大国主命)** **国津神出雲系 創造・農業・愛縁神**

松尾大社 大宝元年(701年) 秦忌寸都理(はたのいみきとり)
主祭神 **大山咋神** 中津島姫命 - 市杵島姫命の別名、異説あり 本社合わせ松尾七社
境内末社 ・松尾総神社 月読尊
・三宮社 玉依姫命、のちに大山祇神・酒解神を合祀して 三宮社
・衣手社 玉依姫命 明治、羽山戸神合祀
境外摂社 櫛谷宗像神社 2社合祀
(宗像社 祭神:**市杵島姫命** 櫛谷社(いちたに) 奥津島姫命 式内社)
月読社 祭神: 月読尊 式内社(名神大)

参考 石清水八幡宮
創建 **貞観元年(859年)** 南都大安寺の僧 行教(空海の弟子)
中御前: 菅田別命(ほんだわけのみこと) 第15代応神天皇の本名。
西御前: 比咩大神(ひめおおかみ) 宗像三女神
多紀理毘売命(たぎりびめ)、市寸島姫命(いちきしまひめ)、
多岐津比売命(たぎつひめ)
東御前: **息長帯姫命**(おきながたらしひめのみこと) 神功皇后の本名。
息長氏は、大和渡来朝鮮、古代近江国坂田郡(現米原市)が根拠地
以上の3神を総称して「八幡三所大神(八幡大神)」という。

木嶋神社 名神大社
木嶋坐天照御魂神社
(このしまにますあまてるみたまじんじゃ)
天御中主命・大国魂神・穂々出見命・
鵜茅葺不合命
「天照御魂神」は諸説。『葛野郡神社
明細帳』は、爾々芸命。『神社志料』
では天火明命



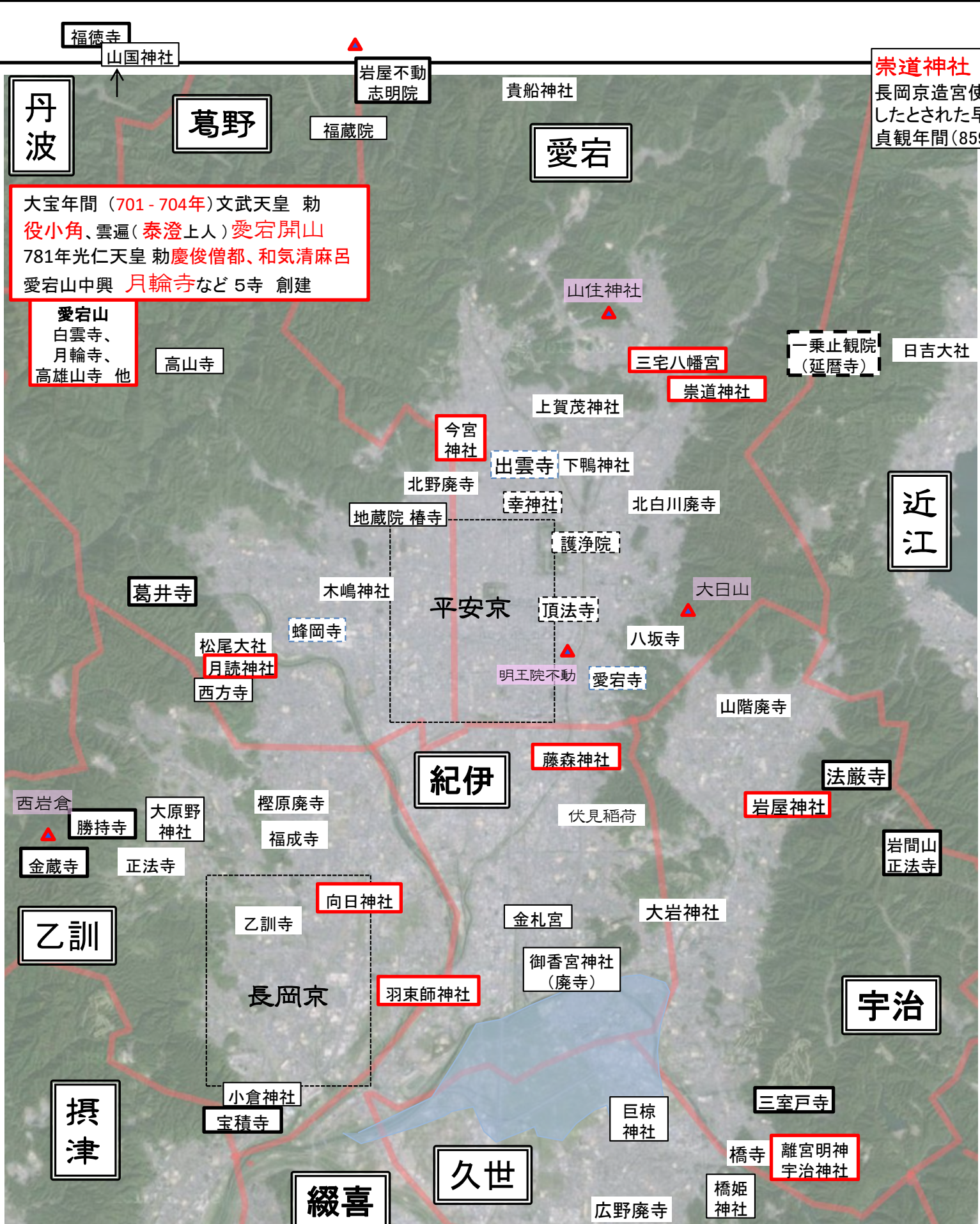
日吉大社 起源社伝崇神7年 推定210年頃
本宮
西本宮: **大己貴神(大国主神に同じ)**
東本宮: **大山咋神**
5摂社
牛尾宮: 大山咋神 荒魂 樹下宮: **鴨玉依姫命**
三宮宮: 鴨玉依姫命 荒魂 宇佐宮: 田心姫神
白山宮: 菊理姫命 白山比咩神社 祭神 白山比咩大神

貴船神社 起源 白鳳6年(666年)以前
本宮 **高禰神** 結社(中宮) 磐長姫命、縁結びの神
奥宮 以前の本宮。闇禰神(くらおかみのかみ) 高禰神と同神
本宮内末社 **白髭社 猿田彦命** 牛一社 木花開耶姫命
川尾社 罔象女命 鈴鹿社 大比古命 祖霊社 氏子の祖霊
奥宮内末社
吸葛社 味耜高彥根命 **日吉社 大山咋神** 鈴市社 五十鈴姫命
境外摂末社 楯取社 宇賀魂命 梅宮社 木花開耶姫命
白石社 下照姫命 私市社 大国主命 林田社 少名彦命
創建社伝 反正天皇時代。神武天皇の母である **玉依姫命**が、**黄色い船に乗って淀川・鴨川・貴船川を遡って当地に上陸し、水神を祭った**。伝承、大山祇命が、天孫瓊瓊杵尊に奉じたが、姉の **磐長姫命**は断られ、「縁結びの神として良縁を授けん」と当地に鎮まる。

賀茂別雷神社(かもわけいかづちじんじゃ)
上賀茂神社
賀茂別雷大神(かもわけい)
賀茂御祖神社(かもみそ)
下鴨神社
東殿: **玉依姫命**(たまよりひめのみこと)
賀茂別雷命(上賀茂神社の祭神)の母
西殿: 賀茂建角身命(かもたけつぬみのみこと)
玉依姫命の父

八坂神社 齊明天皇2年(656年)、高句麗から来日した調進副使・伊利之使主(いりしおみ)の創建(社伝)
主祭神 中御座: **素戔嗚尊**(すさのおのみこと)
東御座: 櫛稻田姫命(くしいなだひめのみこと)
素戔嗚尊の妻
西御座: 八柱御子神(やはしらのみこがみ) -
素戔嗚尊の8人の子供(八島篠見神、五十猛神、大屋比売神、抓津比売神、大年神、宇迦之御魂神、大屋毘古神、須勢理毘売命)の総称
配神(東御座に同座) 神大市比売命(かむおおいちひめ)、佐美良比売命 - いずれも素戔嗚尊の妻
(西御座に御座) 稲田宮主須賀之八耳神
(いなだのみやぬしがのやつみのみかみ)
明治の神仏判然令以前は、主祭神は以下の3柱。
中の座: 牛頭天王(ごずてんのう)
東の座: 八王子(はちおうじ)
西の座: 頗梨采女(はりさいによ・ぱりうねめ)

伏見稲荷大社 和銅年間(708-715年)(一説に和銅4年(711年)に、伊侶巨秦公(いろこのはたのきみ)伊奈利山(稲荷山)の三つの峯に神を祀った
宇迦之御魂大神(うかのみたまのおおかみ)
配神 佐田彦大神(**猿田彦命**) 大宮能売大神
田中大神 四大神(しのおおかみ)



大宝年間(701-704年)文武天皇 勅
役小角、雲遍(泰澄上人) **愛宕開山**
 781年光仁天皇 勅慶俊僧都、和氣清麻呂
 愛宕山中興 **月輪寺**など5寺 創建

愛宕山
 白雲寺、
 月輪寺、
 高雄山寺 他

崇道神社 祭神 早良親王(諡崇道天皇)
 長岡京造宮使であった藤原種継暗殺事件に連座
 したとされた早良親王(崇道天皇)鎮魂
 貞観年間(859年~877年)に創建

向日神社
 同じ向日山に鎮座する「向神社」(上ノ社)「火雷神社」
 (下ノ社)という別の神社だった。
 いずれも延喜式神名帳に現れる古社で、「火雷神社」
 は名神大社「乙訓坐火雷神社(乙訓神社)」の論社
 向神社は御歳神(向日神)が向日山に依り、稲作奨励
 が起源。また火雷神社は**神武天皇**が大和国橿原から
 山城国へ遷った際、当地に火雷神を祀った。

藤森神社
 本殿主祭神 **素盞鳴命**、別雷命、日本武命、
 応神天皇、神功皇后、武内宿禰、仁徳天皇、
 東殿 天武天皇、崇道尽敬皇帝(舎人親王)、
 西殿 崇道天皇(早良親王)、伊予親王、井上内親王
 社伝では、神功皇后摂政3年(203年)、三韓征伐
 から凱旋した**神功皇后**が、深草藤森に纛旗(とう
 き、いくさ旗)を立て兵具を納め、塚を作り祭祀を
 行ったのが発祥。当初の祭神は、現在本殿に祀
 られる7座。現在伏見稻荷大社の社地。稻荷神
 が祀られるため遷座。

月読神社
 主祭神 **月読尊** 相殿 高皇産霊尊
 阿閉臣事代が任那に赴く途中、沓岐での
 月讀尊神託により天皇奏上、**顕宗天皇3年**
 (487年)、「山城国葛野郡歌荒椋田」に神領を
 賜り勧請、沓岐県主・押見宿禰に祀らせた。
 歌荒椋田の比定地は、上野村、桂里、有栖川
 流域説など諸説。斉衡3年(856年)、水害の
 危険避難で、現、松尾山麓に遷座。
 押見宿禰の子孫は卜部氏を称し神職継承。
 大宝元年(701年)には例祭が勅祭と定めら
 れ(『続日本紀』)、延喜6年正一位(『扶桑略
 記』)。延喜式神名帳では「葛野坐月読神社」
 と記載名神大社。天慶4年(942年)には神宮
 号の宣下を受ける。瘡瘡の神として古く格式
 高い神社だが、松尾大社の勢力、影響下に
 あり、明治10年(1877年)松尾大社境外摂社。

宇治上神社
 左殿:菟道稚郎子命(うじのわきいらつこのみこと)
 『日本書紀』『菟道稚郎子』、『古事記』『宇遲之和
 紀郎子』と表記。応神天皇の皇子。皇位譲位に自
 殺、没後創建。(推定**400年代前半**)
 中殿:応神天皇 第15代。菟道稚郎子命の父。
 右殿:仁徳天皇
 創建起源は不明。宇治神社とは二社一体。明治
 に分離。当社地は『山城国風土記』で菟道稚郎子
 の離宮「桐原日析宮」旧跡と伝え、旧称の「**離宮
 明神**」もそれに因む。境内外「天降石」「岩神さん」
 と呼ばれる巨石があり、**磐境信仰**が創祀起源。
 現本殿は平安中期1060年代建立。最古の神社
 建築。**宇治神社** 菟道稚郎子命 神像を祀る。

岩屋神社
 根源は、奥之院、また岩屋殿と称する本社
 後背山の山腹に座す**陰陽の両巨巖**。
 石座信仰の名残で、発祥は仁徳天皇三十一年
 (400年代)と伝承。後年宇多天皇、寛平
 年間(800年代末)に陽巖に天忍穂耳命を、
 陰巖に栲幡千々姫命を、また岩前小社に大
 宅氏の祖神として**饒速日命**を祀る。弘長二
 年(1262年)現社再建。巖への神祀は後年。

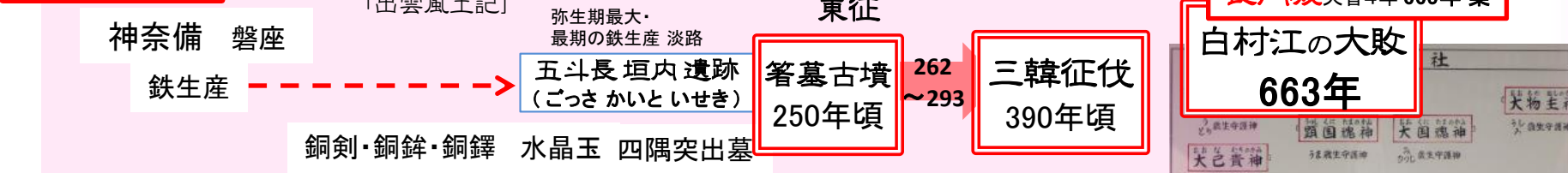
羽束師神社
 祭神 **高御産**(たかみむすび)日神、神御産日神
 (かみむすび)神。ともに創造神、古くより五穀豊
 穰、農耕の信仰。古墳時代**477年**創建の伝承。
 (『羽束師社舊記』) 飛鳥時代567年、第代・欽明
 天皇より封戸贈与。(『羽束師社舊(旧)記』) 665年
 中臣鎌足が勅により再建との伝承。
 奈良時代701年、文献初見「波都賀志神等ノ神
 稻。自今以後給中臣氏」。山背国波都賀志神の
 神稻に関して、当社の斎田から抜穂して祭人・中
 臣氏が新嘗(にいなめ)祭を行った。(『続日本紀』)
 平安時代808年、斎部広成が第51代・平城天皇
 の奏聞で、天照皇大御神など摂社11社が勧請。
 (『羽束師神社旧記』1827)。

三宅八幡宮
 推古天皇16年(608年)遣隋使**小野妹子**が、
 筑紫で病気になるが、宇佐八幡宮に祈願し
 回復、帰国。報恩の意味で自らの所領で
 ある愛宕郡小野郷の地に宇佐八幡宮を勧
 請し建立したのが始まり。「社伝」
 造営当初は伊太多神社(現、崇道神社の末
 社)末社、現在地より南にあった。
 南朝忠臣、児島高德(別名備後三郎三宅高
 徳)が八幡大神を尊崇したことから、「三宅八
 幡宮」と呼ぶ。また、大和朝廷の直轄地である
 屯倉が由来ともされる。

今宮神社
 平安遷都以前から疫神**スサノオ**を祀る社(現在摂社疫神社)があった。平安遷都後は
 疫病や災厄が起こると、神泉苑、上御霊神社、下御霊神社、八坂神社などで疫病を鎮
 めの御霊会が営まれた。994年(正暦5年)大規模な疫病流行、朝廷は神輿2基を造って
 船岡山に安置、疫災を幣帛に依り移らせ難波江に流した。災厄忌避を祈願する民衆主
 導の「紫野御霊会」が今宮祭の起源。1001年(長保3年)疫病流行、朝廷は疫神を船岡
 山から移し、疫神を祀った社に神殿・玉垣・神輿を造らせて今宮社と名付けた。
大己貴命、事代主命、奇稻田姫命(くしなだひめのみこと)の三柱の神が創祀。疫病が
 流行るたびに紫野御霊会が営まれ、今宮社の祭礼(今宮祭)定着し毎年5月に恒例。

周 (東周)	秦	前漢	新	後漢	三国時代 魏蜀吳	西晋	東晋 五胡十六国	南北朝	隋	唐	五代十国	北宋	南宋	金	元	十三	十四
戦国					この時代の詳細図						渤海 698年 - 926年						
403	221	202	8	25	220	265	304	439	581	618	907	960	1127	1271	1368		
弥生時代					古墳時代				飛鳥	奈良	平安時代			鎌倉			
5世紀頃(参考)					3世紀頃				6世紀末	710	794				1185	1336	
箕氏朝鮮 夫余					楽浪郡・帯方郡 高句麗				新羅								
前1世紀頃					4世紀半ば				67								

神話と史実



伝承の中の人々の祖は、記紀では神々として描かれた。大和に鎮座していた神々は、当時の支配者の事情から、「故郷に帰る神」や、「特別に崇められる神」に別れたが、現在、山背国愛宕山には、「天照大御神」以外の、古来の神が集合している。(撰末社としては、祭神:天照大神 神明社) 天照大御神と降臨したその孫ニギノミコトは、記紀創作当時の女帝と孫、皇太子との関係である。愛宕山には、その思惑を嫌い、素朴な神々を主に祀られているのではないのでしょうか。日本国成立前、八百万の神々の共存の姿と考えます。出雲大神宮や元愛宕神社からの継承の歴史。地理的にも、観音信仰的にも、日吉大社と比叡山 延暦寺との関係が、東西で相似します。

籠神社
主祭神 **彦火明命** (ひこほあかりのみこと)
天火明命、天照御魂神、天照国照彦火明命 饒速日命ともいう。
相殿神 **豊受大神** (とよけのおおかみ) 御饌津神。
天照大神 (あまてらすおおかみ)
海神(わたつみのかみ)
天水分神(あめのみくまりのかみ)
祭神には諸説あり、『丹後国式社證実考』などでは伊弉諾尊(いざなぎ)としている。これは、伊弉諾尊が天に登る梯子が倒れて天橋立になったとの伝承による。

大神神社
主祭神 **大物主大神**
(おおものぬしのおおかみ、倭大物主櫛甕玉命)
配神 **大己貴神** (おおなむちのかみ)
少彦名神 (すくなひこなのかみ)

出雲系氏神

高鴨神社
大己貴神の子
味耜高彥根神

賀茂神社
国津神から天津神へ

石上神宮 (イソノカミ)
神体 布都御魂(ふつのみたま)
大己貴神の子 天道日女命(高光日女命)の婿 饒速日命
その子、物部氏の祖、宇摩志麻治命(うましまじのみこと)が祭った

愛宕神社 (現 亀岡市)
継体元年(507年)? 信仰起源
本殿祭神3柱。
火産霊神(軻遇突智神)
伊邪那美神
大国主神
社伝では分霊が京都鷹ヶ峰に祀られた後、和氣清麻呂により嵯峨山に遷された、
現在の愛宕山の愛宕神社

出雲大社
役小角・泰澄

伏見稻荷大社 和銅年間(708年-715年)
主祭神 宇迦之御魂大神(うかのみたまのおおかみ)
豊受大神 とも 同一視

愛宕山白雲寺
天応元年(781)年
愛宕権現
権現 **イザナミ**
本地仏 地藏菩薩
本尊 **勝軍地藏**

明治、勝軍地藏は毀釈無、天台宗 **金蔵寺** に還座

伊勢神宮
春日大社 城南宮 平野神社

宇佐八幡宮
社伝 欽明天皇32年(571年?) 信仰起源
社殿創建(神亀2年) 725年

石清水八幡宮
創建 貞観2年(860年)
宇佐八幡宮から勧請 祭神
中御前: 菅田別命(ほんだわけのみこと) 第15代応神天皇。
西御前: 比咩大神(ひめのおおかみ) 宗像三女神
東御前: 息長帯姫命(おきながたらしひめのみこと) 神功皇后の本名

渡来人による 日本古来神 信仰

出雲大社
祭神 **大国主大神** (おおくにぬしのおおかみ)

愛宕神社
本殿
伊弉冉尊 (いざなみのみこと)
稚産霊神 (わかむすびのかみ) 「穀物神」
埴山姫神 (はにやまひめのみこと) 「創造神」
天平登・祭器・道具・食器の源
天熊人命 (あめのくまひとのみこと) 「五穀神」
豊受姫命 (とよけびめのみこと) 「穀物神」
若宮
雷神 (いかづちのかみ) 「雷」建御雷神
迦遇槌命 (かぐつちのみこと) 「火の神」
伊邪那美神の息子
破无神 (はむしのかみ) 「蛇神」?
奥宮 **大黒主命(大国主命)**、他16柱

出雲大神宮 (現 亀岡市)
創建年代は不詳だが、奈良時代以前から御蔭山を神体とし祭祀と推測。
社伝、和銅2年(709年)社殿創建
主祭神 **大国主命** (おおくにぬしのみこと)
別名を三穗津彦大神・御蔭大神とする。
三穗津姫命(みほつひめのみこと)
高産霊尊の子で、大国主の国譲りの際に大国主の後となったと伝えている。保津川名 由来伝承
配祀神 天津彦根命 天夷鳥命
祭神に関しては、天津彦根命・天夷鳥命・三穗津姫命の3柱とする説や、元々は三穗津姫尊1柱のみであるという説もある。

住吉大社
創建起源 400年頃

国神 (海神~武神)
国生みの際、やけどで死んだ妻 **イザナミ** を救うため、黄泉の国にいった **イザナギ** の禊から生まれた海神 **ツツノヲノ三神** が **住吉大神**。

伊勢神宮
主祭神は以下の2柱。
皇大神宮: 内宮(ないくう)
天照坐皇大御神
一般には天照大御神として知られる
豊受大神宮: 外宮(げくう)
豊受大御神 (とよけのおおかみ)
内宮別宮 月讀宮境内
伊佐奈岐宮 (いざなぎのみや) 式内社(大)
伊佐奈弥宮 (いざなみのみや) 式内社(大)
二十二社(上七社)の一社。
古代においては **宇佐神宮**、中世においては **石清水八幡宮** と共に二所宗廟の1つ。

観音信仰と泰澄

仏教公伝は、「日本書紀」の仏像記載 欽明天皇13年(552年) 欽明天皇(継体天皇嫡子)への、百濟聖明王の釈迦像金剛像伝来に対し、現主説の「上宮聖徳法王帝説」「元興寺縁起」戊午年538年、また「三国史記」聖明王即位や武寧王陵の墓誌石没年523年から推測し548年とする上田正昭 説もある。 同氏は、大和への公伝以前に北九州、福岡の靈仙寺や大分の満月寺の開基伝承、南丹市垣内古墳や、奈良広陵町新山古墳の仏獣鏡など、古代からの文化と同様に、中国から朝鮮半島を経由して、日本海側から自然な伝播があったとする。

また、道教についても、古墳出土の神獣鏡を前置きに、「日本書紀」推古天皇10年(602年)百濟僧觀勒(かんろく)による道教「遁甲方術書」の伝来や、天武天皇14年(685年)「招魂」に法師が煎薬(仙薬)を献じた。など朝鮮半島、大陸より伝来があった。 天武天皇の和風諡「天淳中原瀛真人天皇」(あまのぬなはらのまひと)瀛は、道教三神山「瀛州山」真人は道教奥義を極めた神仙に由来。その称号天皇は道教の「天皇大帝」などに由来する。(津田左右吉指摘) 701年、大宝令以降の大学寮整備、その内の典薬寮には、道教影響の呪禁師、呪禁生が配置された。

700年初期「記紀」の天照大神、天石屋戸の詩章には、道教の最高神 天帝の娘 織女(織姫)「織女神」や、のちに中国で道教と結ぶ古来の女仙「西王母」が重層している。 天平4年(732年)には、役小角の弟子、韓国連広足が道教系の呪禁を積み典薬頭になる。

日本国号は、大宝令が初見「明神御宇日本天皇(あきつみかみとあめのしたしらすやまとのすめらみこと)」。『日本書紀』大化元年(645年)高句麗や百濟の使者に示した詔に「明神御宇日本天皇」

聖徳太子の時代 歴史背景 敏達天皇3年(574年) - 推古天皇30年(622年) 仏教公伝、飛鳥時代 538年(552年)。百濟聖明王が欽明天皇に釈迦仏の金銅像や経論などを贈る。 587年 丁未の乱(ていびのらん) 仏教の礼拝を巡って『崇仏派』蘇我稲目、大臣・蘇我馬子と、物部守屋を攻め滅ぼす。この戦いで、厩戸皇子は神仏の四天王に祈願、勝利し、推古天皇元年(593年)、『四天王寺』を建立開始したとされる。

蘇我馬子も『飛鳥寺(法興寺)』を建立、推古天皇・聖徳太子の政治体制の下で仏教信仰を強く奨励。 厩戸皇子(聖徳太子)は『法華経・維摩経・勝鬘経』の三つの経典の解説書『三経義疏』を著す。『十七条憲法(604年)』第二条も『篤く三宝を敬へ 三宝とは仏・法・僧なり』 仏教が国教となる。

行基の時代 歴史背景 天智天皇7年(668年) - 天平21年(749年) 600年代末、天武天皇や持統天皇も仏教を手厚く保護。 道昭 遣唐使として入唐、玄奘三蔵に師事、日本法相教学の初伝(南寺伝) 680年、天武天皇の勅命を受けて、往生院(現 泉南市)を建立。晩年は全国遊行し土木事業。

義淵 法相宗 天武天皇、道昭と 680年、薬師寺開基(興福寺と共に法相宗大本山 南都七大寺) 天武期を境に、仏呪、道呪に系統した役小角が、葛城、吉野金峯山から山代 山岳修業の拠点発祥。

700年代、文武、聖武期に義淵と弟子の行基や良弁、また泰澄らにより、信仰拠点が山代周辺に。 平城京(710年)、奈良時代には、仏教によって災厄(飢餓・疫病)や戦乱を防ぎ国が安定するという『鎮護国家』の思想に基づき、聖武天皇は741年『国分寺・国分尼寺建立の詔』

743年5月『墾田永年私財法』 同年10月東大寺『大仏造願の詔』 優婆塞 行基集団 が貢献。 749年 聖武天皇に菩薩戒を授けた行基は没す。 751年、良弁が東大寺初代別当に 延鎮(法相宗)による「山科、法蔵寺」と、慶俊(法相、華嚴、真言宗)による「愛宕、五寺」開山で、

山代から山背にかけた山岳での信仰拠点が整う。 その最後、最澄の山岳修業「一乗止観院」から、山城の地に、平安仏教が展開する。

「神仏習合」発祥 752年、聖武天皇・光明皇后(藤原光明子)が東大寺の大仏(盧舎那仏)開眼供養。 南都六宗は国家を安定させるために信仰する『鎮護仏教』としての性格が強い。同時に「東大寺」には、宇佐から八幡神を勧請。 720年隼人の乱以来、八幡神と仏は、宇佐での放生以来、相互関係にある。 神に祈願し勝利した相手、敗者の霊を鎮魂成仏。 神宮寺の弥勒寺建立。神には仏の守護を求めた。

「東大寺」の鎮守社として「手向山八幡宮」が残る。777年八幡神は神で初めて出家、八幡大菩薩へ。

「神信仰と密教」 自然観・宇宙観での共通性 密教: 宇宙の構成要素を「地・水・火・風・空」とし、全てを照らす光(太陽)、「大日如来」を宇宙の真理(根本)とする。

神道: 恵みと災いの源である森羅万象、特に水をもたらす(自然)神山信仰が起源。 地域・氏族守護神(氏神)へ、そこに光(太陽)を頂点とした「天照大御神」が伝来し加わる。

「現世利益」 「観音信仰」による 宗派和合 他の仏教と密教との違いは、「現世利益」即身成仏を目的とすることである。一方、神道(神道とは、記紀以降の国家的神概念ですが)も本来は自然を畏敬し恩恵を願うもの。「現世利益」で共通する。 また自然への信仰、仏性概念は、天台でも 安然・良源「草木国土悉皆成仏」に至る。

では、密教経典は『大日経』『金剛頂経』なのに、日本では「法華経」から誕生した「観音経」 観音菩薩をご本尊とする真言寺院がなぜ多いのか? 平安時代以前から、京都周辺 法相宗寺院でも同様。 神山信仰の水・山と関係する山岳修験道の真言密教 「神仏習合」の地では、その傾向が顕著である。

すなわち、そこでは「現世利益」祈願という共通で、宗派を超えて「観音信仰」が発祥したと考察する。

	インド	中国 日本
初期大乘経典	中期大乘経典	後期大乘経典
1世紀以降	3世紀 中観派 龍樹 『中論』 空の思想体系化	5世紀 唯識派 弥勒 が発祥 無着・世親
般若経		638年、玄奘三蔵がインドで唯識を学ぶ帰朝 『成唯識論』訳出編集。 弟子、慈恩大師基(窺基)が 法相宗 開宗。 日本へは662年 道昭が伝播、奈良時代にさかんに学ばれ 南都六宗のひとつに。 興福寺・法隆寺・薬師寺、清水寺へ
大般若経		9世紀初頭、最澄、空海 真言宗が密教専修、 天台宗は天台・密教・戒律・禪の四宗相承。 山岳信仰とも結び 修験道など「神仏習合」の主体へ
般若心経		
維摩経		
法華経	浄土信仰	中国、2世紀後半浄土教経典伝播、5世紀初め慧遠が念仏結社、初期浄土教主流に。 世親(天親)の『浄土論』(『往生論』)を注釈した曇鸞の影響を受けた道綽(562年 - 645年)が、『仏説観無量寿経』を解釈『安樂集』撰述。弟子である善導(613年 - 681年)が、『観無量寿経疏』撰述、「称名念仏」を勧める。「称名念仏」を中心に浄土思想が確立。しかし中国では主流とはならなかった。
無量寿経	インドにおいて、浄土教の成立時期は、大乘仏教が興起した時代である。紀元100年頃に『無量寿経』と『阿弥陀経』が編纂され、広く展開。 浄土往生の思想を強調した論書として、龍樹『十住毘婆沙論』『易行品』 天親(4-5世紀)『無量寿経優婆提舍願生偈』(『浄土論』・『往生論』)。	その後、慧日(680年 - 748年)が善導の浄土教を基盤に、「浄土」と「禪」を並行して修法することを主張。後、中国の「禪」の大勢となる「念仏禪」の源流。
阿弥陀経	しかし、インドでは宗派としての浄土教が成立されたわけではない。 やがて、古来のバラモン教が、民間信仰と習合し、ヒンズー教が大勢となる。	
観無量寿経		
	禪宗	5世紀後半~6世紀前半 インドの達磨、中国の慧可が開宗 7世紀 慧能の『説法書六祖大師法宝壇経』見性成仏の教え 9世紀 臨濟義玄 臨濟宗 洞山良价 曹洞宗 12世紀末~13世紀初頭 荣西、道元により、南宋より日本伝来
		中国で、儒教と道教の思想や方法論と融合、中国感性に適合した仏教として宋以降は中国仏教の代名詞に、臨濟宗、念仏禪が主流。 中国では、元のち、14世紀 明期には衰退する。 中国共産党 無神論に

仏教世界観 六道（地獄界・餓鬼界・畜生界・修羅界・人間界・天上界：空居天/地居天）、また十界（六道の上に声聞界・縁覚界・菩薩界・仏界を加えたもの）

如来部



阿弥陀如来
極楽浄土の教主
法蔵菩薩が四十八誓願、
修業で如来に
念仏者を救済し極楽往生

弥勒菩薩(如来)

兜率天で修業中
将来の釈迦後継者

釈迦如来

自らの悟りのための仏



盧舎那仏

大日如来

密教



東大寺

薬師如来

浄瑠璃世界の教主
現世病苦救済



薬師寺

菩薩部

極楽院
現 三千院 極楽往生院

浄土三部経
観無量寿経
無量寿経
阿弥陀経

薬上菩薩 法隆寺 薬王菩薩
普賢菩薩 文殊菩薩

五智如来 (東寺講堂)

大日如来(中心)
阿閼如来(東)
宝生如来(南)
観自在王如来(阿弥陀如来)(西)
不空成就如来(北)

月光菩薩

日光菩薩

観音部

勢至菩薩

観音菩薩

变化観音
雑密
不空羂索観音
千手観音

地藏菩薩



蟹満寺
奈良時代
国宝

五大菩薩 (東寺講堂)

金剛波羅蜜菩薩・金剛薩埵・
金剛法・金剛宝・金剛業菩薩

虚空蔵菩薩 (神護寺多宝塔)



広隆寺



法性寺



妙法院
三十三間堂



広隆寺
不空羂索観音



六波羅蜜寺



明王部

五大明王 大元帥明王 愛染明王 孔雀明王 馬頭明王 六字明王

五大明王 (東寺講堂・大覚寺・醍醐寺)

不動明王 が中心

東に降三世明王(ごうざんぜ)
南に軍荼利明王(ぐんだり)、
西に大威徳明王(だいいとく)
北に金剛夜叉明王(こんごうやしや)配置は真言密教(東密)
天台宗密教(台密)は金剛夜叉明王の代わりに烏枢沙摩明王(うすさま)



大覚寺
御本尊

東寺観智院
五大虚空蔵菩薩



西岩倉山

天部

護法善神 密教では神々を意味する尊格の一つ

ヒンドゥー教の神に由来
梵天 帝釈天 大自在天 弁才天(七福神の一柱)
大黒天 吉祥天
韋駄天(陰天) 鳩摩羅天 摩利支天 歡喜天
那羅延天 鬼子母神 荼吉尼天 焰摩天(閻魔)
金剛力士(仁王) 十二天 堅牢地神 伊舎那天 黒闇天
羅刹天 他化自在天 八大龍王
八部衆 十二神将 二十八部衆
不動八大童子(「不動明王」の眷属) 妙見菩薩 飛天
技芸天 摩多羅神 深沙大将 寿老人 福祿寿 布袋 恵比寿

二十八部衆 (三十三間堂)

千手観音の眷属
典拠「千手観音造次第法儀軌」善無畏記



八部衆

四天王 (法隆寺金堂 東大寺戒壇院 東寺講堂)

持国天 - 東勝神洲を守護。乾闥婆、毘舍遮を眷属
增長天 - 南瞻部洲を守護。鳩槃荼、薜荔多を眷属
広目天 - 西牛貨洲を守護。龍神、毘舍闍を眷属。
多聞天 - 北俱盧洲を守護。毘沙門天とも呼ぶ。
典拠「金光明経」

十二神将 (新薬師寺)



護国三部経
金光明経・法華経・仁王経

東寺「密教立体曼陀羅」四方に 四天王が配されている。



知恩院

十六羅漢 (東福寺・知恩院・南禅寺三門 建仁寺楼門)

仏滅800年経ち、ナンディミトラ大阿羅漢が大衆に説いたとされる、
仏勅を受けて永くこの世に住し、衆生を済度する役割をもった16人

日本初の出家者は女性である。飛鳥時代の帰化人・司馬達等(しばたつと)の娘・嶋。584年(敏達天皇13年)高句麗から渡来した僧惠便(えびん)に師事して出家、善信尼と名乗った。

同年、蘇我馬子が邸宅内に百濟から請来した弥勒仏の石像を安置した際、弟子となった惠善尼・禅蔵尼とともに齋会を行ったと伝えられる。6世紀末～7世紀初頭、日本最古の(尼)寺である豊浦寺が営まれた。

古来、神につかえて呪術的な能力をもつ人間には女性が多かった。祭政一致だった邪馬台国でも、神や精霊の声を聞くことができる卑弥呼が女王として存在した。仏を神と同じ範ちゅうで理解していたとしたら、シャーマニズムの一環として、『蕃神を祭るのは女性の仕事』と考えたのかもしれない。

蘇我氏は、神とは別の信仰、権威を必要とした。なぜなら、大伴氏や物部氏などが持つ軍事力や、中臣氏の伝統的な神事・祭祀権限は蘇我氏に無く、その弱点打開策を皇室との姻戚や、仏教に求めた。

観音信仰の系譜

山岳信仰との合流

独尊像としての観音信仰

「山背」での寺院起源・創建

600年前後 聖徳太子の影響 (574~622年)

- 頂法寺(六角堂) 如意輪観音
八坂寺(法観寺) 如意輪観音御告げ
蜂岡寺(広隆寺) 弥勒菩薩

天智天皇 大津京 音羽山重視・権現社参拝
法蔵寺(ほうごんじ) 起源(山岳・観音)

大宝年間(701-704年)

山岳信仰の影響

役小角(修験道の開祖)、
雲遍(泰澄上人)による 愛宕開山
月輪寺起源(創建781年)
千手観音 本尊(平安初期)
十一面観音、聖観音

この時代には、泰澄 大宝2年(702年)
文武天皇から鎮護国家の法師
に任じられ、山背山岳開山
722~794年
(松尾大社)嵯峨野 開発

- 葛井寺(行基 観音?)のち法輪寺(嵯峨野)
正法寺(岩間山 山岳・観音)
長谷寺(山岳・観音) 大和
御室戸寺(山岳・観音) 宇治市

現在の三室戸寺 光仁、花山、白河三帝の
離宮になったため、平安時代末期に改称

鞍馬寺/高山寺 起源(山岳修業)

清水寺 起源(山岳・観音)



中宮寺

7世紀前半、一説に推古天皇15年(607年)
木造菩薩半跏像
本尊。飛鳥時代の作。像高132.0cm(左脚を除く坐高は87.0cm)。広隆寺の弥勒菩薩半跏像とよく比較される。
寺伝では如意輪観音。当初は弥勒菩薩像として造立されたと説有り。

法隆寺 金堂 推古31年(623年)



阿弥陀如来 釈迦如来 薬師如来
薬上菩薩 薬王菩薩

飛鳥時代 ~和銅3年(710年)

観音菩薩立像 夢殿
救世観音
聖観音立像
大宝蔵院
百濟観音
九面観音
夢違観音
(以上赤文字 国宝)



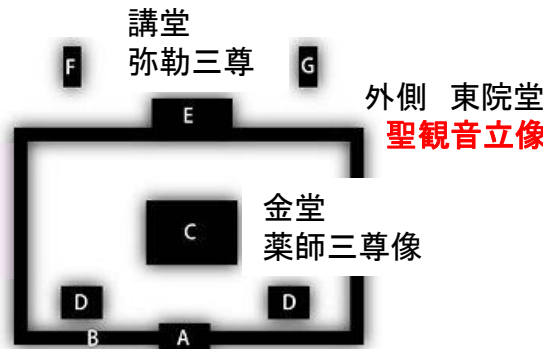
「天寿国繡帳残闕」
聖徳太子一族の伝記



薬師寺(680年)

天武天皇の発願により、飛鳥の藤原京(奈良県橿原市城殿(きどの)町)の地に造営開始、平城遷都後の8世紀初めに現在地の西ノ京に移転

薬師如来
月光菩薩(智慧) 日光菩薩(慈悲)



外側 東院堂
聖観音立像

金堂
薬師三尊像

東大寺 天平勝宝4年(752年)



盧舎那仏 大仏

唐招提寺 金堂 奈良時代 8世紀末

伽藍配置

弥勒如来 講堂
将来の釈迦後継者



千手観音 阿弥陀の慈悲を实践
盧舎那仏 釈迦如来を送り出す存在
薬師如来 現世苦悩の救済

行基 泰澄より「神仏習合」を学ぶ。

八幡信仰を創設 東大寺大仏建立に宇佐八幡宮より守護神勧請(手向山八幡宮)
和銅6年(713年) 文武天皇の母 元明天皇の勅願、五穀豊穰、産業興隆を祈願する
嵯峨野に葛井寺(かどのいでら)建立(現法輪寺 本尊 虚空蔵菩薩)
虚空蔵菩薩の典拠「虚空蔵求聞持法」の伝来が道慈718年。また同時期の、同じ法相宗、観音寺、金蔵寺も観音菩薩であることから「創建当時は、本尊 観音菩薩」と推定。
行基創建 725年 葛井寺(大阪 藤井寺)も、十一面千手千眼観世音菩薩(国宝)である。

「日本書紀」の 仏像記載
欽明天皇(継体天皇嫡子)に、百濟の聖明王が、釈迦像をもたらす 欽明天皇13年(552年)
主説:戊午年 538年仏教公伝(548年説有り)
「上宮聖徳法王帝説」「元興寺縁起」

587年 丁未の乱「崇仏派」勝利

飛鳥仏教 592~710年

用明天皇2年(587年) 蘇我馬子建立発願
法興寺(蘇我氏寺)のちの飛鳥寺
本尊 釈迦如来(飛鳥大仏)
推古14年(606年) 日本書紀より
主説: 日本最古仏 609年
奈良へ分離移築後、元興寺...弥勒像

『三経義疏』 聖徳太子 注釈書 611~615年
『法華経』 観音菩薩 『勝鬘経』 維摩経

法隆寺 本尊623年 伝607年

百濟大寺(初の官堂)(高市大寺)→大官大寺
舒明天皇11年(639年)
起源は、聖徳太子が今の奈良県大和郡山手に建てた 熊凝精舎(くまごりしょうじゃ)
旧本尊 釈迦如来像(金堂)

山階寺 669年
飛鳥に移築後は 厩坂寺(うまやさかであら)

川原寺 670年頃

薬師寺 680年 當麻寺 681年

奈良仏教 710~794年

南都七大寺*(** 飛鳥から移築寺院)
法隆寺、もしくは唐招提寺を含める*
元興寺(** 飛鳥寺を分離)極楽房 智光曼荼羅
大安寺(** 大官大寺)十一面観音(本堂)
薬師寺(**) 薬師如来像(金堂) 法相宗
興福寺(** 厩坂寺)藤原氏 釈迦如来(金堂)
法隆寺*(創建地再建)釈迦如来(金堂)

『国分寺・国分尼寺建立の詔』741年

新薬師寺 747年 薬師如来像(本堂)
東大寺* 752年 盧舎那仏 華嚴宗
唐招提寺* 8世紀末 律宗(金堂)
盧舎那仏(釈迦の本地仏)
西大寺* 765年 釈迦如来(金堂)

神道派の敏達皇統、物部氏と中臣氏、対抗する用明皇統と、その外戚関係を持つ蘇我氏の仏教推進派。物部守屋、山背大兄王一族、蘇我入鹿の死の影には、中臣氏の思惑が隠されていた。その闘争の中で、仏教に学び十七条憲法の「和」に努めようとした聖徳太子は、「四天王寺」と、670年に焼失した「若草伽藍」と呼ばれる法隆寺に何を表現、求めたか？ また、その四天王寺と、再建後の法隆寺に共通する動機、目的は何か？ 四天王寺の本尊は救世観音であって四天王ではない。末法思想の時代に入ると、四天王寺を中心に霊場化が進み、救世観音信仰は次第に浄土念仏信仰へと変容していく。鎌倉時代、親鸞らによって救世観音が和讃や講式に取り込まれ、救世観音信仰は西方浄土信仰と同一視されるようになる。その理由は発祥にある。

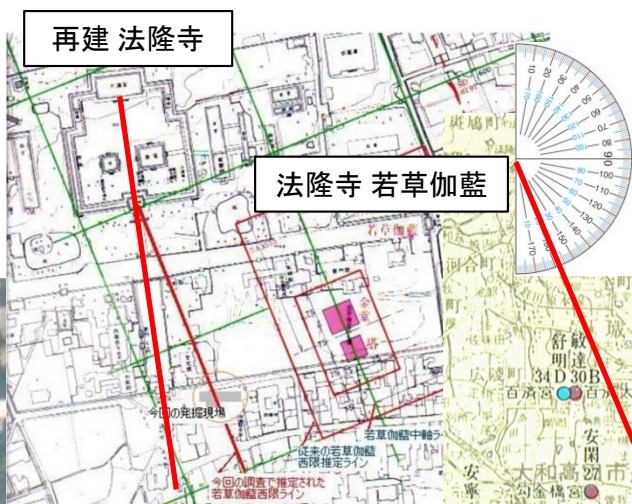
四天王寺と若草伽藍の創建目的は、聖徳太子による物部氏たちの怨霊鎮魂と考える。まず四天王寺所在の河内は物部氏の本拠地である。その聖域 太子奥殿と呼ばれ、太子を祀る八角堂が所在する場所のすぐ東側に物部守屋の祠(ほこら)が伝わる。そこには敗死した守屋の親族、弓削小連、そして中臣勝海連も合祀されている。587年、仏教を巡って物部氏、中臣氏を討った蘇我氏、そしてまだ13才にすぎない聖徳太子も蘇我氏の母系であるために不本意にも従ったと考える。隠された太子の本意として、仏による鎮魂のため、593年、四天王寺の創建が開始された。「八角堂」の様式は、すでに唐の中期以降、墓としての形態である。現に、養老5年(721)、興福寺の八角堂 北円堂は、藤原不比等一周忌に、その慰霊のため、元明太上天皇と元正天皇により創建されている。

二寺に共通する証が、伽藍配置と方向である。それは意味無しに設計されない。例えばのちの天満宮、防府と大宰府、北野は、いずれも西方向に傾斜、「怨霊」を恐れて都からそむけた方向だ。法隆寺若草伽藍は、20度東方を向いていた。藤原京の南、推古天皇の豊浦宮、小墾田宮の方向である。その先には太子誕生の地、橘寺もある。伽藍方向には意味がある。

四天王寺の伽藍配置は、中門、塔、金堂、講堂を南から北へ一直線に配置する、いわゆる「四天王寺式伽藍配置」である。発掘調査の結果、「若草伽藍」の伽藍配置もまた四天王寺式であった。目的は、共通する「鎮魂」である。「若草伽藍」は全焼しているため、その詳細はわからないが、礎石位置から四天王寺と配置は共通。四天王寺は593年創建開始、605年に、太子が斑鳩で居住開始。そして、二寺に同じ鋳型が使われた八葉素弁蓮華紋の軒丸(のきまる)本瓦葺の丸瓦の軒部分に葺く瓦、別名「鏡瓦」(あぶみがわら)から、同時期の創建であると考えられる。

では、四天王寺と再建法隆寺はどうか？ 二寺とも、2度から3度、東方を向いている。測量の誤差と考え、少しあとの創建、680年薬師寺、752年東大寺を見るが、真南を向いている。真南をむけず、わずかに傾斜させた寺院の軸、「鎮魂」の形式を表現しているかもしれない。その後、四天王寺には、浄土信仰が大きく習合していく、「鎮魂」とは関係が深い。再建法隆寺の伽藍配置は、塔、金堂が横に並ぶ。622年、太子没。その後、他者によって設計され建築、711年、中門に仁王像完成となる。藤原氏の興福寺創建開始は、同じ頃の710年。再建法隆寺と同じく塔と金堂は東西に並らぶ。藤原氏による「鎮魂」寺院の形態と考える。鎌足の子、藤原不比等が没するのは養老4(720)年。その前のけじめ、禊かもしれない。

八葉素弁蓮華紋
四天王寺、法隆寺若草伽藍の軒瓦



四天王寺は、平安時代、承和2年(836年)の落雷、天徳4年(960年)の火災で主要伽藍が失われた。たびたびの災害を経て、天正4年(1576年)石山本願寺攻めの兵火焼失。豊臣秀吉の再建、慶長19年(1614年)大坂冬の陣で焼失。江戸幕府の援助で再建。幕末の享和元年(1801年)の落雷焼失再建。昭和9年(1934年)の室戸台風で五重塔と中門が倒壊、金堂も大被害を受けた。五重塔は昭和14年(1939年)に再建されるが、昭和20年(1945年)の大坂大空襲で国宝の東大門他伽藍とともに焼失。現存の中心伽藍は昭和38年(1963年)に完成、鉄筋コンクリート造で、飛鳥建築の様式を再現した。

その歴史で守られ、現存する建物は、重要文化財に指定された永仁2年(1294年)の石鳥居、元和4年(1618年)建立の元三大師堂、元和9年(1623年)建立の浄土六時堂、五智光院、本坊方丈となる。

石舞台は住吉大社の石舞台、厳島神社の平舞台と「日本三舞台」の一つとされ重要文化財である。この舞台では毎年4月22日の聖霊会(聖徳太子の命日法要)の日に、四天王寺の雅楽は、宮中(京都)、南都(奈良)と共に三方楽所とされた「天王寺楽所」によって伝えられ、雅楽の最古の様式を持つ。また、法隆寺でも夢殿が建立された後の、天平20年(748)から「お会式」として聖徳太子のご命日にその遺徳をたたえ、同様に供養法要される。

聖徳太子は日本仏教の祖として、宗派や時代を問わず広く信仰されてきた。また、四天王寺の西門が西方極楽浄土の東門(入口)であるという信仰から、浄土信仰の寺としての性格が大きく習合している。

延喜2年(904年)防府天満宮 延喜19年(919年)大宰府天満宮 天曆元年(947年)北野天満宮



法隆寺 若草伽藍跡

622年の聖徳太子没から、4年後、のちの天智天皇、中大兄皇子は推古34年(626年)に誕生、父の**舒明天皇**は、641年に崩御、皇子はまだ15才。舒明天皇のあとその妻で、皇子の母が皇極として天皇についたが、継承問題は収まっていなかった。聖徳太子の子孫である山背大兄王に対して、蘇我宗家は蝦夷娘と舒明天皇の間の皇子、古人大兄皇子を強く支持していた。そして643年に、蘇我入鹿が山背大兄王一族を襲撃し、滅亡させている。645年、乙巳の変で蘇我宗家滅亡後、古人大兄皇子は出家、中大兄皇子が攻め殺した。中大兄皇子は、その変で共謀した蘇我氏傍系の石川麻呂も、649年謀反嫌疑で滅ぼしている。660年、**百済が滅亡**、救援に向かった斉明天皇、崩御。663年、百済復興をかけて中大兄皇子が、唐・新羅連合軍と対峙するも、**白村江の戦いで大敗**した。

聖徳太子の意向「熊凝精舎の本格的寺院化」を受け、最初に仏教帰依した天皇、**舒明天皇**による初めての国家寺院「**百済大寺**」**639年創建**から668年の天智天皇による崇福寺建立までの約30年、山田寺以外の寺院創建は無い。その後は、669年中臣鎌足の病氣平癒を祈願した夫人の山階寺、670年頃の川原寺、680年薬師寺、681年當麻寺と続き、710年以降は平城京でさらに盛んとなる。その山田寺は、蘇我倉山田石川麻呂の創建。『上宮聖徳法王帝説』裏書に詳しく、舒明天皇13年(641年)「始平地」、整地工事を始め、2年後の皇極天皇2年(643年)には金堂の建立となる。

山田寺の目的は何か？それは、聖徳太子の仏教信仰、和の思想に傾倒した石川麻呂による、蘇我宗家興隆の影となった人々、物部氏や父たちへの「**鎮魂**」、**浄土への寺院**であると考えられる。石川麻呂の父は、倉麻呂。日本書紀では、推古天皇継承者について、田村皇子と山背大兄王で別れたが、倉麻呂だけは保留したと記す。そしてその子石川麻呂は、田村皇子を舒明天皇とした蘇我本家と敵対する。山田寺創建着手の641年は、父の倉麻呂没年頃である。父の追善供養・鎮魂のため、蘇我宗家の587年馬子創建の氏寺、飛鳥寺とは別に創建、この通説は当然の動機である。しかし、その**配置**(南から北へ一直線に、南門、中門、回廊に囲まれた塔、金堂、北側・回廊の外側に講堂)は、**若草伽藍と類似**する。若草伽藍の回廊・講堂の位置は、現在まで特定されていないが、塔と金堂の配置、そして何よりも以下の状況からそう考える。建立の目的は、**伽藍配置に表現されている**。

石川麻呂は600年過ぎの誕生で青年期までは、聖徳太子も存命、斑鳩の若草伽藍へは父と訪れていたはずだ。**山田寺は、若草伽藍を規範**とした。なぜなら、太子の法隆寺「若草伽藍」建立の一般的な目的は、崇仏であった父、用明天皇の鎮魂、浄土安寧とされるが、物部氏たち反蘇我宗家を祀る四天王寺との共通性から、彼らを含む大きな意味での「鎮魂」と考えるからである。用明天皇崩御の直後、蘇我馬子は物部氏を滅ぼしている。蘇我氏と血縁関係、一族の渦中にあり、仏法信仰に依る自身の本意を少なからず隠蔽しなければならなかった太子と石川麻呂の状況は似通う。石川麻呂は、**649年**中大兄皇子に攻められ、その**金堂前で一族自決**する。太子の子孫、山背大兄王一族が蘇我入鹿に攻められ、若草伽藍で自決した643年から6年後のことである。山田寺の法号は浄土寺、太子の伝記「上宮聖徳法王帝説」への山田寺の記事掲載、金堂前での自決と併せ、今回検討した建立目的を裏づける。

石川麻呂は、二人の娘を中大兄皇子に嫁がせていた。蘇我傍流ながら、反蘇我氏の中大兄皇子に対する和合の表れと解釈できる。遠智娘(おちのいらつめ)の娘は、天武天皇の皇后となり、持統天皇に。姪娘(めいのいらつめ)の娘は、元明天皇となり、その皇子は文武天皇、孫は聖武天皇となる。山田寺は、天智天皇2年(663年)塔の建設開始、天武天皇5年(676年)に完成。同7年(678年)「丈六仏像を鑄造」、同14年(685年)にはその丈六仏像が開眼(「丈六」は仏像の像高。立像で約4.8m、坐像はその約半分)。この丈六仏像は頭部のみが興福寺に現存、国宝指定。山田寺整備の陰に、姪娘やのちの持統天皇、鸕野讃良皇女(うののさららのひめみこ)の思いがある。

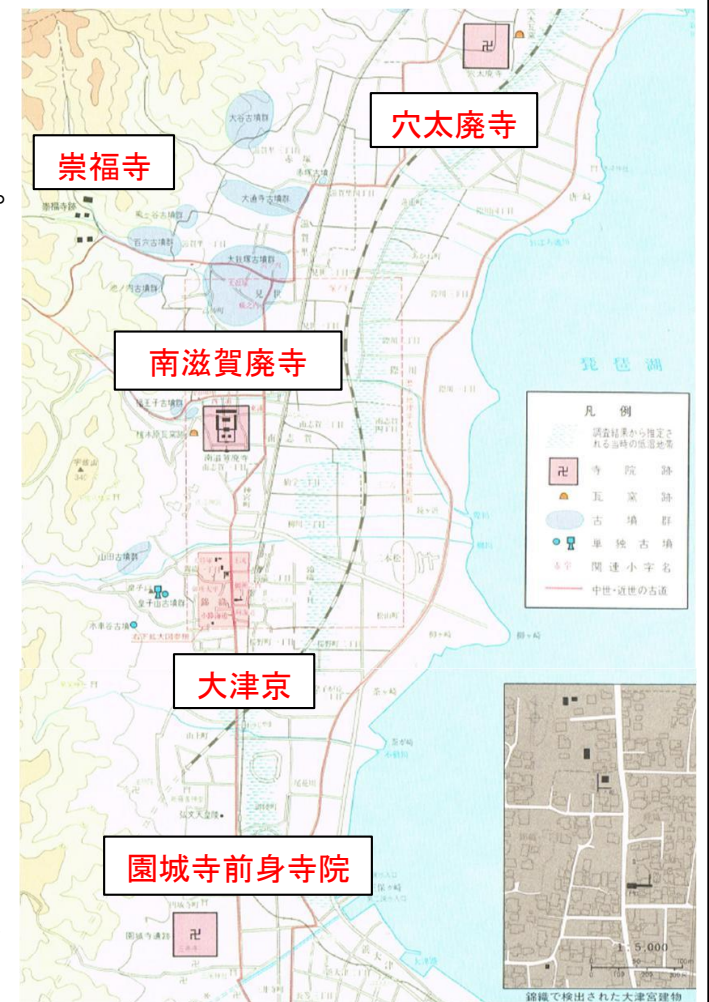
一方、649年、蘇我倉山田石川麻呂の悲劇のあと、660年唐・新羅による百済滅亡までの間、寺院建立は無く、仏教関係の活動は少ないが、注目すべき二件がある。一つは、640年に続き、652年の内裏での**無量寿経講経**。もう一つは、3度の遣唐使派遣の初回、653年第二回遣唐使の中に24才の**道昭**がおり、玄奘三蔵に師事し660年に帰朝、**法相宗を伝来**したことである。次の時代に中心となる経典、宗派である。

661年、百済救援途上で、筑紫朝倉宮にて斉明天皇崩御、663年、白村江で大敗した中大兄皇子は、664年から対馬、壱岐、筑紫国に**防人**(さきもり)と**烽**(とぶひ 敵襲などの変事を都に急報するための山上などの煙火設備)を置き、大宰府政庁を直接防衛する水城(みずき、土塁と濠)を築く。さらに百済の亡命者の指導で、筑前に大野城(おおのじょう)、肥前に基肄城(きいじょう)、肥後に鞠智城(くくちじょう)、対馬に金田城(かねたのき)、長門に長門城(ながとのき)、讃岐に屋嶋城(やしまのき)、大和に高安城(たかやすのき)などの**朝鮮式山城**を築いていった。天智6(667)年には、都を難波から内陸の**大津京**に移す。

天智天皇は、大津京の鎮護のため、668年 大神神社から、日吉大社に**大己貴神**を勧請。元々の神である大山咋神よりも上位に「大宮」とした。のちに、天武天皇が壬申の乱の戦勝祈願の礼として正式に制度化する天照大御神 伊勢神宮奉祭とは対象的である。以後は天皇の代替わり毎に必ず新しい齋王が選ばれ、南北朝時代まで続く制度となった。いずれにしても、護国戦勝祈願の対象は神である。

668年崇福寺、670年頃の川原寺、そして671年までに発願とされる大宰府の観世音寺、天智天皇が母、**斉明天皇の鎮魂供養**のために建立発願したとされる寺である。このうち、**川原寺**は斉明天皇の川原宮跡でありその主旨は明瞭である。(川原寺の日本書紀初見は、天武天皇2年(673)年2月即位後の3月で、一切経書写事業の初見でもある。主旨が隠されて、天武期の事業として取り込まれた可能性が高い)**観世音寺**も、続日本紀の和同二年に**斉明天皇のために発願と記録**、崩御された筑紫朝倉宮近隣から判断し同様に考える。この宮の場所は確定していないが、日本書紀「御船還りて娜大津(ナノオオツ)に至り磐瀬(イワセ)行宮に居」娜大津は博多で、「或本に云はく、天皇、朝倉宮に遷り居しますといふ」から、御笠川の上流、大宰府の近隣であろう。観世音寺は政庁の東に位置する。但し、完成には**741年**まで70年かかる。しかし、**崇福寺**は検討を要する。大津京の西北山岳にあり、同時期の創建となる南滋賀廃寺、穴太廃寺、園城寺前身寺院で都を囲む。鎮魂供養の目的より、都の警護が合理的である。

その観世音寺の当初の目的は、唐との緊張、やがて朝鮮半島で勢力を拡大した新羅との緊張により変化していく。北九州大宰府の立地は、畿内より敏感にならざるえない。その当初と変化の目的の変遷は、観世音寺の伽藍配置と仏、特に新たに加わった仏に明確である。剣を持ち戦う仏、不空羂索観音の登場、「鎮護国家」の仏の誕生である。我が国初の**夷狄脅威の時代**。守護神にだけでなく、**鎮魂、浄土を託す 仏にも護国を願う**時が来た。



北九州は渡来の玄関であり、また国防の要所である。**古事記**に、安曇/住吉、宗像氏族と記される**海人族**は、航海に長じ、漁労も兼ねる海洋集団で、弥生時代以降も続文化として沿岸から内陸する。**安曇/住吉系海人**は、渡来当初、北九州海域を根拠地とし、のち瀬戸内海中心に沿岸と島々、さらに鳴門海峡を出て紀州沿岸を回り、伊勢湾に入り込み伊勢海人として一大中心点を構成した。さらに外洋に出て東海沿岸から伊豆半島ならびに七島の島々に拠点をつくった。そして房総半島から常陸沿岸にかけ分布した。山陰沿岸を北上した一族もあった。出雲杵築、丹波安曇郷(和名妙)などに、安曇氏、海部氏の痕跡が残る。**宗像系海人**は、手づかみ漁、弓射漁、刺突漁など潜水漁を得意とした。本拠を筑前宗像郡鐘ヶ崎に置き、筑後・肥前・豊前・対馬・豊後の沿岸に進出、そして日本海側では、向津具半島の大浦、出雲半島と東進、但馬・丹波・丹後から若狭湾に入り、能登半島・越中・越後・佐渡に渡り、羽後の男鹿半島に及ぶ。

その伝来の遺跡、信仰の拠点である**宗像大社**。田心姫(たごりひめ)神を祀る「沖津宮(おきつぐう)」神域 沖ノ島は、巨石群祭祀遺跡から三角縁神獣鏡、武器、金銅製装身具など出土。湍津姫(たぎつひめ)神を祀る「中津宮(なかつぐう)」大島には、天の真名井、七夕信仰が伝わる。市杵島姫(いちきしまひめ)神を祀る「辺津宮(へつぐう)」は、神湊から釣川を上った、高宮という古代祭場を南に持つ総社。市杵島姫神たちは、宇佐神宮、岡山や奈良桜井、京都の**松尾大社**や**市比賣神社**に、延暦14年(795年)には、桓武天皇の勅命で、藤原冬嗣が皇居鎮護として勧請した**御所の宗像神社**、またのちには、畿島や関東にも祀られる。一方、仏教の弁才天と習合し、本地垂迹においては同神とされた。イネは、まず熱帯ジャポニカが南西諸島を通して列島に伝播した。縄文時代のイネは、炭化米が後期後半の熊本県東鍋田遺跡や、鹿児島県の列島最古、縄文時代早期から集落した**上野原遺跡**などから検出されている。縄文晩期から弥生時代へ、銅剣、銅矛、中期からは銅鏡の出土が多く、主たる遺跡、**吉野ヶ里**、**紀元前400年頃**、**日本最古の弥生・環濠集落の江辻や板付の水田**。弥生後期には、方形・円形周溝墓を持ち、内行花文八葉鏡(46.5cm)を出土した**平原遺跡**など。その鏡について、考古学者(原田大六氏、森浩一氏)は、「皇太神宮儀式帳」の本鏡内容器の記事などを元に、**伊勢神宮内宮「八咫鏡」**と同様の大きさ・文様とする。神と考古の時代から、畿内大和に関係する。古墳時代中期、390年頃 **神功皇后**が三韓征伐の際、**宗像神**に航海の安全を祈り靈験があったとされ、事あるごとに国に幣使を遣わす習いになった。またこの逸話からは航海安全の**守護神**として崇められるようになった経緯がうかがえる。大化の改新(645年)により国郡の制が敷かれると、宗像一郡が神領として与えられ、豪族**宗像氏**が神主として神社に奉仕し、神郡の行政も司ることになった。一方、**宇佐神宮**、社伝では、欽明天皇32年(571年)に起源。720年、隼人の乱で戦勝祈願、社殿創建 和銅年間(708-715)～神亀2年(725年)現地へ。祭神は、応神天皇由来の**八幡大神**、対新羅として祀られた宗像三女神、比売神(ひめがみ)、三韓征伐に由来する神功皇后が祀られる。

大宰府の「大宰」の初見は609年(推古天皇17年)であるが、『日本書紀』宣化天皇元年(536年)条の「夫れ筑紫国は、とおくちかく朝(もう)で届(いた)る所、未来(ゆきき)の関門(せきと)にする所なり。(中略)官家(みやけ)を**那津**(なのつ、博多大津の古名)の口(ほとり)に脩(つく)り造(た)てよ」と記され、大宰府の起源はさらに遡ると考えられる。推古天皇16年(608年)、遣唐使**小野妹子**が隋の使者裴世清を伴って那津に着いた頃から、官家(みやけ)は、大陸や朝鮮半島からの使者の接待をも担うようになった。筑紫大宰は九州全体の統治と外国使節の送迎などにあたり、以後は大宰府に引き継がれていく。大宰(おほみこもち)とは、地方行政上重要な地域に置かれ、数ヶ国程度の広い地域を統治する役職で、いわば地方行政長官である。天武天皇期には、吉備、周防、伊予などあり、『続日本紀』文武天皇4年(700年)10月の条に「直大寺石上朝臣麻呂を筑紫総領に、直広参小野朝臣毛野を大貳(次官)と為し、直広参波多朝臣牟後閉を周防総領と為し」とあるように「総領」とも呼ばれた。**大宝律令(701年)**によって、九州の大宰府は政府機関として確立したが、他の大宰は廃止され、一般的に「大宰府」と言えば九州のそれを指す。

622年、聖徳太子没、643年、蘇我入鹿による山背大兄王一族の襲撃、法隆寺で自害。中大兄皇子は、中臣(藤原)鎌足とともに、645年、乙巳の変で蘇我入鹿を討った。その混乱期に659年(斉明天皇5年)出雲国造に命じて「**神之宮**」を修造。『日本書紀』660年、**百済が滅亡**、救援に向かった斉明天皇は、筑紫の朝倉宮に遷幸し戦争に備えたが遠征軍が発する前の661年、崩御した。663年、百済復興をかけて中大兄皇子が、唐・新羅連合軍と対峙するも、**白村江の戦いで大敗**した。そして、我が国初の**夷狄脅威の時代**を迎える。「若草伽藍」と呼ばれる太子建立の法隆寺が、670年に焼失。671年、天智天皇崩御。翌年、壬申の乱で国内争乱、天武天皇の**伊勢神宮齋宮制**、女帝時代から藤原台頭そして聖武天皇へ。守護神にだけでなく、**鎮魂**、**浄土を託す** **仏にも護国を願う** 時が来た。



神勅とは記紀記述天照大神の勅命。「筑紫の国に降り、沖津宮・中津宮・辺津宮に鎮まりなさい。そして歴代天皇のまつりごとを助け、丁重な祭祀を受けられよ」

「古事記原文」 変体漢文 岩波古典文学大系本(訂正 古訓古事記) 近代デジタルライブラリー 国宝「真福寺本」照合済

「伊邪那岐命 と伊邪那美命」

(前略)是以、伊邪那伎大神詔「吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音穢國而在邪理。此二字以音。故、吾者爲御身之禊」而、到坐竺紫日向之橘小門之阿波岐此三字以音原而、禊祓也。(中略)於是詔之「上瀨者瀨速、下瀨者瀨弱而。」初於中瀨墮迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神。訓禍云摩賀。下效此。次大禍津日神。此二神者、所到其穢繁國之時、因污垢而所成神之者也。次爲直其禍而所成神名、神直毘神。毘字以音。下效此。次大直毘神。次伊豆能賣神并三神也。伊以下四字以音。次於水底滌時、所成神名、**底津綿上津見神**。次底筒之男命。於中滌時、所成神名、**中津綿上津見神**。次中筒之男命。於水上滌時、所成神名、**上津綿上津見神**。訓上云宇閉。次上筒之男命。此三柱**綿津見神者**、阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字以音。下效此。故、**阿曇連**等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。宇都志三字以音。其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱神者、**墨江之三前大神**也。於是洗左御目時、所成神名、**天照大御神**。次洗右御目時、所成神名、**月讀命**。次洗御鼻時、所成神名、**建速須佐之男命**。須佐二字以音。

「天照大神 と須佐之男命」

故爾各中置**天安河**而、**宇氣布**時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劔、打折三段而、奴那登母母由良邇此八字以音、下效此振滌**天之眞名井**而、佐賀美邇迦美而自佐下六字以音、下效此、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、**多紀理毘賣命**此神名以音、亦御名、謂**奥津嶋比賣命**。次**市寸嶋上比賣命**、亦御名、謂狹依毘賣命。次多岐都比賣命。三柱、此神名以音。速須佐之男命、乞度天照大御神所纏左御美豆良八尺勾璫之五百津之美須麻流珠而、奴那登母母由良爾、振滌**天之眞名井**而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命。亦乞度所纏右御美豆良之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、天之菩卑能命。自菩下三字以音。亦乞度所纏御縷之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、天津日子根命。又乞度所纏左御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、活津日子根命。亦乞度所纏右御手之珠而、佐賀美邇迦美而、於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、熊野久須毘命。自久下三字以音。并五柱。於是天照大御神、告**速須佐之男命**「是後所生五柱男子者、物實因我物所成、故、自吾子也。先所生之**三柱女子者**、**物實因汝物所成**、故、乃汝子也。」如此詔別也。故、其先所生之神、多紀理毘賣命者、坐胸形之**奥津宮**。次市寸嶋比賣命者、坐胸形之**中津宮**。次田寸津比賣命者、坐胸形之**邊津宮**。此三柱神者、**胸形君等之以伊都久三前大神**者也。故、此後所生五柱子之中、天菩比命之子、建比良鳥命此**出雲國造**・无邪志國造・上菟上國造・下菟上國造・伊自牟國造・津嶋縣直・遠江國造等之祖也、次天津日子根命者。

661年、百済救援途上で、筑紫朝倉宮にて齊明天皇崩御、663年、白村江で大敗した中大兄皇子は、664年から対馬、壱岐、筑紫国に**防人**(さきもり)と**烽**(とぶひ)を置き、大宰府政庁を直接防衛する水城(みずき)を築く。さらに百済の亡命者の指導で、筑前に大野城、肥前に基肄城(きいじょう)、肥後に鞠智城(くくちじょう)、対馬に金田城(かねたのき)、長門に長門城(ながとのき)、讃岐に屋嶋城(やしまのき)、大和に高安城(たかやすのき)などの**朝鮮式山城**を築いた。天智6(667)年、今の如意ヶ岳と牛尾山を最後の砦とし、都を難波から内陸の**大津京**に移した。

天智天皇は、大津京の鎮護のため、668年 大神神社から、日吉大社に**大己貴神**を勧請。元々の神である大山咋神よりも上位に「大宮」とした。天武天皇が壬申の乱の戦勝祈願の礼として正式に制度化した天照大御神 **伊勢神宮**奉祭とは対象的である。しかし、いずれも**護国 戦勝祈願の対象は神**である。

668年崇福寺、670年頃の川原寺、そして671年までに発願とされる大宰府の観世音寺、天智天皇が母、齊明天皇の**鎮魂供養**のために建立発願したとされる寺である。**観世音寺**は政庁の東に位置する。但し、完成には**741年**まで70年かかる。その観世音寺の当初の目的は、唐との緊張、やがて朝鮮半島で勢力を拡大した新羅との緊張により、伽藍整備の遅延とともに、変化していく。新羅との関係改善は752年までかかる。北九州大宰府の立地は、畿内より敏感にならざるえない。その当初と変化の目的変遷は、観世音寺の伽藍配置と仏、特に新たに加わった仏に明確である。剣を持ち戦う仏、不空羂索観音の登場、「**鎮護国家**」の**仏の誕生**である。我が国初の**夷狄脅威の時代**。守護神にだけでなく、**鎮魂、浄土を託す 仏にも護国を願う**時が来た。

「鎮魂」の仏として、四天王寺・法隆寺・山田寺・川原寺を代表に辿った。この観世音寺には、その「**鎮魂**」と、**新しい「戦仏」「護国」の仏が習合**している。717年から735年遣唐使として帰朝した**玄昉、岡寺**の義淵に良弁と学んだ、物部氏分流阿刀氏の玄昉が、唐より多数の經典と招来した「**不空羂索観音**」である。720年に藤原不比等が没、玄昉帰朝後には737年、不比等の子 藤原四兄弟が病死。**橘諸兄**の下、遣唐使盟友の**吉備真備**と、**聖武天皇の政権に入る**。740年(天平12年)大宰府赴任に不満した藤原広嗣が挙兵するも鎮圧。しかし聖武天皇の遷都遍歴の原因となった。翌741年(天平13年)7月15日**千手経**1000巻を発願、書写・供養。聖武天皇の聖武天皇の母、宮子、異母妹で王妃である光明子(光明皇后)にも接近。光明子は玄昉が話す唐の則天武后が行った政治や仏教政策に興味し、天平13年(741)「**国分寺建立の詔**」、即ち大仏建立、国分寺、国分尼寺建立へと結実していく。観世音寺、東大寺三月堂(天平12年 740年~748年頃)や興福寺講堂(天平18年 746年)の「**不空羂索観音**」が誕生することになる。しかし、藤原仲麻呂が勢力を持つと、745年(天平17年)筑紫観世音寺別当に左遷、封物も没収され、翌746年(天平18年)任地で没した。川原寺や崇福寺と同じく東向きに開口する金堂、本尊は、阿弥陀如来座像で「**鎮魂**」が**当初の目的**。南向きに開口する金堂の不空羂索観音は「**戦仏」「護国**」を祈願された。そして、平安時代後期、「**鎮護国家**」の仏として、**憤怒形相の「馬頭観音」**が加わる。変遷、重層する目的が重なる伽藍配置と、二つの御本尊が並ぶ構造となった。

北九州で600年代末に鑄造された梵鐘が継承され、兄弟の京都妙心寺鐘と共に国宝となる。天智天皇が大津京鎮護で大己貴神を勧請した**日吉大社も分霊、門前鳥居とともに、神仏も習合**している。

観世音寺 本尊 伽藍配置と方向

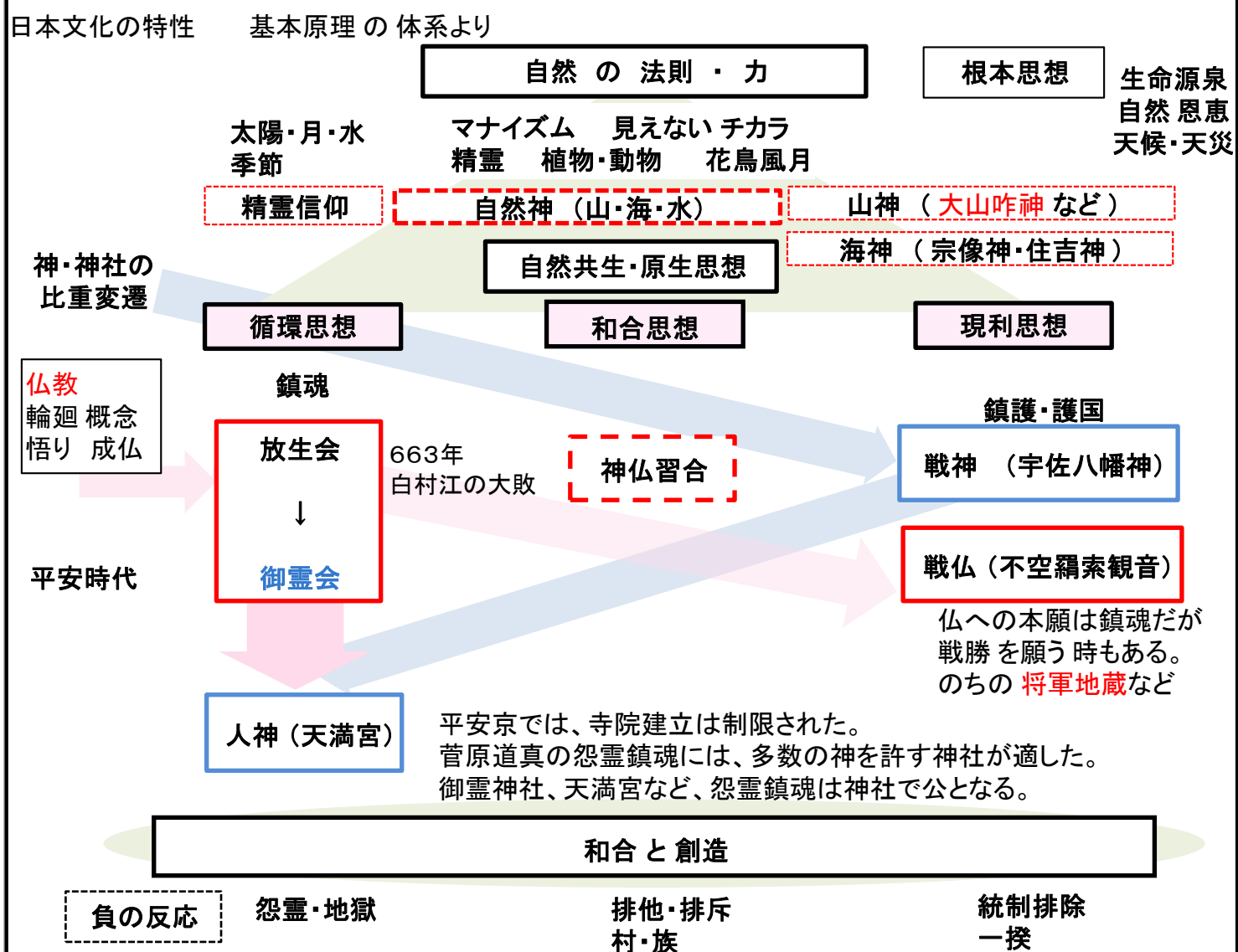
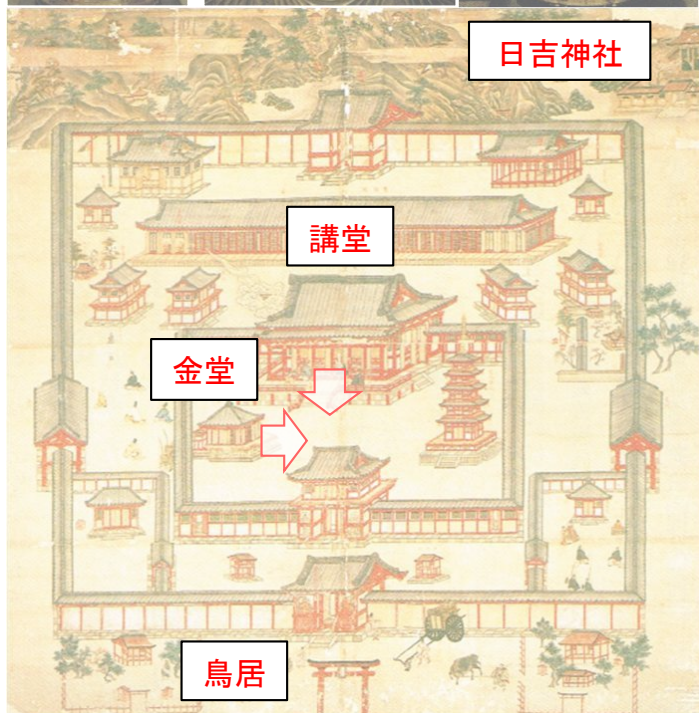
創建当初、金堂本尊：阿弥陀如来 講堂本尊：不空羂索観音
平安末期に、馬頭観音、聖観音、十一面観音



不空羂索観音

日吉神社

阿弥陀如来座像



我が国特有に、観音信仰は長期に継続、千手観音を主に**変化観音**を受容した。理由は何か？我が国古来の自然発生的な多神信仰・習合文化が、多様な変化観音と適合し受容、信仰したと考える。**千手観音**は、奈良時代より京都の山々で祀られ、天台真言の密教、山岳修験とも繋がり平安京での仏教信仰の中心となった。当初は薬師如来を本尊する寺院もあるが、観音は大衆にも浸透した。観音の名を称えれば、火・水・風・刀杖・羅刹・枷鎖・怨賊の**七難**を逃れ、心に念ずれば欲・瞋・癡の**三毒**を離れ、身に名号を礼拝すれば(現世・来世)**二求兩願**が叶う。仏身(ぶっしん)から執金剛身(しゅうこんごうしん)まで、相手に応じて33種類の姿に変えて、説法する。この様に、観音菩薩自身が、元来、**多様な「功德と示現」**を、思想として持つ。「功德と示現」に期待する信仰者の多様性とも言える。観音菩薩に対する「称・念・拝」といった**信仰・祈願手段の多様**にも注目すべきである。平安から鎌倉時代で、阿弥陀に対する祈願について、観想念仏と称名念仏が、課題となるからだ。

一心称名 七難回避

爾時無尽意菩薩。則從座起。偏袒右肩。合掌向仏。而作是言。世尊。観世音菩薩以何因縁。名観世音。仏告無尽意菩薩。善男子。若有無量百千万億衆生。受諸苦惱。聞是観世音菩薩。一心称名。観世音菩薩。即時観其音声。皆得解脱。若有持是観世音菩薩名者。設入**大火**。火不能烧。由是菩薩威神力故。若為**大水**所漂。称其名号。即得浅处。若有百千万億衆生。為求金。銀。瑠璃。車渠。瑪瑙。珊瑚。琥珀。真珠等宝。入於大海。假使**黒風**吹其船舫。飄墮羅刹鬼国。其中若有乃至一人称観世音菩薩名者。是諸人等。皆得解脱羅刹之難。以是因縁。名観世音。若復有人。臨当被害。称観世音菩薩名者。彼所執**刀杖**。尋段段壊。而得解脱。若三千大千国土満中。夜叉**羅刹**。欲来恼人。聞其称観世音菩薩名者。是諸悪鬼。尚不能以悪眼視之。況復加害。設復有人。若有罪。若無罪。丑械**枷鎖**。檢繫其身。称観世音菩薩名者。皆悉断壊即得解脱。若三千大千国土満中**怨賊**。有一商主。将諸商人。齋持重宝。經過險路。其中一人。作是唱言。諸善男子。勿得恐怖。汝等应当一心称観世音菩薩名号。是菩薩。能以無畏。施於衆生。汝等若称名者。於此怨賊。当得解脱。衆商人聞。俱発声言。南無観世音菩薩。称其名故。即得解脱。

常念恭敬 三毒厭離

無尽意。観世音菩薩摩訶薩。威神之力。巍巍如是。若有衆生。多於婬欲。**常念恭敬観世音菩薩**。便得離**欲**。若多瞋恚。常念恭敬観世音菩薩。便得離**瞋**。若多愚癡。常念恭敬観世音菩薩。便得離**癡**。無尽意。観世音菩薩。有如是等大威神力。多所饒益。是故衆生。常応心念。若有女人。設欲求男。礼拝供養観世音菩薩。便生福德智慧之男。設欲求女。便生端正有相之女。宿植徳本。衆人愛敬。無尽意。観世音菩薩。有如是力。若有衆生。恭敬礼拝観世音菩薩。福不唐捐。是故衆生。皆応受持観世音菩薩名号。無尽意。若有人。受持六十二億恒河沙菩薩名字。復尽形供養飲食。臥具。医薬。於汝意云何。是善男子。善女人。功德多不。

受名礼供 二求兩願

無尽意言。甚多世尊。仏言。若復有人。**受持観世音菩薩名号**。乃至一時**礼拝供養**。是二人福。正等無異。於**百千万億劫**。不可窮尽。無尽意。受持観世音菩薩名号。得如是**無量無辺**。福德之利。無尽意菩薩。白仏言。世尊。観世音菩薩。云何遊此娑婆世界。云何而為衆生説法。方便之力。其事云何。

普門示現三十三 三十三身

仏告無尽意菩薩。善男子。若有国土衆生。応以仏身得度者。観世音菩薩。即現**仏身**。而為説法。応以辟支仏身得度者。即現**辟支仏身**。而為説法。応以声聞身得度者。即現**声聞身**。而為説法。応以梵王身得度者。即現**梵王身**。而為説法。応以帝釈身得度者。即現**帝釈身**。而為説法。応以自在天身得度者。即現**自在天身**。而為説法。応以大自在天身得度者。即現**大自在天身**。而為説法。応以天大將軍身得度者。即現**天大將軍身**。而為説法。応以毘沙門身得度者。即現**毘沙門身**。而為説法。応以小王身得度者。即現**小王身**。而為説法。応以長者身得度者。即現**長者身**。而為説法。応以居士身得度者。即現**居士身**。而為説法。応以宰官身得度者。即現**宰官身**。而為説法。応以婆羅門身得度者。即現**婆羅門身**。而為説法。応以比丘比丘尼優婆塞優婆夷身得度者。即現**比丘比丘尼優婆塞優婆夷身**。而為説法。応以**長者。居士。宰官。婆羅門。婦女身**。得度者。即現**婦女身**。而為説法。応以**童男。童女身**得度者。即現**童男。童女身**。而為説法。応以**天。龍。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦楼羅。緊那羅。摩猴羅伽**。人非人等身得度者。即皆現之。而為説法。応以執金剛神。得度者。即現**執金剛神**。而為説法。

無尽意。是観世音菩薩。成就如是功德。以種種形。遊諸国土。度脱衆生。是故汝等。应当一心供養観世音菩薩。是観世音菩薩摩訶薩。於怖畏急難之中。能施無畏。是故此娑婆世界。皆号之為施無畏者。無尽意菩薩。白仏言。世尊我今当供養観世音菩薩。即解頸衆宝珠瓔珞。価直百千両金。而以与之。作是言。仁者。受此法施。珍宝瓔珞。時観世音菩薩。不肯受之。無尽意。復白観世音菩薩言。仁者。愍我等故。受此瓔珞。爾時仏告観世音菩薩。当愍此無尽意菩薩。及四衆。天。龍。夜叉。乾闥婆。阿修羅。迦楼羅。緊那羅。摩猴羅伽。人非人等故。受是瓔珞。即時観世音菩薩。愍諸四衆。及於天。龍。人非人等。受其瓔珞。分作二分。一分奉釈迦牟尼仏。一分奉多宝仏塔。無尽意。観世音菩薩。有如是自在神力。遊於娑婆世界。爾時無尽意菩薩。以偈問曰。

法華経

密教 三身説(さんじんせつ)
大乘仏教、仏の3種類の身のあり方
本体(**法身**ほっしん)が大日如来。荘厳な光の御体が阿弥陀如来(**報身**)。仏陀となるための因としての行を積み、その報いとしての完全な功德を備えた仏身、実際に衆生の元へと様々な姿で現われる御体 (**応身**)が **観音菩薩**。仏が衆生を済度するため、様々な形態で出現する際の姿。
中国 隋(589~619)の時代、天台智顛は『**摩訶止観**』巻6下で「境について法身となし、智について報身となし、起用について応身となすと説明し仏の智慧の身であるとした。また、『摩訶止観』のなかで、「請観音経」の六字章陀羅尼を6つの観音にたとえ、それぞれを**六道**(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天)に配した。

観音経偈

於苦惱死厄	衆怨悉退散	悲體或雷震	廣大智慧觀	十方諸国土	應時得消散	蚊蛇及蠅蠚	毒龍諸鬼等	念彼觀音力	咸即起慈心	或被惡人逐	龍魚諸鬼難	心念不空過	善應諸方所	世尊妙相具
能爲作依怙	妙音觀世音	慈意妙大雲	悲觀及慈觀	無利不現身	衆生被厄厄	氣毒煙火然	念彼觀音力	釋然得解脱	或遣王難苦	墮落金剛山	念彼觀音力	能滅諸有苦	弘誓深如海	我今重問彼
具一切功德	梵音海潮音	謝甘露法雨	常顯常瞻仰	種種諸悲趣	無量苦過身	念彼觀音力	時悉不敢害	呪詛諸毒藥	臨刑欲壽終	念彼觀音力	波浪不能沒	假使興害意	歷劫不思議	佛子何因縁
慈眼視衆生	勝彼世間音	滅除煩惱礙	無垢清淨光	地獄鬼畜生	觀音妙智力	尋聲自回去	若惡獸圍繞	所欲害身者	念彼觀音力	不能損一毛	或在須彌峯	推落大火坑	侍多千億佛	名爲観世音
福聚海無量	是故須常念	諍訟經官處	慧日照諸闇	生老病死苦	能救世間苦	雲雷鼓掣電	利牙爪可怖	念彼觀音力	刀尋段段壞	或值怨賊逐	爲人所推墮	念彼觀音力	發大清淨願	具足妙相尊
是故應頂禮	念念勿生疑	怖畏軍陣中	能伏災風火	以漸悉令滅	具足神通力	降雹澍大雨	念彼觀音力	還著於本人	或因禁枷鎖	各執刀加害	念彼觀音力	火坑變成池	我爲汝略説	爾答無盡意
		念彼觀音力	普明照世間	眞觀清淨觀	廣修習方便	疾走無邊方	念彼觀音力	或遇惡羅刹	手足被杻械	念彼觀音力	如日虛空在	或漂流巨海	聞名及見身	汝聽觀音行



ガンダーラ 仏三尊像の観音菩薩

ガンダーラには単独の菩薩像のほかに、仏三尊像と呼ばれる、中央の仏陀像とその左右に脇侍菩薩像を従える三尊形式の高浮雕の石板パネルの作例が42例ほど確認される。これらの仏三尊像は作例によってそれぞれ細部のヴァリエーションはあるが、多くの場合、中央の仏陀は大きな蓮華座上に結跏趺坐して説法印を結び、両側には菩薩立像が配され、仏陀の両肩部にはしばしば梵天と帝釈天が姿を現し、仏陀の頭上には花樹や天人・化仏・仏菩薩が表される。

42例の仏三尊像の作例で、部分的に破損や欠損を含むものもあるが、少なくとも現在確認できる限りでは、両脇侍菩薩は左右の位置は一定しないが、束髪式（もしくは肉髻式）・持水瓶タイプの菩薩像とターバン冠飾タイプの菩薩像（無持物もしくは持蓮華・持華鬘）とをセットにして配置しており、前述の検討から前者は弥勒菩薩、後者は無持物の場合は悉達菩薩、持蓮華もしくは特筆鬘の場合は観音菩薩に同定しうる。つまり、仏陀・弥勒菩薩・悉達菩薩の組合せより、**仏陀・弥勒菩薩・観音菩薩の組合せが多い**。これらの仏三尊像は様式的に見て2~3世紀に遡るが、特にガンダーラ美術の後期、**3~4世紀頃**に流行したことが窺われ、弥勒菩薩と観音菩薩を両脇侍とする仏三尊像がガンダーラで定着していったと考えられる。弥勒菩薩と観音菩薩を一对にした仏三尊像がガンダーラで好まれた理由は、菩薩の**対照的な二つの性格や働き**が関わっているものと思われる。

束髪にして水瓶を持つ**弥勒菩薩**の姿は、実は頭髪を結って水瓶を執る梵天(ブラフマー)の図像を基にしており、精神界の主である梵天の後裔とされるバラモンの姿も同様で、装身具などを一切つけず、**行者**としてのイメージを表している。これは弥勒がバラモンの出自をもつことや、当初仏弟子として修行者の性格を強く持っていたためであろう。インドではバラモンは僧侶・祭祀階級であり、いわば精神界を司る。一方、ターバン冠飾をつけて蓮華(華峯)を持つ**観音菩薩**の姿は、冠を被る帝釈天(インドラ)の図像を基にしており、神々の王である帝釈天の後裔とされるクシャトリヤの姿もターバン冠飾や装身具をつけ、王者としてのイメージを表している。インドでは王者は国を繁栄させ、人民を安穏にさせる責務を負うという**王権観**があり、クシャトリヤは武士・王侯階級であり、いわば世俗界を司る。ただ、帝釈天は金剛杵を執って武神としての性格を持つのに対し、観音菩薩は持物を蓮華(華鬘)に代えて、武神的性格を消して**慈悲の性格**を現している。

このように弥勒菩薩と観音菩薩の図像は梵天と帝釈天、バラモンとクシャトリヤ、**行者と王者という対立的かつ相互補完的なインドの世界観・社会観**を基にして成り立っていることが分かるが、それは菩薩の二つの基本的な働きとも密接、自ら努力し修行して、悟りを得ようとする「**上求菩提**」の働きと、苦しむ衆生に対して、慈悲心を起こし救い、悟りに導こうとする「**下化衆生**」の働きに関係する。これは「成道」とそれに続く「梵天勧請」によって仏陀が備えた徳であるが、仏陀亡き後、それを菩薩は現実的な働きとして具現化するものといえよう。ガンダーラの仏三尊像はおそらく大乘的な仏身観に基づく永遠存在としての法身的な**釈迦仏を中心**に、仏陀の徳を具現化する菩薩の二つの働きを持つ**弥勒菩薩と観音菩薩を両脇侍として従えることによって、仏国土を表現**したものと考えられる。その後、観音菩薩は、法華経の「普門品」から、また尊像としても仏三尊像から独立し、特に日本では、密教と連携し、現世利益の世界で、多様な下化衆生の仏として祀られていく。

1C 「法華経」 観音信仰の成立

インド

中国



三尊石仏
仏陀
弥勒菩薩
観音菩薩



10C パーラ一朝

弥勒信仰

唐時代・長安3年(703)

インドでは発展しなかったが、ガンダーラから中央アジア・中国で、**半跏思惟像**を伴い発展



鳩摩羅汁 344年 - 413年 (350年 - 409年) 龜茲国 (中国六朝時代)「**妙法蓮華経**」25番「普門品」に「**観世音**」

2C

半跏思惟像

悉達(釈迦)菩薩で始まり、インド西北のガンダーラで**観音菩薩**へ展開。

観音信仰

300~500年頃には 全インドへ南インド**補陀洛山**を住处とし、「航海安全祈願」

天台智顛 (ちぎ)538年~597年 空の思想 現実化 「法華三昧・三諦三観(空・仮・中)三諦円融・一念三千」など **法華玄義 法華文句 摩訶止観** 以上 天台三大部 **観音理解** 「観」を観智 「世」観智によって認識される客観的世界、「音」を 衆生の機根 と解した

4C



6C



ポスト・グプタ朝 多臂観音 密教系観音

玄奘 602年 - 664年 唐代の中国の訳経僧 法相宗 開宗 尊称は三蔵法師 「大般若経」(大般若波羅多経) 「般若波羅密多心経」**般若心経**の訳 冒頭「**観自在菩薩**」 「**大唐西域記**」 インドの観音菩薩

密教系観音

インドでは、シヴァ神を中心にヒンドゥー教の神の特徴を取込み発展。

密教系観音

インドの密教系観音は受容されず

変化観音

不空羼索観音以外は発展せず。シヴァ、ブラフマー、インドラ、ヴァルナなど神の特性を観音の功德として取り入れている。実際の修法でイメージされ、造尊に至らなかったと考えられている。



変化観音が、特に日本で発展する。十一面・千手・如意輪など中国で変化観音についての陀羅尼經典が漢訳され、**尊像礼拝**が重視されたことが要因と考えられている。

起源 観音菩薩のルーツを探ると、古代宗教の神々に到達するといわれる。古代イランの女神**アナーヒター**、ヒンドゥー教のシバ神やその妃**ドゥルガー**・女神**ラクシュミー**など多くの神々の属性が取り入れられ、複合されて観音菩薩という一つの存在に結晶したものと考えられている。

紀元1世紀頃の観音菩薩像が ガンダーラから発見されており、**紀元1世紀頃までには信仰**が形作られていた。バラモン教の十一荒神(一説にはヒンズー教の多面神)は、5, 6世紀の頃、仏教(密教)に融合したとされる仏である。6世紀後半「**十一面神咒心経**」の中に、十一面観音の様相や役割(功德や利益)について書かれている。**中国での発展** 観音信仰はインドから中央アジアを経て中国へ。北魏(376~534)の都、洛陽の近く、「**竜門石窟**」には阿弥陀仏像に先行し、観音像が多く作られ、早くから信仰されていた。

観音菩薩への信仰を支えた教典は『法華経』を龜茲国 **鳩摩羅汁**が『妙法蓮華経』で訳す。「普門品」には観世音が衆生に与える利益が説かれ、普門品が独立して『観音経』となり、中国などで大きな影響力を持つ教典となった。北魏の観音信仰は、個人の現世利益・浄土教的で、死後救済が目的でなく、中国では仏教が「**家**」の**信仰という祖先の追善が中心**。朝鮮も、北魏の仏教継承。唐(618~907)・宋(960~1127)の時代、中国観音信仰が開花・結実。特に密教が興隆した**唐代**に **密教的観音像**の創作信仰が盛んとなる。

日本での融合

追善から現利 国家鎮護、民間信仰

古墳時代の末である500年代中期に仏教公伝。

「観音菩薩」はその公伝後の早い時期から、法隆寺などで独尊像として信仰される。伝来初期は、追善供養への信仰であったが、く奈良時代には密教的現世功德を願う。その理由は何か？ 水瓶を持ち慈悲、すなわち「現世利益」をもたらすからである。

神話時代の、水をもたらす神山「磐座信仰」の源流が、「現世利益」という共通点で仏教と合流、ここでも「和合」が進み、山岳での観音信仰となる。そこでは、宗派を超えた「観音信仰」があり、その特性の強さが感じられる。その「和合」の特性、流れから、「神仏習合」神と仏の役割分担と共存が誕生する。つまり、古代からの「神々習合」の歴史を経験して、「神仏習合」があった。日本仏教の歴史は、聖徳太子の法華経から理論化され具体化する。伝 推古天皇23(615)年、法華経の注釈「法華義疏」が著わされる。法華経の二十五番「観世音菩薩普門品第二十五」に、観音菩薩が語られている。

実際、太子建立と伝えられる寺院の多くは、観音菩薩が本尊である。推古天皇元年(593年)創建の「四天王寺」が、その代表である。

飛鳥・白鳳時代 592~710年

【聖徳太子~天智天皇~天武天皇】

★追善的 観音信仰 (中国の影響で、初期は同様な信仰)

『追善』とは功德を積んで、死者の冥福を祈る仏事。

聖徳太子は法隆寺夢殿の救世観音に皈依した。

615年、「法華義疏」など 三経義疏の成立。

600年代末、法隆寺の壁画に十一面観音の絵が描かれた 外陣壁画 7号壁 観音菩薩 12号壁 十一面観音菩薩

7世紀末、白鳳末期 従来の追善的観音信仰に加えて密教的観音信仰 那智山出土の観音像に十一面観音像がある。朱鳥元(686)年、天武天皇病氣平愈のため観音像仏誦経する。(紀)

奈良時代 710年~794年 ~平安中期

【元明天皇~聖武天皇~桓武天皇】

★密教 現世利益 的観音信仰 (日本独自 発展)

国家鎮護 「観音経」

聖武天皇の時代 (724~749年)

東大寺法華堂 『東大寺要録』『諸院章』などから、

前身「羅素院」は天平5年(733年)頃、良弁が不空羅素観音を本尊として創建。(740年代)天平7(735)年、玄昉、遣唐使と帰国、「十一面神呪心経」などを招来。「玄昉願経」と言われる経典に「千手千眼観世音菩薩大悲心陀羅尼経」があり千巻写経が現在も伝わり著名。

天平8(736)年、聖武天皇は 長谷寺本尊を十一面観音とした。

長谷寺は、神亀4(727)年、徳道 開山の説もある。徳道は、観音霊場巡りを説いた。

天平12(740)年、藤原広嗣の乱に際し、聖武天皇は国ごとに観音像を造り、観音経写経を命じた。

また、「日本霊異記」でも、観音の現世功德への民衆信仰が記録されている。

すでに養老2(718)年、三論宗道慈が唐より招来の「金光明最勝王経」に説く四天王に護国を願い、

天平13(741)年、国分寺建立の詔。「金光明経」に代わり「法華経」「仁王経」と護国三部経となる。

玄昉も、同じ目的で「千手千眼経」千巻書写発願。天平15(743)年、東大寺盧舎那仏像建立の詔天平年間、東大寺に千手(観音)堂が建てられ、今はない講堂にも千手観音像が安置された。

聖武天皇の皇女、孝謙天皇の時代 天平勝宝4(752)年、東大寺で十一面悔過(懺悔)(現 本尊十一面観音の二月堂 お水取り修二会)

母の光明皇后を形どったとされる十一面観音が法華寺に造られた。この時代までの雑密伝来で、飢饉天災・政変鎮静のため、呪術的な力を、変化観音に期待した。変化観音はインドでは衰微、特に日本では盛んに千手観音や不空羅素観音などが祀られた。



参考 広隆寺 半跏思惟像 600年代初期



現存最古 観音像 法隆寺伝来 651年 白鳳期の銘文 四十八体仏 165号 飛鳥奈良時代の49件(57体)の金銅仏の一体 笠評君への追善供養 (東博所蔵)



現存最古 十一面観音像 那智山経塚出土 680年頃 天武天皇 白鳳末期 金銅仏群中の1体 銅造、鍍金 像高30.9 cm 法隆寺金堂壁画と並ぶ、装身具の装飾に用いられた特殊タガネによる複連点文は、法隆寺再建期の金銅仏に共通(東博所蔵)

法隆寺壁画 十一面観音菩薩 外陣壁画 600年代末 7号壁 観音菩薩 12号壁



最古期 木造観音菩薩 法隆寺 百済観音 奈良時代 700年代初~中期



東大寺法華堂 不空羅素観音 奈良時代前半 (天平時代)



伝六観音菩薩 法隆寺 奈良時代 700年代初~中期 クスノキ



九面観音 法隆寺 白檀製 唐時代 国宝 推定白鳳時代



十一面観音 木造(白檀) 唐時代・7世紀 多武峯伝来 重要文化財 (東博所蔵)



十一面観音 聖林寺 大神神社の神宮寺の大御輪寺に祀られが、慶応四年(1868)に寺の廃絶とともに当寺に移された。フェノロサ、岡倉天心らにより開扉。木心乾漆十一面観音立像 (国宝・天平時代)



十一面観音 観音寺 木心乾漆 (国宝・天平時代)



十一面観音 大安寺 奈良時代前半 (天平時代) 秘仏 10月1日~11月30日開扉

「十一面神呪心経」 十一面観音は衆生のために善法を念ぜしめ、病を取り除き、憂悩を去り、障難、災怪、悪夢を除き、一切の諸魔鬼神の難を退ける心呪を持つ像で、像を拝むとご利益に預かれる 十一面観音は変化観音である。観音はもともとはひとつのものだったが、功德が多岐にわたるために、その功德をいろいろな形で、表すようになり、さまざまな形の観音像が作られた。千手観音や十一面観音は、人々に理解しやすいために、多く広まったと考えられる。後世、変化観音の区別して、変化をしていないはじめの形の観音を聖観音と呼ぶようになる。超性別であるが、西インド起源では女神の側面、「水と豊穡」を示す水瓶を持つ。



千手観音 唐招提寺 奈良時代 本尊「盧舎那仏」 左右「梵天」「帝釈天」 右「薬師如来」 三尊四隅「四天王」



現存最古千手観音 葛井寺 奈良時代 700年代中期 聖観音 薬師寺 奈良時代 700年代中期 国宝



平安時代中頃 1,000年頃～

★来世救済的観音信仰 阿弥陀仏への橋渡し

古代国家に衰退の兆しが見え、藤原氏が天皇の外戚として権益を独占した。藤原氏と対立して没落した不遇な貴族たちの間から、来世の信仰としての観音信仰が芽生えた。この時期の観音信仰は、阿弥陀信仰に代表される来世の浄土を求める信仰への橋渡しを担う役割を果たした。11世紀には、反藤原氏貴族たちから生まれた藤原氏など権勢貴族たちにも浄土信仰が広がり、造像・建築の華美を競う。

六道輪廻に苦悩する衆生を導く六観音信仰

天台智顛『摩訶止観』のなかで、「請観音経」の六字章陀羅尼を6つの観音にたとえ、それぞれを六道(地獄、餓鬼、畜生、修羅、人、天)に配した。その考えに基づいて、平安中期、六観音信仰が生まれる。密教の観音として、今まで現世利益中心であった観音信仰は、来世救済の利益も兼ね備えて、観音を本尊とする寺院に「現当二世(げんとうにせい)の利益」を求め、人々が参詣する。真言六観音 小野仁海(じんかい)が藤原道長の下問に対して挙げた六観音像 聖・千手・馬頭・十一面・准胝(じゆんてい)・如意輪(にょいりん) 天台六観音 聖・千手・馬頭・十一面・不空羂索(ふくうけんじゃく)・如意輪

また、養老年間(717-724)大和国初瀬寺(現 西国第八番 長谷寺)にいた徳道上人が病気で仮死状態になったとき、夢に閻魔大王が現れて、「悩める人々を救うため、観音霊場をつくるように」と告げられたという。息を吹き返した上人がこの言葉を守り、畿内の三十三ヶ所に観音霊場を設けたのが現在の西国三十三ヶ所の始まりとする説がある。法華経「観世音菩薩普門品第二十五」(観音経)には、観世音菩薩はあまねく衆生を救うため相手に応じて「仏身」「声聞(しょうもん)身」「梵王身」など、33の姿に変身すると説かれていることにちなむ。当時はあまり普及しなかったが、平安中期になって花山法皇が自ら霊場を訪ね歩いたことが巡礼の始まり、あるいはその復活のきっかけとする説もあり、平安末には山岳での聖たちの活動に倣い、徐々に民衆にも拡大していく。

平安時代末～室町時代

★二求両願的観音信仰

京都七観音詣(革堂、河崎、吉田寺、清水寺、六波羅蜜寺、六角堂、蓮華王院) 平安終末には、聖(ひじり)と呼ばれる修験的仏教者の活動が活発化。聖の多くは霊山・霊場で苦行を重ね、法力・験力を得たとされ、多くの貴族・民衆はこのような異能の行者に対して「現世利益や、来世救済の二求両願」を求めて帰依した。この結果、聖たちの住む山や寺院が参詣・参籠の対象となり、新しい霊場が誕生。また、聖たちが回国修行する各地の霊山・霊場をその帰依者も辿ることにより、霊験・求道の成果を得ようとするのが行われ始め、先の六観音信仰の興隆と合流して三十三カ所観音巡礼が成立した。(『観音信仰事典』速見侑編・戎光祥出版(株) 速見侑「観音信仰のあゆみ」) 鎌倉時代、観音巡礼が盛んになると、「西国写し霊場」として源頼朝や実朝の創建と伝える坂東三十三箇所、京都に洛陽三十三ヶ所。室町時代には秩父三十四箇所も創建され、西国・坂東・秩父と秩父三十四番水潜寺を合わせて「百観音」といわれ、百観音巡礼をする修験者なども増加した。(西国)三十三カ所観音巡礼の本尊 14ヶ寺が「千手観音」で最多、6ヶ寺が「十一面観音」。

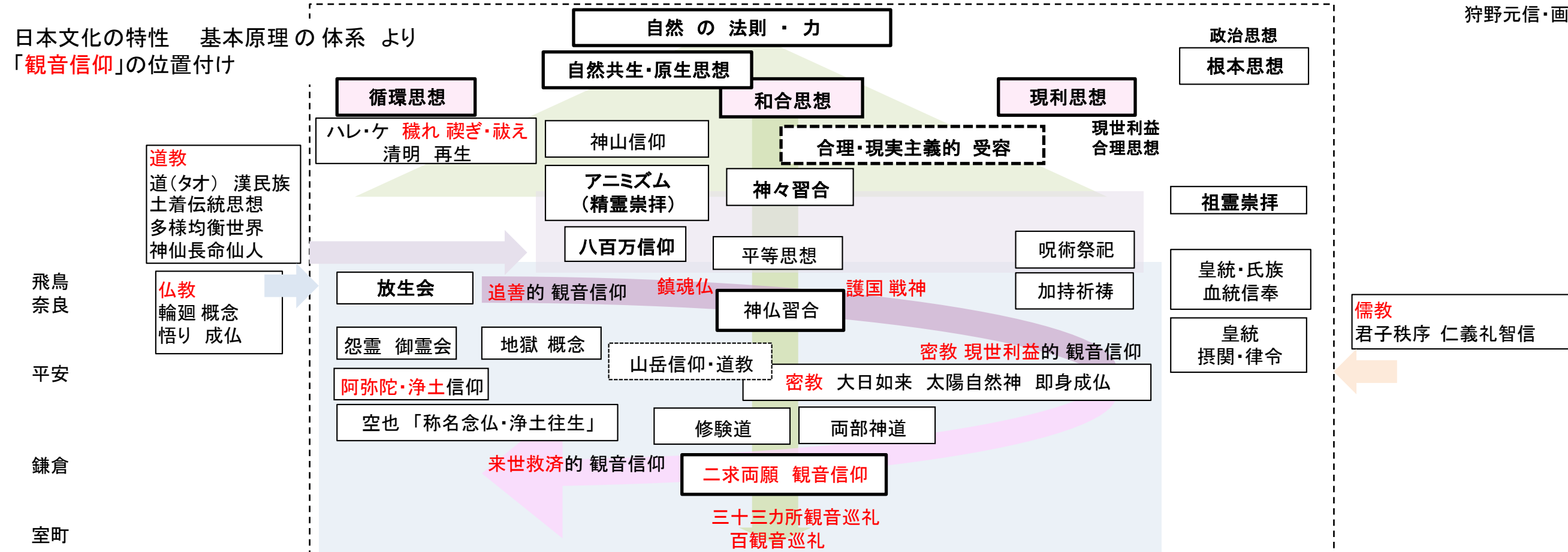


大報恩寺(千本釈迦堂)六観音 鎌倉時代/1224年・定慶作 重文 等身大の六観音像が揃って残っている稀有な重要文化財



白衣観音図 室町時代 狩野元信・画

日本文化の特性 基本原理の体系より 「観音信仰」の位置付け



天武天皇と法相宗の**道昭**、**義淵**により、680年 **法相宗 薬師寺**開基。天武期を境に、仏呪、道呪に系統した**役小角**が、葛城、吉野金峯山から山代 山岳修業の拠点発祥。 700年代、文武、聖武期に義淵と弟子の**行基**や**良弁**、また道昭に師事した**泰澄**らにより、信仰拠点が山代周辺に拡大する。

平城京(710年)奈良時代、717年(養老元年)入唐した義淵の弟子**玄昉**も、ともに濮陽の智周に師事して法相を修め、帰国後これを広めた。玄昉は興福寺に入り当宗を興隆、法相宗興福寺の基をきずく。 **聖武天皇**は、仏教による災厄(飢餓・疫病)戦乱鎮静の『鎮護国家』の思想に基づき、741年『国分寺・国分尼寺建立の詔』。 また、唐の**華嚴宗**第3祖法蔵に学んだ**審祥**は736年に帰朝、金鐘寺(後の東大寺)良弁の招きを受け『華嚴経』・『梵網経』を講義、その思想により東大寺盧舎那仏像が構想された。 743年5月『墾田永年私財法』 同年10月東大寺『大仏造蹟の詔』 優婆塞行基集団 が貢献。 749年、聖武天皇に菩薩戒を授けた行基は没す。751年、良弁が東大寺初代別当に。 同時代、**延鎮**(法相宗)による「山科、法蔵寺」と、**慶俊**(法相、華嚴、真言宗)による「愛宕、五寺」開山で、山代から山背にかけた山岳での信仰拠点が整う。 南都六宗は、三論・成実・俱舎・法相・華嚴・律 の 6 宗。 宗教的としてよりも教学思想的に、朝廷や文化に影響した。 そのうち現存するのは、興福寺と薬師寺を二大本山とする法相宗、東大寺の華嚴宗、東大寺で授戒の制を確立した鑑真が開創した唐招提寺の律宗の三宗。 南都六宗は国家を安定させるために信仰する『鎮護仏教』としての性格が強い。

「**神仏習合**」発祥 南都の教学仏教と平行して、宇佐八幡宮での**法蓮**、のちに**雑密**と呼ばれる断片的密教僧や私度僧の活動がある。「神仏習合」は発祥過程から三種に分類される。

「護法善神」奉斎神が仏を招来 (福井 剣神社 宇佐八幡宮)

「神身離脱」奉斎神が託宣を告げて仏を招来 (若狭彦神社 越前氣比神社 山城賀茂社の岡本堂)

「神奈備・磐座・神籬信仰習合」古来信仰に仏を招来 (木津川 神雄寺 岸和田 神於寺)である。

「**神宮寺**」が、神祇に仕える目的から神社に付属し建立された。霊亀年間(715~717)の越前国氣比神宮寺や、養老年間(717~724)の若狭国若狭彦神宮寺の建立はその先駆をなす。720年隼人の乱後、宇佐での放生以来、八幡神と仏は、相互関係にある。神に祈願し勝利した相手、敗者の霊を鎮魂させる仏である。741年までに宇佐八幡宮神宮寺として弥勒寺が建立された。 “【神仏習合】【神宮寺】”, 国史大辞典

逆に、仏の守護を神に求める役割が「護法善神」である。「東大寺」創建の前、749年、大仏の鑄造が完成し、宇佐から**八幡神**を勧請し「東大寺」の鎮守社として「手向山八幡宮」が創建された。その南都教学と神仏習合発祥の時代、752年、聖武天皇・光明皇后が東大寺大仏(盧舎那仏)開眼供養。 天平宝字2年(758年)竣工した。

777年、八幡神は神で初めて出家、八幡大菩薩となる。

766年までに伊勢神宮にも神宮寺が、奈良時代末までに大神神社に大御輪寺が創建される。(大御輪寺の観音菩薩は、明治、廃仏棄釈の折、聖林寺に遷され国宝となる)

特に「**神身離脱**」習合の背景には、神主や祝部(はふりべ)、豪族たちの**富の蓄積**がある。 神祇祭祀を基礎とする当時の租税制度は 皇祖神の霊力が宿るとした幣帛(へいはく)、律令で定められた幣帛班給を受けるための租税としての初穂徴収である。 しかし一方、律令などの近代化、開墾と条里や灌漑の整備で生産量が増加、富が村に残るようになった。 村長や富農へ、さらに地方豪族や郡司に富が蓄積し、財力で田夫を雇うようになり、**所有の概念**が生まれた。 幣帛への価値観が崩壊し、受領する村が減少、また初穂奉納や班給を私物化する豪族も出現、税制が揺らぎ始めた。 朝廷は、幣帛を受領するように太政官符(行政命令)を出し、ある時期まで一定の効果が得られた。 豪族や富農は、皇祖神への裏切りと所有の**罪悪感**にとらわれ、**密教僧による「神宮寺」を勧進**。 それと相乗して初穂(税収)低迷、幣帛受領の減少もさらに拡大した。

やがて朝廷も、僧統(僧都などの官僚機構)の承認を出して神宮寺の僧を合法化した。 古来の神祇祭祀と律令による近代化との矛盾を、仏教による国家統一に方針変換したわけである。 その結果、豪族の悩みも解消し国家も『墾田永年私財法』などで私的所有を承認したので、仏教ばかりか皇祖神への信仰も厚くなり、仏教と神道の合祀が促進された。 神信仰が無くならなかった理由は、村人や田夫たちは**自然に左右される農耕**の実務者として古来の神祭りや宴を必要としたからである。 そして難解な南都教学とはちがう**密教**は、古来の神祇祭祀となじむ呪術的であり、世俗の富を現世利益として肯定する思想として、この神仏習合の主体となった。 しかし、密教はまだ国家として認知できる大乘仏教、体系を備えてはいなく、空海を待つことになる。

司馬遼太郎によると、**空海**は大安寺の勤操(ごんぞう)の私的給仕人としての自由な立場を得て、その南都教学を消化した。 **法華経**に混在する「人間としての釈迦仏」と「永遠の空なる法身仏」、この存在的矛盾に盧舎那仏(るしゃなぶつ)という思想的法身を創造した思想が、東大寺に伝わった**華嚴経**である。 空海は、その中に 宇宙原理の手掛かりを求める、そして、大和高市郡の久米寺で「大日経」毘盧遮那仏(びるしゃなぶつ)、特に日本密教では「**大日如来**」と呼ぶ思想的存在と出逢う。 延暦23年(804年)遣唐し、密教第七祖 長安 青龍寺の**惠果**から、灌頂名 遍照金剛(へんじょうこんごう)と、伝法印信 阿闍梨付嘱物など授けられた。

大同元年(806年)10月「虚しく往きて実ちて帰る」 大同4年(809年)嵯峨天皇が即位。空海は、和泉国槇尾山寺から、7月の太政官符を待って入京、**和気氏**私寺であった愛宕山麓「**高雄山寺**(後の神護寺)」に入った。

「高雄山寺」所在の**愛宕山**は、愛宕神社略記などによれば、文武天皇期の大宝年間(701~704年)に、役小角と泰澄が開山し神廟を建立したとする。元来は山岳修験の山であり、明治の神仏分離のあと分離成立となる愛宕神社には、その時の伝承から日本一の天狗として「太郎坊」が伝わる。 泰澄は、秦氏の系統で、越前国、豪族三神安角(みかみのやすずみ)の次男が通説。越智山にのぼり、十一面観音を念じて修行を積んだ。のちに開山する白山信仰の創始者である。

天応元(781)年、光仁天皇(桓武天皇の父)の勅により、**慶俊**僧都と**和気清麻呂**が、国家安泰を祈願し、慶俊僧都と愛宕山全域を中興、愛宕一帯を聖地化した。

興福寺の伝えによると弘法大師は法相学を 義淵僧正一道慈一**慶俊**・勤操一空海(弘法大師)という系統で学ばれた。とする。

唐の五台山に倣って、5箇所(の峰)に寺を創建。 朝日峰の白雲寺、大鷲峰(おおわしみね)の**月輪寺**、高雄山の**高雄山寺**、龍上山(たつかみやま)の日輪寺、賀魔蔵山の伝法寺である。「**月輪寺**」は、**千手観音菩薩**を本尊とし、神護寺とともに現存、光仁天皇の勅願所となっている。 清麻呂は、同じ頃、河内にも「神願寺」を創建した。

天長元年(824)清麻呂の子、真綱、仲世の要請により「神願寺」と「高雄山寺」を合併し、寺名を「**神護国祚真言寺**((じんごくそしんごんじ 略して神護寺)」と改め、空海に付嘱し定額寺(官が保護を与える一定数の私寺のこと)に列せられた。それ以後、真言宗として今日に伝わる。

その**慶俊**は、730年頃に生まれ、延暦年間(782~806)まで生きた。 百濟王族の子孫である渡来人系氏族葛井(藤井)連(ふじいのむらじ)の出身。奈良時代の720年に白猪氏から**葛井氏**に改姓。8世紀中頃に創建されたと推定される**藤井寺**を氏寺としている。出家後大安寺に属し、入唐僧の道慈を師として三輪、法相、華嚴などを学ぶ。 天平勝宝5(753)年には法華寺(光明皇后の宮を寺院とした宮寺を起源とする)の大鎮。 同8年、聖武天皇の死に際して律師に。昇進の背景には学問的教養のほか、光明皇后、藤原仲麻呂との強い連携が想定される。 孝謙天皇と道鏡の関係進展で、藤原仲麻呂政権の崩壊とともに失脚するも、道鏡の没落後、律師に復帰していた。



聖林寺 観音菩薩 (元 大御輪寺 像)



我が国古代からの「**自然神**への信仰」と**清浄心**、陰陽の「自然・宇宙の森羅万象」、道教の「神仙思想」、本来の仏教である「現世での煩惱克服」、孔子の儒教からは「性善説と治世者の徳と実践」を強調する孟子的な考え。修験道の信仰を考えると、それらを原初的にすでに内在し、そのため、渡来した各々の信仰思想を受容融合できた、と考える。

日本信仰思想と修験道本山派の教えを総合的に比較すると、「循環思想」である来世往生、浄土信仰が含まれていない様に見え、見受けられる。しかし、熊野が本来、「**観音補陀落の地**」であることは、特に奈良・京都の多くの山岳寺院の起源である修験活動と、本尊観音信仰の一致に受継がれていると考える。聖護院など修験道寺院で、読経されている「法華経」教義も、三世益物(さんぜやくもつ)の本仏釈尊を強調し、二十五番の妙法蓮華経「観世音菩薩普門品」では、「**仏言。若復有人。受持観世音菩薩名号。乃至一時礼拝供養。是二人福。正等無異。於百千万億劫。不可窮尽。無尽意。受持観世音菩薩名号。**」と、その功德の永遠性を説く。吉野金峯山の「**蔵王権現**」は、過去・現在・未来の三世にわたる衆生の救済を誓願して出現した、とその部分を強調する。しかし修験道宗派全般では、個別の經典に執着無く、実践重視である。

熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社の三社からなる**熊野三山**の祭神神々を「熊野権現」と呼ぶ。特に主祭神である家津美御子(けつみみこ)・速玉・牟須美(ふすび、むすび、または「**結**」とも表記)のみを指して熊野三所権現、熊野三所権現以外の神々も含めて熊野十二所権現ともいう。各神社の主祭神は以下の通りであるが、相互に祭神を勧請しあい、前述のように三山では三神と一緒に祀り、熊野として一体習合している。熊野本宮大社の主祭神の家都御子神(けつみこのかみ)または家都美御子神(けつみこのかみ)は阿弥陀如来、新宮の熊野速玉大社の熊野速玉男神(くまのはやたまおのかみ)または速玉神(はやたまのかみ)は薬師如来、熊野那智大社の熊野牟須美神(くまのむすみのかみ)または夫須美神(ふすみのかみ)は千手観音とされる。三山はそれぞれ、本宮は西方極楽浄土、新宮は東方浄瑠璃浄土、那智は南方補陀落浄土の地であると考えられ、平安時代以降には熊野全体が浄土の地であるとみなされるようになった。

熊野祭神の初見は、大同元(806)年『新抄格勅符抄(しんしょうきやくちよくふしょう)』で、天平神護2(766)年、**速玉神**と**熊野牟須美神**にそれぞれ4戸の封戸(ふこ)が与えられたと記される。周辺の考古学情報からも、沿岸部の縄文から弥生時代の自然信仰に原初する。**熊野と吉野**は、古代の自然信仰と、仏教的習合を繋ぐ古道である。奈良の平城京、京都の平安京から見れば、まさに、その時々、時代から、古代にさかのぼる古道でもある。原初原点に回帰し、清浄なる地で、その自然なる力と一体になり、神名の「速玉・牟須美」(タマ 魂・ムス 産霊)に表現される生命力、再生を憧憬する古道である。**天皇や上皇たちの熊野詣の本質**は、「**天変地異**」や、「**貴族社会と武家社会**」混乱に際し、それらの心情、信仰を背景とした「**皇祖神以前、自然神への畏敬崇拜**」と考える。

「**修験**」の初見は、「日本三大実録」の貞観10(868)年、吉野深山で修行した**道珠**に「修験」があると聞かれた天皇が招かれたとある。当時は**清和天皇**であり、その記事の前日7月8日、播磨国で地震。官舎、諸寺堂塔ごとごとく頽倒。前年から引き続き、毎月のように地震があったことも記されている。

鎌倉時代、**熊野を拠点とする熊野修験**、大和諸大寺から金峯山修行、廻国修行する二つのグループが形成。室町末期、前者の聖護院本山派(天台系)が地域組織「霞」を結成し、後者、興福寺などから醍醐寺に結集し当山派(真言系)で組織対抗。江戸時代には「修験道法度」で修験者の二派帰属・統制され、金峯山寺は天台傘下となるが、戦後に「金峯山修験本宗」として独立する。

「**熊野**での仏僧入山修行」は、「日本霊異記」宝亀3(772)年、興福寺沙門「**永興**」が初見。**天台**の第5代座主、智證大師**円珍**(814-891)が、熊野那智の滝に一千日籠居をされた後、熊野より大峰修行された。平安時代には、浄蔵、花山法皇、文覚たちの山籠、大治5(1130)年、天台沙門「**行誉**」らによる埋経など末期にかけて記録が増える。「熊野権現御垂迹縁起」は長寛元(1163)年までに記されており「家津美御子大神本地が阿弥陀如来」など**熊野三所権現**として神仏習合した。「熊野権現金剛蔵王法殿造日記」には、熊野から吉野金峯山までの踏破を試みた山伏の一人、「**長円**」が延久2(1070)年、熊野権現縁由を説明したことで、**白河上皇**御幸に至った、と記する。吉野の金峯山、熊野を拠点とし大峯山への入峯修験者、貴神の熊野詣、御嶽詣(金峯山参詣)が盛んとなりその先達活動が増える。

増誉(ぞうよ、長元5年(1032年) - 永久4年(1116年))は、平安時代中期の天台宗の僧。父は大納言藤原経輔。一乗院大僧正と称される。園城寺(三井寺)の乗延に師事し、行円の下で得度、行観(ぎょうかん)から灌頂を受けた。葛城山や、師と慕した**円珍**が生前行っていた熊野で大峰修行し、修験僧として名をはせ、寛治4(1090)年、**白河上皇**の熊野詣の先達(案内役)を務めた。この功により増誉は初代の**熊野三山検校**(霊場の統括責任者)に任じられ、役行者が創建したとされる常光寺を下賜され、同年、「聖体護持」を意味する「**聖護院**」の名で修験道寺院を創建した。この後上皇による熊野御幸案内は代々聖護院大先達が勤め、「伊勢へ七たび 熊野へ三たび 愛宕まいるは月まいる」と言われるほど、熊野詣は盛んになり、また**愛宕山**も修験の行場として栄えた。

「**修験道**」は、煩惱で曇る本来の本性(仏性)を、修行で験徳を顕わす業道である。

以下、「本山修験宗 聖護院門跡」より

人は本来、仏様と同じ本性(**仏性**)を持っている。ところが煩惱という迷いの中で悪い事を行ってしまい、本性を曇らせている。修行してこの曇りを磨き、悪から離れて**清らかな本心**を發揮する。

そして「**法の徳を顕わす**」ことが修験の意味で、これを実践する人を「修験者」と言う。修験十二箇条に、「凡ソ修験ト称シ候ハ、実行ヲ修シ験法コレヲ成スル之義也」秘訣集に、「修トハ修生始覚ノ修行、験トハ本有本覚ノ験道ナリ」とある。

修行とは、「毎日の生活が則ち修行である」ということに気づき行動する事。經典は主として、法華経(妙法蓮華経)・不動経(稽首聖無動大威怒王秘密陀羅尼経)・般若経、錫杖経(得道梯橙錫杖経)を読む。しかし天台宗の影響を受け、法華懺法や例時作法(阿弥陀経)も日課とする。修験道の思想からすると、宇宙一切の事象や音声は、皆「**法身の顕れ**」である、ありとあらゆる全て経でないものはない。

日本人は昔から山には神々が宿ると信じ、山の神を信仰して来た山岳信仰、**自然崇拜**に源を発した民族信仰を持っている。これは日本の国土が山に覆われ、四季折々に変化する大自然と信仰が結びついていたからである。山自体をご神体(法体)として拝むことに始まり、山の中、つまりご神体の中に入って修行することにより呪術的な験力を得る事を望んだ。また仏教が伝えられると仏教と融和し、**神道・儒教・道教・陰陽道**等をも融合して**仏教的神道的色彩の濃い「日本独自の神仏習合・権現信仰の色彩が強い修験道」**が完成されて来た。修験道では今から約1300年前に誕生された役行者神変大菩薩を開祖と仰ぎ、聖護院では平安期の高僧、第5代天台座主智證大師圓珍を中興の祖と呼んでいる。修験道は山岳崇拜の精神を基とし、厳しい山々で修行し、困苦を忍び、心身を修練し、悟りを開いて仏果を得る、という出家・在家を問わない菩薩道、即身即仏を実修する日本古来の宗教である。



聖護院門跡
本尊 不動明王
平安時代 後期

吉野の金峯山寺は、600年代後期、**役小角**が金峯山山上ヶ岳で一千日の修行に入り、修験道独特の本尊・金剛蔵王大権現を感得し、この姿を山桜に刻んで、山上ヶ岳(現:大峯山寺本堂)と山麓の吉野山(現:金峯山寺蔵王堂)に祭祀したことを開創と伝える。権現とは権(仮り)に現われるという意味で、本地仏の**釈迦**如来(過去世)、千手**観音**(現在世)、**弥勒菩薩**(未来世)が権化されて、過去・現在・未来の三世にわたる衆生の救済を誓願して出現した。また金剛蔵王とは、金剛界と胎蔵界を統べるという意味も表わす、とする。現在の本尊、木造蔵王権現立像三軀は、本堂が再興された天正19年(1592年)頃の制作である。

金峯山寺創建縁起について、「金峯山秘密伝」は、「天智天皇**白鳳十一年**正月八日**役行者**始」とする。延元元年(北朝建武3年)1336年、持明院統の北朝光明天皇による足利尊氏が京都を制圧し開幕した。「金峯山秘密伝」は、その歴史の中で、後醍醐天皇の吉野南朝樹立にあたり護持僧となった醍醐寺の**文観**が著し、後醍醐天皇に献上された書物である。今の「**金輪王寺**」は、その時に後醍醐天皇が皇居とした金峯山寺の塔頭「**実城寺**」で、吉野朝皇居跡とされている。その「天智天皇**白鳳11(671)年**」は、「日本霊異記」に語られる当時の役小角記録や、大宝年間(701~704年)の愛宕山に伝わる越前「**泰澄**」との開山、天狗伝承とも時代が一致する。「金峯山秘密伝」には、役小角が修行霊山として金峯山と大峯山を開山したことや、金剛蔵王権現、眷属の八大金剛童子、子守、勝手、天川弁才天の五尊や諸尊、諸神の次第も詳細されている。また、そこに掲載されている「**吉野種子曼荼羅**」には、**金剛蔵王権現**を中心とした信仰の大成が表現され、金剛蔵王権現を中心に、釈迦、観音、弥勒三尊と、金剛界大日と胎蔵界大日など中核に祀られ、上部には吉野熊野とも呼ばれる弥山の神格とされる龍神の**天川**(天河) **弁財天**を中央に祀り、天満(御霊神)、牛頭(疫神)などで外隔が構成されている。



吉野金峯山寺 本尊



吉野曼荼羅図(重文)
西大寺所蔵
南北朝時代



「金剛蔵王権現信仰」の成立過程
古代神山信仰の流れから、「木曾御嶽」に残るように多くの岩石が折り重なる各国の高山を、美称「御」を冠し「御嶽」と呼んだ。その中で、吉野金峯山は「**金の御嶽**」と呼ばれていた。

奈良時代天平神護2年(766年)、元興寺法相宗青年僧の**護命**(ごみょう)が、吉野山麓の比蘇寺で「**虚空蔵求聞持**(ぐもんじ)法」を行った。**弘法大師**が護命僧正八十才の寿を賀した詩文が、『**性霊**(しょうりょう)**集**』にあり、『元興寺の大徳僧正、年八十に登(すす)んで、智ほ十二(十二部経)に明かなり、無着(むちやく)世親(せしん)の論、奥きを探(さぐ)り、旨(むね)を諳(そら)んず。……二美(福と智)兼修し、六度(六パラミツ)具(つぶさ)に行ず。謂(いい)つべし仏家の棟梁、法門の良将なる者なり』等と最高讃辞をつらね、美しい詩文で『卓たる彼の人宝(じんぼう)、謂うべし国の珍』と人間的国宝であることを宣言して結んでいる。**護命**は、南都仏教の護持につとめ、最澄の比叡山「一乗止観院」の大乗戒壇設置には反対している。

平安時代に、役小角伝承が広がる。800年代後半、**空海**の実弟真雅の入室弟子であり、東大寺で修行していた**聖宝**が役小角に私淑した。吉野の金峰山(きんぷせん)で山岳修行を行ない、参詣道を整備。吉野山に本尊如意輪観音と脇侍の多聞天(毘沙門天)、金剛蔵王菩薩を祀った。貞観16(874)年、聖宝は、京都山科の笠取山山上に准胝(じゅんてい)・如意輪(にょいりん)の両観音像を安置し、山岳修業から「**醍醐寺**」が始まる。今日、上醍醐と呼ばれている場所である。その後、聖宝は、宇多法皇の帰依をうけ、延喜元(901)年、東寺大僧都に任ぜられる。延喜7(907)年には、醍醐寺が醍醐天皇御願寺となる。以後、山麓の下醍醐を中心に飛躍的に発展。**聖宝**は、醍醐天皇のために、准胝堂で皇子誕生を祈願し、のちの朱雀・村上両帝たちが生まれる。金峰山の発展に尽力したことから、聖宝を役小角以降途絶えていた修験道の再興の祖とする伝承が生まれた。のちに「修験道当山派」の本山となる「**三宝院**」は、永久3年(1115年)、左大臣 源俊房の子で醍醐寺14代座主勝覚が灌頂院(かんじょういん)として開き、後に仏教の三宝にちなんで現在の名に改めた。康治2年(1143年)に鳥羽上皇の御願寺となっている。鎌倉から南北朝時代にかけて、成賢(7世)・憲深(11世)・賢俊(21世)と高僧を輩出し、足利尊氏から厚く保護された。応安7年/文中3年(1374年)**足利義満**が三宝院23世である光助を室町幕府の祈禱を行う武家護持僧の管領役に任じられた。25世満濟は「**黒衣の宰相**」とも呼ばれ、応永3年(1396年)に足利義満の猶子となって醍醐寺座主に任じられ、後には足利義教の將軍擁立にも活躍するなどした。以後、歴代院主が醍醐寺座主を兼ねる慣例が成立する。また、古くから醍醐寺は真言宗系の修験の中心であったが、この頃から三宝院が真言宗系の修験者・山伏の取締にあたるようになる。室町時代中期から形成され、江戸幕府によって公式に成立する「**当山派修験道**」では、聖宝を祖とし、以上の経緯から真言宗との関係が深い。

「金剛蔵王権現」の**初見**は「藤原道長金剛経筒銘文」で、寛弘4(1007)年、**藤原道長**が金峯山上に納経し、釈迦の化身として金剛蔵王権現に弥勒菩薩下生まで埋経守護を祈願している。

1100年代に記された「東大寺要録」では、盧舎那仏である大仏鑄造のため、**良弁**が金掘出を吉野の蔵王権現に依頼するが、弥勒菩薩下生の準備であると断られた。代わりに告げられた通り、近江志賀に河辺に如意輪観音を祀り祈願すると、東北より金が発掘できた。そのため、如意輪観音と、脇侍として執金剛神と金剛蔵王を祀り寺とした、とする。その寺が、天平19(747)年創建の「**石山寺**」である。石山寺寺伝では、聖武天皇の勅願による同年もしくは天平勝宝元(749)年、開基とする。国宝本堂の正堂は永長元年(1096年)再建で、滋賀県下最古の建築である。内陣には本尊如意輪観音を安置する巨大な厨子がある。合の間と礼堂は淀殿寄進で慶長7年(1602)に建立された。合の間の東端は「紫式部源氏の間」と称され、執筆中の紫式部像が安置されている。**礼堂**は傾斜地に建ち、正面は長い柱を多数立てて床を支える懸造(かけづくり)で最古建築。懸造本堂は、清水寺、長谷寺など、観音菩薩を祀る寺院に多い。山岳での観音信仰を象徴している。



現存最古の蔵王権現 彫刻

鳥取県東伯郡三朝町の三徳山(みとくさん) **三仏寺**(さんぶつじ)は、『伯耆民談記』で、慶雲3年(706年)、修験道の開祖である**役小角**(役行者)が子守権現、勝手権現、**蔵王権現**の三所権現を祀ったのが始めとされている。永和元年(1375年)の修理棟札で「蔵王殿」と名称された国宝「三仏寺奥院(投入堂)」がある。平安時代末の、投入堂正本尊である木造蔵王権現立像と、本尊像とともに安置されていた木造蔵王権現立像 6軀がいずれも国重要文化財で、現在は宝物殿に安置されている。

三仏寺奥院(投入堂)本尊



本尊は、右足を高く上げ、焰髪を逆立てる典型的な蔵王権現像であるが、忿怒の表情は控えめで、全体に平安後期彫刻特有の穏やかな作風。像内納入文書に仁安3年(1168年)の年記がある。

その他の6軀の内、一番古い像は、年輪年代法によって1025年の伐採年代が確定されている。**蔵王権現の最古の彫像**である。

「不動明王」の漢訳初見は、不空羂索観音の典拠でもある、北インドの菩提流志(ぼだいるし)が、709年「**不空羂索神變真言經**」に記した「**不動使者**」の名称である。善無畏(ぜんむい)訳「**大日經**」では、「**大日如来使**」として、子供の姿として明確化する。そのサンスクリット語のアタチャラナータは「不動の守護者」の意味であるが、同じ頃、唐の一行は、「大日經疏」で「不動明王」と訳した。

善無畏の「大日經」の所説を図示したものが「退蔵界曼荼羅」で、金剛智による「**金剛頂經**」の所説が、「**金剛界曼荼羅**」である。この中心經典成立前の密教を雜密、以降を純密と呼ぶ。金剛界曼荼羅の自性は、中央・大日如来、東方・阿閼如来、南方・宝生如来、西方・阿弥陀如来、北方・不空成就如来によって分担されているが、これら五如来は、それぞれが真理の当体(自性)であり**自性輪身**(仏・如来)という。この真理は、菩薩として化現し衆生を教化救済のために正法を説くため、**正法輪身**(菩薩)という。さらにその済度を徹底するために強剛難化の衆生を忿怒(ふんぬ)相をもって折伏する役割が**教令輪身**(明王)である。それらを「**三輪身**」と呼ぶ。

自性輪身である大日如来の、正法輪身が般若菩薩で、教令輪身が**不動明王**である。そのため不動明王は、未だ教えに従わない救い難い衆生を力づくでも帰依、教化するための役割を持つ。「大日如来の命を受けた」とも、「如来が自ら明王に変化した」とも、伝えられている。釈迦などの如来や、観音などの菩薩とは違い、不動などの明王はすべて**密教**の下で形成されている。恐ろしい外貌と激しい憤怒の相が特徴だが、同じ明王でも「孔雀明王」は唯一、慈悲を表した菩薩の顔をしている。

不動明王は、インドや中国では独尊仏としての作例は乏しく、独立した信仰対象ではなかったが、日本では密教を招来した**空海**が胎蔵界曼荼羅の象徴として重視したため信仰が広まった。その理由は、我が国古代からの神山信仰と、空海たち山岳修行僧にとっての「**山の守護神としての不動明王**」の**信仰一致**にあると考える。左に索髪(さくはつ)を垂らし、右手に剣、左手に羂索を持つ。常に火の中にいることから、光背に迦楼羅炎がある。向かって右(向かって左)に、童顔の**矜羯羅童子**(こんがらどうじ)、左に金剛杵(こんごうしよ)と金剛棒(いずれも武器)を手にしていたずら小僧の**制多迦童子**(せいたかどうじ)を従えた三尊(不動三尊)の形式で祀られることが多い。**その二童子は、中国で考案されたとされる**八大童子の二名で、残りの六名は、慧光(えこう)童子、慧喜(えき)童子、阿耨達(あのかた)童子、指徳(しとく)童子、烏俱婆伽(うぐばが)童子、清浄比丘(しょうじょうびく)である。八大童子彫像の作例として、高野山金剛峯寺不動堂に伝わる国宝像がある。

真言宗(東密)では、不動明王、降三世明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王の五つを**五大明王**という。東寺、大覚寺、醍醐寺、不退寺など多くの寺で、五大明王がそろって祀られている。天台宗(台密)では、金剛夜叉明王の代わりに烏枢沙摩(うすさま)明王が、五大明王の一尊として数えられる。五大明王像は、中国でも若干の遺例があるが、不動明王独尊と同様に日本で造像盛んとなる。平安時代前期に密教が隆盛し、五壇法の本尊として五大明王が祀られた。東寺講堂に、承和6年(839年)頃の国宝彫刻。醍醐寺には、上醍醐五大堂と靈宝館に重文彫刻がある。東寺、醍醐寺、岐阜の来振寺には国宝画像が伝わる。

我が国、最古の「不動明王」は、その**東寺講堂**の国宝像である。東寺は国家鎮護の寺院とし、薬師三尊(現像 桃山時代)を本尊に金堂(国宝)から創建された。弘仁14(823)年、空海が嵯峨天皇より下賜されたあと、真言宗根本道場として、天長2年(825年)講堂(重文)が着工された、承和2(835)年の空海入定後、承和6(839)年に講堂諸像が開眼供養された。(『続日本後紀』)その際の21像の内、現存は15像だが、五仏の中尊の大日如来と、五菩薩の中尊の金剛派羅密は文明18(1486)年の土一揆で、講堂とともに焼失したため、中尊としては不動明王のみが平安時代から存続する。五大明王像(国宝) - 不動明王像を中心に、降三世明王、軍荼利明王、大威徳明王、金剛夜叉明王像を配す。貞観9(867)年創建の**御影堂**の不動明王像(秘仏)も、明王像では日本最古期の作例である。講堂は、金堂の背後(北)に建つ。

800年代の作、「**波切不動**」は、空海が唐で彫り持ち帰ったとされ、高野山南院にある。その面貌は、空海撰「**唵十九種相観想略頌**(かんじゅうきゅうしゅそうかんそうりやくしょう)文」にある「**19観**」に由来し、900年頃より、天台宗の安然や真言宗の淳祐が説き、青黒い身体に片目を閉じる等の特徴をもつ不動明王像が増える。青蓮院の「**青不動**」(平安後期 国宝)が画像としてその典型である。それ以外の造形画像では、円珍が感得して描かせた「**黄不動**」(三井寺 800年代 国宝)、同じく円珍が比叡山横川で感得したという伝説を元にした「**赤不動**」画像(鎌倉時代 高野山明王院)がある。「赤不動」は、**修験道**との関係を表現する「**三環つなぎの飾り**」と、俱梨伽羅剣をもち二童子を従える。竜が剣に巻き付く俱梨伽羅剣は不動明王の化身ともいわれている。

不動明王祈願「不動法」 目的の変遷

- ① **護国**修法 天変消弱・反乱鎮圧 四壇立て(大壇、護摩壇、十二壇、聖天壇)
東密の太元帥法(たいげんのほう)、台密の熾盛光法(しじゅうこうほう)
天慶3(940)年、平将門の乱、広沢遍照寺 寛朝が空海作不動明王を下総に移管、**調伏**祈願。のち成田山新勝寺。
- ② 上級貴族の**私的祈願** 安産祈願・物怪調伏 不動法(護摩一壇)
延喜3(903)年、天皇に入内した娘、穩子(やすこ)の安産祈願を願い、藤原基経が祈願。
五壇法(五大明王を本尊とする) 天台僧 良源の修法 藤原道長の祈願
寛弘5(1008)年、藤原道長の彰子(あきこ)の安産祈願・**物怪調伏**。寛仁2(1018)年、道長重病の回復祈願。
寛仁5(1021)年、政敵であった藤原顕光と娘延子の怨霊に対する、寛子や嬉子のための調伏祈願。
治安2年(1022)年、無量寿院を改称し「**法成寺**」、金堂・五大堂の落慶供養
五大堂の不動明王を主尊とした五大明王への、現世での政敵**調伏**と後世のための念仏専念の守護。
金堂の大日如来(現世利益)。薬師堂の薬師像七体(七道諸国除災)、観音像六体(来世六道衆生拔苦)。
阿弥陀堂の九体阿弥陀仏(来世往生)。
- ③ 平安から鎌倉「**身代り不動**」の伝承「大日如来の教令輪身」から「信者の身代り」
円仁、覚鑿(かくばん)、証空 園城寺修験道による民衆への伝承流布。
- ④ 鎌倉幕府や朝廷の**政敵調伏**祈願
建保元(1213)年、北条義時の和田義盛討伐 台密僧 **忠快**による不動法など
承久3(1221)年、承久の乱での後鳥羽上皇の幕府**調伏**祈願。その後、源頼経の五大堂建立北条執権**調伏**祈願 東密僧 定豪
後醍醐天皇の密教受戒と幕府**調伏**祈願 円珍の「赤不動」を守本尊とした
- ⑤ 修験道 山伏による、**民衆への現利功德**信仰の伝播「太平記」
役小角の奈良・平安からの山岳修行から、室町・戦国の山伏の組織化 (円珍 園城寺~聖護院本山派 熊野 / 空海~**聖宝** 醍醐寺当山派 金峯山)
神山信仰と山の守護神としての不動明王 **修験道の本尊**へ



東寺 不動明王



聖護院門跡
本尊 不動明王
平安時代 後期



「地蔵信仰」は、インドや中国と比較し我が国で最も信仰された菩薩である。その成立過程も、他の仏と違い民間から信仰拡大し、子供の守護神、地域の六地蔵として、生活に密着し多様な功德通称を持つ菩薩が誕生した。また、武家からも信仰も集め、「**将軍地蔵**」という独自の菩薩を創造した。その背景には古代からの他界・地域的な靈観や、他界と媒介する靈憑依の巫女の流れがある。

「地蔵菩薩」のサンスクリット名はクシチガルハで、「大地の包蔵」の意味である。この信仰を説く代表經典「**地蔵十輪經**」では、「此土**末法の教え**なり」として以下に功德を説く。「安忍の動かざることは台地の如く」地蔵菩薩は、耐え忍ぶこと大地のようにおおらかである。「よく善根を生じること**大地の徳**の如し」善根とは、元々持っている心の能力(真の人間性)。大地の徳とは、大地はさまざまな資源を蔵し、草木の生命を育てる。すなわち、大地はわれわれの生活の土台であり、あらゆるものを支える忍耐と堅固さがある。「失道の者を照らすことは明炬(めいきょ)の如し」お地蔵さまは松明のような明るさ(小さな灯り)で、迷った人の行く手(人生という道)を照らしてくれる。飲食・衣服・医療が充実し除病するとする。また「**地蔵本願經**」では、土地は豊饒、家宅は永安、長寿除災二十八種利益を説く。両經共通し冒頭「末法」にあるように釈迦入滅後、弥勒出現までの五濁悪世無仏世界で、六道輪廻する衆生救済を仏から任された菩薩で、地獄救済が地蔵菩薩の本願である。宝珠と錫杖を持つ比丘の姿は、衆生救済の応化身である声聞(せいもん)形で、その親しみやすい出家の姿は中国密教僧、不空による「地蔵儀軌」の影響がある。

地蔵菩薩は、元来、インド古来の**地神**信仰に由来するが、インドでは普及せず、中国には400年前後に伝来し、600年代、**玄奘**により両經が訳された。初見として唐時代の地蔵菩薩が竜門石窟などに残る。隋から唐に興った「三階教」宗派が唱える第三階としての「末法の時代観」が地蔵信仰を興隆させた。他宗の排斥により宋に滅亡するが、唐末に発祥した**道教の「十王思想**」と結合し民間には残存した。「**十王思想**」とは、地獄には亡者審判を行う閻羅王(閻魔)などの十王がおり、生前に十王を祀れば、死後、罪が軽減されるという信仰である。十王は死者の罪の多寡に鑑み、地獄へ送ったり、六道輪廻を司るなどの職掌を持ち畏怖された。閻魔もインドの古代神格で仏教に混入され、「地蔵十輪經」でも地獄で地蔵が閻魔に変化すると説かれている。そのため中国「十王思想」では地獄の支配者**閻魔の本地を地蔵**とした。

日本では、奈良時代「十輪經」は伝来していたが注目されず、平安時代前半も現世利益中心で同様に注目されなかった。寛和元年(985年)比叡山横川の恵心院に隠遁していた**源信**が著した「往生要集」が転機となる。その中では、極楽と地獄が対比され、生善無ければ**閻魔王**に裁かれるとした。また「十輪經」を引用し、阿弥陀や観音と並び「地蔵菩薩の救済」が描かれた。天台僧から疎外されていた源信は、同じく撰撰体制に疎外された貴族の念仏結社「観学会」「二十五三昧会」に影響し、その恐怖と救済が注目された。だが、当時はまだ、阿弥陀如来を中心とした観音・勢至・龍樹とともに「弥陀五尊」の一員として祀られたにすぎなかった。

しかし、その天台浄土教の流れをくむ「聖」から、「**六波羅密寺供花会**」などで結縁した**民衆**に地蔵信仰は伝播していた。平安時代末期の「**今昔物語集**」には、園城寺の**実叡**(じっけい)著書「**地蔵菩薩靈驗記**」の、1000年代中期の説話が引用され、地獄の苦を代行してくれる「地蔵菩薩の**代受苦信仰**」、つまり娑婆(自土)に留まり救済してくれると考えられた。経済的に仏像や寺院が作れず、そのため念仏以外の仏教的善行として物量的な諸行往生がかなわず、また観想による阿弥陀信仰が出来ない庶民に適合し普及した。すでに平安初期の「**日本靈異記**」で地蔵菩薩や閻魔王が登場し、当時は**現世善行**で浄土往生がかなうと考えられていた。しかし、この平安末期には、**前世悪業**で地獄に召される「**地獄必定**」が信じられ、唯一地蔵菩薩だけが救済蘇生できると信仰された。その背景には、天台浄土僧による因果応報の説法、「現世苦役は前世因縁が原因、現世功德なければ来世も地獄」という、絶望的な「**前世・現世・来世の輪廻観**」があった。

鎌倉初期には、来世浄土の役割は、法然の口称念仏によって、阿弥陀如来が主流となるが、明恵や貞慶ら旧仏教僧たちの反阿弥陀専修により、来世ではなく現世に寄り添い救済する地蔵菩薩が擁護された。同中期の弘安6(1283)年、**無住**道暁が編纂した仏教説話集『沙石集』(しゃせきしゅう)などでは、農耕生活にも関係し、「小さき僧」や「若い僧」、「田植女」に変身した地蔵の現世利益が強調された。

南北朝から室町にかけ、**武家**にも地蔵信仰が広がる。平安末「今昔物語集」には早くも武士の危惧を救う「矢取地蔵」が初見され「**太平記**」にも再掲、また壬生寺縄目地蔵の**身代り**説話も登場。**足利尊氏**は伝空海作の地蔵像を守り仏とし、好んで地蔵画像を与え、暦応2(1339)年創建の**等持院**には地蔵十万体を安置した。殺生で落ちる地獄からの救済を地蔵に願った。この時代に、「**勝軍地蔵**」が登場する。文保2(1318)年、中古天台教学の口伝である「溪嵐拾葉集」の中で、怨敵消散させる地蔵の「勝軍」利益が初出される。元亨2(1322)年、「元亨釈書(げんこうしゃくしょ)」には清水寺創建に関係し、坂上田村麻呂の戦勝祈願に応える、**延鎮**の「**勝軍地蔵**」「**毘沙門天**」の法力を記し、この時代の説話と造仏と考えられる。「元亨釈書」は、臨済宗の僧、虎関師錬(1278~1346年)による、漢文体で記された日本初の仏教通史。貞和4(1348)年、尊氏も勝軍地蔵を書写したとされる。**愛宕勝軍地蔵**の初見も室町時代の「愛宕地蔵之物語」である。愛宕明神は、のちに徳川幕府が江戸に勧請し、「武士の勝軍、庶民の防火」祈願が各地に広がる。

庶民では、西院にちなむ「賽(さい)ノ河原」で、夭折した子供の霊を鬼から守る「**子供の守護神**」としての地蔵信仰が広がる。これには集落の**清浄**を保つために**周縁埋葬**した弥生時代の葬送に起源し、古代民俗信仰の影響がある。古事記に登場する**黄泉比良坂**(よもつひらさか)は、死者の住むあの世(黄泉)とこの世(現世)を分かち境であり、「ひら」はアイヌ語で「崖」を意味する。また、賽(さい)は「塞(さえ)」に由来し「賽ノ河原」に繋がったともされる。子供の縁結びや運を定める「塞の神」とも呼ばれる「**道祖神信仰**」や、また「六道冥界と現世の境」で救済する地蔵の功德から、現実の「集落の境」に地蔵が祀られた。「都の境」である愛宕など京の四方山岳に祀られた塞神からも地蔵に繋がる。

子供と地蔵を結び付ける信仰は**日本特有**である。古代のシャマニズムでは、神が子供の言葉を借りて靈託する風習があり、東北地方では地蔵霊を子供に憑依させ、諸事相談をする「地蔵つけ」が近代まであった。**地蔵盆**や**水子地蔵**も、その様な民族信仰と仏教地蔵が習合した習俗・信仰である。室町時代には、薬師信仰に変わり**治病神**としての信仰が庶民に広がり、江戸時代には、延命・腹帯・子育て・子守・片目・油掛・しばら地蔵など治病利益を中心に流行神的に多様化した。

「法隆寺」平安時代初期 唯一の国宝指定の地蔵菩薩であり現存最古。
奈良県の大三轮神社の神宮寺・**大御輪寺**(おおみわでら)から明治時代に移された。同じく大御輪寺から移された「聖林寺」十一面観音立像も国宝指定。



奈良「十輪院」石仏龕(がん)平安~鎌倉時代過去の釈迦、現在の地蔵、未来の弥勒と過去、現在、未来の三世仏

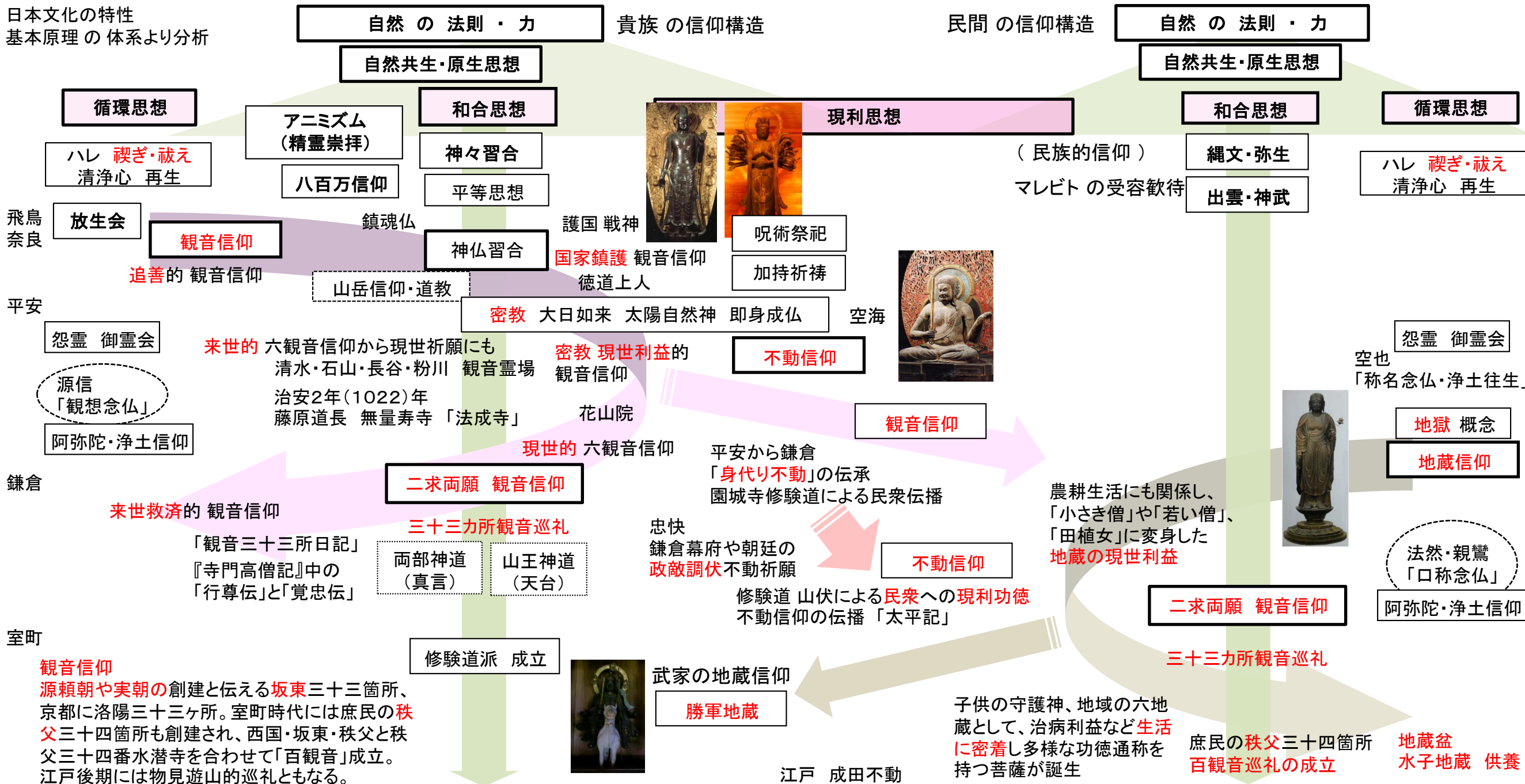
「六波羅蜜寺」木造地蔵菩薩立像 平安時代。六波羅地蔵堂に安置されていた。左手に頭髪を持ち、鬘掛(かつらかけ)地蔵と呼ばれ信仰。『**今昔物語集**』にもこの像の説話があり、古来著名な像。

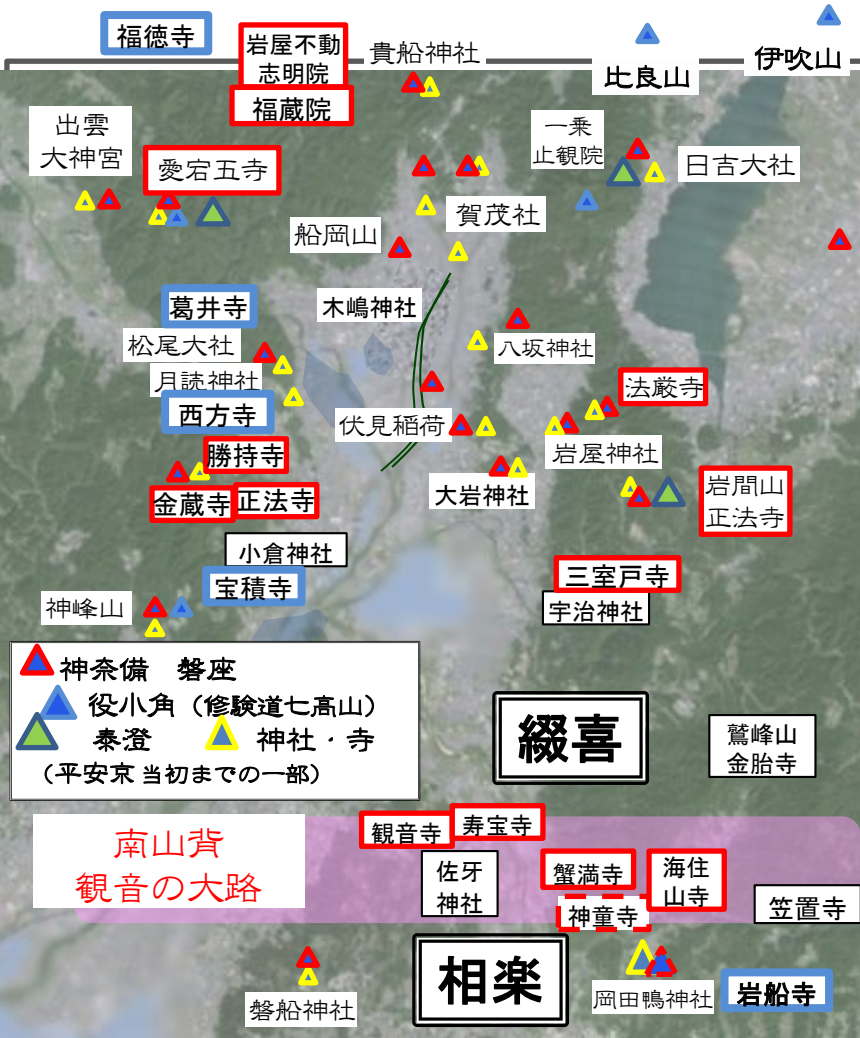
「金蔵寺」将軍地蔵(秘仏)愛宕白雲寺から明治に還座。愛宕信仰の本地

観音信仰は、聖徳太子の法華経信仰に起源する。法隆寺聖徳宗によると、三教義疏は「大乘一仏乗経と空観理解による平等」、つまり万人平等の成仏を説いた。三教の内、帰着尊重された法華義疏に登場する救済者が観音菩薩である。伝来した観音菩薩の功德と、我が国古代からの魂の継承循環信仰が結び、追善供養が行われた。法隆寺若草伽藍が、蘇我馬子に討たれた穴穂部皇子と宅部皇子、あるいは崇俊天皇の御陵とされる藤ノ木古墳の東方に創建され、さらに四天王寺の太子殿の側に同じく蘇我氏に討たれた物部守屋らの祠があるのも、その死者追善と太子の「和」の証である。法隆寺や和宗の四天王寺「救世観音」はその功德を解釈総合する呼称であり、北魏の「家」を中心とした死者追善から、国家レベルの救済に進化した。天智天皇は法相宗義淵に勅し、のちに観音霊場となる岡寺を創建、また山科法厳寺には観音像お手彫りの伝承がある。天武天皇朱鳥元年(686年)の日本書紀記事で、観音信仰の依拠經典が「法華経」ではなく「観世音経」として初見される。これらの史実を繋ぐと、聖徳太子に始まり、天智天皇を経て天武天皇に至る過程で、信仰の典拠収斂が伺える。

他界と現世の通交観念が日本民族的に底流し、死者追善と自身の来世往生を願う、しかし一方では、時代状況に応じて現世利益を願うが、最後は来世への継承循環意識に帰着両願した。この信仰変遷は、観音信仰に加えて、民間主導で武家にも波及した地藏信仰にも共通する我が国の信仰特性である。地藏信仰も同様に、我が国古代の魂に対する継承循環信仰を前提に、前世来世の他界観と現世体験に裏打ちされた地獄の概念によって成立。精霊憑依の巫女の流れから子供と関係し、神信仰を中心とした地域社会や黄泉の国との「境」を意識し、そこを祀る場所とした。他国と比較し際立って興隆・多様化した地藏菩薩への信仰もまた、農耕など日常に根つき治病利益を願うが、地藏盆や水子地藏を証として他界への意識へも回帰習合した。この信仰の歴史的潮流は、観音信仰における二求両願と同様である。不動信仰は、さらに我が国特有である。古代からの神山信仰と山で関係し、役小角に発祥・象徴される山岳修行に密教の尊格が適合し空海が抽出した。修験道山伏の活動で「貴族の不動」から「武家の不動」そして「民衆の不動」へと変遷。藤原道長の往生守護から政敵調伏、現世功德へと、祈願内容と信仰者が拡大した。地藏と比較し自然猛威や物怪、強力なものへの調伏祈願が主である。注目したいのは、三信仰が全て現世利益への祈願を媒介に、身分社会を超越して伝播したことだ。このことは逆に浄土信仰が循環的であるのに、貴族から民間に浸透したことが特殊との認識をもたらす。空也に前兆し法然・親鸞が大衆化させた口称念仏が、革新的で、往生という目的とは違い、口称という方法が現利的であったということだ。

日本文化の特性
基本原理の体系より分析





岩屋不動 金峯寺 志明院
 本尊 不動明王 真言宗
 飛鳥時代、650年、**役小角**が不動明王示験で草創。

南山代 観音 折りの境界
神童寺 本尊 蔵王権現像 真言宗
 山岳信仰霊地、**修験道の聖地**。飛鳥時代、596年、**聖徳太子**が建立。千手観世音菩薩像を刻み、大観世音教寺と号。675年**役小角**が鷲峯山で修行、本尊、**蔵王権現**を刻み神童教護国寺と称す。以上『北吉野山神童寺縁起』より
 722年、**泰澄**が登り、鷲峯山を北山上、山号北吉野山とした。平安時代初期(9世紀)、興福寺の願安が再興。以後、法相、真言兼学道場 役行者像、前鬼・後鬼像所蔵。一時は付近山一帯二十六坊が存在「所蔵絵図」。現本堂は応永13年(1406年)再建。

勝持寺
 本尊 薬師如来坐像 天台宗
 白鳳八年(679)、天武天皇の詔勅で**役小角**が開山。



福徳寺
 本尊は、薬師如来 現:曹洞宗
 和銅4年(711)**行基**、**法相宗**寺院開創。のち聖武天皇勅願で薬師七重塔が建立された弓削寺起源

葛井寺 (現 法輪寺)
 本尊 虚空蔵菩薩 現:真言宗
 和銅6年(713年)、**行基**が元明天皇の勅願により建立。

西方寺 (現 西芳寺)
 本尊 阿弥陀如来 現:臨済宗
 730年頃、聖武天皇勅願で**行基** **法相宗**「西方寺」とし、阿弥陀如来を本尊、観音菩薩と勢至菩薩を脇侍。発祥は**聖徳太子**別荘、太子作の阿弥陀如来像を祀るとの伝承。

三室戸寺 本尊 千手観音(秘仏) 本山修験宗
 宝亀元年(770年)光仁天皇勅願で大安寺の僧**行表**が志津川山中に観音菩薩を安置「御室戸寺」創建(寺伝)。光仁、花山、白河の離宮となり現名、室町中期に現地

大宝年間(701-704年) 文武天皇 勅 **役小角**、雲遍(**泰澄**上人) **愛宕開山**
 781年 光仁天皇 勅 **慶俊僧都**、**和氣清麻呂** 愛宕山中興 **月輪寺**など5寺 創建

600年代末、天武天皇や持統天皇も仏教を手厚く保護。
行基の時代 歴史背景 天智天皇7年(668年) - 天平21年(749年)
 天武期を境に役小角が、山代 山岳の修業拠点を発祥させた。
 700年代、文武、聖武期に 義淵、泰澄、良弁、行基らにより、信仰拠点が北進。
 平城京(710年)、奈良時代には、仏教によって災厄(飢餓・疫病)や戦乱を防ぎ国が安定するという『鎮護国家』の思想に基づき、聖武天皇は741年『国分寺・国分尼寺建立の詔』 743年5月『墾田永年私財法』 同年10月盧舎那仏『大仏造願の詔』 優婆塞行基集団が貢献。749年聖武天皇に菩薩戒を受けた行基没。延鎮(法相宗)による「山科、法蔵寺」と、慶俊(法相、華嚴、真言宗)による「愛宕、五寺」開山で、山代から山背に向けた山岳での信仰拠点が整う。その最後、最澄の山岳修業「一乗止観院」から、山城の地に、平安仏教が展開する。

観音寺 山号 長長山 木心乾漆十一面観音立像(国宝) 真言宗
 白鳳(7世紀後半)、天武天皇勅願法相宗**義淵**創建、親山寺が起源
 天平16(744)年 東大寺初代別当の**良弁**が中興。東大寺の実忠が入寺、宝亀9年(778年)五重塔。古代・中世には普賢寺と呼ばれた。
 延暦13年(794年)以後火災多、藤原氏が都度復興、同氏衰退ともに寺運も衰えた。永禄8年(1565年)の焼失後は大御堂一宇に。

蟹満寺 本尊 釈迦如来(国宝) 真言宗
 飛鳥時代後期(7世紀末)創建と推定、**当初本尊は観音菩薩**(蟹の報恩譚は観音霊験説、山号の普門山も法華經の観世音菩薩普門品に因む、寺入口付近に観音堂。正徳元年(1711年)智積院の僧亮範が再興。今昔物語集等記載の「蟹の恩返し」伝承で有名。所在地名、綺田(かばた)は、古くは「カニハタ」「カムハタ」と読まれ、「蟹幡」「加波多」と表記。

寿宝寺 本尊 十一面千手千眼観音立像 真言宗
 慶雲元年(704)創建、昔は「山本の大寺」と称し七堂伽藍が備って和泉川(現在の木津川)ぞいの大寺。十一面千手観音立像は、大坂河内の「葛井寺」と奈良「東招提寺」の観音とともに三大傑作。四十手に持ち物、扇状複層手は眼描。

「神仏習合」発祥
 752年、聖武天皇・光明皇后(藤原光明子)が東大寺の大仏(盧舎那仏)開眼供養。南都六宗は国家を安定させるために信仰する『鎮護仏教』としての性格が強い。先立つ749年、宇佐から八幡神を勧請。八幡神と仏は、宇佐での放生以来、補完関係にある。神に祈願し勝利した相手、敗者の霊を鎮魂、成仏させるために仏、神宮寺を建立した。また神には仏の守護を求めた。「東大寺」の鎮守社として「手向山八幡宮」が残る。777年八幡神は神で初の出家、菩薩へ

鷲峰山 金胎寺 本尊 弥勒菩薩 真言宗
 天武天皇白鳳4年(675年)、**役小角**開基。『興福寺官務牒疏』(嘉吉元年・1441年)養老6年(722年)、**泰澄**が再興。平城京鬼門封じとし、聖武天皇により堂建立され勅願寺に。大同2年(807年)には興福寺の願安が再興。標高685m鷲峰山(じゅぶざん)山頂付近一帯が境内。

笠置寺 本尊 巨大弥勒磨崖仏 真言宗
 白鳳11年(682年)、**大海人皇子(天武天皇)**の創建『笠置寺縁起』 一方、『今昔物語集』巻11 では笠置の地名起源と弥勒磨崖仏の由来を天智天皇の子、大友皇子とする。巨石群は修業場。東大寺や興福寺など関係、**貞慶**も住した。後醍醐天皇拳兵(元弘の乱)舞台

岩船寺 本尊 阿弥陀如来 真言律宗
 天平元年(729年) 聖武天皇の発願で**行基** 建立の阿弥陀堂、大同元年(806)空海が善根寺(鳴河寺)を建立。甥、弟子の智泉が、嵯峨天皇皇子誕生を祈願し報恩院建立。南方鳴川付近から移転その後、岩船寺と称す。

海住山寺(かいじゅうせんじ) 本尊 十一面観音 真言宗
 天平7年(735年)、聖武天皇の勅願により**良弁**(奈良東大寺の初代別当)開山藤尾山 観音寺という寺号で開創。平城京鬼門。当初の名は観音寺。関連史実としては天平15年(743年)大仏建立詔。鎌倉時代、戒律復興、法相教学を確立した**解脱房貞慶**が 中興、海住山寺と命名。



山背 山岳へ

南山背

金蔵寺 本尊 十一面千手観音菩薩 天台宗
 養老二年(718)、**元正天皇**の勅で隆豊禪師が**法相宗**寺院として開創 「金蔵寺略縁起」。

岩間山 正法寺 本尊 金銅千手観音立像 真言宗
 養老六年(722)、**泰澄**、**千手観音像**を刻み、**元正天皇**の**御念持仏**をその胎内に納め本尊。

宝積寺「宝寺」本尊 十一面観音 真言宗
 724年、**聖武天皇**命で勅願寺にと**行基** 開基。天皇が夢で竜神より授かる「打出」「小槌」を祀る「宝寺」の別名、大黒天寶寺、天王山中腹。

西山正法寺 本尊 千手観音 真言宗
 天平年間729~749年創建 唐渡来、鑑真高弟、**智威大徳**が修行した坊に始まる。延暦年間(782年~806年)最澄が寺整備、

高山寺 本尊 釈迦如来 真言宗
 宝亀5年(774)、光仁天皇の勅願。古代より**山岳修行**の適地として「神願寺」「都賀尾坊」と称す。

一乗止観院 伝教大師最澄が788年(延暦7年)に、一乗止観院という草庵。本尊は最澄が一刀三礼して刻んだ薬師瑠璃光如来

福蔵院 本尊 阿弥陀如来 浄土宗
 792年、最澄の門弟・**空忍**(橘軍氏)により堂宇起源。阿弥陀三尊を安置、天台宗、比叡山三千坊の一つ

山代の信仰

継承される山岳の仏 修験道と観音信仰

福德寺 本尊は、薬師如来 曹洞宗
和銅4年(711) 聖武天皇の勅願で**行基**開創。
七重の塔が建立され、弓削道鏡が伽藍を整備し
当初は弓削寺と称された。
その後、孝謙天皇から福德護国寺の寺号を賜っ
ている。焼失再建後、天和元年(1681)曹洞宗
寺院として再興。明治15年(1882)に福德寺とされ
る。本尊は、薬師如来。境内には、弓削道鏡塚、
樹齢380年「かすみ桜」。

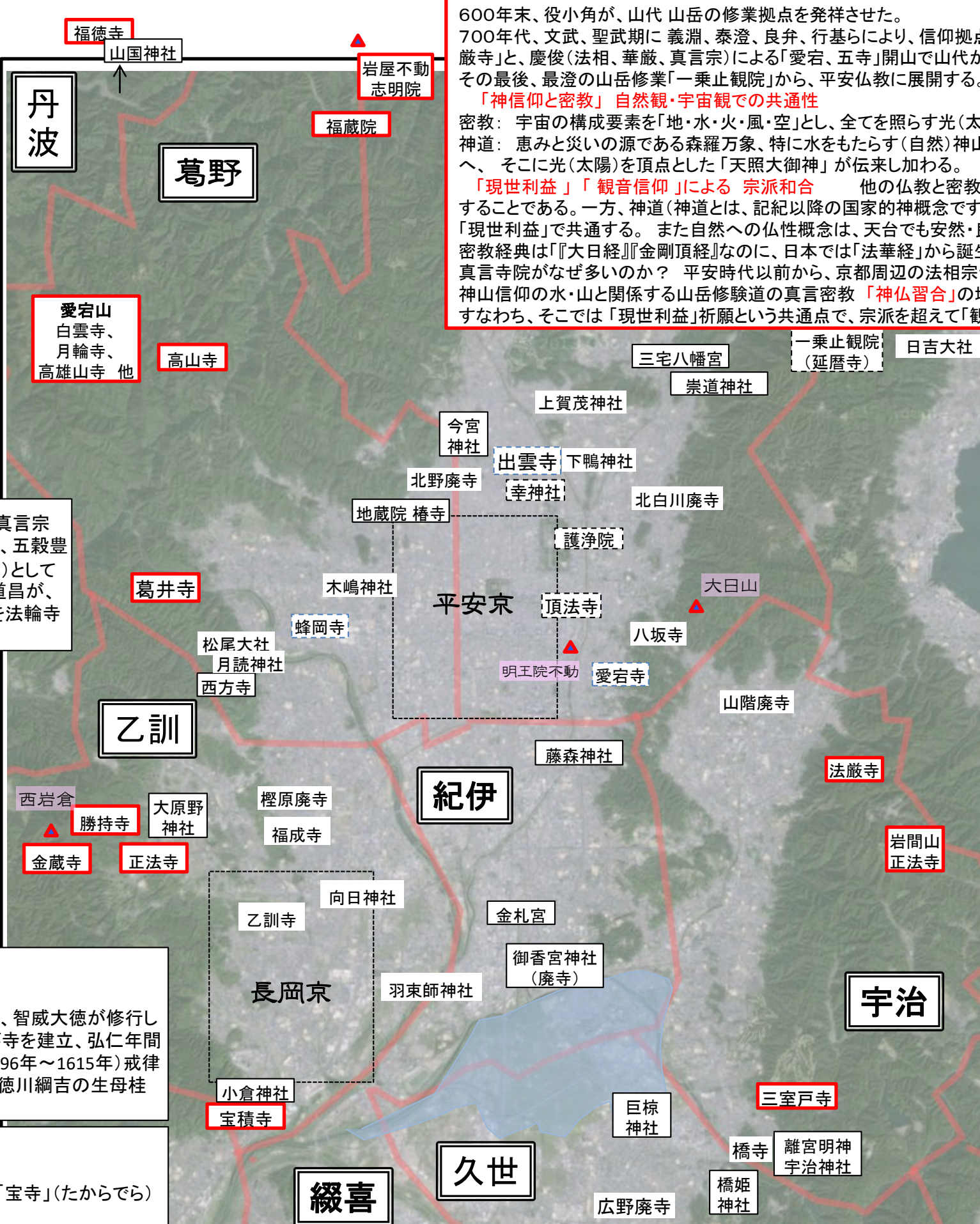
高山寺 本尊 釈迦如来 真言宗
宝亀5年(774)、光仁天皇の勅願で建立。古代
より**山岳修行**の適地として「神願寺都賀尾坊」と
称す。弘仁5年(814)「柵尾十無尽院(じゅうむ
じんいん)と改称。鎌倉時代、神護寺の上覚の
弟子、華嚴宗の復興に努めた明恵上人(のち
高弁)が、建永元年(1206年)後鳥羽上皇から
柵尾の地と、寺名由来の「日出先照高山之寺」
の額を下賜、現・高山寺の創立。鎌倉初期に
栄西が、南宋より明恵に伝来、「本茶」とし天皇
へ献茶「日本最古」と伝える茶園。

葛井寺 法輪寺 本尊 虚空蔵菩薩 真言宗
和銅6年(713年)、**行基**が元明天皇の勅願により、五穀豊
穡、産業の興隆を祈願する葛井寺(かどのいでら)として
建立。天長6年(829年)、空海の弟子にあたる道昌が、
虚空蔵菩薩像を安置、貞観10年(868年)、寺号を法輪寺
と称す。

勝持寺 (しょうじ) 本尊 薬師如来坐像 天台宗
白鳳八年(679)、天武天皇の詔勅で**役小角**
が開山。延暦十年(791)桓武天皇の勅願で空
海が再興、のち最澄が山王権現の神託で薬師
仏を彫り本尊に。承和五年(838)仁明天皇の
勅命で49院の大伽藍となる。当初の法相宗か
ら天台宗に。室町時代、**足利尊氏**が庇護、応仁
の乱で三門以外焼失するが天正年間に復興。
「**花の寺**」の由来は、西行が保延六年(1140)
当寺で出家、桜植樹。「西行桜」は能楽に、
謡曲「小塩」。足利尊氏・義満も桜宴を催した。

西山 正法寺 本尊 **千手観音** 真言宗
天平年間729~749年創建 唐渡来、鑑真高弟、智威大徳が修行し
た坊に始まる。延暦年間(782年~806年)最澄が寺を建立、弘仁年間
(810年~824年)空海が入寺伝承。慶長年間(1596年~1615年)戒律
の志徹が復興、大原野出身で江戸幕府5代将軍徳川綱吉の生母桂
昌院の帰依を得た。

宝積寺「宝寺」 本尊 **十一面観音** 真言宗
724年、聖武天皇命で勅願寺にと**行基**開基。
天皇が夢で竜神より授かる「打出」「小槌」を祀る「宝寺」(たからでら)
の別名、大黒天宝寺、天王山中腹。



600年末、役小角が、山代 山岳の修業拠点を発祥させた。
700年代、文武、聖武期に 義淵、泰澄、良弁、行基らにより、信仰拠点が北進。延鎮(法相宗)による「山科、法
嚴寺」と、慶俊(法相、華嚴、真言宗)による「愛宕、五寺」開山で山代から山背にかけた山岳での信仰拠点が整う。
その最後、最澄の山岳修業「一乗止観院」から、平安仏教に展開する。
「**神信仰と密教**」 **自然観・宇宙観での共通性**
密教：宇宙の構成要素を「地・水・火・風・空」とし、全てを照らす光(太陽)、「大日如来」を宇宙の真理(根本)。
神道：恵みと災いの源である森羅万象、特に水をもたらす(自然)神山信仰が起源。地域・氏族守護神(氏神)
へ、そこに光(太陽)を頂点とした「天照大御神」が伝来し加わる。
「**現世利益**」「**観音信仰**」による **宗派和合** 他の仏教と密教との違いは、「現世利益」即身成仏を目的と
することである。一方、神道(神道とは、記紀以降の国家的神概念ですが)も本来は自然を畏敬し恩恵を願うもの。
「現世利益」で共通する。また自然への仏性概念は、天台でも安然・良源「草木国土悉皆成仏」に至る。では、
密教経典は『大日経』『金剛頂経』なのに、日本では「法華経」から誕生した「観音経」 観音菩薩をご本尊とする
真言寺院がなぜ多いのか？ 平安時代以前から、京都周辺の法相宗寺院でも同様。
神山信仰の水・山と関係する山岳修験道の真言密教「**神仏習合**」の地では、その傾向が顕著。
すなわち、そこでは「現世利益」祈願という共通点で、宗派を超えて「観音信仰」が発祥した。

岩屋不動 金峯寺 志明院 本尊 不動明王 真言宗
飛鳥時代650年**役小角** 不動明王示験で草創。
平安時代、829年、第53代・淳和天皇の勅願
により、弘法大師(空海)のために堂宇を建立
し、鎮護国家の祈禱を行ったという。また、空
海が天皇の命により再興したともいう。第59
代・宇多天皇(867-931)在位887-897)により、
王城地の乾(北西)の勅願所に。「縁起」

福蔵院 本尊 阿弥陀如来 浄土宗
雲ヶ畑の岩屋橋の南に帰命山無量寿寺、
福蔵院(ふくぞういん)はある。
792年、最澄の門弟**空忍**(橘軍氏)によ
り堂宇創建に起源。阿弥陀三尊を安置、
天台宗、比叡山三千坊の一つ。
室町時代、1473年、室町幕府第9代将
軍・足利義尚(1465-1489)の命により浄土
宗に改宗する。安土・桃山時代、天正年
間(1573-1592) 観音堂安置の十一面観音
像を石清水八幡宮・豊蔵坊より遷す。豊臣
秀吉の守護仏だった。

岩間山 正法寺 真言宗
本尊 **金銅千手観音立像** 西国三十三所
泰澄大師が**元正天皇**の三十三歳の
大厄の病を法力で治した褒美として建立し
たことに始まる、元正天皇の勅願寺院。
泰澄は、養老元年(717)白山を開山。
養老六年(722)、元正天皇の病氣平癒
祈願を成満した**泰澄**は、霊地を求め岩間
山を訪れた折、桂の大樹より千手陀羅尼
を感得し、その桂の木で等身の**千手観音
像**を刻み、**元正天皇**の御念持仏をその
胎内に納め祀り本尊とした。
後白河・後宇多・正親町(おおぎまち)天
皇など、 平安~安土桃山時代には、
歴代天皇の尊崇厚く熊野、吉野に並ぶ、
日本三大霊場の一として隆盛。



★月輪寺 略縁起

藤原京
大宝年間
(701 - 704年)

役小角(修験道の開祖)、雲遍(後の秦澄上人)文武天皇の命によって朝日峰(今の愛宕神社の地)に神廟を営んだ。これが愛宕権現の始まり。また、「愛宕五岳」と呼ばれる五つの峰を開いたという。「愛宕山神道縁起」文武天皇(もんむ、683-707)の勅願所になる。秦澄は、越智山にのぼり、「十一面観音」を念じて修行を積み、大宝2年(702年)文武天皇から鎮護国家の法師に任じられている。

山岳 修験道
権現・観音

▲ 役小角 加茂氏(賀茂氏) 67才頃

(えんのおづの/おづぬ/おつの、舒明天皇6年(634年)伝 - 大宝元年6月7日(701年7月16日)伝) 飛鳥時代から奈良時代の呪術者である。姓は君。修験道の開祖とされている。後の平安時代に山岳信仰の隆盛と共に、役行者(えんのぎょうじゃ)と呼ばれるようになった。実在の人物だが、伝えられる人物像は後世の伝説によるところが大きい。天河大弁財天社や大峯山龍泉寺など多くの修験道の霊場に、役行者を開祖としていたり、修行の地としたという伝承がある。役氏(役君)は三輪氏族に属する地祇(ちぎ)系氏族で、加茂氏(賀茂氏)から出た氏族であることから、加茂役君(賀茂役君)とも呼ばれる。役民を管掌した一族であったために、「役」の字をもって氏としたという。この氏族は大和国・河内国に多く分布していたとされる。大和国葛城上郡茅原(現在の奈良県御所市茅原)に生まれる。生誕の地とされる場所には、吉祥草寺が建立されている。17歳の時に元興寺で孔雀明王の呪法を学んだ。その後、葛城山(葛城山。現在の金剛山・大和葛城山)で山岳修行を行い、熊野や大峰(大峯)の山々で修行を重ね、吉野の金峯山で金剛蔵王大権現を感得し、修験道の基礎を築いた。

畿内五国 山岳ノ図

山城、大和、河内、和泉、摂津



修験道七高山 近畿地方にある七つの霊山。

比叡山・比良山・伊吹山・愛宕山・神峰山(かぶせん)・金峰山(きんぶせん)・葛城山 あるいは高野山。

愛宕山は修験道七高山の一つとされ、「伊勢へ七たび 熊野へ三たび 愛宕まいり は月まいり」と言われるほど愛宕山は修験道場として栄え、愛宕山の修験者は「愛宕聖」や「清滝川聖」とも呼ばれた。

● 秦澄 越前秦氏 20才前後

奈良時代の修験道の僧。加賀国(当時越前国)白山を開山したと伝えられる。越の大徳と称された。秦澄の父は、秦氏の 秦角於だとする説がある。白山大鏡第二神代巻初一に「越前国足羽南郡阿佐宇津渡守、爲 秦角於父生、古志路行者秦泰澄大徳是也」とある。『秦氏の研究 -日本の文化と信仰に深く関与した渡来集団の研究-』(大和岩雄 著/大和書房) 秦澄の生まれた足羽郡に秦氏がいたことを指摘し、また、秦氏の山岳信仰の山である愛宕山の開基が秦澄であり、愛宕山を「白山」ということをあげて秦澄が秦氏の出であることを主張されている。14歳の時出家し、法澄と名乗る。越智山にのぼり、十一面観音を念じて修行を積んだ。大宝2年(702年)文武天皇から鎮護国家の法師に任じられ、その後養老元年(717年)越前国の白山にのぼり妙理大菩薩を感得した。各地にて仏教の布教活動を行う。養老6年元正天皇の病氣平癒を祈願し、その功により神融禪師(じんゆうぜんじ)の号を賜った。天平9年(737年)に流行した疱瘡を収束させた功により秦澄の戒名と大和尚位を賜ったと伝えられる。『秦澄和尚伝記』 浄瑠璃や文楽で「誓いの言葉」として使われる「愛宕白山」は、愛宕権現と白山権現を指す。白山権現を祀る寺院 廃仏毀釈を免れて現在でも 白山権現 を祀る寺院が存在する。深雪山 上醍醐寺 書写山 円教寺(兵庫県姫路市) 自生山 那谷寺(なただら 石川県小松市) 養老元年(717年)秦澄法師が、越前国江沼郡に千手観音を安置したのが始まり 愛宕権現 については、後述。日本の自衛隊のイージス艦「あたご」ネーミングに使われている。

この時期、愛宕山麓、嵯峨野周辺では、秦澄と同じ秦氏の活動が活発となる。松尾大社 縁起(ホームページ)より [磐座祭祀] 当社の御祭神“大山咋神”は、当社社殿建立の飛鳥時代の頃に、初めてこの場所に祀られたものではなく、それ以前の太古の昔よりこの地方一帯に住んでいた住民が、松尾山の山霊を頂上に近い大杉谷の上部の磐座(いわくら)に祀って、生活の守護神として尊崇。 [秦氏来住] 五・六世紀の頃、近年の歴史研究では朝鮮新羅の豪族とされている 秦(はた)氏の大集団が、朝廷の招きによってこの地方に来住、その首長は松尾山の神を同族の総氏神として仰ぎ開拓。 [秦氏の開拓] [大堰と用水路] [酒造神] [平安京誘引] 時代と共に経済力と工業力を掌握した秦氏は、大和時代以後朝廷の財務官吏として活躍し、奈良時代の政治が行き詰まると、長岡京へ、次に平安京へ遷都を誘引したのも秦氏の膨大な勢力によるものであったことが定説となっております。 [神殿の造営] 文武天皇の大宝元年(西暦701)に秦忌寸都理(はたのいみきとり)が勅命を奉じて、山麓の現在地に神殿を営み、山上の磐座の神霊をこの社殿に移し、その女の知満留女(ちまるめ)を斎女として奉仕し、この子孫が明治初年まで当社の幹部神職を勤めた秦氏(松尾・東・南とも称した)です。

★ 月輪寺には、愛宕山白雲寺から分霊された将軍地蔵を祀る「権現堂」がある。

愛宕権現は、愛宕山の山岳信仰と修験道が融合した神仏習合の神号であり、勝軍地蔵を本地仏とし、垂迹したイザナミを権現とする。軍神として武士から信仰を集めた。

(白雲寺は勝軍地蔵(将軍地蔵)を本尊としていた)

明治の神仏分離により、白雲寺は廃絶されて愛宕神社になり、勝軍地蔵は京都市西京区大原野の金蔵寺に移されたが、月輪寺の権現堂(将軍地蔵)は、そのまま継承されている。

愛宕山白雲寺、及び愛宕山全山について

神仏分離・廃仏毀釈が行われる以前は、愛宕山白雲寺から勧請されて全国の愛宕社で祀られた。

塞神信仰や陰陽道の影響から、愛宕山は平安京の北西(乾)に位置する守護神ともされた。

愛宕修験では天狗信仰が盛んだったため、愛宕太郎坊天狗も祀った。

▲ 金蔵寺 (こんぞうじ) 標高は360m。 創建当初は、法相宗

山号を西岩倉山と号し、天台宗に属する。寺伝によれば、養老二年(718)、元正天皇の勅によって隆豊禪師が開創し、聖武天皇は勅額を賜り經典を書写して埋め、密教に適う寺として、「金剛界と胎蔵界」から命名。桓武天皇は平安京遷都に当たり王城鎮護のため經典を埋め西岩倉山と号するに至ったと伝えられる。

また、隆豊禪師の開創に当たり、向日町にある向日明神の神助があり、明神の手引きで楠木で千手観音を刻んだことが「金蔵寺略縁起」に見えている。平安時代以後、当寺は西山の名刹(めいさつ)として栄えた。全盛期には、官寺となり無量寿院といって白河天皇建立、金箔のお堂があり、市内からも光って見えたため、西の金閣と呼ばれた。応仁の乱など戦乱で建物はすべて焼失、歴史を伝える古文書、記録も失われた。

現在の建物は、元禄四年(1691)、将軍綱吉の母、桂昌院により再建されたもの

本堂には十一面千手観音像を安置する。背後には、明治初年に愛宕山より本尊、勝軍地蔵像を移して祠る「愛宕大権現堂」、山内には当寺の伝承にまつわる遺跡が多く、本堂の北、長嘯亭からは京都市内が一望の下に見下ろされる。

桂昌院は、京都・堀川の八百屋、仁右衛門の娘で名前は玉子。五代将軍綱吉の母幼い頃、度々父に連れられた金蔵寺復興に尽くした。宝永2年(1705)、79歳で亡くなり遺骸は増上寺に葬られたが、金蔵寺では、遺髪を桂昌院廟所に納めて祀り、報恩供養している。(剣力タバミ紋)



御前立



愛宕山白雲寺、清水寺、そして、比叡山延暦寺にも将軍地蔵は存在した。平安京創建との関連か？

清水寺の将軍地蔵
本堂最奥の内々陣 須弥壇上の三基の厨子内 御本尊の十一面(四十二臂)千手観音
脇侍 勝軍地蔵菩薩 (右手に剣と左手に錫杖) 毘沙門天
錫杖: 煩惱を除去し智慧を得る、武器としても用いる。
清水寺仁王門は、愛宕山を正面としている、
(将軍地蔵、坂上氏と和気氏との関係を連想)
金蔵寺、その麓の勝持寺も、清水寺と同じく創建当初は法相宗。
室生寺と同じく元法相宗、役小角の開山の伝承。地理的には、金蔵寺含む全山、法相宗・役小角が起源と考えた方が合理的である。
清水寺の起源と関係する 山科「牛尾山法厳寺」も、山岳、法相宗、観音信仰。

延暦寺滋賀院 本堂



鎌倉時代に将来された蓮華三昧経に説かれて居る勝軍地蔵は、足利尊氏が深く信仰して以来、足利氏歴代の将軍はいふ迄もなく、一般の武家社会に広く行はれ、吉野、室町、戦国時代を通じて、熱烈に尊崇信仰される様になった。その信仰の態度に我々は二つの場合を見ることが出来る。即ち一は、勝軍地蔵の名の示す如く、軍陣に臨みて之を信仰すれば、向ふ所敵なく、譬へば秋草の風に靡くが如しと言はれて居る所の、戦陣に際しての靈験に依つてであり、足利義尚や、細川高国、上杉謙信の戦勝祈願の態度の中に之を見ることが出来る。

その二は、かゝる勝軍地蔵の靈威を発展せしめて、その信仰に依つて、天下国家の安全静謐を祈り、或はその居城の安全を祈らんとするものである。かゝる場合として、足利義詮以下足利家歴代勝軍が、真言宗の寺院に命じて、勝軍地蔵法を勤修して、天下静謐を祈らしめた 森末義彰氏「勝軍地蔵考」戦国時代末期、本能寺討ち入り前の、愛宕、月輪寺詣でに繋がる。

参考画像 愛宕権現図 長谷川等伯



室町末期~桃山初期 石川県七尾美術館所蔵



清水寺仁王門は愛宕山を、真正面に見つめる 田村氏と和気氏の関係か？ 観音繋がり？



平安時代の神仏について、注目すべき事が三点ある。神仏役割分担の大衆化、神の二つの役割、仏への現利的期待から来世浄土の循環的期待への変遷、である。

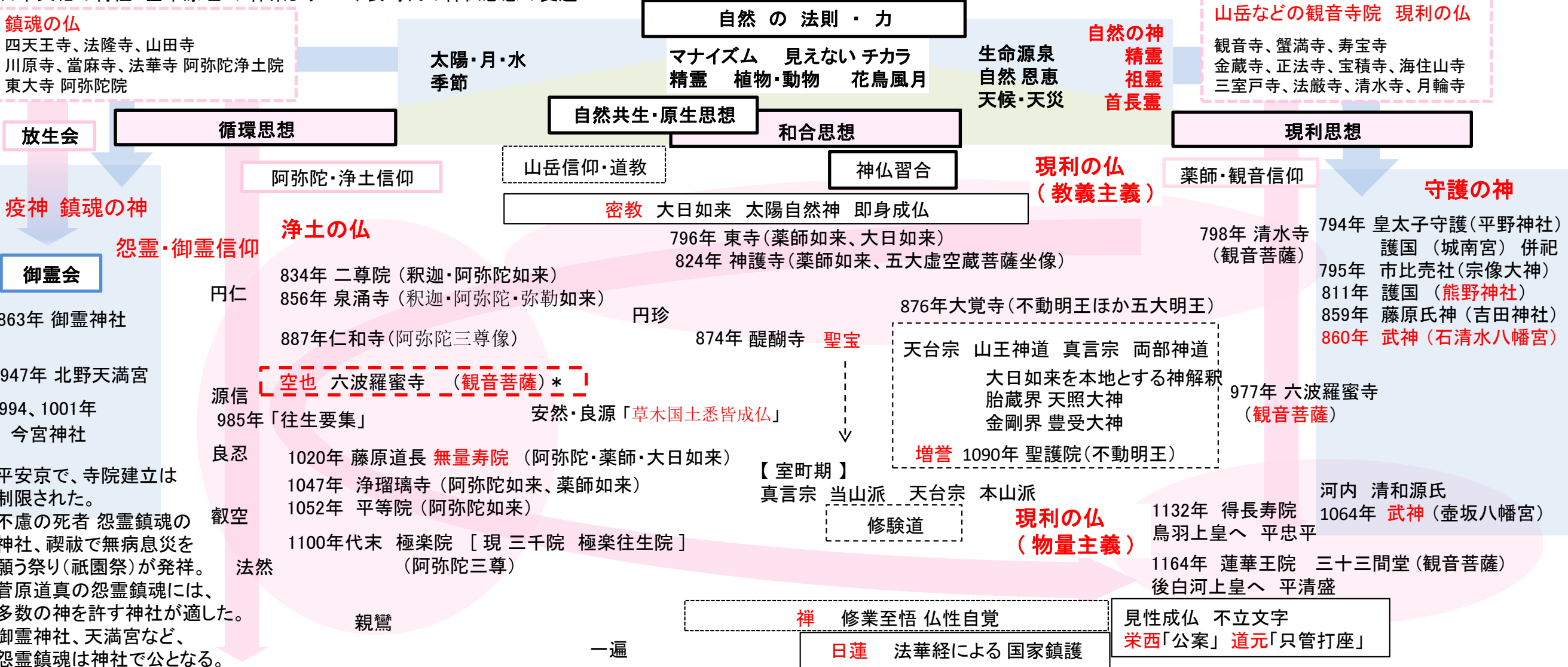
- ① 神仏役割分担の大衆化 神については、古代からの自然への畏敬、精霊、祖霊、皇祖など首長霊と、縄文・弥生・古墳時代にかけて変遷した。その信仰を背景にしつつ、政治的な機能は飛鳥から平城にかけて、唐の儒教・法家を教授し律令制度に役割させていく。その間、三韓征伐の住吉神、隼人の乱の八幡神と、神は**武神**に比重した。そして仏には身近な現利と来世浄土を願った。
- ② 神の二つの役割 平安京に至り、武神として護国守護の役割を担う。そしてもうひとつの役割である鎮魂、飛鳥・平城では、仏の役割とされ争乱の死者を弔ったが、その魂の循環思想に基づいた役割は神に託された。遷都にまつわる**怨霊**に対しては、より強い荒魂が相当し、神の多様性や寺院創建の規制も要因となり、御霊神社などが創建された。このように、守護と鎮魂の二つの役割は、平安京遷都間もない頃に創建された神社や御霊会に明らかである。
- ③ 仏への現利的期待から来世浄土の循環的期待への変遷 「**現利思想**」の密教や観音信仰は平城の時代、すでに発祥していた。経典として「大日経」「十一面神呪心経」などが玄昉たちにより招来され、主に私度僧たちの山岳修験の活動や、神仏習合として神宮寺創建にも関わってきた。平安に至り、真言の空海や天台の円仁により密教は体系され平安初期の寺院に影響した。しかし、平安の都などで繰り返す、疫病・災害は道真の怨霊信仰を庶民に浸透、さらに争乱は、心の安住を来世に求め、浄土への期待が高まった。すでに経典は「阿弥陀経」「無量寿経」「観無量寿経」と解釈され、**他者に対する鎮魂**のための阿弥陀信仰は飛鳥・平城から存在した。平安京では、**自らの成仏を願う仏**として、より役割を挙げ、魂に対する「**循環思想**」は、仏が受け止めた。

浄土への方法は、平安から鎌倉にかけ、源信「往生要集」の「観想念仏」から、より方便しやすい「口称念仏」に変遷する。そして、いち早く平安で「口称念仏」を発祥した人が空也である。その**空也**は、観音菩薩に願い、西光寺のちの六波羅密寺に祀った。**なぜ、阿弥陀如来ではないのか？**すでに飛鳥・平城から阿弥陀如来は祀られている。

空也は清水寺や長谷寺の観音信仰が篤かった。その裏付けは、両観音に東北鎮圧を祈願した坂上田村麻呂、彼と親交のあった東大寺の徳一が創建した東北の観音信仰拠点、会津の恵隆寺や恵日寺などに残る空也の伝承にある。彼はここを拠点に東北地方に布教したという。また「空也上人絵詞伝」「河海抄」などには、清水寺の観音に念仏観化を祈願、感得し、愛宕**月輪寺**で「多年鍊行」、洛中での**念仏**を始めたと記される。そして、清水寺は同じ法相宗の興福寺内浄名院での**空晴**との交流に繋がり、その院一隅の菩提院には玄昉招来の膨大な経典、「十一面神呪心経」などがあつた。状況は以上だが、大事な事は空也の思いで、浄土に坐して待つ阿弥陀如来より、立像としての観音菩薩を選択したのであろう。なぜなら、空也は、洛中市にあり、行動、実践を重んじたからだ。**六波羅密寺**に伝わる観音菩薩は、蓮花や数珠を持たず、如来の如く右手を垂れ左手を胸脇に挙げ、親指と中指の先端を接する**来迎引接印**を結ぶ。観音の姿で来迎した阿弥陀如来かもしれない。月輪寺に伝わる空也も遊行立像。天曆4年(950年)より玄奘三蔵の金字「**大般若経**」書写を行う。



日本文化の特性 基本原理の体系より 平安時代の神仏思想の変遷



平安京で、寺院建立は制限された。不慮の死者 怨霊鎮魂の神社、禊祓で無病息災を願う祭り(祇園祭)が発祥。菅原道真の怨霊鎮魂には、多数の神を許す神社が適した。御霊神社、天満宮など、怨霊鎮魂は神社で公となる。

日本文化 と 泰澄

司馬遼太郎の日本文化論 相対総和と天然無常

司馬遼太郎氏の、日本文化に対する全体を、初期から晩年まで、以下の三著書からつかみたい。前半は、記者時代の経験から美術的関心に傾向するが、後半は、仏教への見識が高まる。一貫して、自然と密接する古代的な神道を日本文化の基層におき、その多神教性は、宗教による統治となじまない、とする。「**たおやめぶり**」にある柔軟性を持った受容と抵抗は、質素な「銀」を基調とする。時に流行る派手な「金」は「ますらおぶり」に通じ、時代的にそれら間の「振り子」的作用、傾向を指摘する。それらのゆらぎは、当方文化構造の両極の間で示したことでもある。

『**日本人と日本文化**』は、1972年の司馬遼太郎氏とドナルド・キーン氏との対談である。司馬遼太郎氏(1923—1996)は、1961年(昭和36年)、39歳で産経新聞社を退職し執筆に専念、この頃は、中世から幕末・明治を舞台とした時代小説の作家としてすでに確立していた。50歳を目前に1971年から『街道をゆく』の連載を始めた時期にあたる。対談の内、特に日本人、日本文化として語られている部分を列記する。

外国文化の受け入れ方について、キーン氏はあらゆる面に外国文化に対する愛と憎、受容と抵抗の関係があると前置きし、『源氏物語』の「**唐(から)めきたり**」の言葉は、その「抵抗」(批判)と指摘した。司馬氏は、それだけではなく「受容」的に「いいこと」も示すとし、それが「**二つの(間の)振り子**」と提起した。そして、日本との対比として朝鮮半島の新羅末期から李朝(李氏朝鮮)を置く。そこでは、1400年頃～1900年頃までの約500年間の全面的な中国化を、儒教を主とした政治や文学、名前で例示し、それが自国語による文学欠乏の原因となったとする。

キーン氏は、平安時代初期、800年代の中国文学(漢文・漢詩)興隆を乗り越え、日本特有な宮廷女性の高い地位によって、女流文学と「**かな文字**」が成立した、とする。司馬氏は、『土佐日記』を事例に、漢詩による感情表現の不自由さを、「かな」による大和ことばで解決した、と同意した。

感情表現の産物「かな」に内在する「**たおやめぶり**」について、司馬氏は、以下の通り述べる。「典型的に日本人が「たおやめぶり」だと言っても、これはけっして日本人として卑下するとか、それを困ったことだと言おうとしているのではないのです。節操のある人、そしてほんとうに勇気のある人というのは、案外「たおやめぶり」の人から出ることが多くて、つまり自分の意見なり、自分の立場なり、あるいは正しいと思ったことを守りぬくという点で、「ますらおぶり」の人はくるっとどこかに転換してしまっているのに、「たおやめぶり」の人は頑固である、ということがある。」(P31)

新しい世界、日本をつくる気概に燃えた奈良時代や、夏目漱石を例に明治文学初期の「ますらおぶり」の一時期があった。しかし、その時期を過ぎると、余裕を取り戻し、前述の平安時代や正岡子規の「たおやめぶり」への**回帰**があることで、二人の見解は一致する。

両者は、「仏教の日本化」を合意した上で、空海について、司馬氏は特に論理的完成に、キーン氏は密教美術や国際性に注目した。親鸞や日蓮による日本化について、司馬氏は、釈迦の教えより、自分一個の安心が決定すればよいというところがある、とした。キーン氏はそのことを「文化的に特筆すべき事柄」とし、司馬氏はさらに「宗教や哲学、原理というより、美に昇華した」とする。

「**金と銀**の対比」においては、義満の「金」から義政の「銀」、安土桃山の「金」から江戸へ遷移するが、その過程の「応仁の乱」を、自然発生的な乱と見る。

キーン氏は、日本の美としてその安土桃山の粗末質素な陶器を示し、司馬氏は、加えて古田織部の**金継ぎ**を特筆した。それは、中国・韓国、西洋には無い独自の文化(価値感)として注目したうえで、桂離宮の対比として日光東照宮を日本の美の特異として断じた。

司馬氏は、医学の山脇東洋らを引用して日本人の**合理主義**に注目し、その理由は不明で不思議とする。政治も同様で、完全に儒教ではなく現実的な体制をとった。つまり世界の大半の民族における、宗教・絶対原理による社会や国民教育・**統治(飼いならし)**のかたちは日本にはない、とする。

生活における神仏儒について、キーン氏は仏儒の影響を強調するが、司馬氏は御所への僧侶不入を例示し、**清浄としての神道**が基礎にあると応える。それら混淆・習合、便宜主義で合意を結ぶ。

後半は、特に仏教との関係に傾向する。釈迦の原始仏教、仏教の無常と日本人の天然の無常観、日本思想として最澄と空海を特に取り上げ、釈迦仏教の理解者として親鸞を評価する。天然自然の世界に軸足を置く空海の密教と、人間の自然に軸足を置く(親鸞の)自然法爾とは、一般に難解ながら、日本人の持つ「天然自然と人間自然」への同一観念として「現実」(実態)で共通させた。当方文化構造の頂点とした自然は空海の密教に、人間側の無常観念と合理主義及びその中庸は最澄の天台に相当する思想体系となる。自然は人間側の自然調和(平等)に直結する。

1984年『**微光のなかの宇宙**』の冒頭、『裸眼で』にて記者時代の美術担当時期での体験を振り返り、他人の理論や様式(既成概念や価値観)からの解放が小説執筆の契機となったと回想する。『密教の誕生と密教美術』では、原始仏教から話を始め、**釈迦への尊敬**を現す。(教義についての詳細はないが、死との無関係を指摘)一方、密教美術には、尊敬とは別に魅力を評価する。原始仏教と日本仏教の異質性はともかく、特に今日のある種の僧の有様には批判的である。

大乘仏教では、如来とは衆生に説きつづける人格で、その内容が「法」である。如来を彫刻にするよりも「**法**」の内容こそが仏教である。**親鸞**はそのことに気づいた少ない仏教者として注目する。

一方、密教は、釈迦の原始仏教でも、ガンダーラの仏像をもつ仏教でも、大乘仏教でもなく別体系の仏教であり、仏画、仏像および密具なしにはその思想体系を示すことができない。密教の教主は、釈迦ではなく大日如来である。**密教**の成立事情に起因し、**現世利益、地上に留まり慈悲を行う菩薩**が装飾され、この世のすべて、現実が肯定され哲学的に昇華させ、大楽という**絶対清浄の世界**にいたらせる。司馬氏は、ここで現実を「**自然法爾**」とだぶらせている。また、密教の三密(身・口・意)について、以下のように解説する。宇宙の普遍的な原理・法則にも三密がある。天地に三密があり、人間のそれと交流しうる。密教の密とは天地の内奥のことで、そこから三密(動き・語り・思うこと)が出てくる。

司馬氏は、日本で、思想における体系化の課題に気づいた人物として、**最澄と空海**を評価する。前述の密教に比し、最澄の顕教は、地上の人々に理解されうる体系を標榜し後進にゆだねた。空海は密教体系を完成させた。その密教と関連し、特に日本で信仰された仏を、山岳信仰と関連した**不動明王**と、すでに『日本書紀』天武天皇期に初出する**観音菩薩**とする。日本密教は、宗教の本質的要素である「聖」を表現し、世界的にも卓越した美術とする。

1995年、司馬氏の晩年となる『**日本とは何かということ 宗教・歴史・文明**』は、山折哲雄氏との対談を主に構成されている。「宗教と日本人」では、当時の震災・事件にふれ「無神論」を導入とする。山折氏は、「神も仏もあるものか」といった宗教無関心の傾向を指摘し、司馬氏は、その風潮を認めつつ、仏教そのものの(高度な)無神論と区別した。宗教の受容について、司馬氏は、仏教は公伝以降、**統治**(飼いならし)の役割はなく、薬効や芸術として受け止めた。それは、明治のプロテスタンティズムでも同様とする。プロテスタンティズムでいう「絶対」「絶対者」は、我が国では受容しがたい概念とする。山折氏は、自然の中に神や仏も宿っているという考え方、多神教的な汎神論、一神論に対する無神論的伝統の例外として、親鸞の阿弥陀如来をあげる。しかし司馬氏は、仏教の「**空**」を「**相対の総和**」と定義し、阿弥陀如来などの仏教本尊は、その「空」の意味(表現)で、前述の「法」の一方便として解釈する。念仏によって、是非善悪を超えた絶対の真理に到達するという**自然法爾**を説く教えである「絶対不二の道」の「絶対」は、西洋の絶対とは違い、浄土信仰を強調した教義の意味(方便)とする。一方、山折氏は、インドの概念的な浄土は、日本では先祖が宿ると信じられた**山**と習合し、自然との協調・**共生**の感覚が多神教的傾向を誘引したとみる。

「日本人の死生観」について、山折氏は寺田虎彦を引用する。西ヨーロッパの自然の安定と対極する不安定が、日本人の自然に対する「**天然の無常**」感覚を育んだ。その感覚は、吉田松陰の死に対する淡泊な精神、無私の精神、無心、初心、「純粋な状態」と通ずる、とする。司馬氏もよく同感し山折氏は縄文以来の「天然の無常」が仏教の無常と一致したと自然感覚と宗教観を強調した。「宗教と民族」について、二人は、紛争の背景にある前述の「絶対」への宗教心を提起した。これからの課題として山折氏は、日本の宗教伝統を国際社会に生かすこと、司馬氏は、それが世界に調和をもたらすことを期待した。そのためには、自分自身を説明する言葉(論理)が必要であると結ぶ。

上田正昭先生(1927~2016)の日本人、日本文化への考えをまとめた。著書『日本神話』『日本人のこころ』『神と仏の古代史』など拝読したが、東日本大震災後、晩年の著作となる、2012年『死をみつめて生きる 日本人の自然観と死生観』を、主にしたい。

「はじめの章」で、寺田寅彦の論文『日本人の自然観』を引用され、日本は本来学んできた「**自然との調和**」を忘却し、戦後欧米型の学問が科学の進歩に寄与するという錯覚に陥っていると警鈴を鳴らされる。それはまた、自然環境、文化遺産、生物全般に被害を及ぼした、20世紀の民族や宗教と政治的対立による大戦・紛争と同様に、「**いのちの尊厳**」への危機として捉える。「**人権問題**」と「**環境問題**」は不可分の関係として提起される。季刊雑誌『日本のなかの朝鮮文化』の顧問として、約30年交流のあった**司馬遼太郎**氏の『二十一世紀に生きる君たちへ』(初出1989年)を引用されたうえで、以下、啓蒙される。「自然をおそれず、その力をあがめず、人間こそがいちばんえらい存在だとうぬぼれてきた現代人が、いかに古代や中世の歴史のなかの人間と異なっているかを見事に指摘している言葉である。人間はひとりでは生きられない。自然と調和し、**自然をあがめて共に生きて共に生みだす知恵と体験**を蓄積し発展してきた日本人のくらしのありようや日本の本来の学問のありようを、いま一度想起すべきではないか」そして原発問題に触れ「自然と調和し自然の力を活用したあらたなエネルギーの発見が不可欠」と、結論される。「あとがき」では、最後に『古事記』の「国生み神話」の「共生」(とも生み)を示し、ご本人の宮中歌会、勅題「草」にそった歌、「山川も草木も人も 共生のいのち輝け新しき世に」を記される。**自然との調和、自然と共に歴史を生みだすありがたさ、外国の人々と共に文化を創りだす「とも生み」、日本人が古代以降持ちつづけてきた死生観であるいのちの尊厳への再認識を叫ばれる。**

上記に、まず冒頭として、「起・結」を、詳細にまとめたのにはそれなりの理由がある。その国の歴史や文化の認識は、過去の理解だけではなく、未来のための指針であるべきだからである。なぜなら、その基層にあるものは、これまでその国の人々が形成してきた根源的なところのかたちであり、その集大が今日まで国家を存続させてきたからである。日本文化に対する上田先生の長年の研究を基にした認識が、これらの言葉、提言の根拠であり成果でもある。

第一章「自然との調和」**鎮守の森**、沖縄のウタキ(御嶽)の森は、神霊の宿る常緑樹である神籬・聖なる**神体木**、聖なる岩や石や**磐座**・聖なるストーンサークルの磐境・**神奈備**(神体山)などにあって、そのいにしえは**縄文時代**にさかのぼる。神籬・磐境は『古事記』『日本書紀』に描かれ、神木信仰は具体化して神柱・御柱となるが、その源流は縄文の三内丸山遺跡などの木柱、木柱列にある。諏訪大社の御柱祭は一本の神体木を起源とし、磐座を山頂・中腹に拝する上社本宮は磐座(硯石)と斎庭を四囲、四本の御柱で聖域とする。伊勢神宮の心の御柱を内包する(神明造り)、出雲大社の九本の柱による大社造りも**神柱信仰**である。奈良の大神神社は、三輪山をカミが降臨し鎮まる神奈備(神体山)とし人々が守ってきた。**モリ**は本来は自然の樹木を意味し、『万葉集』では神社・社がモリと訓(よ)まれた。**ヤシロ**はマツリの建物がある場所が原義で、出雲の神庭サイダニ遺跡の神庭とも呼ばれた。神社建築の起源は、出雲などの田の字形建物を参考に祭事と政事の未分化の段階を考慮すべきである。それら以外に沖縄の御嶽は**海上世界**のニライカナイからカミを迎える海辺や岬のウタキも多い。**社叢**は神社以外に寺院にもあり、その神仏習合のおもむきは、『日本書紀』欽明天皇期の「仏」を「蕃神」として、敏達天皇期の「仏神」は、「仏」が海外からの“まれびと”としてうけとめられたことを示し神宮寺や神前読経で具体化した。「**神も仏も**」のシンクレティズム(重層信仰)を伴い農耕神・土地神を示す「社」は祭祀する建物、人々の団結の絆を固める場に、社叢は土地の神のモリ、聖なるコミュニティのモリ、そのセンターになった。

第二章「鎮守の森と南方熊楠」鎮守の森は**カミとヒトとの接点**であり、**自然と人間の共生**の場であった。南北朝のころ、惣村・惣郷の結合の場、祭祀団体として宮座・宮ノ党が結成、神前で村々の掟をつくり、「一味神水」「一味同心」の盟約し、そのマツリには芸能が奉納され、娯楽を共にする自治と寄合の場となった。明治政府の神道国教化政策により官社・民社の差が明確になり、明治34年(1901)勅令を受け、全国各地で府県知事の判断によって神社の統廃合が進行、明治41年(1908)和歌山県稲成村の合祀問題から**南方熊楠**氏による反対運動が開始。大正7年(1918)衆議院で「神社合併無益」決議の最大の功労者となる。冒頭提起と関連し、現代の合理主義・便利主義・エゴイズムの風潮による、鎮守の森に対する「**オソレ**」「**ツツシミ**」の希薄化を危惧する。

第三章「死をみつめて生きる」(現代は、生ばかりが強調され、死の尊厳が忘却の彼方にある。その意識の希薄化は、結果として、生の希薄化にもつながる、との主旨で書かれている)「**タマ**」が衰微した状態が「**タマシヒ**」である。「鎮魂」「招魂」、**「ミタマフリ」(「カミマツリ」の本番)**によって生者のタマは生命力を充実する。よみがえり引きつがれ、タマは再生する。『古事記』『日本書紀』の神々は、「別天神」を主に**隠り身**として死なない永遠の神と、イザナミのように日本人のカミ観念の特徴を示す死ぬ神がある。カミの原義はその「隠身」(カクリミ)が妥当である。またイザナキ、イザナミは「神」から「命」に神名が推移するが、神の人間化、天つ神の御言の伝達者となる。ニニギノミコトでは、天皇も人間であり死ぬ起源が記される。産まれる場所と種に朝鮮語対応説がある食物神の再生神話と関連し、特に『日本書紀』のアメテラスは、支配者層の**水稻文化**を象徴し、「稲、カイク(蠶)から糸、神衣を織る」が記され、そこに道教最高の仙女で織女神の西王母の影響がある。天武・持統天皇期には、宮廷に七夕行事があり、日神信仰に織女神信仰が重層していた。

第四章「鎮魂の伝統」死者の場合、**鎮魂**されないタマシヒはさまよい、日本人の信じてきた世界に居ることのできない未完の霊魂となる。宮廷における鎮魂の確実な初見は病に際す天武天皇14年(685)である。石上神宮の鎮魂祭はミタマフリとしての鎮魂の伝統を長く保有してきた。平安時代初期の『先代旧事本記』は、物部系の鎮魂と宮廷鎮魂祭とのつながりを強調する。その秘儀に係る「瑞宝十種」は、『古事記』の天之日矛(天日槍)の「将来物」と近似する。カミの来臨をあおいでカミマツリする非日常の時間と空間が「**ハレ**(晴)」、俗なる日常のそれが「**ケ**(褻)」である。「**ケガレ**(褻枯れ)」の状態になれば聖なるカミをマツリ、カミのミタマとタマフル(魂触る)し、タマフユ(魂殖ゆ)することによって生命力を振起し**タマフリ**につながる。死者のマツリについて、「**祖神**」は、血縁神よりも、霊威神や職業神などが有勢な氏族の司祭権の継承・独占により神裔と意識された。そして、**日神大日靈貴**(おおひるめのむち)は、のちに皇祖神としての天照大神に昇華した。大物主神など**崇る神**への意識があるが、そのまま怨霊神になったのではない。**怨霊信仰**は非業や悲運の死霊を対象として奈良時代に起源し、平安時代の**御霊会**となるが、為政者はタマシズメを重点とし、民衆は崇る威力に幸を祈願したミタマフリを重点とした。

第五章「日本人の他界観」仏教以前の日本人の他界観に**折口信夫**先生の考究がある。折口は四天王寺西門の体験と同寺の日想観往生の風習、さらに沖縄探訪の産物“まれびと論”を前提に、京都禅林寺本の「**山越し阿弥陀図**」に日本固有な信仰(日想観)を提起した。しかし静遍上人の真言念仏の信仰による来迎図作とする説では日輪ではなく月輪とみなされ、山の向こうの海に注目したい。山水そのものを浄土として表現し、**海上世界**に**山上世界**が優位しつつ重層する。「海の**水平世界**」も「天あるいは地下の**垂直世界**」も、『古事記』の少名毘古那神や瓊瓊杵尊などに見え、また媒介する「船」「鳥」がある。死後の天上他界観は『万葉集』にもあり、天から山に神々が降臨する伝承を生み、殯をすませ、一定期間後、タマシヒは充足され祖霊となって山・天に鎮まると考えられた。それは精霊迎え・送りに残り、浄土信仰の広がりにより、山の彼方に浄土を求める信仰が具体化した。

第六章「万有生命信仰」『日本書紀』神武天皇即位前紀に、タカミムスヒノミコトが道臣命に命じて斎王(祭主)としてマツリをなしたところ、土・火・水・食物・山・野・木・草がすべてカミとして現れる。それは、あらゆるものに生命をみだしあらゆるものにカミが宿るとする万有生命信仰の反映である。『万葉集』の柿本人麻呂の反歌や、最澄が強調した『涅槃経』の「**一切衆生悉有仏性**」は日本人の万有生命信仰では「**山川草木悉有神性**」であった。そこから顕在した言霊の信仰も『古事記』雄略天皇期の葛城一言主神社に明白である。万有生命信仰は夢窓疎石の後醍醐天皇の鎮魂、安国寺・利生塔建立提言といった**怨親平等の思想**へみちびく。その日本の宗教はアニミズムとよばれる汎神教で、時に神への感謝を奏上する「祈年祭」の祝詞がある。そこに国家的宗教戦争はなく**世界宗教**のめざすべき方向を示唆する。『日本書紀』などの「神道」用例はいずれも特定の教義によって体系化された宗教的認識ではなく、津田左右吉博士のいう「古くから伝えられてきた民族的風習としての宗教」もしくは「神の権威、力、はたらき、しわざ、神そのものなど」である。「神道」は「仏法」の受容によって、「対句」としてそれ以前からの神や神のはたらき、あるいはマツリのしきたりを表現した。神道の世界も、中国や朝鮮の古典に語があり、**東アジア**の動向に連動して成立した。**万有生命信仰**は日本文化の基層として民族神道に息づく。「生者」同志や「死者」との「絆」を忘れず、災害復興や文化伝統のために、タマシヒを振起するタマフリ、**まことの鎮魂**が必要である。



国宝 山越阿弥陀図 鎌倉時代・13世紀
(京都・禅林寺)



古事記には、その当時の日本人の「**自然**」への**価値観**が描かれている。それは、奈良から平安、そして安土桃山から江戸時代へと、表現を多様し継承される。『日本書紀』、『風土記』、『万葉集』などの韻文「上代歌謡」、「和歌」の世界で、季節、植物、風景は、歌の舞台や比喩となった。飛鳥・奈良時代の衣装から始まる「彩」と呼ばれる「色彩」では、空の移ろいを表現した。平安時代の「大和絵」では、「平等院鳳凰堂壁扉画」、東寺伝来「山水屏風」、「鳥獣人物戯画」など、樹木や動物など自然への憧憬が描かれた。「源氏物語」で語られた四季花鳥は、「絵巻」で再現され、「雅」な色彩となり、やがて安土桃山時代の襖絵で、金、墨と和合し、「絢」として絢爛する。作庭やその鑑賞は、平安王朝の別業や浄土寺院、桃山では武家・茶室前庭、江戸初期には貴族や大名の大規模庭園にまで発展。現代でも、社寺、遊興施設、住宅と一体となり、その価値を高めている。

その**古事記**の中で、「**自然**」は、どの様に尊厳され、その信仰は、いつ発生したと語られているだろうか？ その時代特定と併せて、以下に検証したい。

古事記が完成したのは、奈良時代、和銅5年712年 元明天皇の時代である。その時から遡り、時代特定の手掛かりはどこに語られているだろうか？ たとえば、長い物語でも最初の部分となる、「伊邪那岐命と伊邪那美命」の物語で登場する地名、神社所在地。それは、現代に伝わる「墨江」(大阪の住吉大社の地)、「淡海之多賀」(滋賀の多賀大社の地)である。しかしながら、物語はまだ「天照大御神、月讀命、須佐之男命」が誕生したばかりで、神話の最中である。信仰起源としては、大変興味深い記述であるが、神社創建のことではないため、時代特定には利用できない。その後、「天の岩屋戸」「天孫降臨」として神々の誕生期が終わり、「神武東征」を経て、ようやく「垂仁天皇」、「景行天皇」時代の**纏向之日代宮**が登場する。これは、考古学上「纏向遺跡」と照合できる、物語で(実在の是非が問われる天皇陵以外)初めて登場する手掛かりである。その場所からは、古事記にも登場する古代祭祀の供物 桃の実や、大集落遺跡・建築物・西日本から関東の外来土器が発掘され、また日本史上初の前方後円墳を含むことから、弥生時代から古墳時代への転換期、200年から350年と時代推定、学会の主論とされる。つまり、古事記に戻ると、「景行天皇」前後数代の時期が、弥生時代末期から初期古墳時代と結論できる。250年頃と推定されている「箸墓古墳」倭迹迹日百襲姫命(宮内庁治定)は、立地、時代とも近隣である。

以上、念の為、古代史と古事記を同期させた。したがって、**古事記に登場する神々は、その「纏向遺跡」以前、縄文から弥生時代にかけて誕生したことになる**。すなわち人々が狩猟、稲作で生活していた時代である。その神々の内、具体的に役割・由来が記載されているのは、以下掲載の「古事記原文」下線部分である。そこでは、海神、水戸(河口)神、風神、木神、山神、野神が誕生する、このあと誕生する神々も考慮すると、特に海(水)、山の関係の神々が多い。つまり、アマテラスやスサノオ、オオクニヌシが誕生する前に、彼らより重要な神々として誕生させたことに高い価値観、信仰が伺える。さらに、彼らやその子孫は海神・山神の姫たちを妻とする。天孫降臨する邇邇藝命の妻は、山神**大山上津見神の娘**「木花之佐久夜毘売(コノハナノサクヤビメ)」、また、神武天皇の母も**海神大綿津見神の娘**「玉依毘売命(タマヨリビメ)」である。通観すると、**自然神から皇神へ**の神概念、信仰の遷移が浮き彫りとなる。そして、またここでも母系による「和合」が表現されていることに注目したい。

古代日本で、自然は、狩猟の山麓、稲作の水など、現実の生活に「恩恵・現世利益」をもたらし、一方では猛威を振るう「畏怖」の対象である。そこに魂を感じ、木、草、山、川、岩、嵐、雷などを対象に「自然信仰」が発生した。その価値観が古事記で神々の有り様に描かれている。「神山・神奈備磐座」などの存在も、その地域の「現世利益」を願う「自然信仰」の証だ。

「古事記原文」 変体漢文 岩波古典文学大系本(訂正 古訓古事記) 近代デジタルライブラリー 国宝「真福寺本」照合済

「伊邪那岐命 と伊邪那美命」

(前略)既生國竟、更生神。故、生神名、大事忍男神。次生石土毘古神、訓石云伊波、亦毘古二字以音。下效此也。次生石巢比賣神、次生大戸日別神、次生天之吹上男神、次生大屋毘古神、次生風木津別之忍男神、訓風云加邪、訓木以音。次生**海神、名大綿津見神、次生水戸神、名速秋津日子神、次妹速秋津比賣神**。自大事忍男神至秋津比賣神、并十神。

此速秋津日子、速秋津比賣二神、因河海特別而、生神名、沫那藝神、那藝二字以音。下效此。次沫那美神、那美二字以音。下效此。次類那藝神、次類那美神、次天之水分神、訓分云久麻理。下效此。次國之水分神、次天之久比奢母智神、自久以下五字以音。下效此。次國之久比奢母智神。自沫那藝神至國之久比奢母智神、并八神。

次生**風神、名志那都比古神、此神名以音。次生木神、名久久能智神、此神名以音。次生山神、名大山上津見神、次生野神、名鹿屋野比賣神**。亦名謂野椎神。自志那都比古神至野椎、并四神。

(中略)

於是詔之、上瀨者瀨速、下瀨者瀨弱而、初於中瀨墮迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神。訓禍云摩賀。下效此。次大禍津日神。此二神者、所到其穢繁國之時、因污垢而所成神之者也。次爲直其禍而所成神名、神直毘神。毘字以音。下效此。次大直毘神。次伊豆能賣神并三神也。伊以下四字以音。次於水底滌時、所成神名、底津綿上津見神。次底筒之男命。於中滌時、所成神名、中津綿上津見神。次中筒之男命。於水上滌時、所成神名、上津綿上津見神。訓上云宇閑。次上筒之男命。此三柱**綿津見神者、阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字以音。下效此。故、阿曇連等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。宇都志三字以音。其底筒之男命、中筒之男命、上筒之男命三柱神者、墨江之三前大神也**。於是洗左御日時、所成神名、**天照大御神。次洗右御日時、所成神名、月讀命。次洗御鼻時、所成神名、建速須佐之男命。須佐二字以音**。(中略)故、伊邪那岐大御神、詔速須佐之男命、何由以、汝不治所事依之國而、哭伊佐知流。爾答白、僕者欲罷妣國根之堅洲國。故哭。爾伊邪那岐大御神大忿怒詔、然者汝不可住此國、乃神夜良比爾夜良比賜也。自夜以下七字以音。故、其伊邪那岐大神者、坐**淡海之多賀**也。

「天照大神 と須佐之男命」

(前略)故爾各中置天安河而、宇氣布時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劔、打折三段而、奴那登母母由良邇、此八字以音。下效此。振滌**天之眞名井**而、佐賀美邇迦美而、自佐下六字以音。下效此。於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、**多紀理毘賣命**。此神名以音。亦御名、謂奧津嶋比賣命。次**市寸嶋上比賣命**。亦御名、謂狹依毘賣命。次**多岐都比賣命**。

(中略)又食物乞大氣津比賣神。爾大氣都比賣、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、爲**穢汚**而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生**稻種**、於二耳生**粟**、於鼻生**小豆**、於陰生**麥**、於尻生**大豆**。故是**神產巢日御祖命**、令取茲、成種。

(中略)故、其櫛名田比賣以、久美度邇起而、所生神名、謂八嶋土奴美神。自土下三字以音。下效此。又娶**大山上津見神之女、名神大市比賣**、生子、大年神。次**宇迦之御魂神**。

(中略)天之冬衣神。此神、娶刺國大上神之女、名刺國若比賣、生子、大國主神。亦名謂大穴牟遲神、牟遲二字以音。亦名謂葦原色許男神、色許二字以音。亦名謂八千矛神、亦名謂宇都志國玉神、宇都志三字以音。并有五名。

「崇神天皇」

即以意富多多泥古命、爲神主而、於**御諸山**拜祭意富**美和之大神前**、又仰伊迦賀色許男命、作天之八十毘羅訶、此三字以音也。

「景行天皇」

大帶日子淤斯呂和氣天皇、坐**纏向之日代宮**、治天下也。此天皇、娶吉備臣等之祖、若建吉備津日子之女、名針間之伊那毘能大郎女、生御子、櫛角別王。次大碓命。次**小碓命。亦名倭男具那命**。



① 天地初發
あめつちはじめてあらわれしとき

天之御中主神(あめのみなかぬしのかみ)
高御産巢日神(たかみむすひのかみ)
神産巢日神(かむむすひのかみ)

造化の三神
ぞうかのさんしん

建速 須佐之男命
(たけはやすさのおのみこと)
天照大御神
(あまてらすおおみかみ)
月読命 (つくよみのみこと)

⑥ 三貴神

⑦ アマテラスとスサノオの誓約
天岩屋戸

天降り

国宝 海部氏「勘注系図」、物部氏「先代旧事本紀」で彦火明命は別名、天火明命、邇邇芸速日命(ニギハヤヒ)、天照國照彦天火明櫛玉邇速日命(尊)

⑧ 国譲

大国主 武御雷神

⑨ 天孫降臨

天邇岐志国邇岐志天津日高日子番能 邇邇芸命 (あめにきしくににきしまつひこひこほの ににぎのみこと)
三種の神器
大山津見神の娘、木花佐久夜毘売と結婚

⑩ 海幸彦・山幸彦

⑪ 東征

② イザナギとイザナミ 共生み

④ 神産み

③ 国生み

⑥ 三貴神

⑤ イザナギ 身禊

月読命

住吉三神

天照大御神

建速 須佐之男命

宇迦之御魂神
うかのみたまのかみ

宗像三神
市寸嶋比売命

天火明命
あめのほあかりのみこと

邇邇芸命
(ににぎのみこと)

出雲神話

大国主神

神武天皇

美和之 大物主神 勢夜陀多良比賣(せやたたらひめ)の娘
富登多多良伊須須岐比賣命(ほとたたらいすすきひめのみこと)と結婚

迦毛大御神

「山城国風土記」

賀茂別雷命・賀茂建角身命・神伊可古夜日売・玉依日売

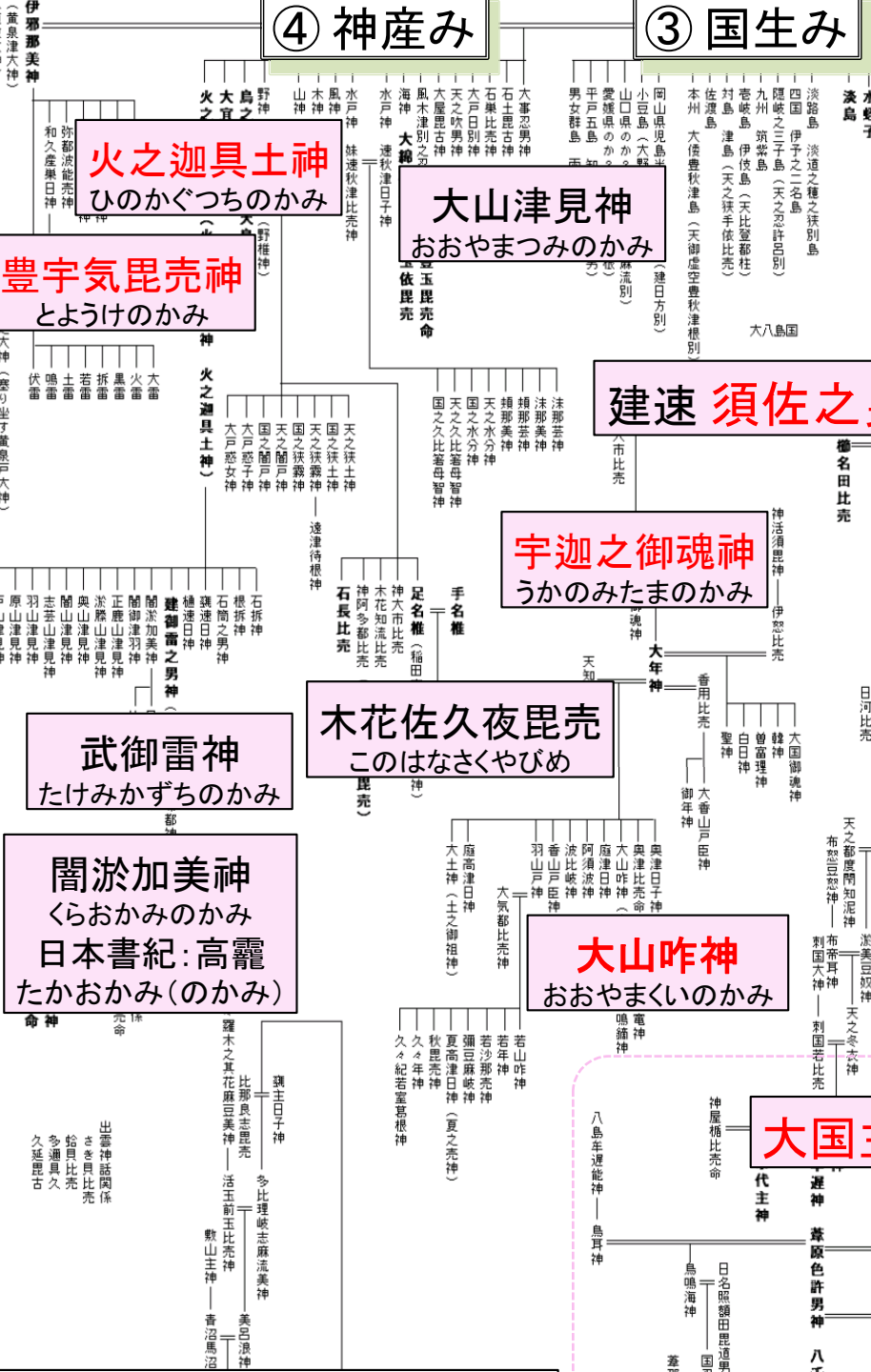
火之迦具土神
ひのかぐつちのかみ

豊宇気毘売神
とようけのかみ

武御雷神
たけみかずちのかみ

闇淤加美神
くらおかみのかみ
日本書紀:高麗
たかおかみ(のかみ)

「八幡」神
『続日本紀』天平9年(737)初見
天平勝宝元年(749)宣命
「広幡乃八幡(ヤハタ)大神」
九州宇佐から、八幡 神入京
* 小野妹子「三宅八幡宮」
社伝 推古天皇15年(607)遣隋後



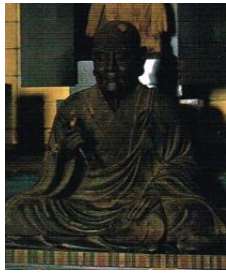
山陰は、縄文時代を深層に、弥生時代に至る出雲文化が交錯している。気多大社能登国の一宮の「大国主命」、四隅突出墓、『古事記』大国主神の沼河比売婚姻談の歴史は、出雲大社と白山比咩神社の「亀の神紋」に結実し、縄文の漁労狩猟と弥生に重層する海部族の信仰を確信させる。

渡来習合文化を基層とする出雲の磐座、神山信仰が、泰澄出現の土壌にある。

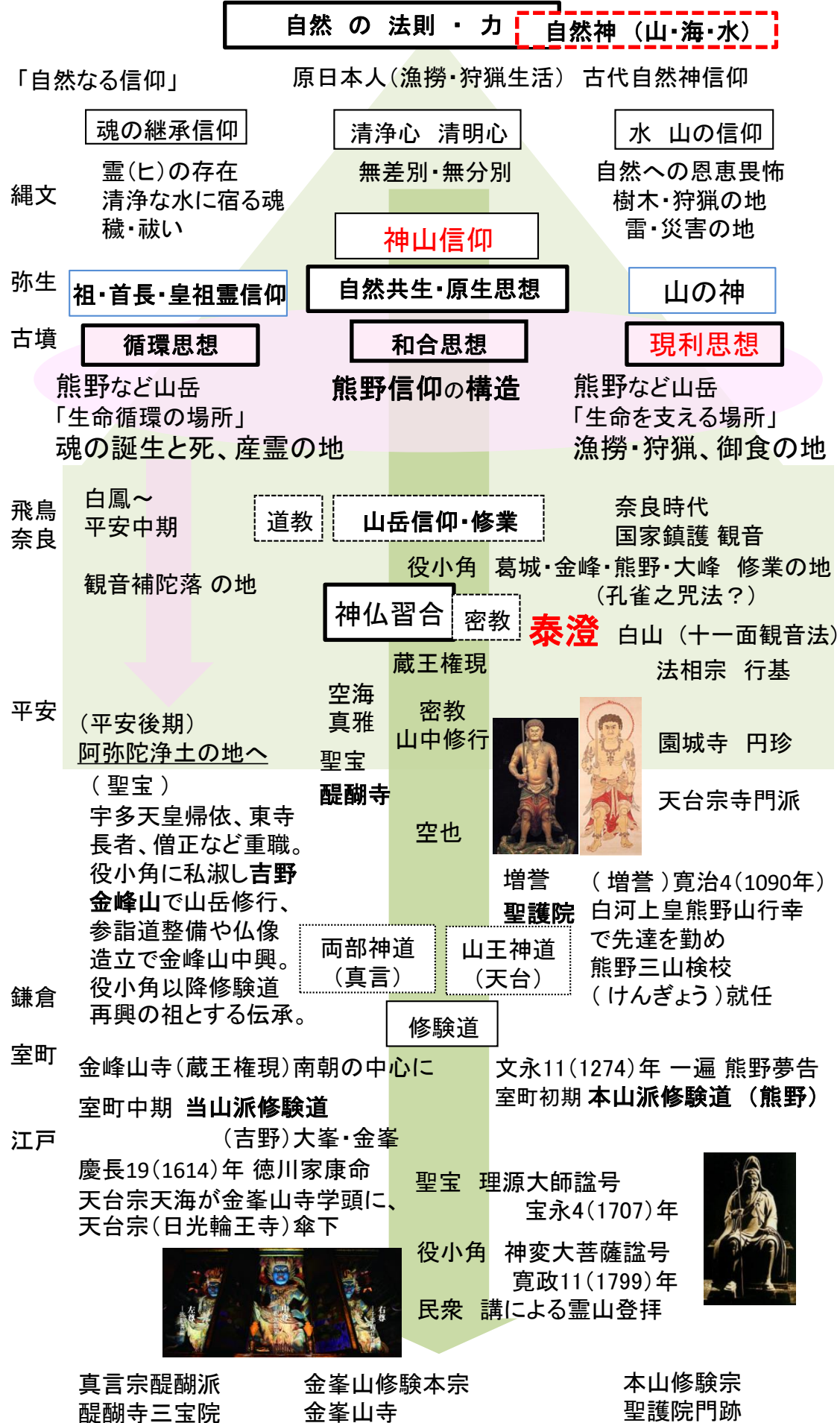
泰澄は役小角とともに、神山聖域信仰を革新し山岳信仰のあり様として山中没入した。秦氏としての伝承は、王朝や様々な畿内、稻荷山や愛宕山での足跡が傍証し、その二人の関係は、松尾大社と上賀茂神社の関係に投影されている。そして、泰澄と白山で相会した行基の父は百濟から渡来した王仁(わに)の子孫にあたる高志(こし)氏で、行基の師は法相宗初伝の道昭である。幼少の泰澄を神童と見込んだ人はその道昭であった。泰澄は自然習合文化の最中にあり、山と観音を媒介に神仏修験した。

菊理媛神 くくりひめのかみ 『日本書紀』神代四神出生章第十の一書にみえる神。泉津平坂で伊弉諾尊・伊弉冉尊の二神が口論した際、泉守道者(よもつちもりびと)とともに二神の仲介をし、黄泉国の伊弉冉尊の言葉を伊弉諾尊に伝えたという。「ククリ」は漏入(くきい)りの意で、とざされた泉門をこの神々のみ出入りし得たための名であるという説、事象をくる(まとめる)霊能をもつ一種の呪言神とみる説などがある。石川県石川郡鶴来町に鎮座する白山比咩神社の祭神。[参考文献] 松村武雄『日本神話の研究』(倉塚 曄子)

白山比咩神社 しらやまひめじんじゃ 「日本大百科全書」石川県白山市の旧鶴来町に鎮座。おそくとも9世紀初頭までには成立していた霊峰白山(はくさん)への登拝路の一つである加賀馬場(ばんば)を前身とする。現在は社伝により菊理媛(くくりひめ)神、伊邪那岐(いざなぎ)神、伊邪那美(いざなみ)神の3座をまつが、本来の主神は白山比咩神(鎌倉時代以後 菊理媛神説が中心)で白山を神体山とする。延喜式内社(小社)で神階は853年(仁寿3)従三位、859年(貞観1)正三位にのぼり、加賀国の一宮。旧国幣中社。加賀馬場は平安中期までに白山七社に分かれるが、その本宮は手取川の安(阿)久濤(あくと)の淵に臨んでいたため鎌倉時代に洪水で流失、以後いくたびかの變遷を経て1488年(長享2)旧社地の東方近傍の山麓にあった三宮を本宮鎮座地と定め、三宮姫神を相殿神とすることになった。これが現社地である。神主職は平安以来上道(かみつみち)氏が補せられ、中世に建部(けんべ)氏が加わって西神主(上道)・東神主(建部)として並列したが、後に水島、守部(もりべ)、大桑氏らも社家としてこれに当たるようになった。ただし神仏習合で白山(はくさん)寺が成立し、平安末に延暦寺別院となり叡山と結びつくに及んで、実権はしだいに社家から社僧に移っていた。社僧は堂僧と講衆からなり、惣長吏が統轄した。また独自の白山修験の教団組織とか御師(おし)の発達はみられなかったが、修験道の霊場として古来著名であったので止宿する修行僧や修験者も多かった。これらも含めて白山衆徒と称された社僧や神人(じにん)は、白山本宮、白山寺を支配したのみならず、守護勢力の弱かった鎌倉時代以後の加賀では、在地小領主の国人層や国衙と対抗するだけの勢力を保ち続けたが、室町時代末期の一向一揆によってその世俗的権力は衰微、社頭も荒廃した。社殿の復興は、江戸時代に加賀藩主前田家の保護を得てからである。しかし、白山嶺上の管理をめぐる越前馬場平泉(へいせん)寺との争論には敗れ、白山を含む山麓18カ村が天領となり、また山上堂社の支配権は平泉寺に与えられ白山本宮から離された。現状のように嶺上の神祠が白山比咩神社奥宮となり、当社が全国2700余の白山(はくさん)神社の本社と仰がれるようになるのは1873年以後である。いくたびかの洪水、火災で多くの社宝が失われたが、吉光銘の剣(国宝)、太刀、狛犬、螺鈿鞍(らでんくら)、沈金手筥(以上、重要文化財)など鎌倉・室町期の美術工芸品、《白山之記》《三宮古記》《莊嚴講中記録》《神皇正統記》(以上、重要文化財)をはじめ近世に至る多くの典籍記録文書を所蔵、《白山史料集》《白山比咩神社文献集》などが公刊されている。[下出 積與]



神紋
みつこもちきつこうりのほな
三子持亀甲瓜花



The Japan code

「日本文化の原理」について

日本の「カミ」について、「記」・「紀」神話から、その古代の感覚を解説する。

それは、「見えないモノ、チカラ」の気配を感じるころである。

古事記は、初めに誕生する、「天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)」「高御産巢日神(タカミムスヒノカミ)」「神産巢日神(カミムスヒノカミ)」「宇摩志阿斯訶備比古遲神(ウマアシカビヒコチノカミ)」「天之常立神(アメトコタチノカミ)」「國之常立神(クニトコタチノカミ)」「豊雲上野神(トヨクモノカミ)」は、「**隠身**」なりとする。

上田正昭先生は、この記述から、目に見えない「**隠身**」、これを日本語の「カミ」の語源とする説を、説得力があると支持される。(「日本人のころ」より)

石井一良先生は、「記」・「紀」神話や、『風土記』などの説話は、縄文時代の古いカミガミ(精霊といった方がよからう)が水稻農耕時代の新しい神々と葛藤し、結合し、癒着し、それに吸収されたプロセスを反映しているとされる。(「思想史 I」より)

『日本書紀』は、天孫降臨する前の葦原中国について、精霊の活躍する幽暗な(うすくらい)呪術の世界とする。また、『常陸国風土記』では、先住する体が蛇で頭に角がある「**夜刀の神**」と、西方から進出してきた稲作の水田開墾者とが交渉し「夜刀の神」を祀ることで決着する。大和の三輪山では**蛇神**が祭られ、豪族の娘と結ばれて三輪氏の祖となる。その神は『日本書紀』ではスサノオの子の大物主神とされ、平安時代の始めには「名神大社」の一つとなって五穀豊穰をもたらす**農耕神**として国家から奉幣された。これらが、「カミ」として描いた古代の感覚である。

『日本書紀』一書曰、天忍穗根尊、娶高皇産靈尊女子栴幡千千姫萬幡姫命・亦云高皇産靈尊兒火之戸幡姫兒千千姫命、而生兒天火明命、次生天津彦根火瓊瓊杵根尊。其天火明命兒天香山、是尾張連等遠祖也。及至奉降皇孫火瓊瓊杵尊於葦原中國也、高皇産靈尊、勅八十諸神曰「葦原中國者、**磐根・木株・草葉、猶能言語(なおよくモノ言う)**。夜者若燦火而喧響之(夜はホベのモロコにオトナイ)、晝者如五月蠅而沸騰之(昼はサバエナすワキあがる)」云々。

なお、「思想」と、堅い表現となっているが、以下のような「ころ」のことである。

「循環思想」 守り伝えるころ

魂への思い、価値感 継承価値 天皇尊厳 時間軸「無常」

「現利思想」 今を大切にするころ

技能・技を極めるころ 政治的には徳治 場所・上下軸「今」

「和合思想」上記2軸の「間」で、和合、均衡、葛藤 ゆらぐころ

「国譲 神々和合」「神仏習合」「公武習合」「武家と禅・茶道」

「義理と人情」「粹」「いき」「花鳥画と水墨画」「赤楽茶碗と黒楽茶碗」などの間のころ

古代的感觉として

他界感覚 … 「見えない世界」との交流 自然の中に見えないチカラ、存在を感じる ころ

場所として、空・天 海・山から来る「**隠身**」(神) を感じるころ 繋ぐもの: 依代「神籬・御諸・社」

そして時間軸である、前世や死後の世界を含め、それらを習合した他界感覚

水と産霊の信仰 … 「万物自然に対し、感じるころ」

霊す(ムス) 霊(ヒ)、生命が誕生する水、それらに共通する「穢と禊」、清浄心・清明心

以上の重層する感覚を基礎に、形成されてきた「ころの表現」として、「**日本文化の原理**」とする。

古代的感觉

自然の法則・力

マナイズム 見えないチカラ

他界 (あちら ほか よそ むこう)

他界と現世

黄泉国 死後

他界から来訪する霊的 もしくは神の本質的存在

彼方の(常世)国 空・天 海・山

モノ

稀人概念

繋ぐモノ 風・鳥 樹・柱

循環的概念(時間)

神籬 社

現利的概念(場所)

現世とあの世

神の依代

ここと海、山

産日(ムスヒ)の信仰

現世 (こちら ここ)

太陽・月・水 季節

精霊 水と

植物・動物 花鳥風月 産霊(ムスヒ)の信仰

生命源泉 自然 恩恵 天候・天災

アニミズム

神への思い

穢れを落とし、水によって生命が誕生する

水の中の靈魂を体内に入れ、体と靈魂を結合する。

魂

和魂・荒魂 幸魂・奇魂

魂の継承

清浄心 清明心

水をもたらす 山の信仰

霊(ヒ)の存在 清浄な水に宿る

原初共同体 モラル 自然への恩恵・畏怖 地域生活・祭祀 樹木・狩猟の地 雷・災害の地

ころの表現

日本文化の原理

継承性

習合性

実用性

自然の法則・力

八百万信仰

自然共生・原生思想

循環思想

和合思想

現利思想

皇祖霊信仰

縄文・弥生習合

地域共同体

氏族祖霊の長

神々習合

定住自活型

鎮魂・供養

神仏習合

戦神

大乘仏教との整合

阿弥陀・浄土信仰

薬師・観音信仰

密教

盧舎那仏 大日如来

空諦

中諦

仮諦

顕教

諸行無常

涅槃寂浄

諸法無我

The Japan code

「日本文化の原理」 「思想」「こころ」について、「代表的事例」と併せ、以下に再掲する。

「循環思想」 守り伝えるこころ

魂への思い、価値感 継承価値 天皇尊厳 時間軸 「無常」

「現利思想」 今を大切にすること

技能・技を極めるこころ 政治的には徳治 場所・上下軸 「今」

「和合思想」 上記2軸の「間」で、和合、均衡、葛藤 ゆらぐこころ

「国譲 神々和合」「神仏習合」「公武習合」「武家と禅・茶道」

「義理と人情」「粋」「いき」「花鳥画と水墨画」「赤楽茶碗と黒楽茶碗」などの間のこころ

古代的感觉として

他界感覚 ... 「見えない世界」との交流 自然の中に見えないチカラ、存在を感じる こころ

場所として、空・天 海・山から来る「**隠身**」(神) を感じるこころ 繋ぐもの: 依代「神籬・御諸・社」

そして時間軸である、前世や死後の世界を含め、それらを習合した他界感覚

水と産霊の信仰 ... 「万物自然に対し、感じるこころ」

霊す(ムス) 霊(ヒ)、生命が誕生する水、それらに共通する「穢と禊」、清浄心・清明心

以上の重層する感覚を基礎に、形成されてきた「こころの表現」として、「**日本文化の原理**」とする。

代表的 事例	自然の法則・力		
	循環思想	和合思想	現利思想
	継承性	習合性	実用性
基層文化	縄文・狩猟	自然調和	弥生・稲作
日本語 文字	漢字	平仮名	片仮名
神道 儀礼	ハレ 非日常 禊祓	再生	ケ 日常 穢れ
神と仏	鎮魂・供養	神仏習合	武神・戦神
徳治思想	仏教	和の思想	儒教
平安文化	ひな(び) はかなし 他界	もののあわれ(共感)	みやび 現世
日本的仏教	浄土信仰	悉皆成仏	観音信仰
		自然法爾思想	
鎌倉室町文化	無常	神・仏・儒 一致	遁世
		合議・寄合・座・講	
日本画	大和絵・水墨画	四季自然画	花鳥画・文人南宋画
安土桃山文化	ワビ・サビ	均衡	絢爛・豪華
統治体制	天皇	公武合体	武家
江戸文化	人情・粋(すい)	葛藤	義理・粋(いき)
伝統文化	継承		技術
現代的 理想	持続		合理



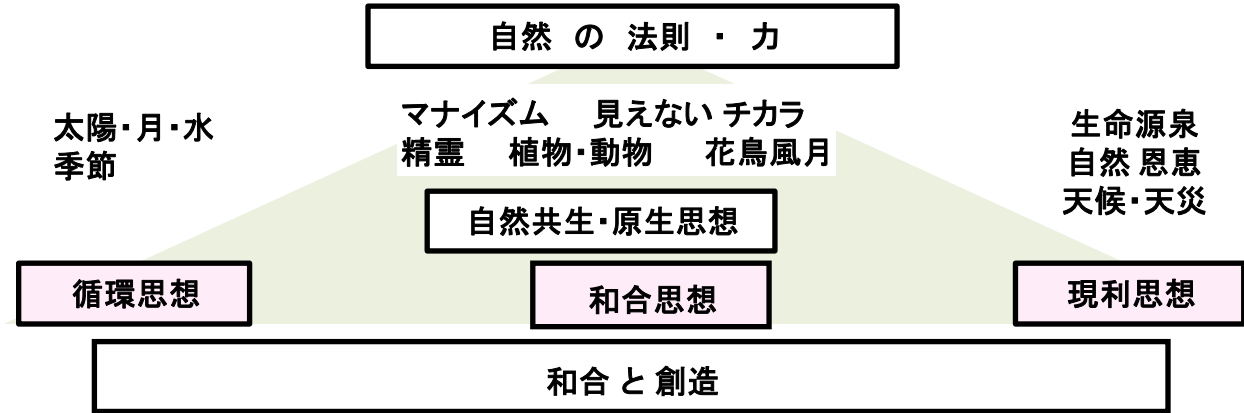
我が国の文化源流を古代にもとめる時、その手掛かりは縄文、弥生時代の遺跡や出土品、そして文書、伝承古き神社となる。またそれらは、文化の中核となる信仰を伝える。手掛かりは、相互に検証されることで、仮説は補強され、時には、通説とされる内容が矛盾として浮き彫りとなる。

文書の手掛かり、「古事記」「日本書紀」などの研究は、特に江戸時代の国学者から活況となり、幕末から明治、そして昭和以降の天皇尊厳の変遷を経て、現在に至っている。また、その間、明治維新後の廃仏棄釈や民間信仰禁止政策、第二次世界大戦後のGHQ神道指令による「国家神道廃止」など、神仏信仰環境は安寧ではなかった。

しかし、長い武家政権の末期に起こった国学、その後の神仏混乱を経て続く「記紀研究」は、我が国古代信仰の中に、日本人、日本文化の源流を求める 同じような心情であろう。京都、奈良などへの社寺参拝、浄土教はじめ仏教信仰、歴史的文化財への憧憬、祭りや、しきたり、風習は、なぜ行われるのか。単純に他動的習慣ではない、隠れた特性がそこに存在するはずだ。

「古事記」には、元明天皇期712年、太安万侶より撰上された当時の、皇族、氏族の政治的脚色がある。しかしまた、政治的にしろ、彼らの系譜が関係する様々な神の立場や性格、また、大和・出雲など実際の国土地名が登場する部分に特徴があり、信仰文化の特性や史実が潜んでいる。そして、神々には、祀る神、祀るとともに祀られる神、祀られるだけの神、祀りを要求する崇りの神という性格の違いがあるとされ、天照大御神、大国主たちは、祀るとともに祀られる神である。なぜなら「葦原中国の平定」において、高御産巢日神は常に天照大御神と共に、「日本書紀」では高御産巢日神が単独で派遣する神を命じており、「神武東征」でも同様である。稲羽(因幡)兎救出で、八十神に殺された大穴牟遲神(大国主)を蘇らしたり、少名毘古那神とともに葦原中国を作堅其國と命じたのは、神産巢日神である。つまり、「高御産巢日神」や「神産巢日神」は、天照大御神や大国主が祀る神々である。そして、古事記神代記において、天地初發之時、於高天原で、初めに誕生(存在)したのは「天之御中主神」であり、次にその二柱「産巢日神」が誕生した。また、祀られるだけの神は、山神、川海神などで、崇りの神は、御諸山上神(美和之大物主神)となる。では、古事記が語る、その初めに誕生し祀りの頂天にある「天之御中主神」とは何か？ どんな信仰、思想が表現されているのだろうか？ どの様に解釈すれば古代の精神を理解できるだろうか？

日本文化の特性 基本原理の体系



「天之御中主神」とは何か？ (道教の影響を前提として)

それは、自然の法則・力と考える。なぜなら、そのあとに誕生した「高御産巢日神」は別名「高木神」、神の依ります神籬(神体木)、天地を繋ぐもの 出雲大社、伊勢神宮の心御柱に表現される。同じ時に関係し、違う場所や立場から指導・影響を与える。まさに 現世利益 である。

そして、「神産巢日神」は、須佐之男命が殺した大氣都比賣から穀物の種を生み、また大国主を蘇らせる 循環再生 を表す。この神代再生は、世代・時間の継承を表現している。

つまり、その頂天に語られる「天之御中主神」は、「場所」と「時間」の概念で、それぞれ「高御産巢日神」と「神産巢日神」とに繋がる、「自然の源、原理」であり、「法則・力」と考える。

三神は、日本文化の特性として今回仮説した原理を構成する基本要素であり、「天之御中主神」と、天津神系「高御産巢日神」と 国津神系「神産巢日神」が、ほぼ同時に誕生することに、異なる信仰文化の「和合」の思想が伺われる。また「産巢」の名を持つ二神は「創造」の象徴でもある。創造されたモノは、人々に「場所」と「時間」の関係で繋がる「神への信仰、祭祀」の理由となる。この神を祀る「彌久賀神社」は出雲大社南方 延長五年(927年)『延喜式神名帳』神門郷の筆頭。

「古事記原文」 変体漢文 岩波古典文学大系本(訂正 古訓古事記) 近代デジタルライブラリー 国宝「真福寺本」照合済

「別天神五柱～神世七代」

天地初發之時、於高天原成神名、天之御中主神。訓高下天云阿麻。下效此。次高御産巢日神。次神産巢日神。此三柱神者、並獨神成坐而、隱身也。

次國稚如浮脂而、久羅下那州多陀用幣流之時、流字以上十字以音。如葦牙因萌騰之物而成神名、宇摩志阿斯訶備比古遲神。此神名以音。次天之常立神。訓常云登許、訓立云多知。此二柱神亦、獨神成坐而、隱身也。上件五柱神者、別天神。

「伊邪那岐命と伊邪那美命」

於是天神諸命以、詔伊邪那岐命、伊邪那美命、二柱神、修理固成是多陀用幣流之國、賜天沼矛而、言依賜也。故、二柱神立訓立云多多志。天浮橋而、指下其沼矛以畫者、鹽許々袁々呂々邇此七字以音。畫鳴訓鳴云那志。而、引上時、自其矛末垂落之鹽累積、成嶋。是淤能基呂嶋。自淤以下四字以音。

於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿。於是問其妹伊邪那美命曰、汝身者如何成。答曰吾身者、成成不成合處一處在。爾伊邪那岐命詔、我身者、成成而成餘處一處在。故以此吾身成餘處、刺塞汝身不成合處而、以爲生成國土。生奈何。訓生云宇牟。下效此。伊邪那美命、答曰然善。爾伊邪那岐命詔、然者吾與汝行迴逢是天之御柱而、爲美斗能麻具波比。此七字以音。如此之期、乃詔、汝者自右迴逢、我者自左迴逢。約竟迴時、伊邪那美命、先言阿那邇夜志愛上袁登古袁、此十字以音。下效此。後伊邪那岐命、言阿那邇夜志愛上袁登賣袁、各言竟之後、告其妹曰、女人先言不良。雖然久美度邇此四字以音。興而生子、水蛭子。此子者入葦船而流去。次生淡嶋。是亦不入子之例。

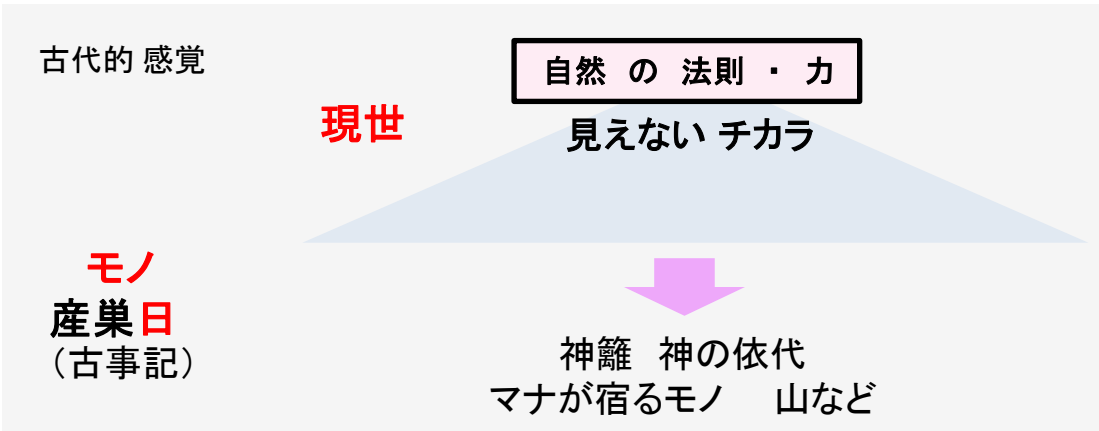
「天照大神と須佐之男命」

又食物乞大氣津比賣神。爾大氣都比賣、自鼻口及尻、種種味物取出而、種種作具而進時、速須佐之男命、立伺其態、爲穢汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生稻種、於二耳生粟、於鼻生小豆、於陰生麥、於尻生大豆。故是神産巢日御祖命、令取茲、成種。

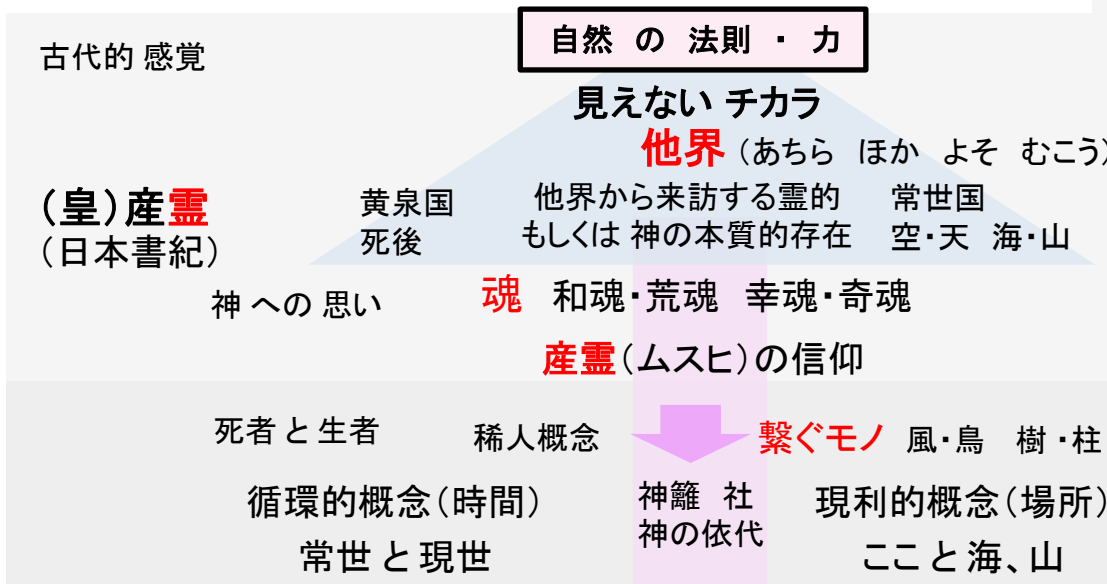
「大国主神」

於是八上比賣、答八十神言、吾者不聞汝等之言。將嫁大穴牟遲神。故爾八十神怒、欲殺大穴牟遲神、共議而、至伯伎國之手間山本云、赤猪在此山。故、和禮此二字以音。共追下者、汝待取。若不待取者、必將殺汝云而、以火燒似猪大石而轉落。爾追下取時、即於其石所燒著而死。爾其御祖命、哭患而、參上于天、請神産巢日之命時、乃遣蜃貝比賣與蛤貝比賣、令作活。爾蜃貝比賣岐佐宜此三字以音。集而、蛤貝比賣持人而、塗母乳汁者、成麗壯夫訓壯夫云袁等古。而出遊行。

マナイズム 見えないチカラ (非人格的要素)



アニミズム 見えないチカラ (人格的要素) 霊・魂



マナイズム・アニミズムと 他界観

マナイズムにおける見えないチカラには、死後の他界観はない。あくまでも非人格的要素を持つ。アニミズムは、人格的要素として霊の観念を持ち、その観念における見えないチカラは、死後の他界観における見えない霊と、現世における見えない霊の二種がある。

このことが日本文化にとって重要だが、現世においては、見えないチカラを持つものとしてのモノと、同じく見えない存在としての霊が存在すると観念される。

我が国では特に民俗学的に死後を含む「他界の世界」が身近であるとの見解がある。なぜであろうか？その理由として、マナイズムのモノとアニミズムの霊が、それぞれの見えないチカラ、存在という共通性を媒介に、同一視されていくところにあるのではないかと仮説する。つまり、身近なモノが、本来は死後を含む他界の存在である霊の観念を引き寄せて、霊までも身近に観念させたのではないかと考える。モノに対する愛着もそのようなこころの顕れである。しかしながら、そもそもモノと霊に対する観念は、別々の概念であることを認識しなければならない。なぜならモノには、死後の他界観は無いからである。なお死後を含む「他界」(あの世)と「人間界」(この世)の近接性について当論「他界の時代」で論及する。

原始宗教の超自然観は二つに大別される。(一)超自然的存在・対象に人格的要素を認めるものと、(二)これに多少とも非人格的要素を認めるものとである。

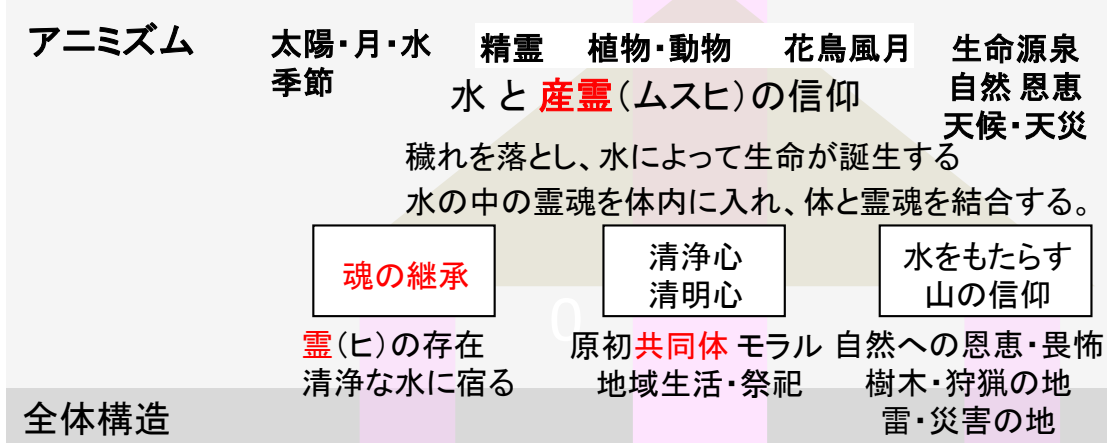
人格的要素の基本的なものは、霊的存在(スピリチュアル=ビーイングズ)=靈魂(ソウル)・死霊(ゴースト)・精霊(スピリット)である。一般に靈魂は人間の身体に宿る霊的存在、死霊は死者の霊的存在、精霊は人間以外の諸存在に宿る霊的存在、すなわち神霊・祖霊・霊鬼・妖精など、とされる。しかしどの原始社会においても超自然的存在がこのように明瞭に区分されているわけではない。実際には一つの語によって複数の、あるいはすべての霊的存在を意味していることが少なくない。霊的存在の特徴は、その宿り場を自由に離脱し、人間・社会の吉凶禍福に直接間接に影響を与えると信じられている点にある。

非人格的要素は一般に呪力・神秘力として把握されていることが多い。メラネシアやポリネシアにおける「マナmana」観念はその典型的なものである。マナは神や人間から動植物・自然現象・自然物・人工物に宿り、モノからモノへと転移し得る。しかし一切の存在が無差別にマナを有しているとは見なされない。人間も他の存在も並みはずれた力能を示すとき、マナを有するとされるのである。

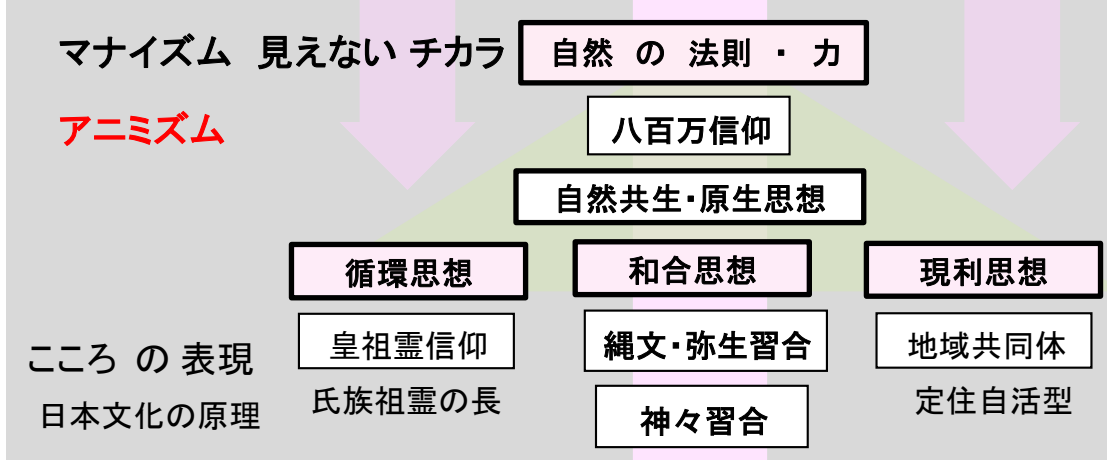
学説的には超自然的存在・対象に人格的要素を認めるもの、すなわち人格的超自然観をアニミズムと呼び、これに対して非人格的超自然観をマナイズム・アニマティズム・プレ=アニミズムなどと呼ぶ。

死霊・祖霊崇拜、シャーマニズム、ナチュリズム(自然崇拜)、高神・多神崇拜、フェティシズム(呪物崇拜)、トーテミズム、ウィッチクラフト(妖術)、ソーサリー(邪術)などの原始的諸宗教形態は、いずれも前述の二つの超自然観を基盤として成立している。

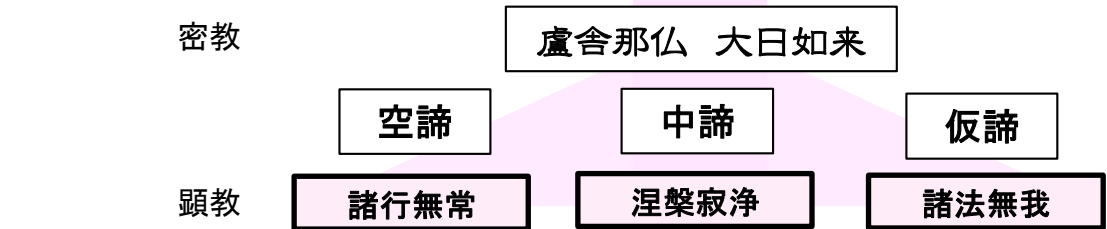
アニミズム 現世 (こちら ここ)



全体構造



大乘仏教との 整合



マナイズム・アニミズムと 他界観について、以下に整理する。重要なことは、見えないチカラ・存在という他界観で共通していることである。この習合が、日本人の他界観を構成しており、例えば「物の怪」という双方にまたがる概念を形成している。

原始宗教の超自然観

見えないチカラ・存在として共通

アニミズムの霊

マナイズムのモノ(に宿るマナ)

人格的要素の基本的なものは、霊的存在(スピリチュアル=ビーイングズ)=靈魂(ソウル)・死霊(ゴースト)・精霊(スピリット)である。一般に靈魂は人間の身体に宿る霊的存在、死霊は死者の霊的存在、精霊は人間以外の諸存在に宿る霊的存在、すなわち神霊・祖霊・霊鬼・妖精など、とされる。霊的存在の特徴は、その宿り場を自由に離脱し、人間・社会の吉凶禍福に直接間接に影響を与えると信じられている点にある。

非人格的要素は一般に呪力・神秘力として把握されていることが多い。メラネシアやポリネシアにおける「マナmana」観念はその典型的なものである。マナは神や人間から動植物・自然現象・自然物・人工物に宿り、モノからモノへと轉移し得る。しかし一切の存在が無差別にマナを有しているとは見なされない。人間も他の存在も並みはずれた力能を示すとき、マナを有するとされるのである。

他界観

死後の他界観における見えない霊
現世における見えない霊の二種がある

モノは現世の概念で、死後の他界観は無い

循環的概念(時間)

現利的概念(場所)

常世と現世

ここと海、山

継承性

和合性

実用性

マナイズムにおける見えないチカラには、死後の他界観はない。あくまでも非人格的要素を持つ。アニミズムは、人格的要素として霊の観念を持ち、その観念における見えないチカラは、死後の他界観における見えない霊と、現世における見えない霊の二種がある。

このことが日本文化にとって重要だが、現世においては、見えないチカラを持つものとしてのモノと、同じく見えない存在としての霊が存在すると観念される。

我が国では特に民俗学的に死後を含む「他界の世界」が身近であるとの見解がある。なぜであろうか？その理由として、マナイズムのモノとアニミズムの霊が、それぞれの見えないチカラ、存在という共通性を媒介に、同一視されていくところにあるのではないかと仮説する。

つまり、身近なモノが、本来は死後を含む他界の存在である霊の観念を引き寄せて、霊までをも身近に観念させたのではないかと考える。モノに対する愛着もそのようなこころの顕れである。しかしながら、そもそもモノと霊に対する観念は、別々の概念であることを認識しなければならない。なぜならモノには、死後の他界観は無いからである。

なお死後を含む「他界」(あの世)と「人間界」(この世)の近接性について当論「他界の時代」で論及する。

古代的 感覚

自然の法則・力

見えないチカラ

他界(あちら ほか よそ むこう)

他界と現世

黄泉国 死後

他界から来訪する霊的
もしくは神の本質的存在

常世国 空・天 海・山

マナイズム 見えないチカラ

稀人概念

繋ぐモノ 風・鳥 樹・柱

産巢日

循環的概念(時間)

神籬 社 神の依代

現利的概念(場所)

(古事記)

常世と現世

ここと海、山

モノ

現世(こちら ここ)

(皇)産霊

(日本書紀)

神への思い

魂 和魂・荒魂 幸魂・奇魂

水と産霊(ムスヒ)の信仰

アニミズム

太陽・月・水 季節

精霊 植物・動物 花鳥風月

生命源泉 自然恩恵 天候・天災

穢れを落とし、水によって生命が誕生する
水の中の靈魂を体内に入れ、体と靈魂を結合する。

魂の継承

清浄心 清明心

水をもたらす 山の信仰

霊(ヒ)の存在 清浄な水に宿る

原初共同体 モラル 自然への恩恵・畏怖 地域生活・祭祀 樹木・狩猟の地 雷・災害の地

全体構造

継承性

和合性

実用性

マナイズム 見えないチカラ

自然の法則・力

アニミズム

八百万信仰

自然共生・原生思想

循環思想

和合思想

現利思想

こころの表現

皇祖霊信仰

縄文・弥生習合

地域共同体

日本文化の原理

氏族祖霊の長

神々習合

定住自活型

神仏習合

大乘仏教との整合

密教

盧舎那仏 大日如来

空諦

中諦

仮諦

顕教

諸行無常

涅槃寂浄

諸法無我

モノに対するマナイズムの次に、生命の誕生と関係するカミ(神)、タマ(魂・霊)のアニミズムがある。「魂」と「霊」とは、霊にも御霊(みたま)の読みがあり、一般的にはその区別は定かではない。「魂」には主に神の作用として和魂・荒魂や天皇の鎮魂、魂振の用例がある。「霊」は、かつて「みずち/水霊」「のつち/野霊」「いかずち/雷」の「チ」、「わたつみ」「やまつみ」の「ミ」にも用いられ、神や自然の霊の意で、神秘的な力を表した。また、「霊」は祖霊、御霊(ごりょう)、怨霊など、神から人間などへ用例が拡大された。このことから、概ね、貴神崇敬性の「魂」、世俗汎用性の「霊」と区別できると考える。

元日本民俗学会会長の宮田登先生は「世界大百科事典」“神”の論述で、タマの顕著な特色は、それがつねに浮遊している霊であり、外来から何物かに付着し、またそこから去っていくという傾向をもっている、とする。(その点で**非人格的要素**として呪力・神秘力のマナが**モノ**からモノへと転移し得るマナイズムの要素が強い) タマは、**外来魂**といえる。たとえば稲のタマは**稲魂**とか**宇迦之御魂神**(記)倉稲魂(紀)と表現されている。稲魂が、稲穂や穀物に付着することにより豊穰がもたらされると考えられている。この稲魂が基礎となり、神話では保食神や登由宇気神(記)大気津比売神といった穀物神が成立する。

靈魂は、人間の身体に宿ると観念されている超自然的存在である。靈魂に対する観念は、人間に限らず動植物などの万物に霊が宿るとするアニミズムの観念に包含される。宗教の起源を論じたタイラーは、宗教のなかで最も簡単で原始的なものが「霊的存在」に対する信仰であると規定し、「霊的存在」には人間の身体に宿る靈魂、死霊、精霊という人間以外の霊や浮遊霊との三種類があり、靈魂や精霊の観念から神祇・神の観念に発展したと説いている。タイラーの説くアニミズム観念のうち、それが宗教の起源であるとする考えや進化論的な考え方に対しては各種の批判があり、また靈魂と精霊との区別も民族によって必ずしも一様でないことが明らかにされている。しかし靈魂や精霊に対する信仰は、原始や未開社会の宗教のみではなく、諸宗教においても重要な問題であり、靈魂・精霊などの遊離・憑依によって夢・幻覚・病氣・予言、幸・不幸などを説明することも多く、靈魂や精霊を操作したり、排除や憑依させたりすることによって治病、託宣をする宗教的職能者の活躍が世界各地で認められる。

古代日本においては、靈魂を**タマ**と呼び、魂・霊の漢字をあててきた。タマは人間の靈魂のみではなく、動植物などにも宿るものとされ、タマの遊離によって病氣や死が説明されており、タマの遊離を防ぐ**鎮魂**(たましずめ)、それとは逆に体内で静止した靈魂を活動させようとする**魂振**(タマフリ)などの儀礼が宮中で盛んに行われてきた。その意味では、日本人の靈魂観もアニミズムの概念に包摂できる。靈魂に限ってみても幾つかの区別がなされており、古代における**和魂**(にぎみたま)・**荒魂**(あらみたま)、**幸魂**(さきみたま)・**奇魂**(くしみたま)などの区別もその一つであるが、生者の遊離した靈魂を**生霊**(いきりょう)、死者の霊を**死霊**、子孫より祀られ非個人的な清らかな霊を**祖霊**とする区別も古からの一般的観念である。死霊は子孫からの祭祀を重ねられることにより祖霊となり、子孫を守護する存在となるものであるが、その一方で、非業の死をとげた者、この世に未練を残して死んだ者の霊は**御霊**(ごりょう)と呼ばれ、この世にさまざまな災厄をもたらすと信じられてきた。この**祖霊**と**御霊**という二つの観念が、日本人の靈魂観の基本をなしている。もっとも御霊という漢字をあててミタマと読み、天皇家の先祖霊を指す用法が『続日本紀』にみられる。しかし奈良時代末から平安時代にかけての頻発する政変・災害などを背景にして、非業の死をとげた者の怨霊が災厄をもたらすものとされ、貞観五年(八六三)、早良(さわら)親王以下の**怨霊**を鎮めるための御霊会が国家的レベルで執行された。また平安時代に災厄の要因とされたモノノケ(物怪)も、生霊・死霊・遊離霊などが主たる内容であったといえる。靈魂の処理は、**仏教**の普及によって次第に僧侶に委ねられるようになり、近世の寺請制度、寺檀関係の形成によって確立したものであるが、それでもなお、あるき巫女(みこ)・修験者・聖・行者などの下級宗教者の関与が認められ、とりわけ災厄の原因となる諸霊の処理に大きな役割を果たしてきた。

和魂と荒魂 奇魂 幸魂 古く日本人は神の靈魂の作用および徳用を異なる作用を持つ靈魂の複合によると考えた。すなわち、静止的な通常の状態における神霊の作用および徳用を(和魂)とし、活動的で勇猛、剛健、ある意味では常態をこえるような荒々しい状態における作用および徳用を(荒魂)と考えた。神霊も平常のときには一つの神格に統一され別個のはたらきは見せないが、時と場合に応じて分離し、単独に一個の神格としてはたらくものと信じられた。

古代的 感覚

自然の法則・力

見えないチカラ

他界(あちら ほか よそ むこう)

他界と現世

黄泉国 死後	他界から来訪する霊的 もしくは神の本質的存在	彼方の(常世)国 空・天 海・山
-----------	---------------------------	---------------------

神への思い **魂** 和魂・荒魂 幸魂・奇魂

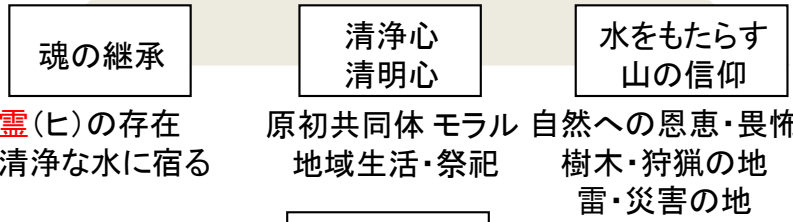
稀人概念 繫ぐモノ 風・鳥・柱

循環的概念(時間) 神籬社 現利的概念(場所)

現世とあの世 神の依代 ことと海、山

現世(こちら ここ)

太陽・月・水 季節	精霊	植物・動物	花鳥風月	生命源泉 自然恩恵 天候・天災
水と産霊(ムスヒ)の信仰				
穢れを落とし、水によって生命が誕生する				
水の中の靈魂を体内に入れ、体と靈魂を結合する。				



アニミズム 八百万信仰

ニギと**アラ**は対語で、(和妙(にぎたえ))<荒妙(あらたえ)>(《延喜式》)、(毛麤物(けのあらもの))<毛和物(けのにぎもの)>(《古事記》)などの用例がある。《古事記》《日本書紀》には、崇神天皇のとき、疫病のために多くの民が死んだのは大物主神のたたりであると見え、それは(荒魂)のたたりであると説かれる。

和魂だけをまつる場合も、荒魂だけをまつる場合もある。《日本書紀》では、神功(じんぐう)皇后の(三韓征伐)に際して、(住吉三神の和魂は王身(みついで)に従って寿命(みいのち)を守り、荒魂は先鋒(さき)となって師船(みいくさのふね)を導き守ろうとした)とあり、長門住吉神社には住吉三神の荒魂がまつられている(住吉大社の三神は和魂もしくは荒魂、両説がある)。ほかに荒魂をまつっている例としては、伊勢の皇大神宮(内宮)の別宮荒祭宮(あらまつりのみや)には天照大神の荒魂が、豊受大神宮(外宮)の別宮多賀宮(たがのみや)には豊受大神の荒魂がそれぞれまつられている。なお、神の靈魂の作用および徳用を言い表したのものには、ほかにも(奇魂(くしみたま))<(幸魂(さきみたま))>などがある。奇魂とはすべてのことを知りわきまえしむる魂で、幸魂とは幸いをもたらす恵みの魂で、ともに和魂から分化したものと考えられる。この幸魂・奇魂の語は、『日本書紀』神代宝剣出現章第六の一書で、大己貴神のそのはたらきを示すことで記し、『日本紀私記』で幸魂は「是左支久阿良之无留(さきくあらしむる)魂也」と註しているように、人を幸福にさせる神の靈魂で、奇魂は不思議な力を持った神の靈魂の意。

渡来文化への価値観について考えてみたい。それは、渡来人と共に、あるいは単独で流入、選択、習合しながら、我が国の文字、制度、信仰、風習、建築などに取入れられてきた。公には鎖国の時代があったにせよ、途切れない渡来文化への関心は、どんな心情がもたらしたものか？大陸、半島からの流入、そして、室町時代頃に起源し戦後に極まる欧米文化が記憶に新しい。その源流は、神籬(ひもろぎ)を依り代として降臨する神、その擬似として、稀に到来する人「稀人」への期待、歓迎する心情、信仰であると考えます。神社の原点、記紀神話、遺跡から、日本文化の重要な特性である、その源流について考察したい。



手掛かりとなる記述・・・神籬(ひもろぎ)

古来、日本人は自然の山や岩、木、海などに神が宿っていると信じ、信仰の対象としてきた。そのため、古代の神道では神社を建てて社殿の中に神を祭るのではなく、祭の時はその時々神を招いてとり行った。その際、神を招くための巨木の周囲に玉垣をめぐらして注連縄で囲うことで神聖を保ち、古くはその場所が神籬と呼ばれた。つまり、神籬とは、臨時に神を迎えるための依り代となるものである。

「ひ」は神霊、「もろ」は天下るの意の「あもる」の転、「き」は木の意とされ、神霊が天下る木、神の依り代となる木の意味。

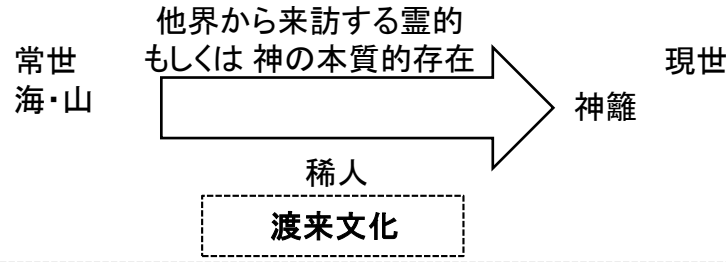
飛鳥時代以降、仏教寺院の影響を受けて、神社が建てられるようになり、祭りも社殿で行われるようになったが、古い形の神社は、建物の中に玉垣を設けて常盤木を立てて神の宿る所とし、祭るもので、後にこの常盤木を神籬と呼ぶようになった。「日本書紀」「葦原中国平定」(国譲り)では、祭祀のため高皇産靈尊が「天津神籬」「天津磐境」を造る場面が登場する。「天津磐境」は、社殿発生以前に神を祭るため、臨時的に設けられた小規模な石囲いの施設のことで、対して磐座は常設的な祭祀の対象で、神の座となる石である。

古事記にも邇邇藝命が高天の原の「天之石位」を離れ降臨する場面がある。貴船神社の「石庭」は天津磐境を想定した重森三玲の作。今日、神籬は地鎮祭などで用いられる。

その神籬を依り代として、至りくる神の擬似として「稀人」の語がある。折口信夫は、『まれびとの最初の意義は、神であつたらしい。時を定めて来り臨む神である。大空から、海のあなたから、或村に限つて、富みと齢と其他若干の幸福とを齎して来るものと、村人たちの信じてみた神の事なのである。』とした。琉球の「にらいかない」と同様に、古事記天の窟戸の条「常夜行く」の「常夜」とこよは「絶対の闇が続く」死霊の住み賜う国である。そこには人々を悪霊から護ってくれる祖先が住み、毎年定期的にその祖霊がやってきて、人々を祝福してくれるという信仰を持つ。(この信仰は、仏教公伝後、盂蘭盆会にも受継がれる)奈良時代には、光明的な富と齢との国として「常世」の「とこよ」に変化し、古事記垂仁期「多遲摩毛理」の派遣先、浦島子の行く先となる。と後述を要約する。「海のかなた」(海上世界観)から「天上」、「地上のどこか」へと、水平から垂直方向に、「常世」の場所は転化されつつ、神、そして稀人は、その様な処から到来すると考えられ歓迎された。同様の価値観で、海から来る渡来文化、渡来人を歓迎、和合習合したと考える。古事記の海人族の記憶 安曇/住吉・宗像氏族と名づく海洋集団の存在も影響したかもしれない。

・関係する 神事・・・禊祓 『禊祓 気吹放てむ その国は 海のかなたか 海の底』 延喜式卷八「祝詞「六月晦大祓祝詞」より 『吞ては 気吹戸に坐す気吹主と云神 根国底之国に気吹放てむ 如此気吹放ては 根国底之国に坐す速佐須良比咩と云神 持さすらひ失てむ』

・関連する 遺跡、建築・・・天と繋ぐ柱 縄文時代の遺跡に、環状列石(ストーンサークル)環状土籬(周提墓)環状木柱列(ウッドサークル)がある。これらは、天と繋ぐ柱として祭祀的存在とされ、「神山」「神奈備」信仰を経て 出雲大社の(心御柱)岩根御柱、伊勢神宮の心御柱、諏訪大社の御柱祭など、その様な縄文祭祀遺跡の今の姿と考えます。古事記「伊邪那岐命と伊邪那美命」より 於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿



「日本書紀 原文」和化漢文体 卷第二 神代下 第九段 第二節一書

「葦原中国平定」(国譲り)

於是、大己貴神報曰「天神勅教、慇懃如此。敢不從命乎。吾所治顯露事者、皇孫當治。吾將退治幽事。」乃薦岐神於二神曰「是當代我而奉從也。吾將自此避去。」即躬披瑞之八坂瓊、而長隱者矣。故經津主神、以岐神爲鄉導、周流削平。有逆命者、即加斬戮。歸順者、仍加褒美。是時、歸順之首渠者、大物主神及事代主神。乃合八十萬神於天高市、帥以昇天、陳其誠款之至。

時高皇産靈尊、勅大物主神「汝若以國神爲妻、吾猶謂汝有疏心。故今以吾女三穗津姫、配汝爲妻。宜領八十萬神、永爲皇孫奉護。」乃使還降之。即以紀國忌部遠祖手置帆負神定爲作笠者、彦狹知神爲作盾者、天目一箇神爲作金者、天日鷲神爲作木綿者、櫛明玉神爲作玉者。

乃使太玉命、以弱肩被太手繩而代御手、以祭此神者、始起於此矣。且天兒屋命、主神事之宗源者也、故俾以太占之卜事而奉仕焉。

高皇産靈尊因勅曰「吾、則起樹天津神籬及天津磐境、當爲吾孫奉齋矣。汝、天兒屋命・太玉命、宜持天津神籬、降於葦原中國、亦爲吾孫奉齋焉。」乃使二神、陪從天忍穗耳尊以降之。

これにより、大己貴神は「天神の申出は過分なほどに行き届いており、おっしゃるように致しましょう。私が治めているこの地は皇孫が治めてください。私は退(しりぞ)いて幽事(かくれたること=神事)を司りましょう」とお答えし、岐神(ふなとのかみ)を二神に薦めて、「この神が私に代わってお仕えます。私はこれから隠れます」と申されて、八坂瓊(やさかに=大きな玉)を身につけて永久(とこしえ)に隠れられた。

そこで、經津主神は岐神を先導役とし、國中を巡りながら平定していった。反抗する者がいれば斬り殺し、従う者には褒美を与えた。この時、従った神の長は大物主神(おほものぬしのかみ)と事代主神(ことしろぬしのかみ)で、八十萬神を天高市(あまのたけち)に集め、皆を伴って天に昇り、本心を述べさせた(=服従の誓をした)。高皇産靈尊は大物主神に「あなたが國神を娶るようなら、先の誓いを疑ってしまうので、私の娘の三穗津姫(みほつひめ)を妻にして欲しい。そして、八十萬神を率いて、永遠に皇孫を守って欲しい」と言われて、帰り降らせた。

紀國(きのくに)の忌部(いみべ)の祖神(とほつおや)の手置帆負神(たおきほおひのかみ)を作笠者(かさぬい)と定め、彦狹知神(ひこさちのかみ)を作盾者(たてつくり、たてぬい)とし、天目一箇神(あまのまひとつのかみ)を作金者(かなつくり)とし、天日鷲神(あまのひわしのかみ)を作木綿者(ゆふつくり)とし、櫛明玉神(くしあかるたまのかみ)を作玉者(たますり)とした。太玉命(ふとたまのみこと)が、『以弱肩被太手繩而代御手(よわかいなにふとたすきをかけて、みてしろとして=若輩ではあるが立派な襷を掛けて、天孫に代わって)、大己貴神を祀るようになったのは、これが始まりである。天兒屋命(あまのこやねのみこと)は『主神事之宗源者也』、太占(ふとまに)によって仕えさせた。

高皇産靈尊は「私は天津神籬(あまつひもろぎ)と天津磐境(あまついはさか)を造り、皇孫のために祭祀をしよう。

天兒屋命と太玉命は、天津神籬を守って、葦原中國に降り皇孫のために祭祀をしなさい」と命じ、二神を天忍穗耳尊に従わせて降らせた。



原理を仮説し、信仰・文化の歴史を辿っている。

その過程で「循環的なもの」と「現利的なもの」との間で「均衡作用」があることに気付いた。

仏教では、阿弥陀如来に対する薬師如来や観音菩薩。また、天台智顛の「三諦円融」空仮中の均衡は、それを受け入れることで浄土信仰や禅・日蓮誕生の土壌となった。闘争する武家に対して、静寂なる茶道や禅。茶道は、武家など日常に対する非日常を均衡させる作用。絵画では花鳥画に対する水墨画で均衡した。その**均衡**をもたらした源が自然の法則・力を潜在する日本文化であり、和合的な現象として現れたと考える。神仏習合はその代表であり、戦う神と鎮魂の仏である。

古事記、古代から中世まで日本文化の原理を仮説・検証してきたが、改めて逆に「均衡」を意識して古事記をふりかえると、「天之御中主神」と「月読命」がその作用で共通していることに気がつく。両者は同時に誕生した活動的な他の二者の間で、無作為な力・作用である「均衡」を象徴しているのではないか。「**天之御中主神**」と「**月読命**」、そして、火照命(海幸彦)を兄に火遠理命(山幸彦)を弟に持つ「**火須勢理命**(ほすせりのみこと)」も同様で、いずれも天津神・国津神ではなく、ただ存在を記される。

冒頭に提起した「**天之御中主神**」の意味、それは、自然の法則・力と考えた。なぜなら、そのあとに誕生した「**高御産巢日神**」は別名「高木神」、神の依ります神籬(神体木)、**天地を繋ぐもの**出雲大社、伊勢神宮の**心御柱**に表現される。そして、「**神産巢日神**」は、須佐之男命が殺した大氣都比賣から穀物の種を生み、また大国主を蘇らせる**循環再生**を表す。この神代再生は、**世代・時間の継承**を表現している。つまり、その頂天に語られる「**天之御中主神**」は、「**場所**」と「**時間**」の**概念**で、それぞれ「高御産巢日神」と「神産巢日神」とに繋がる、「自然の源、原理」であり、「法則・力」と考えた。その解釈は誤りではなかったが、その「自然の法則・力」がもたらした具体的な力、すなわち「**均衡作用**」とも言える。

とすれば、古事記の「**月読命**」の意味は何か？ その神も同じ作用をもたらし、国譲りを演出したと考える。**天照大御神に象徴される「太陽」と建速須佐之男命の「大地」、**昼間の太陽は大地を熱する。しかし、特に晴れた夜には、放射冷却で大地は逆によく冷える。太陽と大地の熱循環(交流)作用が高まっている状態だ。その晴れた夜には「月」がよく見える。太陽と大地の好循環は**月の作用**と考えたに違いない。自然に敏感で稲作など農耕が主な生活では、ごく自然な発想、信仰と考える。

「国譲り」の主体は大国主とその代理者や天照大御神に派遣された者たちだが、その前に月読命を登場させた意味は、「国譲り」の予言、伏線であろう。二者択一ではなく二者均衡の支点と考える。その存在は、いわゆる二極の「**間**」と表現したら理解しやすいかもしれない。

自然の法則・力から誕生した**和合の神格**が、「**天之御中主神**」であり、「**月読命**」である。では、その神話の基本思想は誰のものか？ 記紀編纂を勅命した人、武力で皇位についた天武天皇は語りづらい。最終的な編集者、藤原不比等にとっては、祖神の活躍が最重要であった。

その思想の草案者は、やはり「和」の思想家、**聖徳太子**と考える。古事記の神話部分などは「国記」を反映しただろう、そして十七条憲法とは、均衡させる作用、和合思想で結びつく。京都の**月読神社**は、顕宗3年(487)、阿閉臣事代(あへのおみことしろ)が朝鮮任那渡航の際、吉岐から分霊した元来は海神である。現在は**秦氏**松尾大社の摂社で、その境内に聖徳太子を祀る社がある。月読神社によると、**太子は月読神を崇敬したとされ、ここに祀られていることがその証である。**また、その仮定だと、聖徳太子以前に鏡威信が天照大御神の様な固有名詞で信仰化されていたことになる。

日本書紀は、推古28(620)年 推古天皇、聖徳太子による歴史書、「天皇記」「国記」「臣・連・伴造・国造百八十部等の本記」が編纂されたと記す。それら書物は、皇極5年(645)乙巳の変の際に、蘇我蝦夷の家とともに燃やされ、**船恵尺**(ふなのえさか)により「**国記**」のみ取り出されて残ったと記録する。**船恵尺**の子供が**道昭**で、入唐し玄奘と同じ房に住して学問し、招来した法相宗は奈良時代に栄えた。「国記」編纂の約100年後、712年「古事記」が、720年には「日本書紀」が撰上された。

ユング心理学の権威で元文化庁長官の**河合隼雄先生**『中空構造日本の深層』では、この無為な中央にのみ注目している。しかし日本文化の理解にとっての重要は、**両極の思想軸の発見、認識**である。

日本文化の原理



「産日、産霊(むすひ)」から「水を掬ぶ(むすぶ)」「結ぶ」へ

この言葉は、天皇の皇祖霊信仰、穀物の起源を語り、また仏教では先祖供養などを誕生させた。我が国の「生命誕生・魂の継承」の思想、「結ぶ」の源流を辿る。

「結び」の語源である『産巢日・産霊(むすひ)』は、日本の神信仰における重要な概念である。「産(むす)」は生じる、「日」は太陽、「霊(ひ)」は神秘的、靈的な働きを示す。つまり『ムスヒ』とは天地万物を生み出すチカラ、靈的な働きのことを言う。古代から続いてきた日本の信仰心である「森羅万象に神が宿る」という考え方の根幹をなす。もうひとつ、むすびには『水を掬ぶ(むすぶ)』という意味がある。水を両手のひらで掬って(すくって)飲む動作を『水を掬ぶ(むすぶ)』と言う。日本の古代信仰では水の中に「靈魂」を入れてそれを人間の体の中に入れることで、体と靈魂を結合させるという意味があった。その動作をした者は非常な威力を発揮して来る。この技法を「禊」とした。そして、この水の「掬ひ」と、何かを結んだり結合する意の「結び」には、深いつながりがある。内在するものを外部に逸脱しないようにした外的な形を「むすび」という言葉で表現した。水の掬ひの信仰は今ではもう廃れたが、このような動作を今日「結ぶ」と言うようになったのです。(折口信夫『産霊の信仰』より抜粋、要約)

① 宮中八神 と「産霊(むすび)」

宮中で祀られている八神 八神殿(はっしんでん)は、日本の律令制下で古代から中世の間に神祇官西院に設けられた、天皇守護の8神を祀る現在の「神殿」である。大同2年(807年)編纂『古語拾遺』と延長5年(927年)『延喜式』神名帳とで表記は異なるが、同じ神を指す。うち5神に「ムスヒ(ムスビ)」が含まれている。神産日神(カミムスビ)と高御産日神(タカミムスビ)と以下、産霊に関係する三柱と、その以外の三柱である。玉積産日神は『古語拾遺』の「魂留産霊」と同神で、「タマツメ(タマトメ)」は魂を体に留める(鎮魂)という意味である。生産日神の「イク」は「イキ」(生き、息)と同根で、むすひの働きを賛える語である。足産日神の「タル」は、その働きが満ち溢れている(足りている)様子を示す。

大宮売神は、宮殿の人格化とも内侍(女官)の神格化ともいわれ、君臣の上下を取り持つ神。

御食津神は、食物を司る神、事代主神は、言葉を司る神とされる(出雲系の事代主神とは異なるとされる)。

祭神8神は天皇に直接関わる重要な神々であるが、そのうちに皇祖神であるアマテラス(天照大御神)が含まれていない。

② 「高御産巢日神」について

「古事記」では誕生や葦原中国の平定の命令神としての多くの記述がある。「日本書紀」巻第二 神代下では「皇祖」とされ、出雲国造「神賀詞」では「高天の神王」(たかあまのかみおや)とされる。そのことから、原初の最高神はタカミムスヒ(高御産日神/高皇産霊尊)であったとする説がある。「日本書紀」で、アマテラスは第10代崇神天皇の時に宮廷外に出された(のち伊勢神宮)と記され、7世紀末頃にタカミムスヒは宮中に、アマテラスは伊勢に住み分けたとする説もある。崇神天皇以前の皇祖として、アマテラスと神武天皇を設定したのは天武天皇だろう。

③ 「火之迦具土神」(カグツチ:古事記)の別名「ホムスヒ」(火産霊:日本書紀)

火の神。火之迦具土神(ひのかぐつちのかみ;迦具土神)、火之夜藝速男神(ひのやぎはやをのかみ)、火之炫毘古神(ひのかがびこのかみ)と表記。『日本書紀』では、軻遇突智(かぐつち)、火産霊(ほむすひ)と表記される。イザナミは火の神カグツチを生んだことで陰部を火傷して亡くなった。それを怒ったイザナギはカグツチを斬り殺すが、その際に「山神八柱」や、「建御雷之神など雷火神や剣神ら八柱」が化生している。多数の神を生み出す神ということで「むすひ」の神なのであるが、ここから「むすひ」の、死んでもなお多くの命を生み出すという、生命の連続性の象徴という意味が見えてくる。「連続」とはすなわち「結び」(むすび)である。

和久産巢日神、ワクムスビもその時に誕生し、死んでから多数の穀物などを生み出している。『日本書紀』では稚産霊と表記される。神名の「ワク」は若々しい、「ムスビ」は生成の意味であり、穀物の生育を司る神である。食物神のトヨウケヒメ(豊受比売神)を生み、『日本書紀』ではその体から蚕と五穀が生じている。他の食物神の大気都比売(オオゲツヒメ)・保食神(ウケモチ日本書紀)などと同様に、稲荷神(倉稲魂命)(うかのみたま)と習合し、同一視されるようになった。オオゲツヒメは、神産みにおいてイザナギとイザナミの間に生まれたとの記述がある。高天原を追放されたスサノオは、鼻や口、尻から食材を取り出し、それを調理していたオオゲツヒメを、汚い物を食べさせていたのかと斬り殺した。その死体、頭から蚕、目から稲の種、耳から粟、鼻から小豆、陰部から麦、尻から大豆が生まれた。

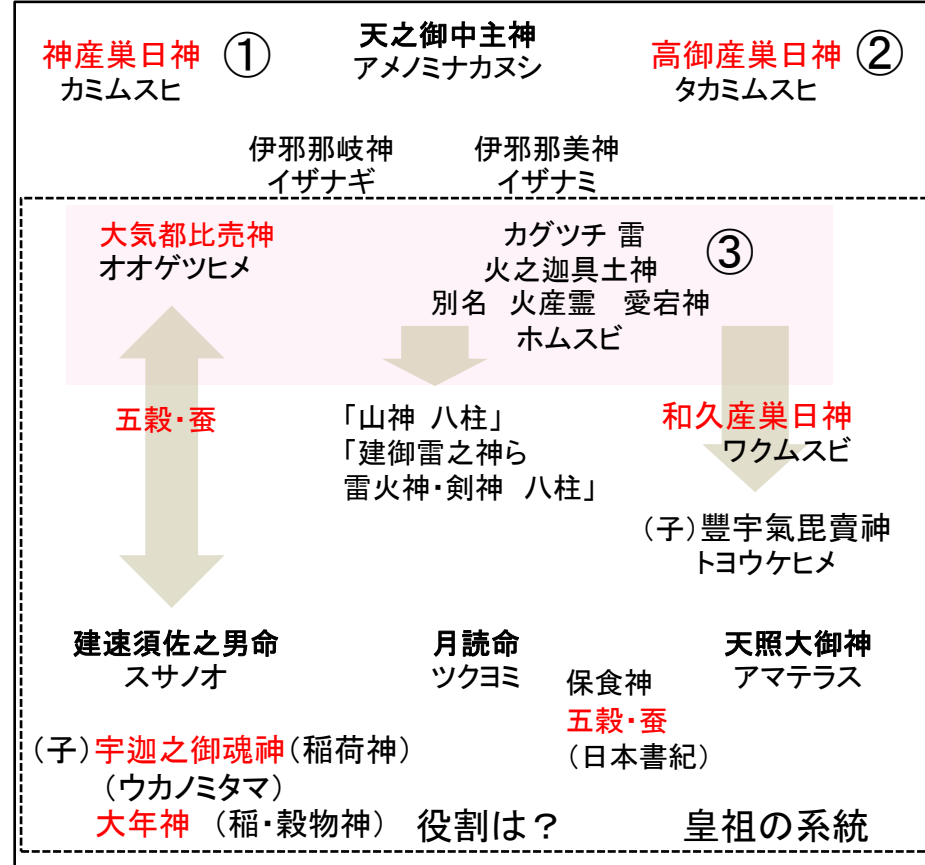
④ 熊野速玉大社：熊野速玉大神 熊野夫須美大神(むすび産霊神) 熊野本宮大社：家都美御子大神(食物神)

(参考) 忌部氏である齋部広成、大同2年(807年)編纂の『古語拾遺』によると、初代神武天皇の時に皇天二祖(天照大神・高皇産霊神)の詔のままに神籬を建て、高皇産霊・神皇産霊・魂留産霊・生産霊・足産霊・大宮売神・事代主神・御膳神を奉斎したといい、編纂当時の祭祀はこれに始まるという。△カムロギ・カムロミと産霊神 始源神の天之御中主が親で、高御産巢日が長男、津速産霊(ツハヤムスビ)が次男、神産巢日を三男とする。△氏族と産霊 高皇産霊神は伴・佐伯の祖、津速産霊神は中臣朝臣の祖、神皇産霊神は紀直の祖。

総角結び agemaki musubi 無防備な背後を守り、生命の緒をつなぎとめる護符としてつけられている。この総角結びは中央の結び目の形から「入型」と「人形」に分けられます。日本武具には「人形」を使い、部屋や調度品の装飾には入型が使われる。



古事記 「産霊 神々の位置付け」



ハレ・ケ 穢 禊・祓 タマ・モノ 殯(モガリ) 鎮魂 魂振 (招魂 みたまふり)



「**神産巢日神**」について 古事記の中には、古代生活における「循環」信仰、思想 も描かれている。黄泉の国(死者の国)を訪問した伊邪那岐命(いざなぎのみこと)が死の**穢れ**に触れ**禊祓**をした際に、**悪霊はらいや、時、病氣治療、道案内、食料、航海、漁労など十二の神が誕生した**という記述。そして、目耳鼻口陰尻から食物を出した大氣津比賣神を、須佐之男命(すさのお)が**穢れ**として殺した時に、神産巢日御祖命がそれら食物を 種とした記述がある。また、死んだオオナムチノカミ(大国主神)の下へキサカヒヒメ(赤貝)、ウムギヒメ(蛤)を派遣して再生させている。

それらは高御産日神にはない生命再生の象徴である。「ハレ」は清浄性・神聖性、「ケ」は日常性・世俗性、そして「**ケガレ**」は不浄性だが、ケガレは稲の霊力であるケが枯れた状態、つまり「**ケ枯れ=ケガレ**」であり、そのケガレを回復するのがハレの神祭り、その結果、生活に必要な活力が**誕生、再生**されるといった 循環の信仰、思想である。

「**ハレ**」と「**ケ**」は、日本人の生活リズムを表現した言葉で、漢字で書く場合ハレには「晴」、ケには「褻」の字が当てられている。民俗学者・柳田國男(明治8年～昭和37年)によって注目され、かつての日本人の生活にはハレとケの二つの時期があり、両者ははっきりと区別されていた、と主張。「ハレ」とは、神社の祭礼や寺院の法会、正月・節句・お盆といった年中行事、初宮参り・七五三・冠婚葬祭といった人生儀礼など、非日常的な行事が行われる時間や空間を指した。そしてハレ以外の**日常生活**(普段の労働や休息の時間・空間)が「**ケ**」であるとして、このハレとケとの**循環リズム**から日本の生活文化が分析できると唱えた。

非日常である「ハレ」の日は、単調な生活に変化とケジメをつける日であり、この日には人々の衣食住に大きな変化が表れ、例えば特別な日にのみ着用される「晴れ着」を着たり、家や部屋には普段とは違う装飾を施したり、酒・米・魚・餅・団子・赤飯・肉・寿司といった日常生活では口にしない食物が供せられるなど、非日常的な世界が設定された。ハレの場における酒は、味を楽しむより、酔う事によって共同体を構成する人々が連帯感を深める事が目的であったとされる。 今日使われる「晴れ着」「晴れ姿」「晴れ舞台」などの言葉は、いずれもハレの概念に基くものである。一方、ケとは、日常生活そのものを指し、普段着を意味する「褻着」(けぎ)や日常食を意味する「褻稻」(けしね)などの民俗語彙から抽出された概念といわれる。柳田は、このハレとケの循環の中に稲作を基礎とする民族生活があった事を指摘、江戸時代後半以降は飲酒、魚食や肉食が日常化し、人々の服装も色鮮やかになっていくなど、ハレの日常化が進み、近代化と共にその両者の区別が曖昧になってきている事を指摘した。

古代の「死生観」において、「**ケガレ**」る魂「**タマ**」は生霊であり、生霊が抜けた肉体が行く世界が「**モノ**」である。縄文時代には屍を村外に遠ざけたことから、「ケガレ」の意識が強く表れている。弥生時代には、土器など死者への副葬品が後期にかけて増加する。そして、この副葬品は、古事記の葬儀に登場する「殯」に用いられたと考えられている。「**殯**」とは、死の直後「**タマ**」はすぐには「**モノ**」の世界に行かず滞留すると考えられ、「**鎮魂**」の歌舞、辞で「**魂振**」れをして屍に呼び戻し、死者と生者の「**タマ**」を結合する儀式である。「魂振」の意義は、弥生時代の祖霊信仰、飛鳥時代の皇祖信仰に基づく、地位と資産の継承にある。 臣下が「**誅**」(るいしのびごと)すなわち忠誠・服従する様子、またその儀式の場所として、飛鳥浄御原宮内の「御窟殿」(みむろでん)の存在が、「**魂振**」と共に**日本書紀の天武期に多く記録されている。壬申の乱のあとの混乱鎮静**への取組が伺われる。

「**魂振**」については、祭祀を司る**物部氏**の記事が明確である。以下、石上神宮での行事より(同社には、鎮魂八神と**大直日神**(おおなびのかみ)を祀る天神社がある)饒速日命の御子様に宇摩志麻治命(うましまじのみこと)がおられました。宇摩志麻治命は、初代の天皇である神武天皇と皇后の聖寿の長久を祈られる時、天璽十種瑞宝を用いて鎮魂祭(みたまふりのみまつり)を斎行されました。これが**鎮魂祭**の初めとなったことが『先代旧事本紀』に記されています。この物部氏の鎮魂は、御魂を振動させる「**御魂振り**(みたまふり)」と「**玉の緒**」を結ぶことが中心です。「玉の緒」とは玉を貫きとめる緒(ひも)のことで、玉(たま)と同音の「魂(たま)・命」を結び留めることを表しています。現在も、石上神宮では11月22日夜に「**鎮魂祭**(ちんこんさい)」を、また節分前夜に「**玉の緒祭**(たまのおさい)」を斎行しています。



「古事記原文」 変体漢文 岩波古典文学大系本(訂正 古訓古事記) 近代デジタルライブラリー 国宝「真福寺本」照合済

「**伊邪那岐命 と伊邪那美命**」(前略)是以伊邪那伎大神詔、吾者到於伊那志許米上志許米岐此九字以音。**穢國**而在祁理。此二字以音。故、吾者爲御身之**禊**而、到坐竺紫日向之橋小門之阿波岐 此三字以音。原而、**禊祓**也。故、於投棄御杖所成神名、衝立船戸神。次於投棄御帶所成神名、道之長乳齒神。次於投棄御囊所成神名、時量師神。次於投棄御衣所成神名、和豆良比能宇斯能神。此神名以音。次於投棄御禪所成神名、道俣神。次於投棄御冠所成神名、飽咋之宇斯能神。自宇以下三字以音。次於投棄左御手之手纏所成神名、奧疎神。訓奥云於伎。下效此。訓疎云奢加留。下效此。次奥津那藝佐毘古神。自那以下五字以音。下效此。次奥津甲斐辨羅神。自甲以下四字以音。下效此。次於投棄右御手之手纏所成神名、邊疎神。次邊津那藝佐毘古神。次邊津甲斐辨羅神。右件自船戸神以下、邊津甲斐辨羅神以前、**十二神者**、因脱著身之物、所生神也。於是詔之、上瀨者瀨速、下瀨者瀨弱而、初於中瀨墮迦豆伎而滌時、所成坐神名、八十禍津日神。訓禍云摩賀。下效此。次大禍津日神。此二神者、所到其**穢**繁國之時、因污垢而所成神之者也。次爲直其禍而所成神名、**神直毘神**。毘字以音。下效此。次**大直毘神**。次**伊豆能賣神**并三神也。伊以下四字以音。次於水底滌時、所成神名、底津綿上津見神。次底箇之男命。於中滌時、所成神名、中津綿上津見神。次中箇之男命。於水上滌時、所成神名、上津綿上津見神。訓上云宇閑。次上箇之男命。此三柱**綿津見神者**、阿曇連等之祖神以伊都久神也。伊以下三字以音。下效此。故、**阿曇連**等者、其綿津見神之子、宇都志日金拆命之子孫也。宇都志三字以音。其底箇之男命、中箇之男命、上箇之男命三柱神者、**墨江之三前大神**也。於是洗左御日時、所成神名、**天照大御神**。次洗右御日時、所成神名、**月讀命**。次洗御鼻時、所成神名、**建速須佐之男命**。須佐二字以音。

「**天照大神 と須佐之男命**」(前略)故爾各中置天安河而、宇氣布時、天照大御神、先乞度建速須佐之男命所佩十拳劔、打折三段而、奴那登母母由良邇、此八字以音。下效此。振滌天之眞名井而、佐賀美邇迦美而、自佐下六字以音。下效此。於吹棄氣吹之狹霧所成神御名、多紀理毘賣命。此神名以音。亦御名、謂奥津嶋比賣命。次市寸嶋上比賣命。亦御名、謂狹依毘賣命。次多岐都比賣命。(中略)又食物乞大氣津比賣神。爾**大氣都比賣、自鼻口及尻**、種種味物取出而、種種作具而進時、**速須佐之男命**、立伺其態、爲**穢**汚而奉進、乃殺其大宜津比賣神。故、所殺神於身生物者、於頭生蠶、於二目生**稻種**、於二耳生**粟**、於鼻生**小豆**、於陰生**麥**、於尻生**大豆**。故是**神産巢日御祖命**、令取茲、成種。

「葦原中國の平定」天若日子の葬儀

(前略)此時阿遲志貴高日子根神自阿下四字以音。到而、弔天若日子之喪時、自天降到、天若日子之父、亦其妻、皆哭云、我子者不死有祁理。此二字以音。下效此。我君者不死坐祁理云、取懸手足而哭悲也。其過所以者、此二柱神之容姿、甚能相似。故是以過也。於是阿遲志貴高日子根神、大怒曰、我者愛友故弔來耳。何吾比**穢**死人云而、拔所御佩之十掬劔、切伏其喪屋、以足蹶離遣。此者在美濃國藍見河之河上、喪山之者也。其持所切大刀名、謂大量、亦名謂神度劔。

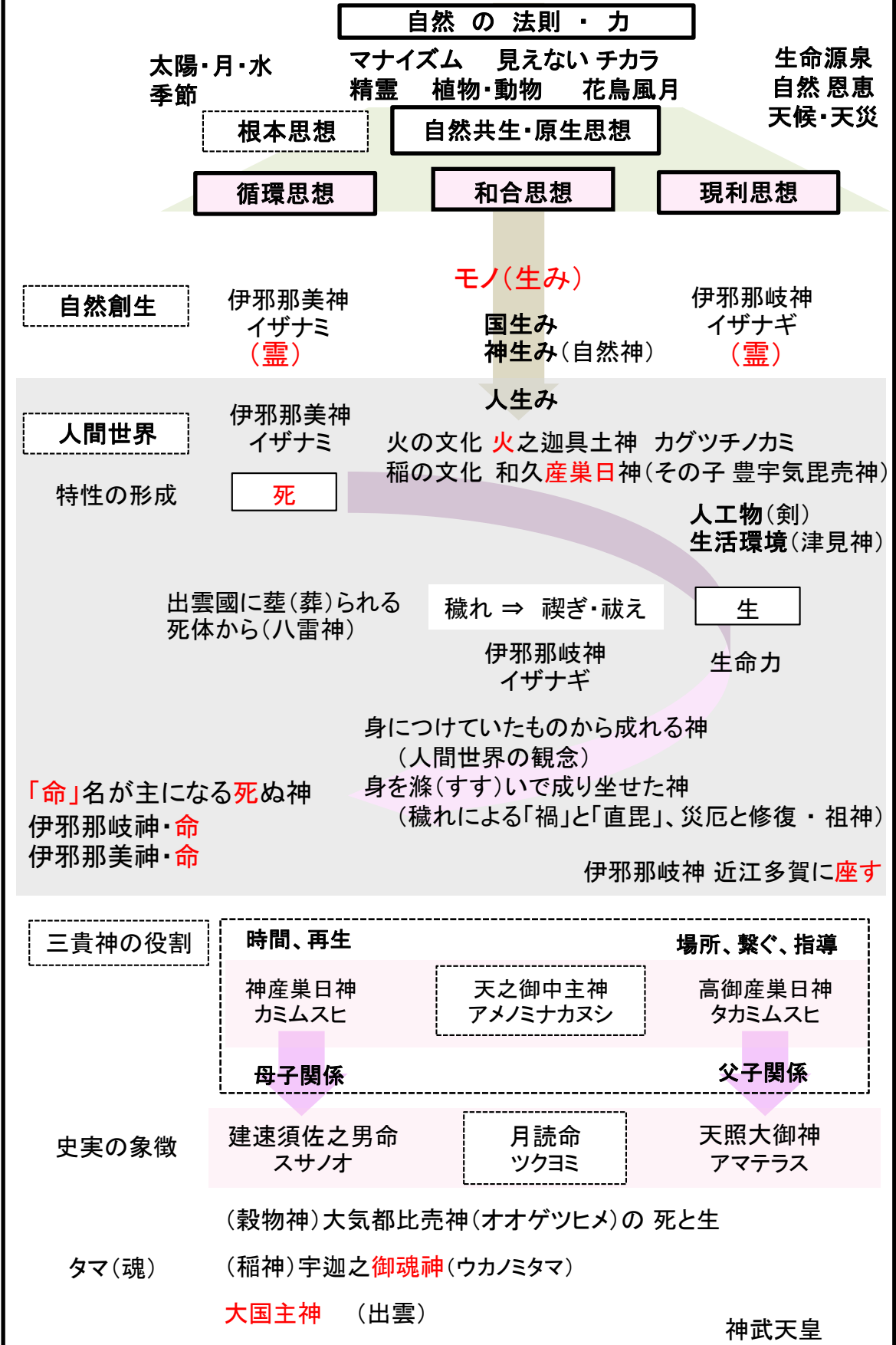
古事記には、自然創生、人間世界、そして異なる文化の習合として三貴神の物語が描かれている。
伊邪那岐(いざなぎ)神と**伊邪那美**(いざなみ)神は、古事記の序文で「**二靈**為群品之祖神」と記される。
万物の生みの親としてその神名に「**靈**」の文字が使われ、国生みや神生みを成す。ここで重要なことは、その二神によって「**死**」と、「**生の穢れ**」と「**再生**」が描かれていることである。死後、黄泉の国に行った伊邪那美神と、そのから引き返した邪那岐神との間で、「**千引き石**」を境に人間の生死を宣言している。伊邪那美神は、神として始めて死ぬが、伊邪那岐神は多賀に坐す(古事記)、もしくは淡路に隠れた(日本書紀)とされる。また人間を自然と断絶せず「**青人草**」「**人草**」と表現している。
 これらの伊邪那岐神と伊邪那美神との物語で、「**靈**」と関係して記述される一連の内容は、我が国文化の古層として、「**自然と人間との共通概念**」を論証するために重要な手がかりである。

柳田國男の研究者で石文化研究所の小畠宏充所長は著書『日本人のお墓』で、**伊邪那美**を「**自然**」(ものの次元)、**伊邪那岐**を「**文化**」(たまの次元)と解釈し、「**千引き石**」を文化的な墓石の原点とする。

最後、其妹伊邪那美命、身自追來焉。爾**千引き石**引塞其黄泉比良坂、其**石**置中、各對立而、度事戸之時、伊邪那美命言「愛我那勢命、爲如此者、汝國之**人草**、一日絞殺千頭。」爾伊邪那岐命詔「愛我那邇妹命、汝爲然者、吾一日立千五百産屋。」是以、**一日必千人死・一日必千五百人生也**。故、號其伊邪那美神命、謂黄泉津大神。亦云、以其追斯伎斯此三字以音而、號道敷大神。亦所塞其黄泉坂之石者、號道反大神、亦謂塞坐黄泉戸大神。故、其所謂黄泉比良坂者、今謂出雲國之伊賦夜坂也。

記・紀神話の全体は、天上の神々の世界である高天原(たかまがはら)に淵源する皇室の神聖性と、皇室による国土と国民の支配の正統性を説明する目的で貫かれ、多様な話にもそれぞれに皇室の王権神話の一部としての意味と位置付けが与えられ、これが日本神話の一つの大きな特徴となっている。天地開闢(かいびやく)の後にはまず活躍を語られるのは、**伊邪那岐神・命**と**伊邪那美神・命**で、原初には一面の海だった下界に、最初の陸地の淤能碁呂嶋(おのごろじま)を作ってその上に降り、兄妹で結婚してまず日本の国土の島々を生み、次に多くの神々を生んだが、しまいには火の神を生んだために伊邪那美は、火傷を負って死んだ。伊邪那岐は、地下の死者の国の黄泉国まで妻を連れ戻しに行くが、失敗して地上に帰り禊(みそぎ)をすると、最後に左の目から**天照大御神**が、右の目から**月読命**が、鼻から**建速須佐之男**(すさのお)命が誕生し、**天照大御神**は高天原を、**月読命**は夜之食国を、**建速須佐之男**は海原を支配せよと、伊邪那岐から命令される。だが素戔嗚尊はこの命令を聞かずに泣き続け、怒った父に追放されると、天照大御神に会いに高天原に昇って行き、そこで邪心のないことを証明するために誓約(うけい)をし、姉神は弟神の十拳劍から三女神を、弟は姉が身に帯びていた珠から**天之忍穗耳**(あめのおしほみみ)命ら五男神を出生させる。**建速須佐之男**はそれから、高天原で乱暴を働き、天照大御神が怒って天石屋(あまのいわや)に閉じ籠る。太陽が隠れたため、世界が**常夜**(とこよ)になる。天神たちは相談して、皇室の神器となる八咫鏡(やたのかがみ)と八坂瓊(やさかに)の玉を作って神に掛け、天宇受賣(あめのうずめ)命が踊りながら乳と陰部を露呈し神々を哄笑させるなど、賑やかな祭をし、天照大御神を天石窟から招き出した上で、**建速須佐之男**を下界に追放する。**建速須佐之男**は出雲で八岐大蛇(やまたのおろち)を退治し、その尾から出た草那芸劍(くさなぎのつるぎ)を天照大御神に献上し、生命を助けてやった櫛名田比賣(くしいなだひめ)と結婚する。その子孫の**大国主**(おおくにぬし)神が、**神産巢日神**の手の指の間から漏れ落ちて下界に来た不思議な小人の神の**少名毘古那**(すくなびこな)神と兄弟になり、協力して**国造り**をすると、天照大神が**天忍穗耳**命をその国に降らせ支配させようとして、大国主神のもとにつぎつぎに使者を派遣し、命令を伝えさせる。大国主神が最後に使者に来た**建御雷之男**(たけみかずち)神らの神威に屈し、ついに**国譲り**を承知すると、天照大神は**天忍穗耳**命の願いを聞き、この神の代りに誕生したばかりのその子どもで自分の孫の邇邇藝命(ににぎのみこと)に、三種の神器を授け、五伴緒(いつとものお)命らの天神たちを従わせ地上に降らせる。この天孫降臨の一行は、出迎えた猿田毘古(さるたひこ)神の案内で、日向の高千穂峯(たかちほのたけ)に降る。それから邇邇藝命と、その子で山幸彦の**火遠理命**(ほおりのみこと)、さらにその子で神武天皇の父となった**鸕草葺不合**(うがやふきあえず)命まで、三代の皇祖神は日向に住み、その物語である日向神話が記紀神話の終幕を構成し、このあと神武天皇の東征となる。

日本文化の原理



大国主神は、出雲国造(いづものくにのみやつこ)の祖神で、今日、出雲大社の祭神である。そして、京都、愛宕神社の奥宮に祀られていることも、見逃してはならない。

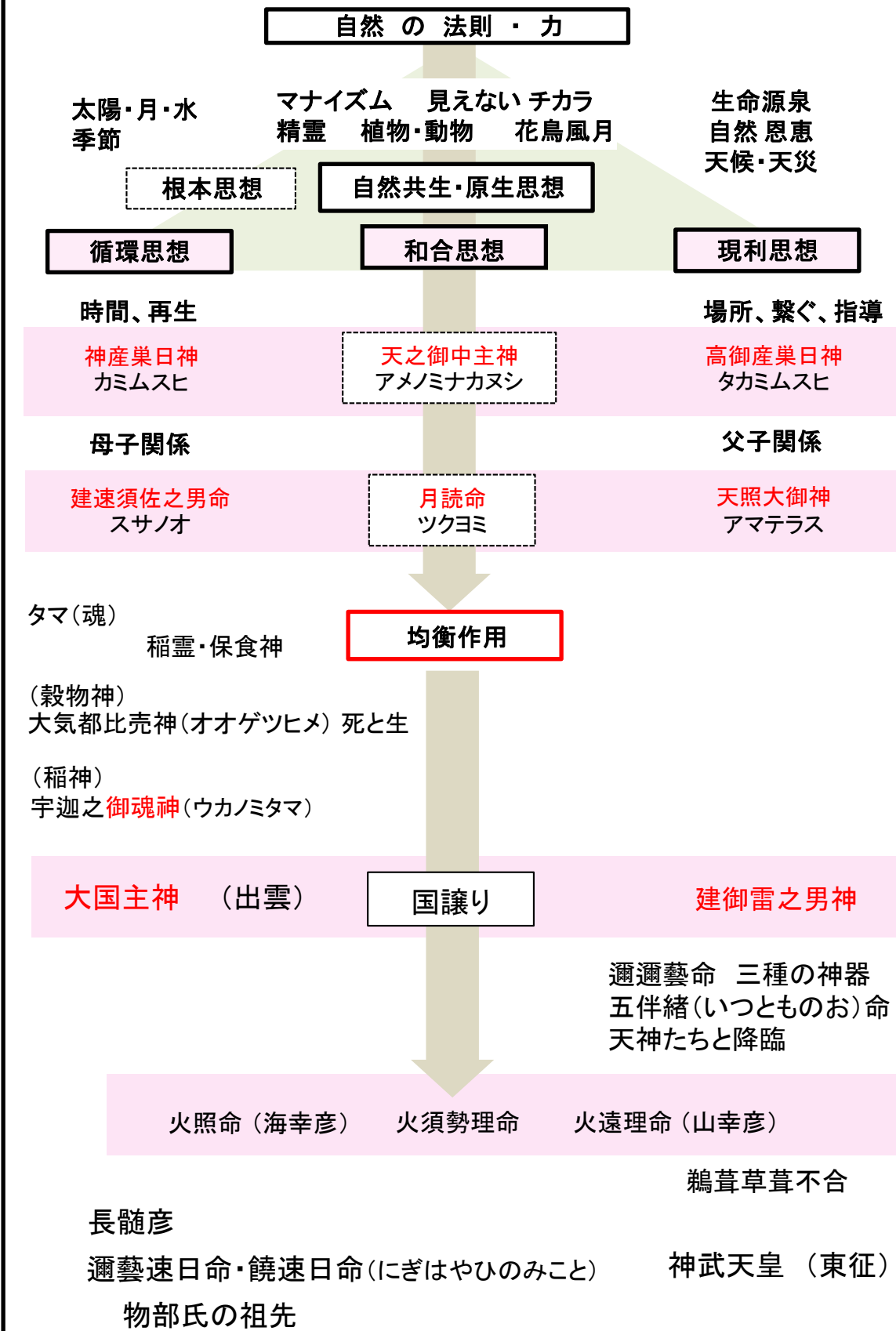
大国主神は、須佐之男の系統として、神産巢日神の助けによって 生死復活を繰り返し、国造りに至る。大国主神が誕生する前には、天上界から追われた須佐之男に食事させようとした大気都比売神(オオゲツヒメ)の死によって、蚕、稲の種、粟、小豆、麦、大豆が生まれた。またその系統には、宇迦之御魂神があり、この神もまた、今日、伏見稻荷大社(下社)の祭神となっている。つまり片や高御産巢日神と天照大御神の系統に対し、時間軸の継承、循環的系統として、再生しつつ受け継がれる稲霊・保食神の系統を形成、国造りする大国主神登場の基盤を成している。(紀:倉稲魂命イザナギイザナミの子) 迦れば、イザナミの死から誕生した和久産巢日神の子、豊宇気毘売(とようけひめ)神も保食神としてそれらと同性質の神であり、もちろん天照大御神を祀る伊勢神宮内宮に対し外宮の豊受気毘売神である。これらに、我が国国家草創期における二つの文化・思想の習合関係が表現されているわけである。

大国主神は、古事記では、大穴牟遲神(おおなむちのかみ)、葦原色許男神(あしはらのしこおのかみ)、八千矛神(やちほこのかみ)、宇都志国玉神(うつしくにだまのかみ)などの別名がある。日本書紀で別名は、大物主神(おおものぬしのかみ)、大己貴命(おおなむちのみこと)、葦原醜男(あしはらのしこお)、八千戈神(やちほこのかみ)、大国玉神、顕国玉神(うつしくにたまのかみ)とする。根(ね)の堅州国(かたすくに)(死者の国)の須勢理毘売(すせりひめ)ほか、八上比売(やがみひめ)、沼河比売(ぬなかわひめ)など多くの女性を妻とした。多くの別名は、各地で各段階で発生した諸神格が、日本神話の総合期にまとめあげられたもので、その中で、神名として出雲大社などに残ることから、大国主神は最も新しい成立と考えられる。歴史の現実として日本は本来多数の原始国家に分かれ、それぞれに小さい国主がいたが、古代日本の統一が大きく進んだと思われる。その統一のありようは、縄文から弥生時代の、出雲から紀州熊野、北陸、中部地域における、土器種別や、磐座祭祀、銅鐸出土の共通性に見出される。

ちなみに、大国主命の別名、大物主神は、大国主命の幸魂(さきみたま)・奇魂(くしみたま)とされている(日本書紀)。三輪(みわ)氏の祖神で、この神には勢夜陀多良比売(せやだたらひめ)や倭迹迹日百襲姫命(やまとととひももそひめのみこと)との聖婚を語られている(古事記、日本書紀)。蛇神、雷神でもあり、農耕神でもある。三輪山の「山の神」で、大神(おおみわ)神社(奈良県)の祭神である。三輪山は磐座祭祀の地で、その西方の唐古・鍵遺跡などからは銅鐸が出土している。「かなび山」の名称をもつ山は諸国にあるが、三輪山がもっとも著名である。このほか大和(奈良県)など近畿から出雲(島根県)に多いため、出雲系の神を祀ったものであろうとする説が有力である。

『古事記』の大国主神を主人公とする物語は、(1)オオナムチが種々の苦難、試練を克服して大いなる国主となる物語、(2)ヤチホコの神の妻問い物語、(3)少名毘古那神(すくなびこなのかみ)(少彦名命)との協力による国作り物語、(4)葦原中国の主として天津神に国譲りする話の4部分からなる。(1)において、オオナムチには多くの兄(八十神(やそがみ))がいたが、1日かれらは因幡(いなば)の八上比売(やかみひめ)のもとへ求婚に出かける。途中赤裸(あかはだ)の兎と出会い、八十神が兎をいっそう苦しめたのに対しオオナムチは懇切に療法を教えて救い、よって袋を背負い従者の身なりをした末弟のオオナムチがヤカミヒメを得ることとなった。それを怒った八十神はオオナムチを欺いて二度にわたり殺すが、そのつど母神の刺国若比売が神産巢日神にお願いしたりして、助けられて蘇生する。そのあと紀の国の大屋大屋毘古神から助けられて、祖神スサノオのいる根(ね)の国へ逃れる。根の国ではスサノオから課された蛇の室(むろ)、むかで・蜂の室、野焼きなどの難題を解決した。葦原中国との境の黄泉比良坂まで追いかけてきたスサノオから、スサノオの娘須勢理毘売命を妻となし、またスサノオから奪った宝器(生大刀(いくたち)生弓矢(いくゆみや))を、正式に授かった。大国主神は、それをもって八十神を追い払い初めて国を作った。つまり、大国主神は、生死復活を繰り返して、その国造りに至るわけである。

日本文化の原理



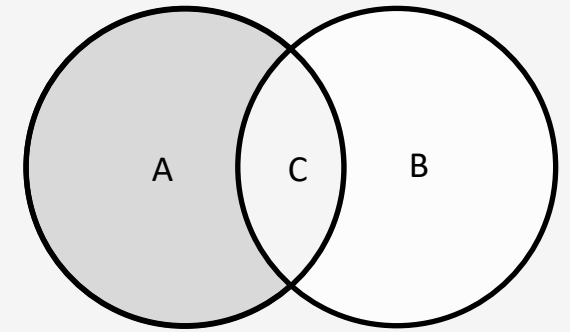
平安京の都市構想に、中国の「四神相応」理念があったことは、よく知られている。現国際日本文化研究センター所長の小松和彦先生と、写真家の内藤正敏先生との対談による著書『鬼がつくった国・日本』の中で、そのことを「陰陽道の呪術によるほどこし」とする。しかし、平安京の創始以前に遡ると、その外縁たる山々に観音菩薩が祀られたことは、今では遠い記憶となっている。著書の中でも語られている「まつろわぬ者」としての象徴、役行者(役小角)から始まる修験者たちによってそれは祀られた。そのうち、観音信仰は、我が国仏教の一つの柱として「現世利益」の代表となってゆく。ではなぜ、彼らは山に**観音菩薩**を祀ったのか？ その手掛かりは、上賀茂神社や、松尾大社、伏見稻荷大社にある。それら神社の原初たる信仰は、背後の山頂の「磐座」を依り代とする、いわゆる**山の神**、神山信仰である。「神聖なる山々に立ち入り、呪的な力を獲得しようとした者たちが修験者であった」(同著P77)山がもたらす**水**は、観音菩薩の典拠『法華経』で、平等な慈悲の比喩(薬草喩品第五)として語られ、特に日本において、長谷寺の本尊を代表に「水瓶」を持つ観音菩薩が多い。もちろん、水は生活に欠かせない命の源泉である。「磐座」への信仰は、古事記のスサノオやオオクニヌシに象徴される「出雲文化」として、「銅鐸」の出土と同様に、現在の島根、出雲から和歌山、熊野にわたる広域に、その存在を確認できる。そして彼らは、アマテラスたち天孫の立場からは、まさに「まつろわぬ者」であり「国譲」で封印され、崇神天皇を経て習合したと、古事記も語る。前述の役行者(役小角)は、大和の高鴨神社地域を出自とするその出雲の鴨族であり、山を媒介に復活したのであった。上記「陰陽道」の安倍清明もまた、衰退した古代豪族の末裔である。大化改新の時代の阿倍内(倉梯)麻呂や、奈良時代の阿倍仲麻呂を最期に、藤原氏の陰となっていた。いわば「闇」にいた一族の者が、平安時代に陰陽師として同じく復活した。平安京創建当時の御霊信仰、菅原道真死後の怨霊信仰は、安倍清明活躍の前提であった。それら潮流は、「闇」がもたらした「闇」からの復活と言える。ここでいう、これらの「鬼」の痕跡は、一見、隠れている。しかし、よく見ると確かに実在する。その古層たる痕跡を見ようとしないと、日本の歴史も見えてこない。日本文化の源流もまた、隠れている。

『鬼がつくった国・日本』で、「鬼」とは、説話などで語られる「想像上の鬼」、もしくは周囲や自分自身がその子孫と信じていた「実在の鬼」で、反体制的で村落共同体の外にいる人々のこととする。(同著P11)同著は、特に後者の「**実在の鬼**」について語られている。その「鬼」たちは、中央から排除された者としての意識で、またある時は、天皇と結びついた起源伝承を持つ意識、その**二面性**をアイデンティティとする。「鬼」は、山、海、谷、坂でネットワークし、京都周辺においては紀州熊野を拠点とし、時に体制側の後白河法皇たちと結びつく、とする。(同著P176)小松先生の著書『異世と日本人』は、さきほどの前者、「**想像上の鬼**」について語られている。人々の恐怖の対象が、**自然**・道具・人間・自分自身へと、意識する対象が狭窄、縮小しつつ、そのころに出現した「鬼」、「妖怪」とする。そして、多くの異界をめぐる物語の舞台が、「妖怪や霊的存在の世界」としての「異界」と「人間界」の双方に**重なる**「両義性を帯びた領域」である、とする。(祀り上げている霊的存在が「神」で、そうではなく人間の制御外に在る霊的存在が「妖怪」)また、同センター名誉教授の久野昭先生の著書『日本人の他界観』では、**死後**の意味としての「他界」は、ほとんど現世と隣り合わせといってもいいくらい意外に**親しい**世界、とする。そして、その理由を日本という精神風土に長く続いてきた他界とのかかわり、とする。

つまり、我が国で、「闇」「異界」、そして「他界」は、「実在」「想像」を問わず、「人間界」(この世)と明確に断絶した世界ではない。その世界の「実在」や「想像」の「鬼」や「神」、「妖怪」、さらに「死後の世界」は、「日常」に対し、ある部分で重層した「非日常」的な意識の世界に存在したと言える。その非断絶・重層の理由は何であろうか？ 当論は、それを**自然環境**と考える。なぜなら、小松先生の「想像上の鬼」つまり、人々の恐怖の対象が「自然」から始まり、また、久野先生のいう「日本という精神風土」は、自然世界の盛衰・生死が身近である風土がもたらした、「無常感」をもつ精神を示す、と考えるからである。非断絶・重層の理由について、当論では、別途、**マナイズム**の「モノ」とアニミズムの「霊」が、それぞれの**見えないもの**、**存在**という**共通性**を媒介に、同一視されていくところにあるのではないかと仮説したが、まさに自然環境がもたらした観念である。**マナイズム**とは、**自然物**、**自然現象**に対する尊敬や畏怖の態度の総称であり、これはまた、まさに現代的な課題でもある。小松先生は、鬼や妖怪の棲む「闇」や「異界」は、人間に対して「**道徳**」の役割を持ち、人間社会の矛盾や自身の不正、罪悪感からくる恐怖心の現れとする。そして、現代は、「空間」や「時間」に画一的に「**光**」があり、その「見える(あるいは、見えると思ひこんでいる)時代」に、見えない「闇」や「異界」の意義を指摘される。本論は、日本文化の理解のため、「日本人のころ」を構造化するものである。くしくも当論でも、自然の「見えないチカラ」に注目し、「他界」を広義的に「空間」「時間」の両意でとらえ、そして「この世」との関係を示すところから始まる。日常では見えない、歴史の中で培われた「日本のころ」を、因果関係によって構造化することが、本論の目的である。

小松和彦先生 著書『異世と日本人』より

「異界をめぐる概念図」



A: 「妖怪の世界・霊的存在の世界」としての「異界」
 B: われわれの世界「人間界」
 C: 双方に**重なる**「両義性を帯びた領域」



「日本文化の構造」との関係 発展的普遍化



平安時代、安倍晴明(921~1005)は、藤原兼家(929~990)から藤原道長(966~1027)の時代に活躍した。

その時代の、陰陽道周辺の信仰思想を構造化した。
 「密教」は、その基礎とする信仰は自然と密接することから、呪術的な「見えないチカラ」に位置付けられる。
 「鬼」などの異界と通交すると認識された「陰陽道」や、「山中」という都に対する他界を拠点とする「修験道」とともに、異界を含む広義の「他界的信仰」世界を形成する。
 その構造全体は、怨霊への恐れや浄土への願いから惹起されたものであり、この世から見た「あの世」への心情を基礎とする。つまり、それは「死」を媒介に「霊」や「来世」に対する「循環思想」から発生したものとして類別できる。そして、「修験道」は、その活動や目的から現世利益的な信仰であることから「現利的信仰」に、一方「陰陽道」は、「占い」や「霊」など時間軸を主とすることから「循環的信仰」に位置づけられる。
 つまり、その構造の中において、それぞれは「循環思想」と「現利思想」として、二者均衡していることが重要である。この構造は、「異界」「他界」に対する人々の心情をさらに強め、鎌倉時代の「無常」への回路となる。
 一方、この構造全体とは別に、外側で均衡するものとして、観音信仰があったことに注目しなければならない。これら重層する均衡構造が、日本文化信仰の**典型**である。

900年代初頭の古今和歌集以来、世相は「はかなし」の時代であった。さらに平将門と藤原純友の承平・天慶の乱(931~947)があり、都の不安は拡大した。空也は、天慶元年(938)36歳で、愛宕山中から降りて、京都市中を巡りながら民衆に念仏を勧め、阿弥陀聖とも市聖(いちのひじり)とも呼ばれた。
 天慶3年(940)平将門の乱に際し、真言密教である広沢遍照寺の寛朝が空海作不動明王を下総に移管し、**調伏**祈願をしている。源信(942~1017)は永観2年(984)11月に『往生要集』の執筆を始め、翌年4月に完成した。その序に「濁世末代」の語があるように、末法が認識され始め、そのことは人々の「無常感」をさらに強め、浄土信仰を本格化してゆく。また藤原道長は法成寺にて、密教修法の五大明王を本尊とする五壇法を以て、現世利益として怨霊調伏を祈願している。宮廷文学も「もののあわれ」に向う時代であった。1000年頃の『源氏物語』に「**宿世**」の語があるように、この世にいながらにして他界感、異界感が拡大した。そのような時代が、安倍清明活躍の背景にある。

さらにその時代の前後を俯瞰すると、「怨霊信仰」や、「天皇と修験道」との関係がある。

宇多天皇は踐祚(即位)直後、仁和3年(887)、藤原基経に閔白させる詔を降したが、基経の儀礼辞退に対する重ねての優詔の文言「阿衡」の解釈をめぐり、いわゆる「阿衡の紛議」が起り、藤原氏の専横に対する不快の念を強めた。その事情もあり、天皇は、菅原道真を重用した。しかし、醍醐天皇譲位後、基経の嫡子である藤原時平らは、道真の女が天皇の弟齊世親王の室となっていることから、廃立を企てていると讒言し、延喜元年(901)道真は大宰権帥に左遷され、延喜3年(903)に大宰府で没する。
 その後まもなく、延喜9年(909)時平が三十九歳で没。時平と関係が深かった醍醐天皇の皇子も相次いで死んだ。これらが、道真の崇りとされ**怨霊信仰**となり、900年代中期には一連の天満宮創建に繋がる。

その宇多天皇が帰依した聖宝(832~909)は、役小角以来の修験道再興の祖とされる。貞観16年(874)、京都の東南の笠取山頂で、准胝・如意輪両観音像の造立と堂宇の建立に着手、貞観18年(876)に両像と二堂が完成した。これが今の上醍醐で、この年を醍醐寺の創建とする。聖宝は、東寺長者、僧正など重職に就き、一方、役小角に私淑して吉野金峰山で山岳修行、参詣道整備や仏像造立で金峰山を中興した。これら業績によって(吉野)大峯・金峯当山派修験道の祖となる。(現在は真言宗醍醐派)

白河天皇は増誉(ぞうよ、1032~1116)を先達とし、のちの平安時代末期、後白河上皇の**熊野詣**を先鞭した。平安時代後期の天台宗寺門派の僧で一乗寺僧正と号す。正二位権大納言藤原経輔の子で、御室戸僧正隆明の甥にあたる。長元5年(1032)誕生し、六歳で園城寺に入り、年長じて大峯・葛城両山で苦行、熊野詣は十三度に及び、白河・堀河二代の護持僧として隆明と駿徳を並称された。応徳3年(1086)権大僧都となり、寛治4年(1090)白河上皇の熊野詣の先達をつとめた功ではじめて熊野三山検校に補され、洛東の地に熊野神を勧請してのちに修験道本山派大本山となる聖護院を建立した。
 つまり、この時代の天皇との関係が、修験道の確立に繋がったわけである。



日本文化 と 自然

仮説「日本文化の特性 基本原理」を、縄文、弥生から古墳時代までの歴史を辿りながら、成立過程とその傾向をみてきた。以下、簡単に整理する。

古代日本で、自然は、狩猟の山麓、稲作の水など、現実の生活に「恩恵・現世利益」をもたらし、一方では猛威を振るう「畏怖」の対象となった。そこに魂を感じ、木、草、山、川、岩、嵐、雷などを対象に「自然信仰、自然の法則・力」を感じた。その価値観が古事記で神々の有り様に描かれている。「神山」、「神奈備 磐座」などの存在も、その地域の「現世利益」を願う「自然信仰」の証である。

その信仰の発祥理由を、「国土の立地・地形」と「気候」、そこからもたらされる「自然環境」にあると考えた。「列島を取り巻く環境がもたらす山からの恩恵」である。暖流が温暖と、豊富な雨量をもたらす、森林を育む。そして山の水が川となり下流に集まる。その水は森が生んだ栄養含み、川や沿岸を、貝や魚の良き生き場とする。縄文時代においては、その多くの河川、山麓環境で採種・漁撈を分かち合った。それは、気候が一定の範囲で定まると、安定かつ豊富な自然を循環させるからである。西欧と比較明らかに生活環境は異なる。大陸から離れている列島は、その中でも多様な気候と、断続的な人々や文化の渡来、防御の役割となる。

縄文から弥生時代への移行では、漁撈を共通に、採集に水稲稲作が加わり、次第に稲作が主となる。ここでも大きな混乱はなかったと考える。もともと陸稲の生産効率を改善する水稲であり、先住者の狩猟、漁撈とは棲み分けられた土地活用だからである。漁撈技術にも好影響があったに違いない。また、山、森林からの恩恵を共通、つまり価値観も異ならないからである。同じ価値観は、信仰を違えず、自然の循環サイクルの中で「和合」した。その前提条件は、自然への感謝と畏怖である。「穢れ 禊ぎ・祓え」などの清浄心も自然信仰によると考える。

その自然循環は、天地の柱、生死の「循環思想」をもたらした。のちの仏教伝来「彼岸と此岸」「浄土信仰」が、我が国で根付いた理由でもある。信仰の遺跡 天と繋ぐ柱、魂の再生思考は、環状列石(ストーンサークル)環状土籬(周提墓)環状木柱列(ウッドサークル)古事記「伊邪那岐命と伊邪那美命」の於其嶋天降坐而、見立天之御柱、見立八尋殿「円+柱」「村・大地」そして「山」「神奈備山」へと広がったのではないか。諏訪大社の御柱祭 出雲大社の心御柱、伊勢神宮心御柱はそんな縄文祭祀の名残りである。

土偶埋葬も再生信仰の表れと考える。死産児の遺骨を、住居近辺のトイレや玄関など、女性がよくまたぐ場所に埋葬して再生を願う、近年まで残った風習である。四季を持つ「日本の森」があって初めて生まれた言葉、自然の音を捉えた擬音、日本特有の「擬態語・擬音語・擬声語」、「言霊(ことだま)」という思想がある。日本では「モノ」という言葉に、物質以外の要素を詰め込んできた。「物思い・物語・物静か・物の怪・物のあわれ・物忌み…」と、物質以外のモノは多い。その一方でモノづくりの場においても、モノに魂を吹き込むという日本人の特性に、「マナ」という(モノに霊性を認める)心根の継承がある。語源的に見ても「マナ」と「モノ」とは共通性がある。交易にあたる人たちを、マレビト(稀れ人)=まろうど(客人)と呼び、手厚くもてなした。「渡来文化」への高い価値観、憧憬になる。

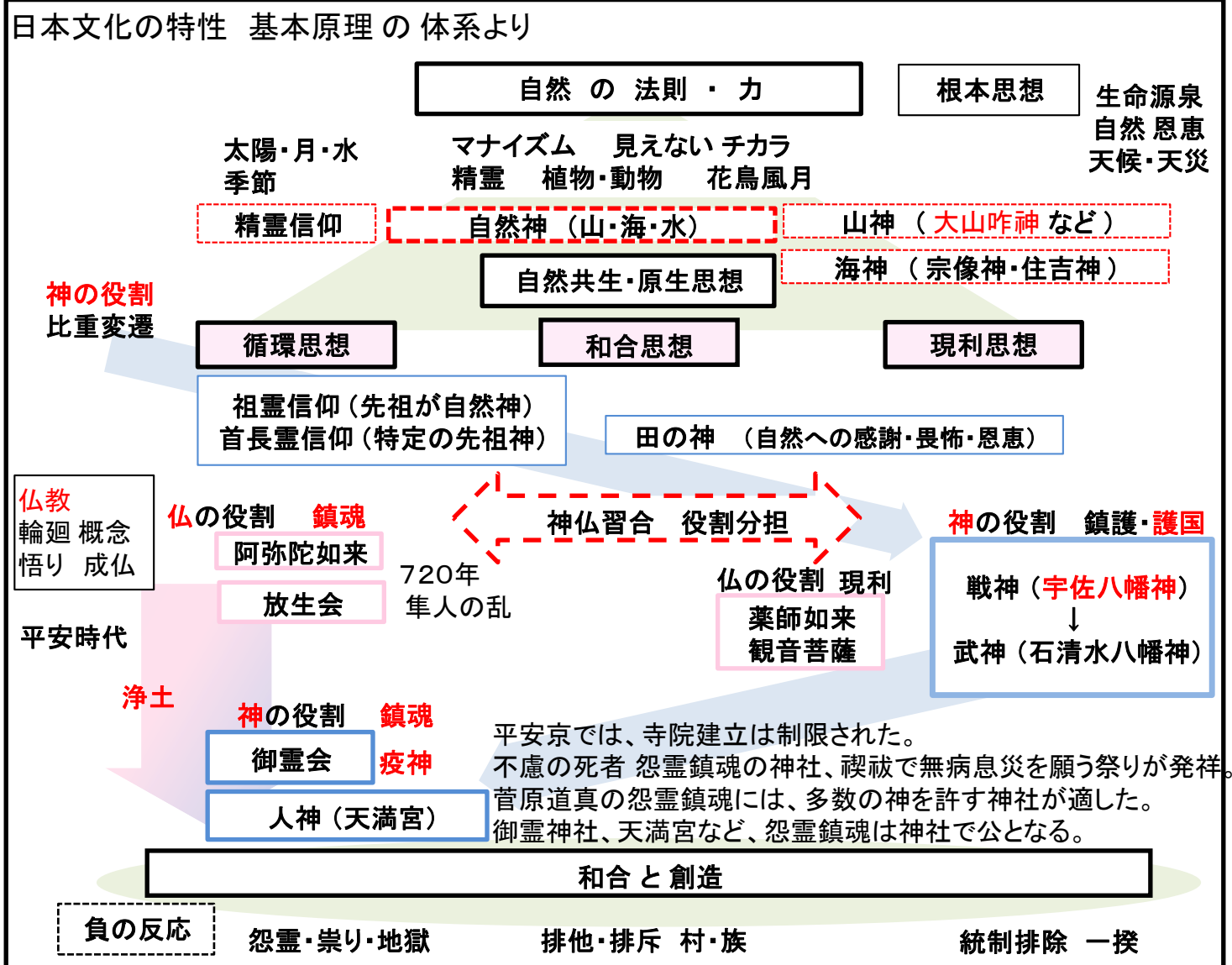
「循環思想」は、殯(モガリ)魂振 鎮魂の儀式に残る。その深層度は、神社建築や放生会、御霊会、怨霊への恐れ、行事、仏壇に出現する。モノへの霊性は、唐物から和物など中世の「物数奇」に繋がる。魂の「循環」、「継承」と「根本(原点)」への崇敬に繋がり、皇統・貴族・家系や、工芸・芸道など伝統文化への高い価値感を生む。

「和合思想」については、重要であり、多くの事例、仮説を提示した。漁撈から出雲文化の継承は、銅鐸の編み紋様や、大社の亀甲紋に残る。出雲と神武天皇の名の勢力交渉は、「国譲り」としてその状況を詳しく語られている。現代に残る多くの出雲祭神の神社が、その交渉の結果、和合を裏付ける。出雲系姫たち母系や「天照國照彦天火明命」の名にも、その手掛かりを探した。鏡勢力は、神武天皇と崇神天皇を、内行花紋鏡と画紋帯神獸鏡に仮説比定し、その鏡の合祀埋葬に和合を見た。伊勢神宮の構成、天照大御神と豊受大御神も同様である。

「現利思想」で、神への願い、信仰の変遷を追った。農耕・漁撈・狩猟に関わる神、田の神、そして祭司、支配のための神、朝鮮半島や反倭勢力に対抗し、争乱から誕生した神が、宇佐の八幡神。戦いの神への変遷・拡大である。その戦う神が誕生した時、神の概念は、自然世界を前提とする古代の精神から、徐々に現実的、具体的な役割に移行した。

以上が、我が国、古代生活から誕生した「神」への信仰である。同時にそれは、日本文化の基礎部分でもある。仮説「日本文化の特性 基本原理」が、歴史とともに徐々に骨格されてきた時代である。

このあと、古墳時代、仏教・儒教の公伝以降の歴史となる。基本原理と整合しながら、人々の願いに応じて神仏儒教が役割分担していく。そして「和合と創造」の産物が誕生する。



「現利思想」の概説

現世利益を求める合理思想現実主義 真摯に現実の生き方を考え、自身や家族、一族の生活維持を求める志向。 自然への感謝、畏怖を前提とする。(以下の詳細は後述)

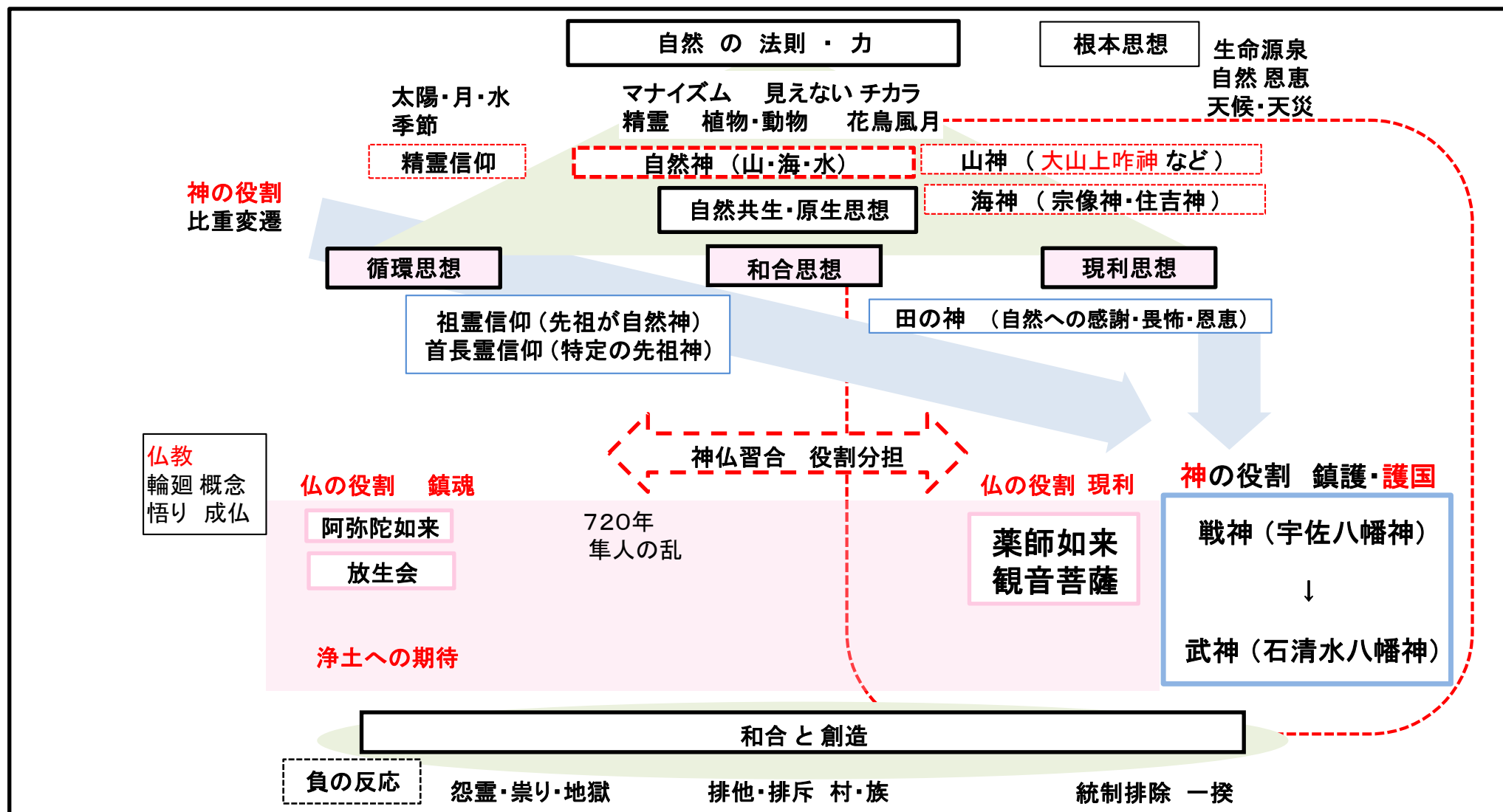
古事記からも判るように、神信仰は自然への畏敬・恩恵から発祥、神は山・海・水にあった。 今に伝わる神奈備・磐座の存在がその信仰の証である。 稲霊(いなだま)すなわち「倉稲魂」(うかのみたま)、「豊受媛神」(とようけびめのかみ)、穀霊神の大歳神(おおとしのかみ)の名も古事記に記され、農耕神、一般に「田の神」をまつる習俗を語る。 そして太陽、日の神と系統すると物語された氏族、首長霊に変貌していく。 北九州には、縄文時代 漁撈民族の海・航海の神、住吉神・安曇神や宗像神が信仰されていた。 そのあと、朝鮮半島や反倭勢力に対抗し、海の神に航海安全を祈願しつつ、争乱から誕生した神が、宇佐の八幡神である。 宇佐八幡宮には、海神、宗像三女神とされる比売神(ひめがみ)に加え、三韓征伐に語られる神功皇后、その闘争の中で誕生したとされる応神天皇に由来する八幡大神が祀られる。 のちに京都石清水や鎌倉に勧請され、武将の神 武神として鎮座する。

縄文から弥生時代にかけての農耕・漁撈・狩猟に関わる神、そして祭司、支配のための神、その次に求められた戦いの神への変遷・拡大である。 戦う神が誕生した時、神の概念は、自然世界を背景とする古代の精神から、徐々に現実的、具体的な役割に移行した。しかしそれらは、収穫や安全、戦勝と、「現世利益」を願う信仰、思想であることに変わりはない。

古墳時代の末である500年代中期に仏教は公伝した。 初期の主たる寺院 飛鳥寺、法隆寺、百濟大寺などは、基本的な仏として、釈迦如来を本尊とする。 しかし、釈迦如来以外の仏を本尊とし、その名称とした寺院が現われた。 天武天皇が680年に建立勅願、法相宗の道昭、義淵により創建された薬師寺である。 藤原京やそのあとの平城京でも西方に建立され都の大寺となった。天武天皇が 後の持統天皇である鸕野讃良(うののさらら) 皇后の病氣平癒を願うためのもの。つまり、「現世利益」を願う特別な寺院が、公伝した飛鳥から遠くない時期・場所に、天皇によって誕生した。また、「観音菩薩」も早い時期から独尊像として信仰される。 その理由は何か？水瓶を持ち、慈悲すなわち「現世利益」をもたらすからである。 神話時代の、水をもたらす神山「磐座信仰」の源流が、「現世利益」という共通で仏教と合流、「和合」が進み、山岳での観音信仰となる。 元来は法華経に典拠する仏であるが、法華経を主たる経典としない例えば法相宗寺院でも本尊とされた。 義淵による、600年代後半の南山背の観音寺、700年代初頭には隆豊禅師の西山 金蔵寺、725年、行基の葛井寺(大阪 藤井寺)などである。 山科法蔵寺やその系譜の清水寺も同様である。 そこでは、宗派を超えた「観音信仰」があり、その特性の強さが感じられる。 また「和合」から、「神仏習合」 神と仏の役割分担と共存が誕生する。 古代からの「神々習合」の歴史を経験して、「神仏習合」が誕生した。

日本文化の特性 基本原理の体系より

旧石器
縄文時代
弥生時代
古墳時代
飛鳥時代
奈良時代
平安時代



原初的な神信仰から、仏教、儒教の受容と、その日本的な習合、変貌について図解にて整理した。江戸時代までに徐々に形成されてゆく「**神・仏・儒一致**」への過程である。その原初的な神信仰は「**清浄**」や、「**水**」と関係する。それらは古事記の記事や神名に**表現**され、祭祀に先立って唱える「**祓詞**」の「**祓戸大神**」とは、古事記で黄泉から帰還した伊邪那岐が禊をした時に化成した船戸神以下十二神の総称である。そのあと水中で「**海の神**」たちを生み、水で身体を洗い、誕生する神々が「**洗左御目時**、所成神名、**天照大御神**。次洗右御目時、所成神名、**月讀命**。次洗御鼻時、所成神名、**建速須佐之男命**」である。神話で重要な神々を生み出す、水と関係した「**生命の誕生・再生**」への思いである。また天照大御神は「**天之眞名井**」で、「**十拳劔**」を「**振滌(ふり清め)**」て宗像三神たちを生む。**神産巢日神**(カミムスヒ) **高御産巢日神**(タカミムスヒ) の「**産巢日**」(ムスヒ)は、**生命「霊」**(ヒ)の誕生・再生と関係し、その「**ムスヒ**」は、水の「**掬**び」でもあり、水中の「**霊**」を取り込んだ。

「**霊**」と「**魂**」について 「**霊**」は万物に宿る精神で、死んで天に昇る「**魂**」霊と、地上に残る「**魄**」霊があり、そのため死霊はあると考えられ、死魂は無い。祖霊神は、その「**魂**」の集合体である。生前の「**魄**」が「**穢**」で、「**禊祓**」で封じる。すなわち生前死後の「**魂**」は、**清らかな**のである。「**魂**」は、**神格**とも関連し、宇迦之御魂神、大國御魂神、布都御魂、国魂などに顕れる。例えば、倭大國**魂神**(やまのおおくにたまのかみ)は、日本書紀に登場し、日本大國魂神とも表記する。大和神社(奈良県天理市)の祭神である。(魂魄概念は、中国の道教靈魂不滅説に由来。日本には鎌倉時代に渡来)

「**禊**」と「**祓**」について 「**禊**」が身体を穢れを除去して**浄める行為**を指すのに対し、「**祓**」は罪や災いをとり除く行為を指していた。だが、両者は機能が近いこともあり、記紀の時代には既に、「**ミソギハラヒ**」と複合した言い方もされる。

「**修祓**(しゅばつ)」の際、奏上される**祝詞**「**祓詞**(はらえことば)」より「**修祓**(しゅばつ)」とは、「**祓の神事**」 「**祓**」は、神道の神事において、禊や**齋戒**の後に行われる、重要な意義を持つ浄化の儀式である。齋戒とは、物忌み(ものいみ)のことで、ある期間中、ある種の日常的な行為をひかえ穢れを避けること。

祓は、神を迎え交流する準備として、**罪穢れのない清浄な空間**をつくる意義がある。「**神道の根本思想**」は、神事に臨む個人のものだけではなく、この世界のあらゆる罪穢れを徹底的に祓い浄め、「**明(あか)き浄(きよ)き正しき直き**」**境地**を求める姿勢にある。

「**祓詞(はらえことば)**」
 かけまくもかしこき いざなぎのおほかみ
 掛介麻久母畏伎 伊邪那岐大神
 つくしのひむかのたちばなのおどのあはぎはらに
 筑紫乃日向乃橘小戸乃阿波岐原爾
 みそぎはらひへたまひしときになりませる はらへどのおほかみたち
 御**禊祓**閉給比志時爾生里坐世留 **祓戸乃大神**等
 もろもろのまがごとつみけがれあらむをば はらひたまひ こよめたまへともほすことを
 諸之禍事罪**穢**有良牟乎婆 **祓**閉給比 **清米**給閉 登白須事乎
 きこしめせと かしこみかしこみもほす
 聞食世登 **恐美恐美**母白須

天の思想 「天の思想」とは、原初的には自然摂理をいう。古事記の「**天之御中主神**」 聖徳太子の憲法三条「**天覆地載 四時順行 万氣得通**」の「**天**」。儒教の、倫理的応報で天地万物を支配、合理的法則を意味する「**天**」、 仏教の天界・四天などの護法神や、道徳的善行による天界往生する生天信仰にある「**天**」、老荘思想では、自然法的なもので運命な「**天**」、それらの「**天**」を習合した思考また行動を意味する。

和の思想
 徳仁礼信義智
 徳:自然なる徳
 仁:仁徳 奉仕、情け、慈悲
 礼:礼徳 尊敬、礼節
 信:信徳 信賴、信用
 義:義徳 正邪を正す、正義
 智:智徳 習得、スキル習得

徳の思想
 北条重時「**六派羅殿家訓**」
 「**仏・神・主・親への崇敬**」「**因果の理**」
 道徳教訓書の代表「**五常内義抄**」
 「**儒仏一体の道徳思想**」
 儒教道徳の五常
 「**仁・義・礼・智・信**」
 仏教の五戒「**不殺生・不偷盜・不邪淫・不妄語戒・不飲酒戒**」

日本文化の特性 基本原理の体系より

マナイズム
 原始宗教として、タイラーが提唱した生命万物の「**霊**」観念がアニミズム。その前段階の観念としてコドリントンがポリネシア信仰で紹介し、人類学者マレットが提唱。**超自然的・神秘的な、非人格的な力の作用(マナ)**を定義した。
 <イギリス 文化人類学>

「神の思想」
 自然の下に生かされている
 自然調和 循環と継承
 清浄心と清明心

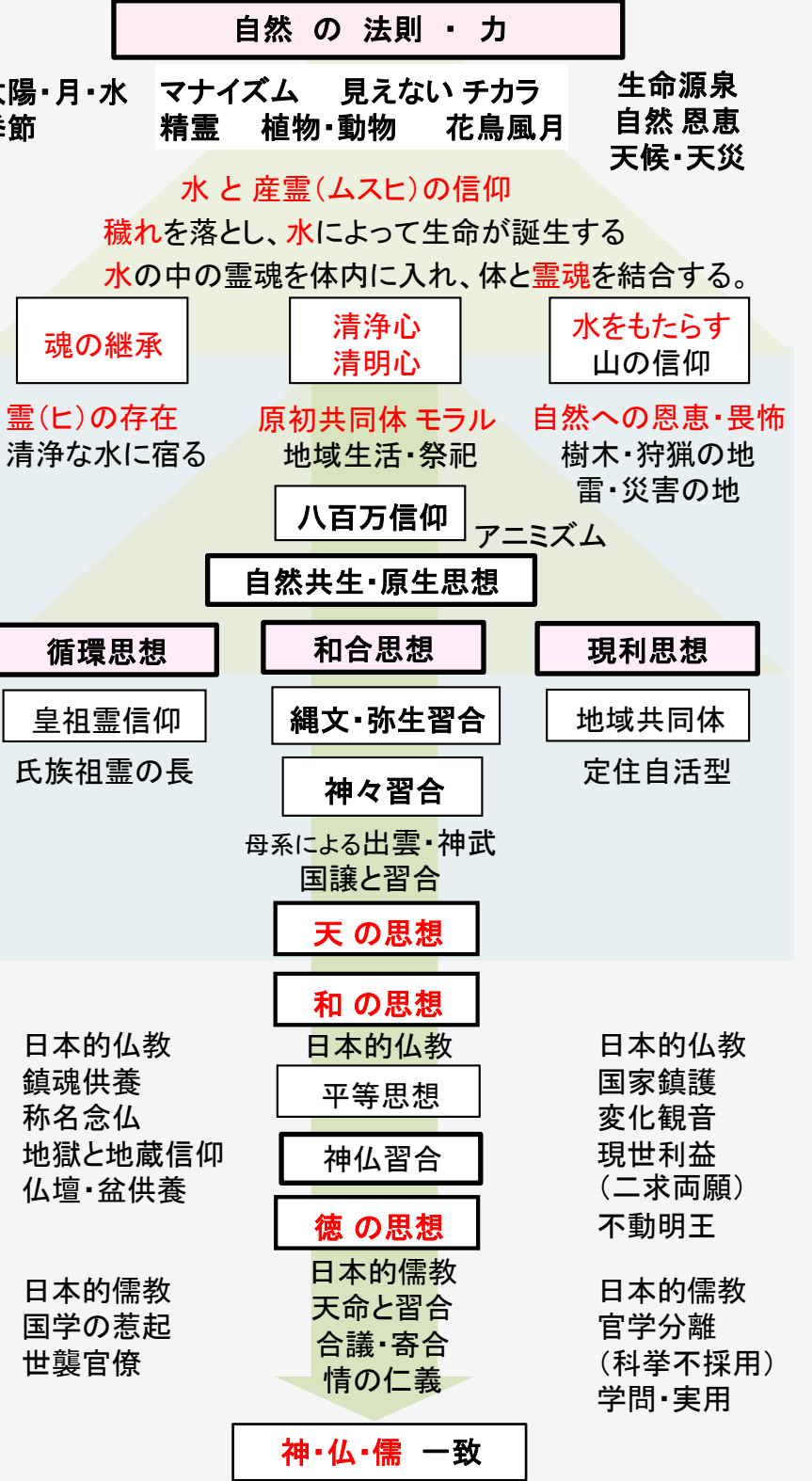
「**自然**」の中の人間
 自然・水 から誕生する生命
 神は、清浄な場所に来りくる存在
 超越した力を持ち、恐れ畏(かしこ)むべき存在

「仏の思想」
 諸行無常
 万人平等の成仏
 前世・現世・来世 救済

人間への教え、人間から捉えた世界観
 万人平等の成仏 法華思想
 「**自然**」には言及しない。
 世界を時間軸でとらえる意識が強い

「儒教の思想」
 君子秩序 仁義礼智信
 徳治と放伐

人間と人間の関係性
 政治思想との関係が強い



空海、親鸞、安藤昌益たちの「自然（じねん）」「おのずからそうある状態」への探求を、辿りたい。
 ここで注目すべきは、「自然への思考」の前提として、聖徳太子から一遍に至る「自然調和な無差別への思考」の、歴史的関係である。
 その「自然調和な無差別への思考」の前提は、「神仏儒一致に顕れる習合和合への思考」である。

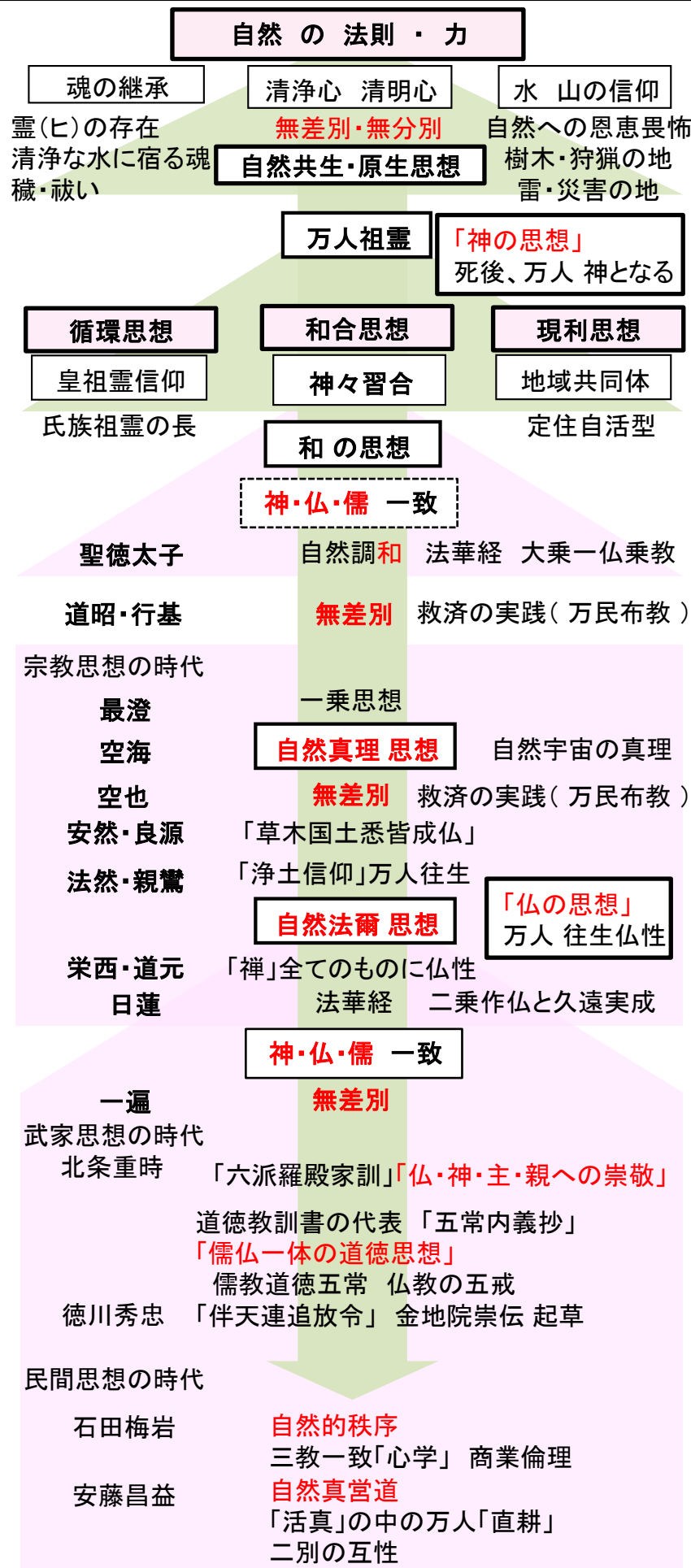
我が国では、人間のあり様としての意識である「自覚自然」が「万物自然」への認識と同質性を持った。それらの源流として、風土環境から発祥した「自然なる神信仰」がある。そして「神仏儒一致の源流」は、聖徳太子にあった。（聖徳太子の神仏儒一致については、本論「聖徳太子の思想」で論証した）法華経を重視し遺族に「天寿国」と名称する絵画を描かれた太子の平等思想は、道昭・行基たちの社会事業によって実践された。最澄・空海によって説かれた「万人救済」一乗思想、自然への尊厳と感謝、その後の「平等思想」の源流でもある。「万物自然」への認識が、「自然調和な無差別への思考」「人間自身・社会の理想への思考」をもたらしてきたことを忘れてはならない。

「おのずと生じたもの一般」の自然から発祥した神信仰は、「神仏儒の自然調和」を受容する原理を、本来内在していた。その思考を前提に「万人平等」に向かい、そして「おのずからそうある状態」である自然（じねん）の思考を、人間社会に受容し発展させていった。我が国、古代からの「万人、神になる」思考は、例えば代表として親鸞の「万人、浄土往生」思考に至る。そしてそのあと、彼が最後に思考したものも「自然（じねん）」であった。上記「自然環境が生んだ自然調和な思考、そして平等、自然（じねん）への思考」の典型である。中国「老子」の自然（じねん）とは「人為的でなく、おのずからそうある状態」の意味であり、「孟子」では猛然や欣然（きんぜん）のようにある状態をあらわす。いわゆる自然世界の「自然（しぜん）」は、ギリシャ語の「フシス physis」を語源とするオランダ語「ナウール natuur」であり、江戸時代に蘭学で訳され、「おのずと生じたもの一般」を意味する。わが国では人間意識の『自（みづか）ら然（なる）』『自（ひと）り然（な）す』の「自然」と同じ漢字が、日本語として万物自然を表す言葉の訳に「自然」があてられた。この事実は、自然と人間、両者の調和共生を原点とする日本文化を象徴する表現として注目すべきである。また、天台僧の安然（あんねい）による成句「草木国土悉皆成仏」も同じ心情である。「おのずからそうある状態」の「自然（じねん）」は、我が国での用例として、空海「十住心論」や、親鸞の「自然法爾（じねんほうに）の事」、日本朱子学、安堂昌益「自然真営道」の「自（ひと）り然（な）す」生ける事实在がある。この「自然」を人間自身を自覚する意味として「自覚自然」と定義する。日本では「自覚自然」が「万物自然」への認識と同質性を持つ。

空海の『十住心論』巻第一には、「經云自然者。謂一類外道計。一切法皆自然而有。無造作之者。」とあり、「經に自然（じねん）というは、いわく、一類の外道を計すらく、一切の法はみな自然にして有なり、これを造作するもの無し。」の意味である。続いて、「如蓮華生色鮮潔誰之所染。棘刺利端誰所削成。故知諸法皆自爾也。有師難云。今日觀世人造作舟船室宅之類皆從衆緣而有。非自然成。云發之。是亦不然。既須人功發之。即是從緣非自然有也。大唐所有老莊之教立天自然道。亦同此計。經云内我者。有計身中離心之外別有我性。能運動此身作諸事業。」とあり、「老莊の教えは、天の自然道に立つ、またこの計に同じ」と、同じ意味であるとする。この著書は、正式名称を『秘密曼荼羅十住心論』とし、低次元の心の世界から高次元の心の世界へと次第に進展し向上する過程を、かりに十段階に分けた曼陀羅で構成される。その高次元の心の世界が、第十住心「秘密莊嚴心」で、（草冠）の嚴心（法を表しながらあらゆるものを生み出す創造者のこころ、毘留舎那仏、真言密教）無限の世界である。秘密莊嚴心とは、自らの心の源底を覚知し、ありのままに自らの身体の数量を証悟するのである。いわゆる胎蔵界会の曼荼羅と金剛界会の曼荼羅とがこれである。「おのずからそうある状態」のこころで、「おのずと生じたもの一般」の世界に身を置き、その真理を観ずる境地であろうか。ありのままの自然世界である高野山に身を置き、自然宇宙に空間時間を超越し外在内在する大日如来を最高仏とし、修行者自身と一体化すべきものとした。宇宙までの自然意識と、それを自然（じねん）に観ずるための取組であろう。

親鸞の「自然法爾（じねんほうに）の事」について、詳細は「自然から学ぶこと親鸞上人の思考」を、参照いただきたい。親鸞は「阿弥陀仏が無量寿（永遠）の仏陀、つまり、ありとあらゆるものの基である究極の实在」と考えた。本願を通じて生きとし生けるものをすべて救おうとする、阿弥陀仏の根本の目的である。当方見解として、親鸞は、自然世界の中で、人々や万物に対し平等な恩恵をもたらす主体を仏教の中の「阿弥陀仏」に見いだした。その主体こそ「自然の法則・力」未知なる自然の実体である、と考えた。

安藤昌益の著書『自然真営道』は、陽明学の「気一元論」を基礎とし、自然を「活真」と「直耕」で表現する。根源的实在である土が「活真」であり、自己運動によって木火金水の四行に分化し、四行は各々進退し八気になる。「活真」は、世界の中央に位置して四行八気を統制し、無始無終で、万物を生成する。この生成運動を「直耕」と定義する。万物は、初めを司る「木」と、終りを司る「水」など、対立（相対）しながら互の本質を本性として内在。このことを「互性」とした。「自然真営道」とは、対立するものが相関し統一しあっている活真の、営為原理のことである。人類社会の原点は、天地の直耕と、人類全員の直耕が両立し、自然と社会が調和し、自然界に天災地変なく、社会に差別や階級的対立が存在せず健康である。この状態を「自然の世」とした。不耕貪食する支配階級が作り出した差別「二別」ある現実社会を「法世」とし、支配階級思想である儒学・仏教・神道・道教など既成思想を否定した。理想社会「自然の世」として、自然真営道を体得した「正人」による、「（原始“ではなく”）高度”自然の世を”変革目標とする。その世では、「忠」は否定され、五穀「直耕」による「孝」を肯定する。夫婦を基本に、父子・兄弟・孫・従弟という血縁関係で、儒教でいう「五倫」を再構築し、「五倫惟だ一和して」と、互性的相互関係を道徳とする。「正人」が出現し治世する理想社会。その出現までの過渡的社会を「上下なれども二別無き常安の世」とし、全ての人々の直耕を条件に、「上慈下敬一和する則は、上下なれども二別無き常安の世なり」と、上下の和合を必須とする。治世者たる「上」は、万世一系的には固定していないが、彼の日本通史編である九・十巻「私法神書巻」で、一貫して天皇を「天子」などと記し、尊厳している。



「自然(しぜん)調和、自然(じねん)調和への思考」の事例として「**草木国土悉皆成仏**」という言葉がある。その言葉と関連し、梅原猛先生の成句である「山川草木悉皆成仏」や「山川草木悉有仏性」が流布しているが、そのことを仏教經典に典拠なし、と指摘する末木文美士先生の著書『草木仏性の思想』がある。

しかし、そもそも「草木国土悉皆成仏」が、インドの原語や中国の經典になく、我が国の天台宗、比叡山の僧侶、安然(あんねい)による成句であることに注目しなければならない。**安然**が、著書『斟定草木成仏私記』の中で、『中陰經』に書かれている妙覚如来の神通力を解釈し作り出した言葉である。だが『中陰經』の記述は「天から地獄までのあらゆる**有情**が仏になる」という内容で、いわゆる**無情**(心のはたらきのないもの 植物や無生物)である「草木」は含まれていない。つまり、『中陰經』に基づく仏教の「有情成仏」だけではなく、「無情成仏」までも含む考えが、「草木国土悉皆成仏」である。この段階で、すでに仏教を超えているか、もしくは日本的に変質していることを認識しなければならない。この**安然の思想**は、その後、同じ天台宗の良源『草木発心修行成仏私録』や源信『三十四箇事書』(枕双紙の異本)に影響を与え、さらに現代では、冒頭に提示した「山川草木悉皆成仏」と編集されるほど我が国に定着し受け入れられた。ではなぜ、安然は、そのような言葉、思想をいだいたのか？

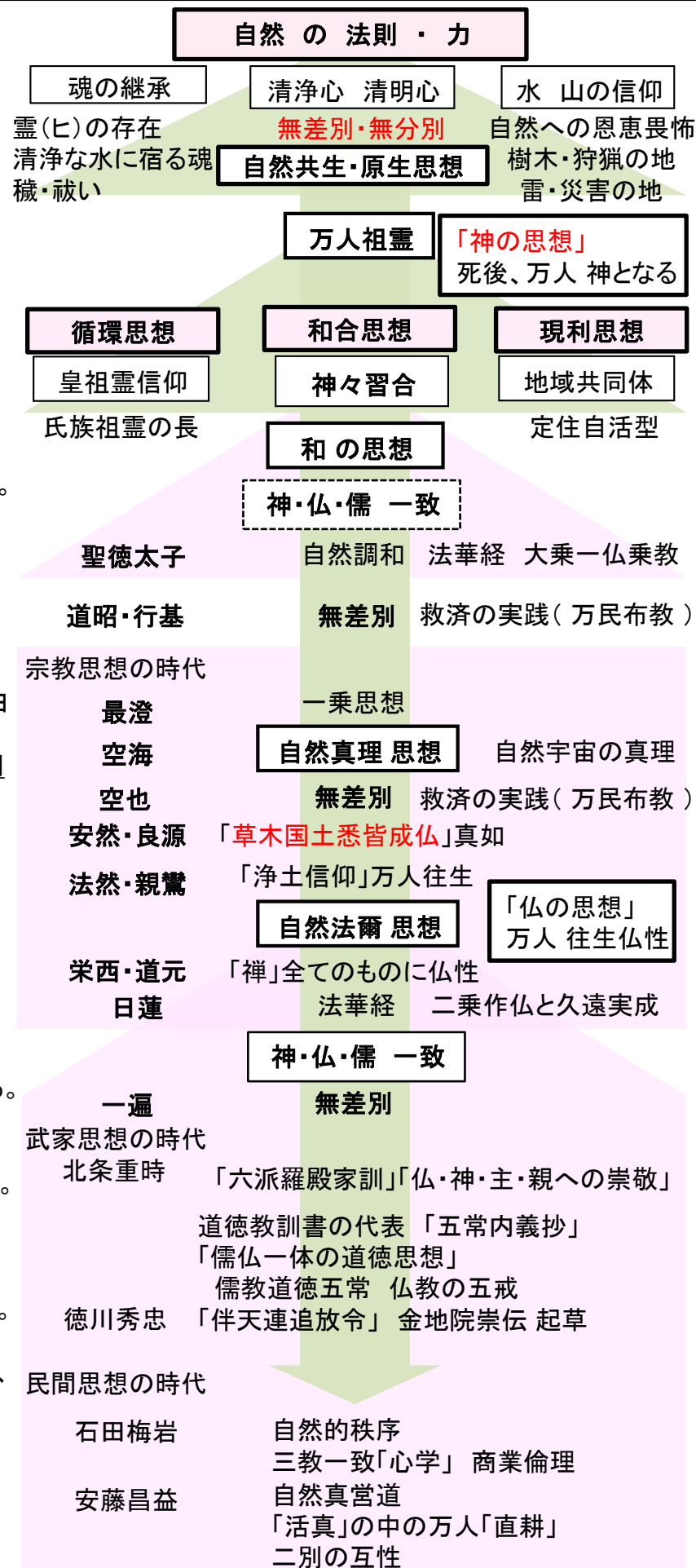
前提として、その時代までの、「草木国土悉皆成仏」に関連する言葉を考える。まず、「**一切衆生悉有仏性**」の言葉は、『涅槃經』に登場し、その「衆生」とは梵語の「サットヴァ」であるが、唐の玄奘は「衆生」ではなく「有情」という訳語を当てた。「有情」は前述の「無情」に対する「心のはたらきのあるもの 六道の中の人間・動物・その他」のことである。つまり、ここでも「草木」は含まれない。その点で、上記の『中陰經』と同様である。次に、「**山川草木**」の言葉は、漢籍や密教經典、『日本書紀』に用いられている。『日本書紀』では、イザナギとイザナミによる「国生みの段」で登場するが、二神が「山川草木」を生んだ後、アマテラス(大日靈貴)誕生や、「人間の誕生や死」の主役であることに注目しなければならない。つまり、我が国の「**自然と人間との共通概念**」が、ここにある。さらに古事記に、その概念はもっとわかりやすく記述されている。初めに誕生する、「天之御中主神(アメノミナカヌシノカミ)」「高御産巢日神(タカミムスヒノカミ)」「神産巢日神(カミムスヒノカミ)」「宇摩志斯訶備比古遲神(ウマアシカビヒコチノカミ)」「天之常立神(アメトコタチノカミ)」「國之常立神(クニトコタチノカミ)」「豊雲上野神(トヨクモノカミ)」は、「**隠身**」なりとする。一方そのあとに生まれる伊邪那岐命(イザナギ)・伊邪那美命(イザナミ)については、その序文で「**二靈為群品之祖神**」と記す。つまり**万物の生みの親**として神名に「靈」の文字が使われていることが重要である。古事記で3ヶ所しか用いられない「靈」は、我が国の「**自然と人間との共通概念**」にとって重要な言葉である。

「次生海、次生川、次生山、次生木祖句句迺馳、次生草祖草野姫、亦名野槌。既而伊弉諾尊・伊弉冉尊、共議曰「吾已生大八洲國及**山川草木**。何不生天下之主者歟」於是、共生日神、號大日靈貴。大日靈貴、此云於保比屢咩能武智、靈音力丁反。一書云天照大神」

『草木仏性の思想』から引用 安然は多様な世界の真理を唯一の根源へ集約していった。それが密教の「大日如来」であり、さらに理論的に原理を探求し、その根源を「**真如**」と呼んだ。この世界はすべてが真如の活動からなっていることから、有情も無情もすべて真如そのものであり、区別できない。人間も草木もすべて仏の世界の顕れで、同じように発心・成仏できるとした。しかし本来の仏教は、「諸法無我」「諸行無常」であり、あらゆるものは相互の縁起による現象で、根源的な実在を求めていない、と矛盾を提示する。

つまり安然の「真如」は、もはや本来の仏教では解釈できず、仏教の中では密教にその答えを求めざるを得ないことになったわけである。このことは、**自然と密接する日本の変質、特質**と考えなくてはならないであろう、と考える。自然への信仰は、密教の宇宙根本仏としての大日如来と親和する。密教が本来的にもつ包容的な性格は、わが国の民族信仰を摂取して神仏習合思想に理論的な基盤を与え、本地垂迹説を生み出し、山岳信仰を包摂して修験道を形成した。わが国の風俗習慣と広く結びついて、庶民信仰の中に深く根を下した。

著者も指摘する「理解を超えた不思議な力、科学では解明できない「自然(しぜん)」について、安然はその根源を「真如」と名付けた。人間などの有情と草木などの無情との共通性を、「了解不可能な他者性」に見出すが、本論でも指摘している原理の頂点である。著者は、「日本古来のアニミズム」について批判的だが、木や岩が神聖視されたり、蛇や狐が神、または神の使いとされることは認める。自然物すべてを神と崇めるということはなかったと「思われる」、と断定はせず、卑弥呼のシャーマニズムの傾向を強調する。一方、古事記からは、国の民を表す「**青人草**」「**人草**」の表現を根拠に、人間と草木の境界はないとする。日本人の災害観として、平安時代の、自然災害を「崇り」によるものとしたこと、病気を「怨霊」によるものとしたことを列記している。そのことから、現世を超えたその背後の靈や神仏との関係を重視したことや、非科学的、非合理的な思考を見出し、今日の科学的、合理的解釈(偏重的判断)に警鐘を鳴らす。いずれにせよ「真如」の思想、「草木国土悉皆成仏」という言葉の解釈には、我が国の**自然観**として「自然の法則・力」「見えないチカラ」の想定が必要である。上記のアニミズム、シャーマニズム、さらに本論が提示したマナイズムなどとの関係はともかく、大事なことは、我が国において仏教や儒教を受容し変化させる、根本としての自然観、日本文化が存在した事実である。



初めに、中国の「老子」の自然(じねん)と、いわゆる自然世界の自然、両者の言葉を区別しなければならない。前者「自然」とは「人為的でなく、おのずからそうある状態」を意味し、「孟子」では猛然や欣然(きんぜん)のようにある状態をあらわす。後者「自然」は、ギリシャ語の「フシス physis」を語源とするオランダ語「ナチュール natuur」で江戸蘭学で訳。おのずと生じたもの一般を意味する。

親鸞の消息『末燈鈔』「自然法爾(じねんほうに)の事」この「自然」は前者の意味で、空海「十住心論」や日本朱子学、安堂昌益「自然真営道」の「自(ひと)り然(な)す」生ける事实在も同様である。「自然」といふは、「自」はおのづからといふ、行者のはからひ(自力による思慮分別)にあらず、「然」といふは、しからしむといふことばなり。しからしむといふは、行者のはからひにあらず、如来のちかひにてあるがゆゑに法爾といふ。「法爾」といふは、この如来の御ちかひなるがゆゑに、しからしむるを法爾といふなり。

法爾はこの御ちかひなりけるゆゑに、およそ行者のはからひのなきをもつて、この法の徳のゆゑにしからしむといふなり。すべて、ひとはじめて(あらためて。ことさらに)はからはざるなり。このゆゑに、義なきを義とすとするべしとなり。「自然」といふは、もとよりしからしむるといふことばなり。弥陀仏の御ちかひの、もとより行者のはからひにあらずして、南無阿弥陀仏とたのませたまひて迎へんと、はからはせたまひたるによりて、行者のよからんとも、あしからんともおもはぬを、自然とは申すぞとききて候ふ。ちかひのやうは、無上仏(このうえなくすぐれた仏。ここは、無色無形の真如そのものをいう)にならしめんと誓ひたまへるなり。無上仏と申すは、かたちもなくまします。かたちもましまさぬゆゑに、自然とは申すなり。かたちもましますとしめすときには、無上涅槃とは申さず。かたちもましまさぬやうをしらせんとて、はじめて弥陀仏と申すとぞ、ききならひて候ふ。

弥陀仏は自然のやうをしらせん料(ため)なり。この道理をころえつるのちには、この自然のことはつねに沙汰(あれこれ論議し、詮索すること)すべきにはあらざるなり。つねに自然を沙汰せば、義なきを義とすといふことは、なほ義のあるになるべし。これは仏智の不思議にてあるなるべし。正嘉二年(1258年)十二月十五日愚禿親鸞八十六歳 親鸞聖人御消息「自然法爾の事」浄土真宗聖典注釈版768

真宗大谷派 開教使 名倉幹先生解釈を要約

親鸞は、仏教の知的・精神的な伝統の中で思考した。自然法璽章(ありのままの真実についての著)で、阿弥陀仏は、私たちが、形も色もない(不可思議な)法身(ダルマカーヤ)を知るための媒体とした。「阿弥陀仏が無量寿(永遠)の仏陀、つまり、ありとあらゆるものの基である究極の実在」と考えた。

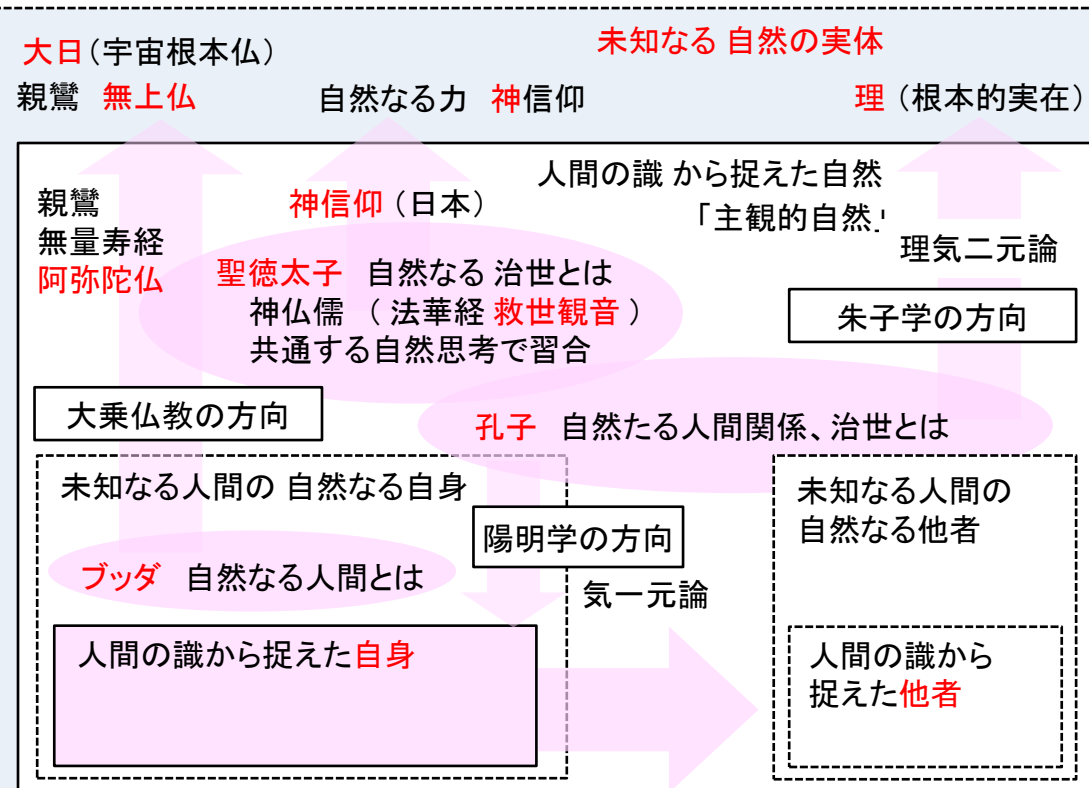
天台および華嚴の教学から普遍的・統一的な見方として、宇宙のすべてを包括するものが仏性の現れで、その仏性は阿弥陀仏に最も広く表れていると考えた。そして、信心が真実と現実とに関連していることを示し、それが信心の本質であるとした。真実についての知識を持ち、理解すると、救いが得られると考えた。

この様に、親鸞は「自然法璽章」の中で、阿弥陀仏を宇宙規模で理解する結果として、従来の浄土教で重要な役割を演じた自力對他力の二元論を超越し、自力的姿勢が現実にもそぐわないこと明らかにした。現実の進化にあるように、木や植物の花が咲くことや生き物が絶えず環境に順応、生命がずっと続いている流れの中に成長と発展がある。人間の体験では、私たちの身体が成長し、知覚・理解する能力も成長する。自然界では転換や超越することが起こるが、これらは、精神面から見れば、生命を全う再生し、生きとし生けるもの一切の精神性レベルを高めるように努力する現実の活力であると解釈できる。阿弥陀仏は、私たちが精神性をもっと理解し、生活を転換するよう私たちの心の中で働きかける他力の象徴である。浄土教の根本経典『仏説無量寿経』(康僧鎧訳)「正宗分」に、法蔵菩薩が仏に成るための修行に先立って立てた四十八願が説かれている。この第十八願は、本願に信心を抱く道で、これが絶対的な他力の道である。

本願を通じて生きとし生けるものをすべて救おうとする、阿弥陀仏の根本の目的である。

仏教が教える「縁起論の原理」は、近代科学の発展により強く支持されている。この精神的な意味が再認識され、自然の均衡に対して、勝手に自分たちの意志を押し付け、生きとし生けるものの生命侵害を否定する道徳観念を示唆する。私たちは、他のものすべてを犠牲にしてはならない。

自然が、私たちの命を支え、私たちの人生をめぐる有り様にも顕れている。我々の悪や煩惱にかかわらず、私達の人生自体がその慈悲の発願の表れである。日常生活において、他の生きものや人間との関係を持つ際、私たちはその慈悲の発願を実行するべきである。親鸞聖人が説かれた自由と平等の精神は、すべての民族と共に励んで平和、公正、自由および相互の理解に満ちた世界を作り上げ、阿弥陀仏の本願の意図および精神を成就する。



当方論中の「ブツダから学ぶこと」で、ブツダは、冷静に人間の煩惱を見つめた。そして人間の限界に気付いた。縁起の中で無常なる自然のあり様に学び、その尊厳を感じ、人間の限界に気付く自然の中の人間の立場を悟った。その悟りが「執着からの解放」で、「智慧の完成」すなわち「般若波羅蜜」である、と考えた。

親鸞は、自然世界の中で、人々や万物に対し平等な恩恵をもたらす主体を仏教の中の「阿弥陀仏」に見いだした。その主体こそ、「自然の法則・力」であると考え。未知なる自然の実体である。ブツダも親鸞も、ありのままの自然と人間をみつめた。ブツダは自然の中の人間を主に意識したが、親鸞は最終的に、人間や万物に対する自然を主体に意識した。ブツダは出家し非日常に身を置き瞑想したが、親鸞は在家に戻り日常に身を置き、ありのままの人間として行動した。

我々は、親鸞から何を学ぶか? 「真実の探求」への「実践」であると考え。「真実」とは、普遍的で絶対的に存在するもの。自然の法則・力である。自然の恩恵や恐威への感情が、日本の神々信仰の原点であるが、親鸞は、経典の中にその主体を探したと考える。そして、万人への慈悲を信じて、自らの日常で「実践」した。「ブツダの思考」は、もちろん仏教の原点であるが、いわゆる大乗仏教において、その自然たる阿弥陀の慈悲を信じ、信仰を体現したところに親鸞の意義があると考え。本論「聖徳太子から学ぶこと」で、太子は、「法華義疏」の「一大乗」で、前世・現世・来世の普遍的な平等統一を表現し、自然調和な神信仰を、三法崇敬で方便した、と考えた。法華経にも阿弥陀仏は登場するが、太子は、現世利益として「観音菩薩」に救世を願った。親鸞は、末法地獄信仰の時代に、「阿弥陀仏」を選択した。

冒頭「自然」の二つの意味、元来は別の意味を持つ。わが国では人間意識の『自(みづか)ら然(な)る』『自(ひと)り然(な)す』の「自然」と同じ漢字が、万物自然世界を表す言葉の訳にも、日本語として「自然」があてられた。近代西洋哲学、デカルト・ベーコンの「人間と自然 二元論」ではなく、「万物自然」と「ありのままの人間」の本来的な同義意識、自然界の神々信仰がその背景にあり、両者の共生調和につながる日本文化の原理なる心情である。

我が国、神道の根本精神、その心は、「中今(なかいま)」である。石清水八幡宮の宮司であり、神社庁総長を務められる田中恆清氏は、著書『神道のちから』の主題として繰り返し述べられている。古来、日本人は、自然(じねん)、つまり「自ずとそうなる」の内に見えない「気配」として神の力を感じた。その場所である鎮守の杜、神を祀る場所となる神社を中心に、地域社会として**共生**(ともうみ)がある。その「木の文化」は**再生**を前提に、古式と新式を習合する**伝統**を継承してきた。「歴史的に**継承**している**今**」を大切にすることが「中今」の道德、道理、倫理としての「神道」である、とされる。

私は、先達諸先生の御研究を基本に、我が国の地理的環境や気候、考古学、記紀古文献に「日本文化の源流」を探し、その後の出来事、信仰宗教や、祭祀と芸能、文字、建築、絵画や諸道などで、「日本文化の原理」を仮説し、検証した。著者とは別の立場、アプローチで見いだした原理は、誠に僭越ながら「**中今**」の**精神と一致**する。つまり、循環思想が「歴史的に継承していること」であり、現利思想が「今」である。その考えのどちらか片方だけではなく、双方の「共生」、原理では和合思想とした「**均衡**」が重要なのである。そして、その原理が、今日まで我が国を存続させ、文化を創出した。

著者は、その「中今」の精神を繋いできた日本人やご自身の「DNA」の存在についても、重ねて言及されている。不肖本論は、その「DNA」の存在と構造を、**歴史的検証から、はからずも論証**する「抄論」となり、論中図解が、現代人にとって「中今」精神の理解促進となれば、幸いである。神道「中今」DNAの構造とは、この「日本文化の原理」である、と考える。

本論「日本文化の原理」は、その時々時代の性や、信仰思想の構造を、極力単純明解に説明できた、と考える。目的は、難解な思想論の構築ではなく、普遍的でかつ、課題提起できる「軸の呈示と、その証明」なのである。

この「日本文化の原理」により、天皇の尊厳、そして貴族文化や武家文化、そしてそれらが重層してゆく歴史を辿った。神仏習合では、神と、日本的に受容変化する仏の役割分担を説明した。観音・不動・地蔵の信仰変遷や、天台智顛の三諦円融との整合、そこから発祥した日本的な浄土信仰と禅の立場を検証した。江戸時代では、幕末までの歴史を、神仏に儒教・国学を加えて論証・図解した。ブツダや孔子の教学、聖徳太子の考えも、それぞれ最新研究に新たな解釈を試み、原理の普遍性を強化した。それら一連の検証目的は、著者が神職、宮司の御立場で、あえて強調される「**言挙げ**」なのである。

現代的生活は、自然の恩恵や畏怖に気付きにくく、また、忘れがちである。第三、四次産業が、身の回りをとり囲む現代の「モリ」なのである。経済的理由や学力中心観念は、マスメディアの影響も受けて、若年層を中心に都市移動を助長した。それは、自然から遠ざかる移動であり、また、もたらされた核家族化は家族の「**継承**」を、競争意識は「**共生**」を衰弱させた。歴史の忘却を証明する言葉が、著者も記されている「**想定外**」であり、その「言葉」に「言霊」はなく、歴史や自然の外側から、むなしく放たれる。自然の中で、その恩恵の下、我々が存在しているのだ。その自然に神を感じてきた人々が日本人である。

歴史から学ぶことは、災害だけではない。学ぶべきは、本来は日本人が信仰してきた、**自然(じねん)「自ずとそうなる」力と、「多様性と共存共栄」への意識**である。その意識があったからこそ、多くの神社や寺院がある。それらは、自然から遠離し薄れつつある現代では、あえて**自覚**しなければならない。もちろん、全てが美しい歴史ではないが、何を学ぶかが重要なのである。

自然「自ずとそうなる」力への意識は、自然に対して感謝と謙虚な心を生み、今を大切に人間同士を寄り添わす。ブツダも孔子も、死については「無記」であり、仏教や儒教として宗教となる以前に説かれたまさに「**現世、今の教え**」であった。

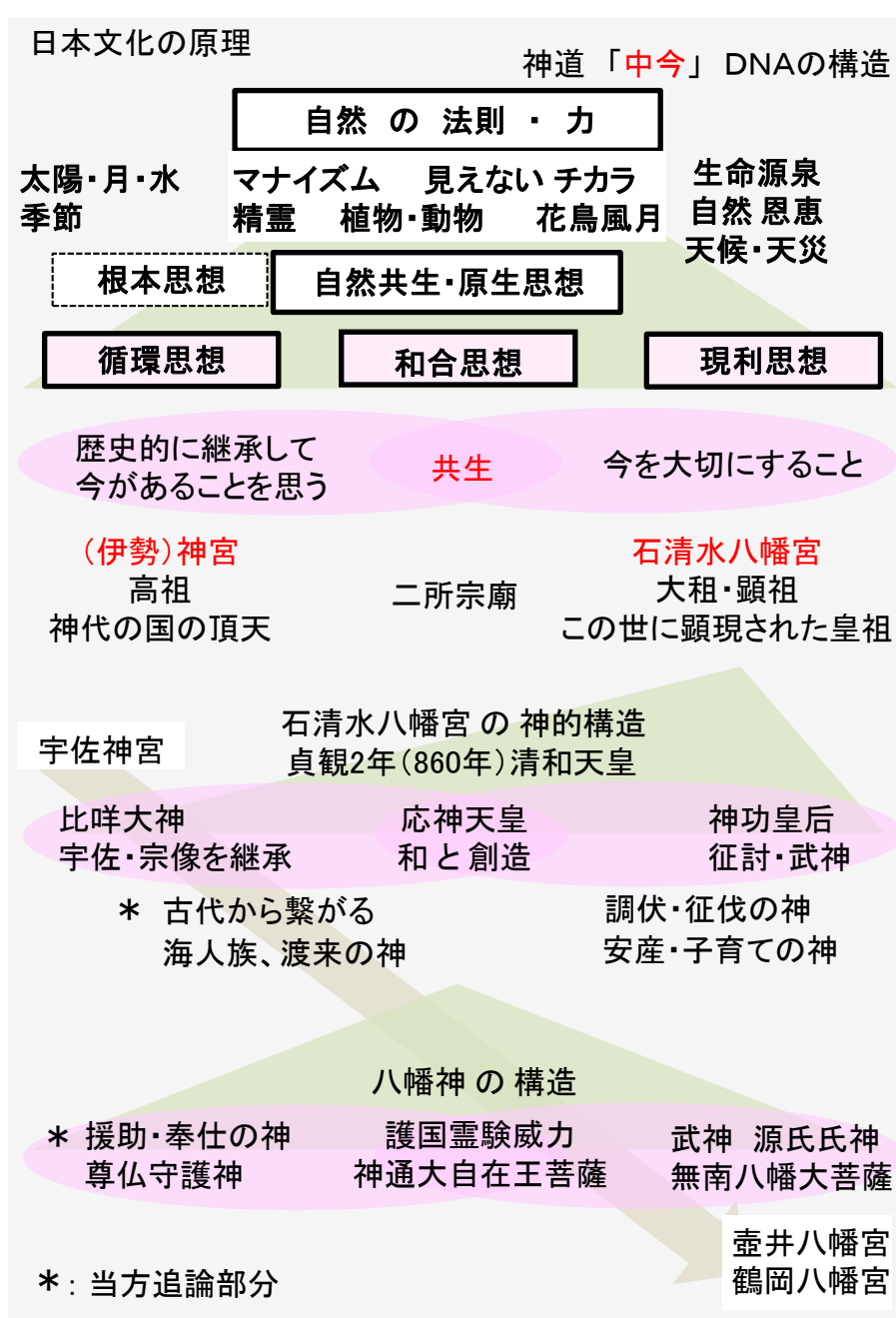
ブツダは、冷静に人間の煩悩を見つめた。そして人間の限界に気付いた。縁起の中で無常なる自然のあり様に学び、その尊厳を感じ、**自然の中の人間の立場**を悟った。その悟りが執着からの解放で、「**智慧の完成**」すなわち「般若波羅蜜」である。

孔子は、**人生の目的と、人と人の関係性に自然を思考**した。人は天「命」を自覚し、「学」び、「思」考することで信条・思想を持ち「行」いを重んず。人間関係である「志」では、「信・義・忠」をこころがけ、「仁」を以て「礼」を尽くす。さらに君子は、「温・良・恭・儉・讓」を備え、「敬・恵」を行い、「範」とならなければならない。家庭を社会の基本とし、君子との関係より、より**自然に家族、親子関係、子の「孝」**を優先した。**朱熹**は自己の外にある「理」こそ自然とし、**孟子**や王陽明は人間内面に**自然平等なる「気」**に一元した。

そして、**聖徳太子**は、**自然調和な神信仰たる「和」の思想**を前提に、「仏」への崇敬、「法」「僧」で具体化した、と考える。なぜなら、その教学は「**法華経**」を主とする「**三教義疏**」であり、そこでは、時間と空間を超越し、**万人に平等な慈悲力**を説いているからである。まさに「**自然の力**」である。他に何かあるだろうか？ **太子**は明文化されていない**自然調和な神信仰**を、**三法崇敬**で方便した、と考える。そして冠位に明らかな様に、本来は「**仁義礼智信**」の儒教から、**自然なる条件**として治世者の「**徳**」を前提に「**仁礼信義智**」と序列した。我々日本人は、神に自然なる「和」と「清」を、仏に「無」と「悲」を知り、儒に「徳」と「伐」を得た。そのことを、聖徳太子たち先人から学ばなくてはならない。

「**多様性と共存共栄**」は、自然、すなわち神への信仰、神道を基本とした日本文化の真髄である。なぜこのことが**重要な**のか？自分とは違う信仰などを持つ相手を否定することは、紛争となり自滅するからだ。受容と選択はしても、否定はならない。

ここで必要な事は、みんなが「**浄明正直**」に学ぶことであろう。同じ様な**価値観を共有**できれば、**自然に和となり共生**(ともうみ)できる。本著冒頭とされた、近年のパワースポットへの注目、また、神宮参拝の興隆などは、現代的生活からの**揺り戻し**と考える。自然の中で、おのずと神の「**気配**」を観ぜられる。神社とはそういう場所である。清浄なる場所で、日常のケガレ「**気濁れ**」を祓い、**気を再生**する。その行為「**禊ぎ**」は水で清めるが、水はまた「**掬ぶ**」ことで、新たな「**産霊**(むすひ)」となる。そして、今を生きる力と文化を生む。日本文化の原理「DNA構造」が「中今精神」の言挙げに有効となり、「**揺り戻し**」が新たな創造に繋がる事を希望する。



「**天皇の祈り**」 著書文中より編集し、所感追加
石清水八幡宮寺の名称として、貞観2(860)年の創建。それ以来、神仏和合の一大聖地として、歴代天皇は**国家鎮護**の祈願なされた弘安4(1281)年、元寇襲来に対し、**龜山上皇**が御親拝・参籠文久3(1863)年、掃攘夷敵のため、**孝明天皇**が御親拝戊辰戦争最中、慶応4(1868)年、西南戦争最中、明治10(1877)年、**明治天皇**が御親拝平成9(1997)年、**今上天皇皇后両陛下**が御親拝この御親拝の大御心とは？平成7(1995)年 阪神淡路大震災復興に加え、諸事件に兆候する「日本人のゆくえ」に向けて、静かに言挙げなされたのかもしれない

鈴木大拙氏は、69才の1939年「禪と日本文化」(原題 Zen Buddhism and Influence on Japanese Culture「禅仏教と日本文化への影響」)、74才の1944年「日本的靈性」を著し、1966年96才で没した。「禪と日本文化」 禪は、仏陀の精神を直接に見ようと欲する。その精神は、般若(超越的智慧)と大悲(般若と得て個人的な利益や苦悩に思ふ患わず作用する万物への愛)である。とする。禪で、般若は無明と業に密雲に包まれて、我々の内に睡っている般若を目ざまそうとする。禪は、知性と論理を蔑視し、事物の真髓が把握せられた後に、知識の価値を知る事ができる。禪の考え方は、精神に焦点を置き、形式を無視する。よって、どの様な形式にも存在し、不十分不完全なる事で、精神が顕著になる。形式・慣例・儀礼の否定が精神を浮き彫りにする。無執着である超越的な孤高が、清貧主義、禁慾主義の精神である。孤高は仏教では絶対と解釈され、森羅万象の中に存在する。多くの内外権威者は、禅宗が日本人の性格形成に重要な役割を果たし、日本人の道徳的・修養的・精神的な生活の背景にある、という。以下、個別の文化との関係で、禪を説明している。

- ・「禪と美術」 中国と比較し、我が国民の文化生活への影響が大きい。ただし中国の宋学、絵画に影響し、特に南宋絵画は中国で廃れたが、日本の国宝となる。南宋「一角」と日本「減筆体」の極めて少ない描線・筆触は、禪の精神と一致する。表現される「わび」は、世間的な富・力・名に頼らず貧困、自然であり、禪はそれを親しみ、単純性を味わう精神である。精神を重視するため形式は無視され、不完全となり、そこに古色と原始性が伴うと「さび」となる。知性は均衡を欲するが、本来、日本人が好み文化の特性でもあるそれら「非均衡・非相称・一角・貧乏・単純・さび・わび・孤絶」は、禪の真理「多即一、一即多」の認識、つまり個々の事物を完全と見ると同時に「一」に属する「多」の性質を体現するものとする認識、と一致し、またその認識から生まれる。
- ・「禪と武士」 禪は、道徳的に首尾一貫の意思・哲学的には生と死の無差別で、武士を支援し、潔い死と関係させる。また、禅修業と戦闘精神を単純・直裁・自恃・克己的で一致。当時、既成仏教が強い京都と違い、鎌倉の地での禅導が可能であったと説明する。
- ・「禪と剣道」 「刀は武士の魂だ」という言葉に、忠・自己犠牲・尊敬・恩愛および宗教的感情の涵養を見る。 大刀と小刀を帯びる鍛錬は、道徳的・精神的な目的で、禪と提携した。沢庵の「無心」や、「無我」や悟りを目指す禅僧と「技を完成させる武者修行」で例える。
- ・「禪と儒教」 禅僧は、儒教研究や、神仏儒と問わない書物印刷で貢献した。儒教朱子学を通じた武家幕府との関係や、神道への信仰哲学的な刺激効果と共存に注目する。
- ・「禪と茶道」 原始的単純性の洗練美化、人為排除自然親和。禪と密接する感情的要素の「和敬清寂」の説明で、聖徳太子によって明文された日本意識である「和」を、我が国の地理環境・温暖気候による固有の心とした。(1935年出版、和辻哲郎 著「風土」が影響か?)また、この執筆当時、1939年の社会的・経済的・民族的難題に際し、その美德を守護する「禅による救済」を説いている。「寂」では、快樂と刺激を求める当時の現代生活に対し、教養的享受や根本的再起を提言している。また実業家の早衰に触れ、武士の闘争に対する茶道に、心身爽快と普遍価値想起の効果を見出す。
- ・「禪と俳句」 改めて日本と仏教との深い関係と、他の仏教と禪の違いを「われわれ自身の存在、実在そのものの秘密を直接に洞察すること」とする。悟りの原則は事物の真理に到達するために概念に頼らぬこととし、西洋人の心理は秩序論理的で、東洋的心理は直感的とする。禪と日本的芸術概念との精神的関係として「妙」つまり日本文学における「幽玄」は、「永遠なる事物の瞥見、実在の秘密への洞徹」として悟りと通ずる。禪の心は、宇宙自然に面し、対象物や特殊存在に興味し、季節に移り変わる自然のできごとに深く関心を持つ。これらの直覚を詩的形式で表現することを俳句とする。日本語の豊かさがこれを実現する。日本人の心の強みは、最深の真理を直覺的につかみ、表象を借りて現実的に(俳句などで)表現することにある、とする。

「日本的靈性」 「禪」と「浄土系思想」が、インドや中国には無い、最も日本的靈性なるもの、とする。「靈性」の定義は、精神や心に包みきれない物(物質)を含み、倫理性を伴う「精神」を超越する「無分別智」である。靈性に目覚めることで初めて宗教がわかる。靈性の直感力は精神より高次元で、靈性に裏付けられた精神の意思力は、不純なものを含む自我を超越し、聖徳太子「以和為貴」の真義に至る。とする。靈性は、民族がある程度の文化段階に進まぬと覚醒せず、日本でそれは鎌倉時代とする。平安時代の貴族、女性文化時代を経て、時勢頹廃が自身存在の反省を促し、蒙古襲来や南宋交流に刺激された武家文化を通じて、日本靈性たる「禪」と「浄土系思想」が民衆に萌芽した。鎌倉時代、越後から関東の「大地性」に触れた親鸞や武家階級が、それら靈性たる思想を生み、政治的側面では日蓮を動かした。ここでいう「浄土系思想」は、末世思想では無く、「純粹他力」と「大悲力」を指す。浄土往生の是非ではなく、弥陀の誓願を信じ、その大悲を、親鸞が「大地」で体認した。また法然から遡り、日本の教主として聖徳太子に進み、自身の靈性が日本的なる所以を意識した。日本的靈性の情性方面に顕現した「浄土系思想」は、個己の方向に超個の人を見る。日本的靈性の知性(概念性)方面に顕現した「禪」は超個の人の方向に個己を見る。その双方は「超個の人でまた個己の一人一人である。この一人一人が超個の人」という自覚で共通する、とする。

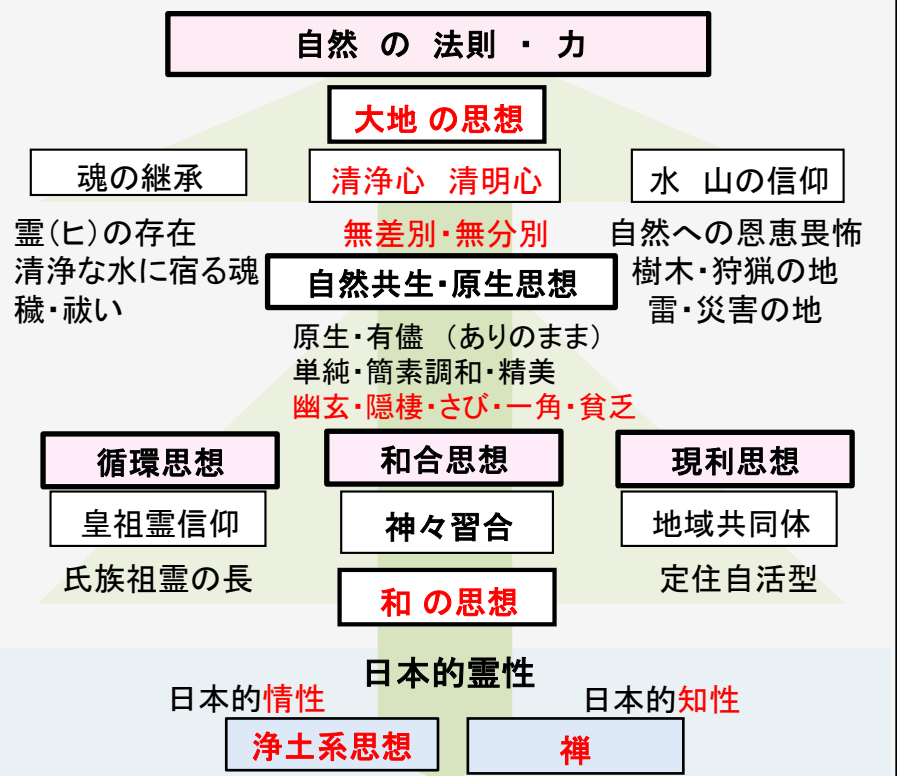
解釈するに、その「靈性」を理解する手掛かりが、上記の「聖徳太子」、そして「大地性」と「修験道」である。

「大地性」とは、大地に関わりの無い生命は無く、親しむべき「愛の大地」とする。人間は大地において自然と人間の交錯を経験する。鎌倉時代は、雲の自然、大地の自然が、日本人をしてその本来のものに還らしめたと言ってよい、と定義を結ぶ。

「修験道」について、それまで貴族たち上層部に留まっていた奈良仏教や最澄・空海の真言が、「神道」と抱合を遂げて発展し、それは日本的靈性の外郭に触れた、という。それらに共通する思想が、「万物自然そして人間、また人間同士の一体性と共生和合」である。仏教では、弥陀という名で、万物自然の般若(超越的智慧)と大悲(般若と得て個人的な利益や苦悩に思ふ患わず作用する万物への愛)を認識し、「禪」で内省的に自覚、「浄土系思想」では称名することで体認する。「修験道」では、自然の中での体認を通じて「大地」を感じる、そこで直覚させるものが日本的靈性ではないだろうか。

著者は、本来内在するも顕在していなかった靈性が、社会的弛緩への反動や外圧により覚醒したとする。その「本来のもの」とは？また、その発祥理由は？ 他国との比較で説明が必要である。文中の断片を繋ぐと、『靈性は日本精神の明き心、清き心が深層意識に沈潜し、無意識無分別に莫妄想に働く時、靈性が認識せられる。万葉集に歌われる神、清明心には反省無観の機会がおとずれていなかった。「清明心、丹心、正直心、物忌み、穢れ、祓う」は、素朴で原始的な日本の情性であり、伊勢神道は「神道の目覚め」であるが、形而上学的基礎をもたず、「絶対者の絶対悲」を欠くことで、靈性的領域に認めない』とする。執筆当時の戦中神道に筆者は寄りがない心情があり、「伊勢神道」への見解については、直覺性を重視する靈性論理とは矛盾がある。しかし、両部や山王、そして元寇を契機に仏教意識して発祥した伊勢神道など、広く神道が、明確な主体性に弱く、仏教や儒教との相対的思想であることは事実である。一方、筆者は、それらの原始的な日本の情性と靈性発生との関係は否定しない。ここに、我が国独特の地理環境・温暖気候、つまり自然や「大地の思想」を前提に、著者が定義する「靈性」を含む我が国の心情、信仰、思想の一貫性を見出す。

原始的な日本の情性が無ければ靈性の覚醒もなかった。つまり、「禪」と「浄土系思想」が、インドや中国で長期かつ国家的に信仰文化として根付かず、我が国では、ここでいう「靈性」という形で顕在した。その源流が「原始的な日本の情性」である。



「和合思想」が初めて明文化されたのは「**十七条憲法**」である。日本書紀、先代旧事本紀の推古天皇12(604)年に記される。以下、日本書紀原文より引用する。
 「**皇太子親筆作憲法十七條**。一曰。以**和**爲貴、無忤爲宗。人皆有黨亦少達者、是以、或不順君父乍違于隣里。然、上**和**下睦諧於**論事則事理自通**、何事不成」また最後の十七條でも、独断を禁じ、議論することで、道理に至ると、再度説いている。「十七日。夫事**不可独断**。**必與衆宜論**。少事是輕。不可必衆。唯遠論大事。若疑有失。故與衆相辨。辞則**得理**。」
 和合についての論拠を記紀、神社、考古より、母系による氏族習合、出雲と神武に代表される新旧勢力、神々の共存とした。その過程で争乱はあったが、両者が存続したことは和合と判断してよく、その証拠に東西の遠隔地域以外は、律令から国家として共同、統一してゆき、今日の日本がある。のちに皇統や武家による内紛はあったが、国家として分裂した歴史はない。また、和合の原点を長期な縄文、漁撈・狩猟の生活、水耕稲作をもたらした人々との共栄とし、発生の由縁を我が国特有の自然環境とした。その説、飛鳥時代までに和合の源流があることを「**十七条憲法**」は証明する。**聖徳太子**による、それまでに習俗熟成されてきた「**和合思想**」の明文化である。突然、発祥された思い、思想ではない。二条以下の憲法には仏教や儒教が影響するが、一条は認められない。理由を下図に示したが、元来、目的が違う。仏教は人自身、仏と人。儒教で身分秩序を維持する「礼」に依らず この条は「人と人」を説く。明文された思想が我が国に適正したことは、その後の神仏習合、武家・民衆の合議・寄合などの制、心学・報徳の思想発生が追証する。なにごととも唐突に始まらず、因果縁起がある。文言だけでなく、前後の史実因果から、和を以て説は検討されるべきである。

我が国は、ギネスでも認定された**世界最古の国家**であり、君主制として規定されている。**世界最古の企業**は、大阪四天王寺の「**金剛組**」、その次が京都の「**財団法人池坊華道会**」である。不思議だが、ともに聖徳太子とご縁がある。金剛組は四天王寺建立のため百済から渡来した宮大工が発祥。池坊は、伝承によると太子が四天王寺建立の用材を探した六角堂の地、その池のほとりに小野妹子を始祖とする僧侶が住み、宝前供花が起源。和合がものごとの創造につながり、自らを存続させる。「和合思想」がもたらした**長命の証**である。不思議ではなく必然かもしれない。

日本文化の特性 基本原理の体系より

参考 空海「**三教指帰**」
 儒教・道教は、仏教が考える「五蘊が仮に和合してできた国土、仮の世界」での教えにすぎない。仏教が説く真理の一部分である。ここでは、それを前提に現世での思想とする。

道教
 道(タオ) 漢民族土着伝統思想
 多様均衡世界 神仙長命仙人

「道」を世界万物の根源で無・混沌水のごとく万物に恩恵柔軟である。そのから誕生した天地は悠久で、無為自然で、節度の重要を説く。

仏教
 輪廻 概念 悟り 成仏

道教は、人為を捨てて自然に生きることを説くのであって、自然との神秘的な合一のことを「和」と表現していることもあるけれど、人と人との間の「和」を説くものではない。

仏教は、現世を空とし、それを知らない無明を克服して悟りを得ることを本願とする。「和」が一番大切であるという教えはない。慈悲の教えもあるけれど、それもまた「和」とは違う

・心学 庶民教化 神道・儒教・仏教の三教合一説。正直の徳。天地の心を獲得し、私心無く無心による仁義を説く。

・報徳思想 神道・仏教・儒教などと、農業実践から考案。豊かに生きるための知恵。教えの大極に向かう道心を説く。

太陽・月・水
 季節

自然の法則・力

マナイズム 見えないチカラ
 精霊 植物・動物 花鳥風月

生命源泉
 自然恩恵
 天候・天災

自然共生・原生思想

和合思想

現利思想

縄文・弥生習合

呪術祭祀
 巫女 呪術

自然の神
 精霊
 祖霊
 首長霊

八百万信仰

神々習合

母系による出雲・神武習合

平等思想

和の思想

戦神

徳 仁礼信義智(冠位・憲法)

神仏習合

現世の仏

守護神

合議・寄合

北条泰時「御成敗式目」公平道理
 夢窓国師「夢中問答」共生
 「早雲寺殿廿一箇条」無私正直
 「朝倉敏景十七箇条」
 武田信玄「甲陽軍鑑」

茶道(禪)

心学 石田梅岩
 報徳思想 二宮尊徳

儒教は「仁、義、礼、智、信」をその徳目としているが、「和」という徳目はない。論語の学而第一12「有子曰。禮之用。和爲貴。」は、礼の説明である。この文章を参考にしたとしても、「以**和**爲貴」と、「和」を主題にしたことに注目すべきである。第一条に「礼」の文字は無い。



池坊『花伝書』

政治思想

根本思想

皇統・氏族
 血統信奉

儒教
 君子秩序 仁義礼智信

皇統
 律令・摂関

皇統
 武家・式目

和合と創造

「和合思想」は、「日本文化の原理」の中心にあり、「**心御柱**」である。「自然の法則・力」を背景に、「循環思想」と「現利思想」の調整・均衡を保ち、新たな「創造」を生み出す力となっている。

「天寿国」とは、聖徳太子の理想世界である、と仮説する。では、その理想世界とは、何か？

佐伯 定胤(さえき じょういん)氏は、1950年(昭和25年)法相宗を離脱し、法隆寺を本山に新たに初代佐伯良謙として聖徳宗を開いた。宗派信条は、太子の教理を解釈した七条からなる。聖徳宗の高田良信長老の著書「法隆寺教学の研究」によると、その七条の根本は「大乘一仏乗教」である、とする。

「一仏乗教」とは、『法華経』・『勝鬘経』に由来し、一人として成仏せざるものはなく、あらゆる万善万行、すなわち日常の人間生活そのままが多種多様であるにもかかわらず唯一の常住真実の仏果に究極する、という意味である。この大理想を達観し、十七条憲法が制定された。また、『維摩経』を通じて、凡夫及び二乗の偏執を打破し、空観を理解し、偏執差別を打破して、四生の終帰、万国の極宗とした。つまり「万人平等の成仏」を説いた、とする。「大乘一仏乗教」を、特に力説しているものが、「法華経」の太子註釈「法華義疏」である。

太子の考えを考察する。聖徳太子の「理想世界」を探る手掛かりは、「法華経」と、「冠位十二階」、そして「十七条憲法」、そして「敬神の詔」や神社創建である。それらを総合しなければならない。法華経の中で「寿量品」が唯一最高で、その「寿量品」の中心思想は三世常住の益物であり、縦に過去・現在・未来なる三世を貫き、横に十方世界に普遍して、全宇宙法界の衆生の救済を説く。しかしなぜ、憲法で、その法華経の主体たる「仏」は二条に登場するのか？ その意味は重要である。なぜなら、その仏教の前に「自然なる調和」の「和」、つまり我が国古来からの「自然調和なる神への信仰」があるからと考える。つまり、この「寿量」とは、自然の恩恵、つまり古事記でも記される、水、海、山など原初なる自然神の力の下にある。「天寿国繡帳」で太子の言葉として記された「世間虚仮唯仏是真」の教えとは、「自然の見えない力こそが真実で、この人の世は(その力の表現による)仮の姿である」である、と考える。

「神道」という言葉の初見は、『日本書紀』585年頃、聖徳太子の父である用明天皇の信仰を解説する記述、「天皇、仏法を信(う)けたまひ、神道を尊びたまふ」である。しかし、その神道には明文化されたものはない。ただただ多様な自然神、皇祖神を祀る信仰である。しかし、当時、仏教によって逆に我が国古来の信仰が浮きぼりに意識されてきた。その結果、「神道」と呼ばれ始めた。その「神の概念」を 聖徳太子は外来の經典に求め、治世に生かしたのではないか。治世には明文が必要である。

鈴木大拙氏は『日本的靈性』の中で、禅は、仏陀の精神を直接に見ようと欲する。その精神は、般若(超越的智慧)と大悲(般若と得て個人的な利益や苦悩に思ふ患わず作用する万物への愛)である、とする。「禅と茶道」では、原始的単純性の洗練美化、人為排除自然親和とした。禅と密接する感情的要素の「和敬清寂」の説明で、聖徳太子によって明文された日本意識である「和」を、我が国の地理環境・温暖気候による固有の心とした。また、「浄土系思想」とは、末世思想では無く、「純粹他力」と「大悲力」を指す、とした。つまり、「禅」は、自身の内に 自然なる「摂理」「和敬清寂」を感じる。浄土系思想とは、自身の外に 自然なる「純粹他力」「大悲」を願うこと。と 解釈すれば判りやすい。

聖徳太子は、自然調和な神信仰たる「和」の思想を前提に、「仏」への崇敬、「法」「僧」で具体化した。その教学は「法華経」を主とする「三教」である。なぜなら、その教えは時間と空間を超越し、万人に平等な慈悲力を説いているからである。まさに「自然の力」である。他に何かあるだろうか？ 太子の「法華義疏」では「一大乗」という言葉で、普遍的な平等統一を表現している。太子は明文化されていない自然調和な神信仰を、三法崇敬で方便した、と考える。そして冠位に明らかな様に、本来は「仁義礼智信」の儒教から、自然なる条件として治世者の「徳」を前提に「仁礼信義智」と序列した。そのことは、憲法四条の、治世者に求める「礼」にも表れている。

【 聖徳太子「神信仰」の論拠 】

推古15年(607)、聖徳太子は推古天皇の下、神道の神を厚く祀ることとして、「敬神の詔」を出した。四天王寺境内には鳥居があり、伊勢遥拝所・熊野権現遥拝所、そして守屋祠がある。日本書紀卷第廿二 豊御食炊屋姫天皇 推古天皇 『十五年春二月庚辰朔、定壬生部。戊子、詔曰「朕聞之、曩者、我皇祖天皇等宰世也、踰天踏地、敦禮神祇、周祠山川、幽通乾坤。是以、陰陽開和、造化共調。今當朕世、祭祠神祇、豈有怠乎。故、群臣共爲竭心(ともにためにこころをつくして)、宜拜神祇。甲午、皇太子及大臣、率百寮以祭拜神祇。」』

・聖徳太子が創建したとされる四天王寺七宮 小儀神社(四天王寺東門前) 土塔神社(同南門前) 河堀稻生神社(天王寺区大道) 久保神社(同勝山) 大江神社(同夕陽丘町)

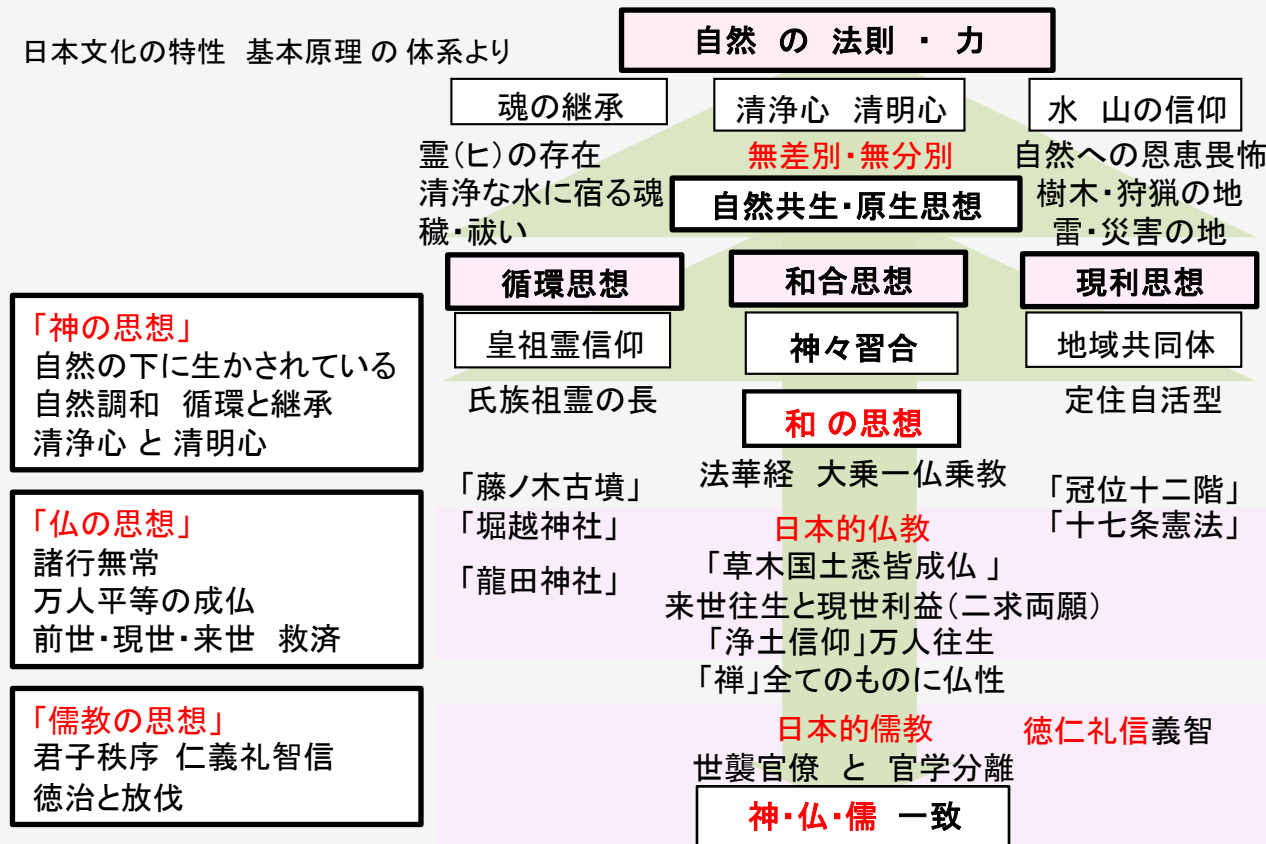
堀越神社(同茶臼山町)祭神 崇峻天皇 上之宮神社(同上之宮町) 今宮戎神社(浪速区恵美須西)。法隆寺の鎮守社として、現在の龍田大社より、天御柱命・國御柱命の二神を龍田神社に勧請した。聖徳宗の高田良信長老は、藤ノ木古墳被葬者の一人を崇峻天皇と、合理的な推定をされている。

日本的に編集された「神仏儒習合の共生」こそ、「天寿国」たる「理想世界」である。それは、「万人平等思想」を伴い、聖徳太子を原点とし、江戸時代にその完成をみる長い歴史をたどる。我々日本人は、神に自然なる「和」と「清」を、仏に「無」と「悲」を知り、儒に「徳」と「伐」を得た。

「聖徳宗信条」

- 一 聖徳法王ヲ開祖ト仰ギ御製ノ三経疏ヲ以テ立宗所依ノ根本聖典トス
- 二 大乘一乗教ヲ以テ教義ノ神髓トナス
故ニ所行ノ功德ハ普ク一切衆生ニ廻向シ我等ト共ニ仏道ヲ成ゼンコトヲ念願スベシ
- 三 法華経ノ万善同帰仏寿無極ノ玄旨ヲ以テ信仰向上ノ宏猷トナス
故ニ所修ノ善事ハ悉ク己人慾ヲ超越シ挙ゲテ仏果証得ヲ要期シ永遠ノ生命ナルニ安住スベシ
- 四 勝鬘経ノ十大受ヲ以テ菩薩道修行ノ典儀トナス
故ニ正法ヲ摂受シ無相ノ大乘心ヲ忘レザルヲ要ス
- 五 維摩経ノ弾呵折伏ノ活手段ヲ用ヒ三乗差別ノ偏執ヲ打破スルヲ以テ善巧ノ方便トナス
故ニ無我ノ空理ヲ自覚シ和光同塵ヲ示シ而モ感累ニ染セラズ無垢ノ浄名ヲ揚ゲンコトヲ希フベシ
- 六 和ヲ以テ貴シトシ件ヲ無キヲ宗トスルヲ宗トスルヲ道德実践ノ要諦トナス
故ニ上下和睦シ鬭争ヲ避ケテ人生ヲ円満ニ樂マンコトヲ望ムベシ
- 七 篤ク三宝ヲ敬ヒ直キヲ拳ゲテ枉レルヲ 措キ無我ノ大道ニ徹スルヲ以テ道德修養ノ靈枢トナス
故ニ三宝ヲ恭敬シ崇高ナル信仰ニ立脚シ以テ正直心ノ人格ヲ修ムベシ

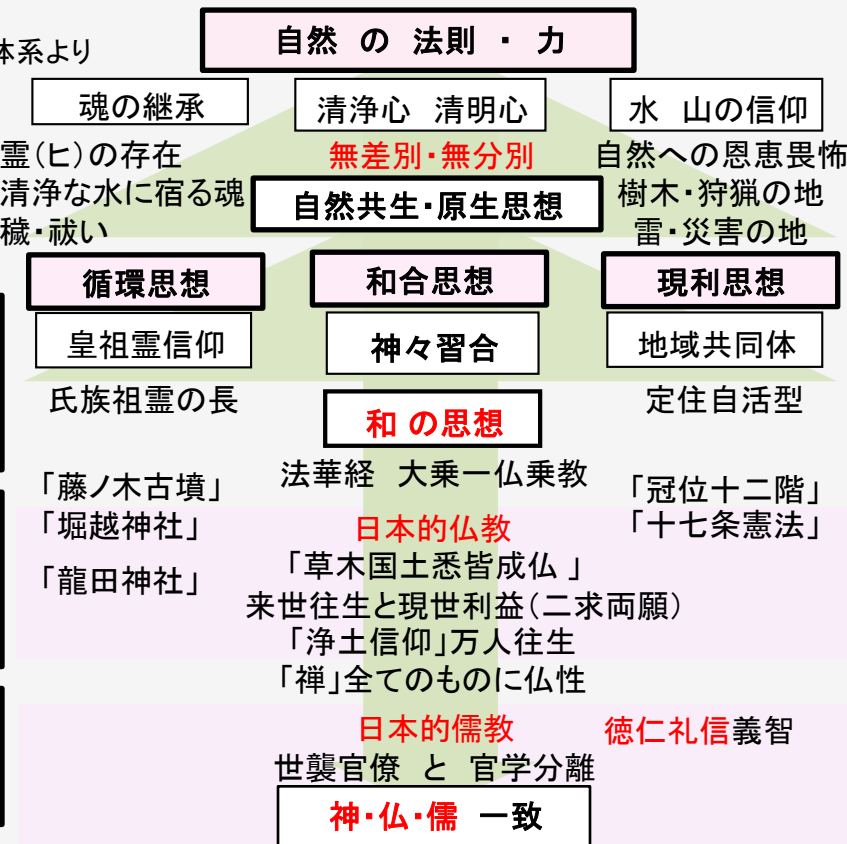
日本文化の特性 基本原理の体系より



「神の思想」
自然の下に生かされている
自然調和 循環と継承
清浄心と清明心

「仏の思想」
諸行無常
万人平等の成仏
前世・現世・来世 救済

「儒教の思想」
君子秩序 仁義礼智信
徳治と放伐



あらためて、聖徳太子から学ぶこと、そして、日本文化の特性との共通性や、その後の、日本で適合を考えた。

聖徳太子は、自然調和な神信仰たる「和」の思想を前提に、「仏」への崇敬、「法」「僧」で具体化した、と考える。なぜなら、その教学は「三教義疏」の主である「法華経」であり、そこでは、時間と空間を超越し、万人に平等な慈悲力、「自然の力」を表現している。そして「冠位」では、本来は「仁義礼智信」の儒教から、自然なる条件として治世者の「徳」を前提に「仁礼信義智」と序列した。

自然調和な神信仰は、明文化されていなかった。太子は、その日本的な自然調和な文化を基礎に、三法崇敬で方便し、冠位で表現した、と考える。「不自然なるもの」、「自然なるもの」「自然たるもの」への、大なる思考である。その関係を図解解説する。「自然なる信仰」から、聖徳太子の思考を原初に仏教儒教との関係。下段に原理の現代的表現、すなわち「現代への活用」を考えた。

聖徳太子と、神信仰や神道と関連させる代表的な証拠は「敬神の詔」である。「神道」という言葉の初見は、『日本書紀』585年頃、聖徳太子の父である用明天皇の神信仰を解説する記述、「天皇、仏法を信(う)けたまひ、神道を尊びたまふ」であった。神道には明文化されたものはない。ただただ多様な自然神、皇祖神を祀る信仰である。しかし、仏教によって逆に我が国古来の信仰が浮きぼりに意識され、「神道」と呼ばれ始めた。その「神の概念」を聖徳太子は外来の經典に求め、治世に生かしたと考える。なぜなら、治世には明文が必要だからである。

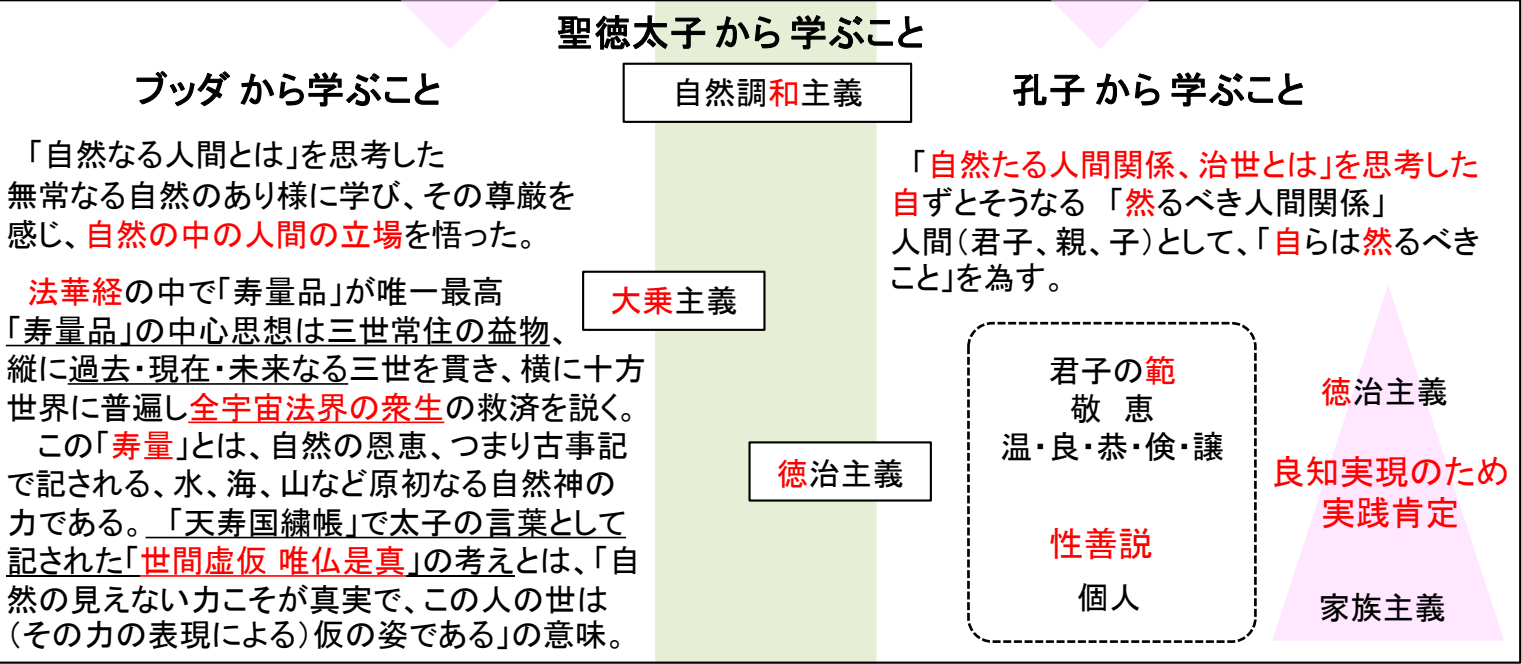
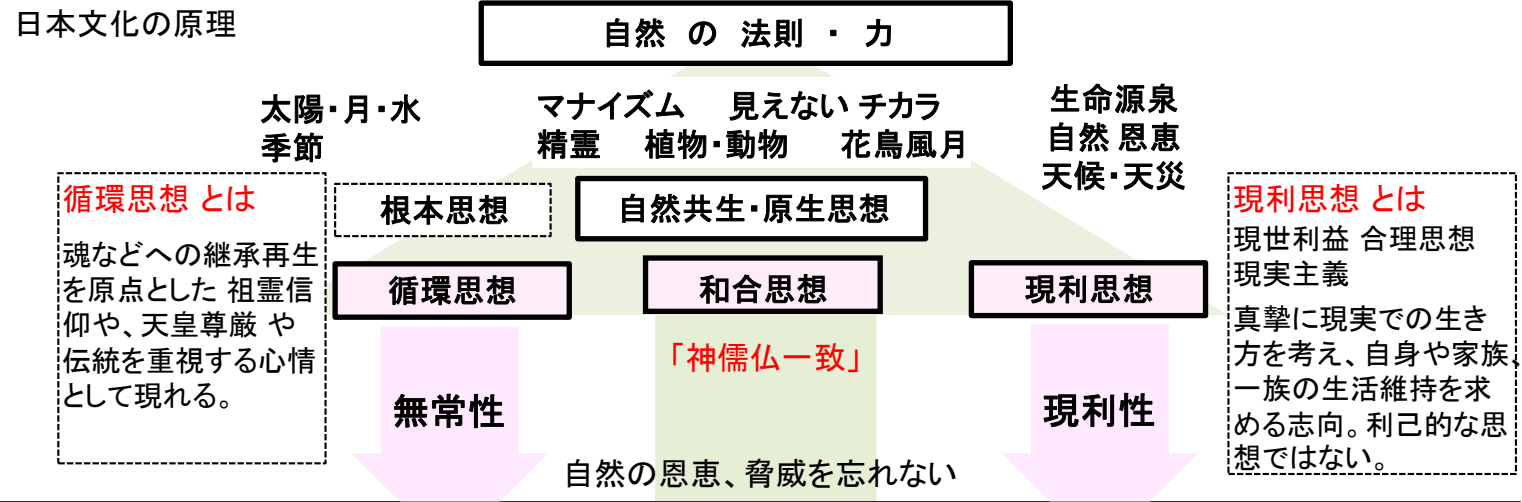
和辻哲郎氏もまた、『日本倫理思想史』で、十七条憲法第一条における、「礼」に対する「和」の優位性独自性に注目されている。一般的に、その条文の引用元とされる論語の学而第十二は、「有子曰、禮之用和爲貴、先王之道斯爲美、小大由之、有所不行、知和而和、不以禮節之、亦不可行也」と、和の通用より、「禮」礼の優位を説く。対して、憲法第一条は、「以和爲貴、無忤爲宗。人皆有黨亦少違者、是以、或不順君父乍違于隣里。然、上和下睦諧於論事則事理自通、何事不成」である。論語を元とするならば、「礼」は、あえてそこから除外されている。また、同氏も注目されている憲法第三条「承認必謹。君則天之、臣則地之。天覆地載、四時順行萬氣得通、地欲覆天則致壤耳。是以、君言臣承、上行下靡。故承認必慎、不謹自敗」この「天地覆い地載せるときに、四時順行し万氣通い得るがごとく」である。同氏は「天地自然の理」にもとずく上下関係を説く、と解釈されている。詳細は、本論「自然(じねん)への思考」で纏めるが、この思想は、空海や親鸞、江戸時代の民間思想家たちにより、歴史的に継承されていくことになる。

鈴木大拙氏もまた、聖徳太子から禅に、自然親和と我が国固有の心を見出す。『日本的靈性』の中で、禅は、仏陀の精神を直接に見ようと欲する。その精神は、般若(超越的智慧)と大悲(般若と得て個人的な利益や苦悩に思う患わず作用する万物への愛)である、とする。「禅と茶道」では、原始的単純性の洗練美化、人為排除自然親和とした。禅と密接する感情的要素の「和敬清寂」の説明で、聖徳太子によって明文された日本意識である「和」を、我が国の地理環境・温暖気候による固有の心とした。また、「浄土系思想」とは、末世思想では無く、「純粹他力」と「大悲力」を指す、とした。それはまさに、自然調和の「和」であると考え。

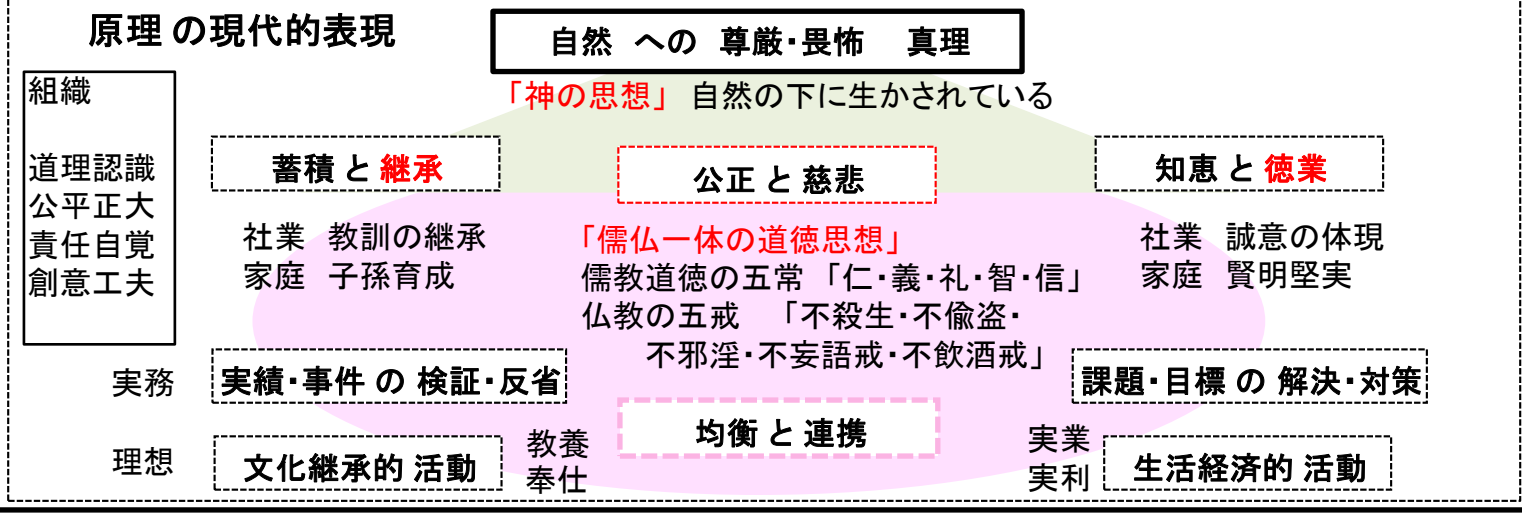
以上、聖徳太子の思想について、「法華経」「十七条憲法」「敬神の詔」や、先達の解釈から、あらためてその歴史的な価値を含め、整理した。神仏儒習合と関係する自然(じねん)への思考として、再度、認識すべきと考える。

図に「ブッダと孔子から学ぶこと」との関係を示した。自然調和な思想を基礎に、大乘主義と徳治主義を取り入れ、その意味で神仏儒習合を思考した人が聖徳太子である。その思考は我が国に根つき、のちに「万人往生」や「陽明学・心学」として顕在した。なぜなら「日本文化の原理」と一致した思想であったからと考える。

日本文化の原理



適合 循環思想 から 和合思想へ 地獄信仰を前提に 浄土信仰は、万人往生で適合した 現利思想から、和合思想へ 性善説、特に、実践として「放伐」を説く 孟子と適合しつつ、 自然調和な社会、生活が 自然と生まれ、継承できる。 陽明学・心学で適合した。 形式や制度にはこだわらない



ここでは、**現代の社会的問題**にどのように生かせるか？を呈示したい。文化信仰思想の原理が、その問題に適正を以て活用できると考える。今、この文化的特性を、より一層、**意識**し、その上で、「現代社会における諸問題の議論」がなされるべきと考える。

「原理」に沿って、下部に「社会的表現」を配列した。日常、よく意識され、報道されるものが「今日的課題」であり、「現利思想」に相当する。そして「持続的課題」が、「循環思想」に相当し、その両者の「均衡と連携」が「和合思想」である。

今日、「持続的課題」がようやく注目されているが、本来は絶えず意識されるべき課題であると、今なら気づくはずだ。「持続的課題」は、いずれも危惧された時点では、正常な状態までの回復に相当な困難がある。これまで、「今日的課題」に執着しすぎたことに、極端な「持続的課題」の悪化の因果がある。両者の「均衡と調整」こそ、これまでの「政策の視点」として議論されるべきであった。

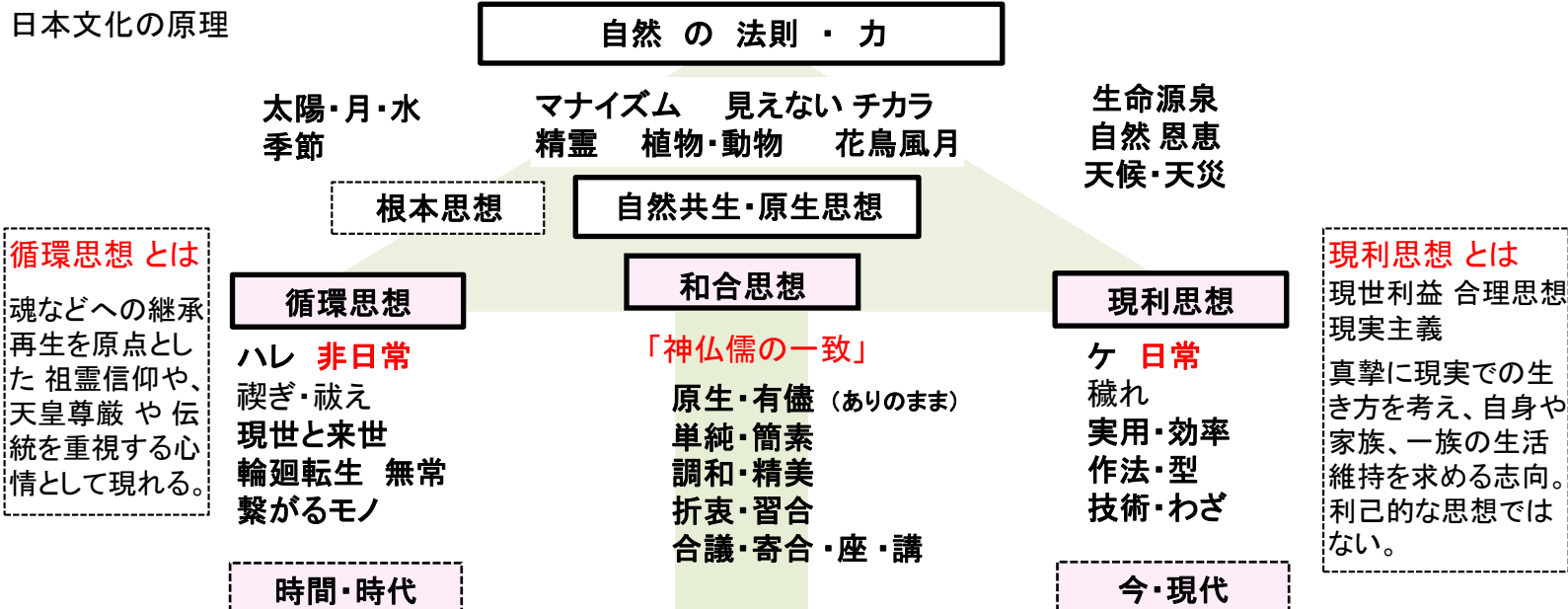
「原理」の認識が、いかに重要であるか「持続的課題」の内容を見て、今なら「当然、認識している」と、考える人は多いはずだ。しかし、我が国の歴史・文化・信仰の検証を以て、確たる「原理」に基づいた政策がなされてきたであろうか？ いや、「原理」そのものが、明確では無かった。今、あたらためて、この「原理を」自覚しなければならぬ、と考える。

そして、最も意識されるべき重要なことは何か？それは、それら三つの思想・課題の根本たる「自然への尊厳・畏怖」「真理」である。ともすれば、他の課題と並列的な価値感で捉えられていないだろうか。古代からの自然（じねん）なる自然への信仰を基礎として、聖徳太子は、自然調和な神信仰たる「和」の思想を考えた。その**自然（じねん）なる思考**は、日本的に「神仏儒一致」させ、その後1400年もの間、我が国文化信仰の主軸となった。現代社会では「**自然・生活・社会の一致**」と方便すべきだろう。しかし、重要な「自然への意識」は、未だ充分には認識されていない。

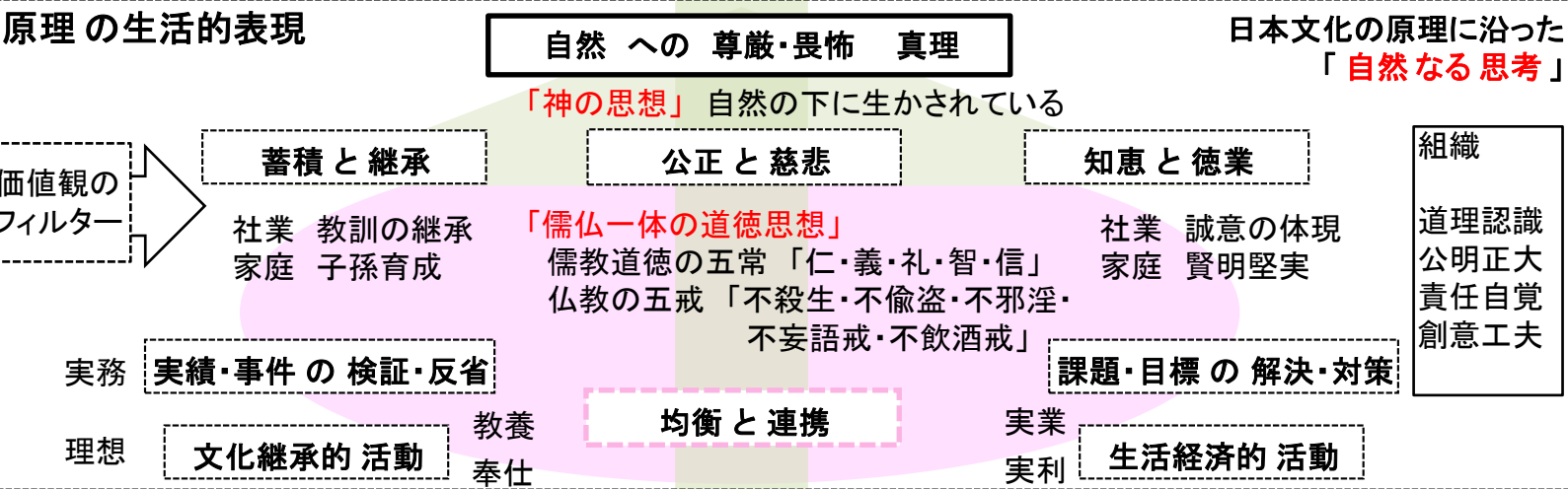
国家として意識されるべき精神も、同じく天皇称号や日本国名を用い始めた、聖徳太子から天武天皇の時代に学ぶ必要がある。当時、隋や唐を意識した国家としての「**独立自主**」の精神である。他文化を受容はしても依存はしない「大和魂」である。世界経済の中で、もちろん貿易は必要だが、我が国のエネルギーや食糧の外部「依存」は、あまりにも大きい。外交の前提として重要な「自立」性は、低下しすぎている。「**原理**」を意識した**精神**と、**生活的社会的な物質的「自立」**が、**国家国民として必要な**のである。

この状況で「持続的課題」挽回に対し提起できることは限られる。しかしまず取り組むべきは、エネルギーと防災、地方（創生）的課題解決に同時に関係する政策として、「地熱発電」と「火山監視」であろう。立地的に併設可能な場所も多いと考える。特に日本メーカーの「地熱発電」は、世界シェア一位の導入実績を有する。原発と表裏で普及停滞していた。近年、漸く見なおされてきたが、主要な国策として積極的には推進されていない。健全なる自立への第一歩である。

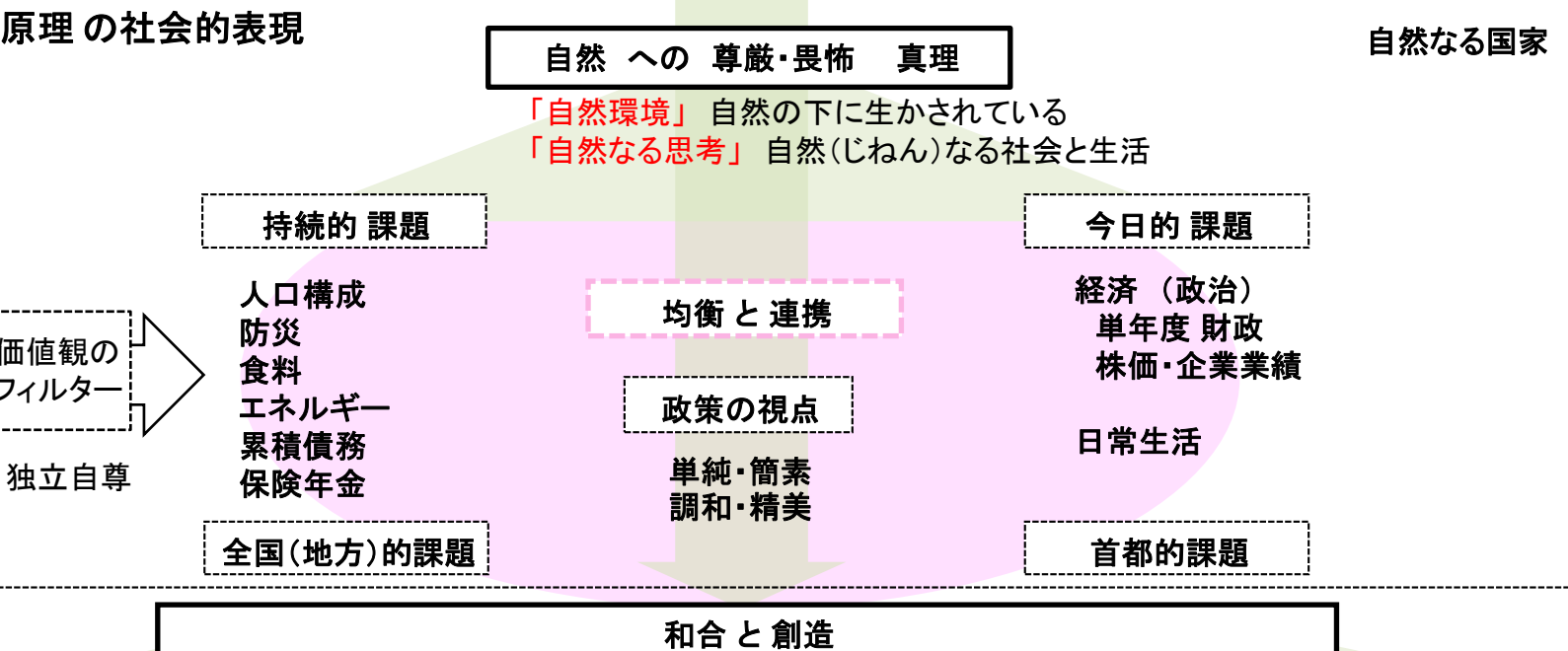
日本文化の原理



原理の生活的表現



原理の社会的表現



和合と創造
 「和合思想」は、「日本文化の原理」の中心にあり、「心御柱」である。
 「自然の法則・力」を背景に、「循環思想」と「現利思想」の調整・均衡を保ち、新たな「創造」を生み出す力でもある。



政次郎文庫

「泰澄大師と日本文化」

Foundation of Kyoto culture
Principle & Origin of Japanese culture

抜粋版（本編 約400ページ）

平成27年 4月29日 初版発行 随時 追論中

著者 中村正司
発行者 中村政次郎
発行所・発行元 歴史文化研究所 史跡 政次郎文庫
京都市下京区紅葉町
電話 090-6056-3295
<http://nakamuranina.jimdo.com/>

大阪支店 営業
大阪府泉南郡熊取町桜が丘1-19-5

装幀者 中村ニナ

本書の無断複写・複製・転載を禁じます。
落丁・乱丁、内容の問合せ・ご意見などは、上記発行元まで
ご連絡下さいませ。



日本文化構造学 研究会主宰
日本学・京都教授研究会「知恵の会」



© Masashi NAKAMURA 2017 Printed in Japan